

# 奇譚クラブ

1958年 5月号

手マリアンヌの「赤いペチコート」 鴉嘔吐夫・訳  
 ダイアナ夫人「障碍への道」 乗杉貴代子



5月号

昭和三十三年四月三十日印刷 (第十二巻 五月号) (毎月一回一日発行)  
 昭和三十三年五月一日発行 (第六号 通巻第百七号) 昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年五月号

5

奇譚クラブ

昭和三十三年四月三十日印刷 (第十二巻 第六号)  
 昭和三十三年五月一日発行 (毎月一回一日発行)  
 昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB  
 Published Monthly By Tenseisya  
 Osaka Japan



IBM. 2805





痛められし桃の実(第二回).....矢桐 重八	「秘蔵の黒髪」.....白金 正三
(マリアンヌの手記より)鴉嘔吐夫・訳	ある夢想家の手帖から.....近藤 洋
「美女達のお尻が風船をつぶすアイスシ	「苦しみ求めて」(完結).....波路
ョー」.....清水 恵二	私の好きな女靴.....古井 真哉
マゾヒズムへのいざない.....天野 哲夫	女性ホルモン服用の実験報告.....阿部 秀
女性切腹随想.....田谷 敬生	再映画化作品について(2).....柳 一
和装教室(古典模倣矢新御供の巻).....白 金	私の本箱から.....岸 貴子
雑報と雑感.....沼 正三	ダイアナ夫人.....星 光
浣腸機と雑感.....赤井 茂	妙齡美人の吊責め.....黒岩 青柳
捕縄術入門.....赤井 茂	シエームス・デインの事.....伊藤 晴雨
戦争未亡人の告白「ヒップ受難」.....収 一	残酷芸術展覧会.....山本 節夫
美容病院(第一回).....花田 育子	私のキタ・セクシユアリス.....山本 節夫
モデル志願の女性より.....久留木 栄	創作「東京自殺クラブ」.....山本 節夫
架空小説「残酷芸術展覧会」.....永井 朱実	告白「アヌス自虐体験記」.....菅 道夫
雑誌通信「挿絵を中心として」.....伊藤 晴雨	あらびやの奴隷市.....保月 定吉
フランソワの手記.....山梨 参次	不良グループの私刑.....本田 由郎
読者通信.....山梨 参次	アブ・モード・オール・スクラツプ.....由郎
〇十一月号(復刊第二十号).....【定価二百円】	女はらきりの夢.....矢桐 重八
口絵.....【定価二百円】	雑報と雑感.....藤山 秀三
責絵「拘束眼」.....四馬孝・画	終戦奴隷(後篇).....雪 俊
滝れい子面集.....滝れい子・画	マゾヒズムへのいざない.....天野 哲夫
舞妓(まいこ) 予後(よこ).....山下 真二	下着通信.....九 雅
緊縛写真「猿ぐつわと縄目」.....沼 正三	特異な角度から(3).....山下 真二
縛られた女優たち(場面集).....楓月太郎提供	「演出」.....牧 九
東映「朝焼け富士」三浦 光子	家畜人ヤブー(第十一回).....沼 正三
宝塚「題不詳」尾上さくら	通信「最近号の感想と批評」.....近藤 洋
サシスチックな洋面スチール二題	読者通信.....近藤 洋
伊映画「カルタゴの女奴隷」	〇十二月号(復刊第二十一号).....【定価二百円】
米映画「異教徒の旗印」	口絵.....【定価二百円】
口責めと幾何学図形.....久留木 栄	責絵「磔」(ハリツケ).....四馬孝・画
悲しきはマゾヒストの告白.....三根 耕二	滝れい子面集.....滝れい子・画
性倒錯の男と女.....山下 真二	「夜の脱衣場」マダム.....杉原虹児・画
美容病院.....久留木 栄	縛絵「ローンク責」.....杉原虹児・画
体験記「つばきの沼」.....久留木 栄	映画紹介「縛られた女優たち」.....阿部 秀

「秘蔵の黒髪」.....白金 正三	ある夢想家の手帖から.....近藤 洋
「苦しみ求めて」(完結).....波路	私の好きな女靴.....古井 真哉
女性ホルモン服用の実験報告.....阿部 秀	再映画化作品について(2).....柳 一
私の本箱から.....岸 貴子	ダイアナ夫人.....星 光
妙齡美人の吊責め.....黒岩 青柳	シエームス・デインの事.....伊藤 晴雨
残酷芸術展覧会.....山本 節夫	私のキタ・セクシユアリス.....山本 節夫
創作「東京自殺クラブ」.....山本 節夫	告白「アヌス自虐体験記」.....菅 道夫
あらびやの奴隷市.....保月 定吉	不良グループの私刑.....本田 由郎
アブ・モード・オール・スクラツプ.....由郎	女はらきりの夢.....矢桐 重八
雑報と雑感.....藤山 秀三	終戦奴隷(後篇).....雪 俊
マゾヒズムへのいざない.....天野 哲夫	下着通信.....九 雅
特異な角度から(3).....山下 真二	「演出」.....牧 九
家畜人ヤブー(第十一回).....沼 正三	通信「最近号の感想と批評」.....近藤 洋
読者通信.....近藤 洋	〇十二月号(復刊第二十一号).....【定価二百円】
口絵.....【定価二百円】	責絵「磔」(ハリツケ).....四馬孝・画
滝れい子面集.....滝れい子・画	「夜の脱衣場」マダム.....杉原虹児・画
縛絵「ローンク責」.....杉原虹児・画	映画紹介「縛られた女優たち」.....阿部 秀
新東宝「修羅八荒」遠山 幸子	大映「女狐屋敷」近藤 美恵子

写真「縛つた女体」.....本誌写真部撮影	洋面スチール二題.....米映画「キング・コング」
(くさり)(ボリウム)(凝視)(光沢)	米映画「壮烈カイパー銃隊」
「カラシヤの教典」.....西小路八彦	マゾヒズムへのいざない(一).....天野 哲夫
創作「ゆうべのお客様」.....近藤 洋	「麻生保氏の生活と意見」.....麻生 保
「靴への愛慕と踏まれる喜び」.....波路	黒いベチコート.....藤山 秀三
黒いベチコート.....藤山 秀三	屠腹乙女桜(前篇).....沼 正三
家畜人ヤブー(第十二回).....沼 正三	ワイド映画の縛りシーン.....牧 九
「逆比例」.....高志 文	ダイアナ夫人.....岸 貴子
危難に遭つた美貌の女.....久留木 栄	美容病院.....久留木 栄
「非きもの読本」.....白 金	大衆小説の中から拾つた縛りシーン.....白 金
残酷芸術展覧会.....山下 真二	ある夢想家の手帖から.....天野 哲夫
ある女給の体験(6).....沼 正三	一揮筆続記.....内田 絹子
白人の娘のこと.....須藤 武夫	探った秘密.....青葉 真一
看護人.....青葉 真一	帝国海軍の私刑.....香川 章二
「真実は誰も知らない」.....辻村 隆	ナースと浣腸日記.....岩村 美智子
ケンちゃんのこと.....柴崎 黎子	男奴隷のことども.....皆川 ぶ子
本誌紹介「緊縛映画一覽」.....編集部編	読者通信.....編集部編
〇新年号(復刊第二十二号).....【定価二百円】	巻頭口絵.....木馬責の構想.....久留木 栄

滝れい子面集「女学生」.....「三十娘」	縛絵「柱後手しほり」.....杉原虹児・画
写真「ニユー・ガールの緊縛模様」	洋面スチール「女囚一三三」より
新年の責めのアイデア.....久留木 栄	カメラと映画雑誌.....西小路八彦
「カラシヤの教典」.....黒田 史朗	マゾヒズムのいざない.....黒田 史朗
「ボクの責め方」続稿.....宝塚二三夫	マニア通信.....伊吹寅太郎
お灸通信.....伊吹寅太郎	映画女優緊縛に関する一考察.....沼 正三
ある夢想家の手帖より.....沼 正三	女性ホルモン服用の実験報告.....古井 真哉
ブレさんの浣腸日記.....岩村 美智子	ナースの浣腸日記.....伊藤 晴雨
責物美人伝(腰元お菊).....久留木 栄	美容病院.....久留木 栄
告白「慕情のあり方」.....桂 弥生	九雅節夫氏に寄す.....佐々木ツトム
「三浦右衛門の最期」.....桂 弥生	「我が娘を鎖で監禁」.....近藤 洋
お伊勢参り.....青葉 真一	時代小説「女賊変化」.....海野 繁
「手記」私のいたつら.....麻生 保	麻生保氏の生活と意見.....麻生 保
「マゾヒストの告白」.....杉本 真三	犬の生態.....杉本 真三
女性切腹秘話 愁風連.....青葉 真一	奇ク十二月号雑感.....太 芳樹
夜光る.....辻村 隆	生首礼賛.....沼 正三
家畜人ヤブー.....沼 正三	雑報と雑感.....阿部 秀
緊縛映画速報欄.....阿部 秀	読者通信.....阿部 秀
編集後記.....阿部 秀	





# 奇譚クラブ

復刊第二十七号  
五月

## 目次

四馬 孝傑作集 美人調教馬	四馬 孝・画
實画 女友達(乳房責めの部)	杉原虹児・画
滝れい子画集 横恋慕	滝れい子・画
縛り写真「屏風の前にて」	田中芳代嬢
和装縛り写真「赤い扱帯」(二)	花坂道子嬢
緊縛映画名場面集	提供(藤木仙治、阿部 秀)
大映「東京暴力団」(矢島ひろ子)	
東映「力闘空手打ち」(園ゆき子)	
洋画スチール伊映画「カルタゴの女奴隷」	編集部 選

論文 下着と女性の進化を論ず S・S 生 18

緊縛映画研究 縛られた女優たち 大河原珠樹 20

マリアンヌの手記 その五

赤いペチコート 鴉嘔吐夫訳 22

続・変ないたづら 三隅千恵子 28

マゾヒズムへのいざない(第八回) 黒田史朗 34

魔教圈 No.8 (3) 土路草一 38

私のアイデア 磔縛り七態 奈加多須磨尾 48

残虐なる女性たち 森本愛造 50

ある夢想家の手帖から 沼 正三 54

「続・女優と磔刑」 奈加多須磨尾 56

磔にされた二人の新人女優



私の体験したフェチシズム ときま・かつひこ 59

続・病者の獄 青葉慎一 62

悦虐クラブ陽春例会報告 泉 かよ子 70

切腹風土記 壬生三郎 80

女体切腹の創作 夕陽に散る華 (前篇) 藤山秀緒 82

日本印象記(外人の見たはらきり) 南方 純 87

虹のつゆあと 皆川のぶ子 92

敲(たたき)五十 香野 滋 98

レーゼ(読物)シナリオ

御用盗異変 海野築朗 100

現代マゾヒズム芸術時評 原 忠正 112

強盗団に襲われた若後家 岸本青柳 114

縛られた女優たち(追加) 大河内珠樹 119

映画にあらわれた男性責シーン 菅 良太 122

創作結婚の条件 近藤 一 122

私の女装遍歴 矢島浩二 136

女体風俗 妖艶花の巻 牧 高志 138

雑誌通信 匪賊の惨虐な私刑 東西南北生 142

創作紅山彦 三条卓史 144

十三人目の奴隷 夢原狂介 150

ダイアナ夫人障碍の道 乗杉貴代子 160

読者通信 165

編集後記 176







# 美人調教馬

四馬 孝傑作集 (1)

こんな馬車に乗ってみたいと思いませんか、読者の皆さま各自で御自由にストーリーをお作り下さい。



四馬 孝・画



# 女 友 達

(乳 首 責 め の 部)

杉 原 虹 児 ・ 画



横<sup>よこ</sup> 戀<sup>れん</sup> 慕<sup>ぼ</sup>



滝  
れい子・画

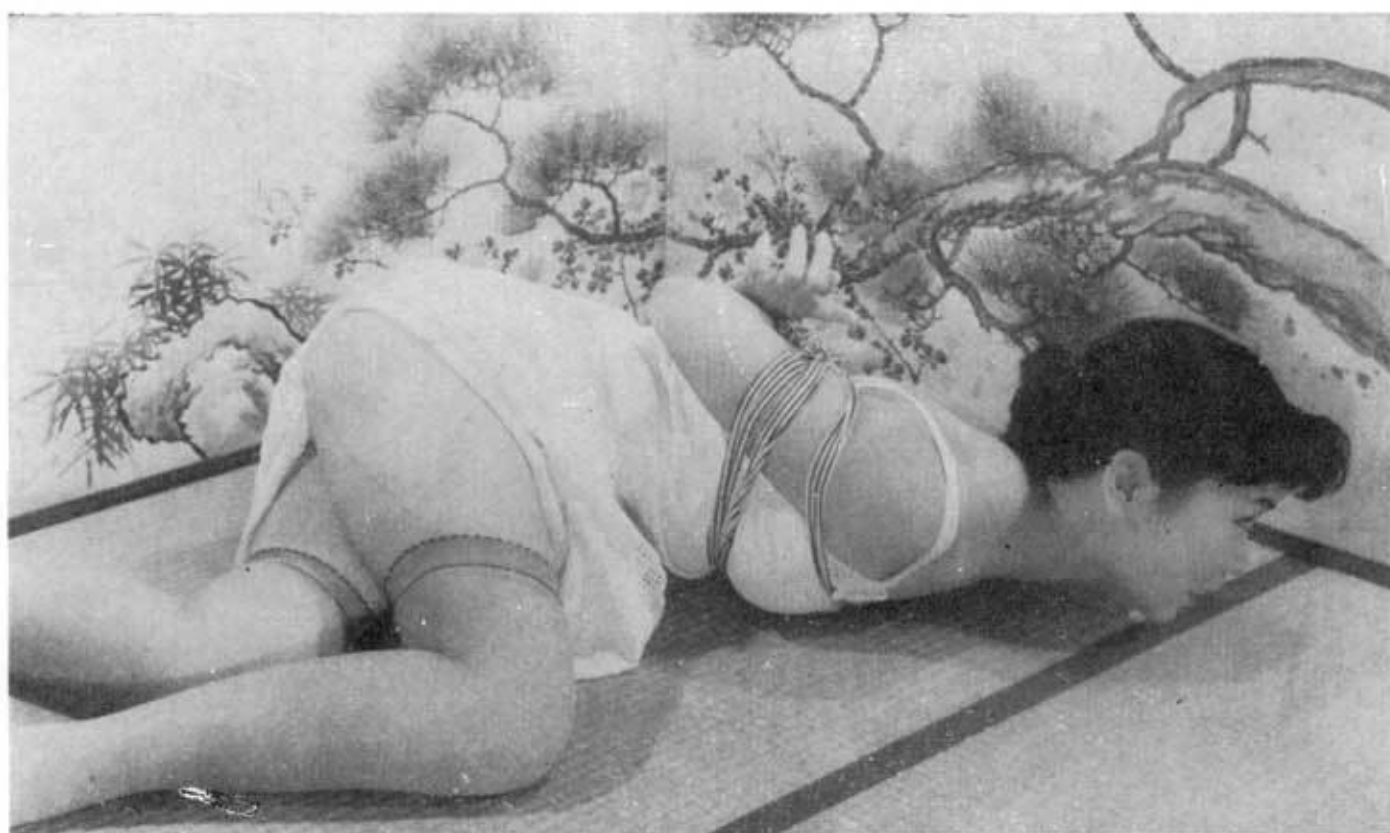


# 屏風の前にて



モデル

田中芳代嬢





和装 縛り  
赤い 扱帯

(その二)

— モデル —  
《花坂道子嬢》



＜緊縛映画名場面画集＞……………＜提供 藤 木 仙 治＞  
阿 部 秀



大映「東京暴力団」三年ばかり前に封切されたギャング映画で原作は島田一男。縛られている女優は矢島ひろ子、髪の毛をつかまれ、ピストルの銃口を咽喉もとに突きつけられているポーズがサデイスチックである。



東映「力闘空手打ち、(第三部)」園 ゆき子  
先月号の口絵に掲載した場面のアップである。白布の猿ぐつわをかまされて、ぱつちりと見開かれた目もとが印象的である。



洋画 スチール伊映画「カルタゴの女奴隷」 J・Mカナール 主演  
H・ミストラル



死の寸前、激闘の中で磔られた美女は助けられようとするが……。



恋人を救わんとするが、お互いに縛しめられて思うにまかせぬ悲しさ！



新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1958年 5月号

(第十二卷 第六号 通刊第一百七号)

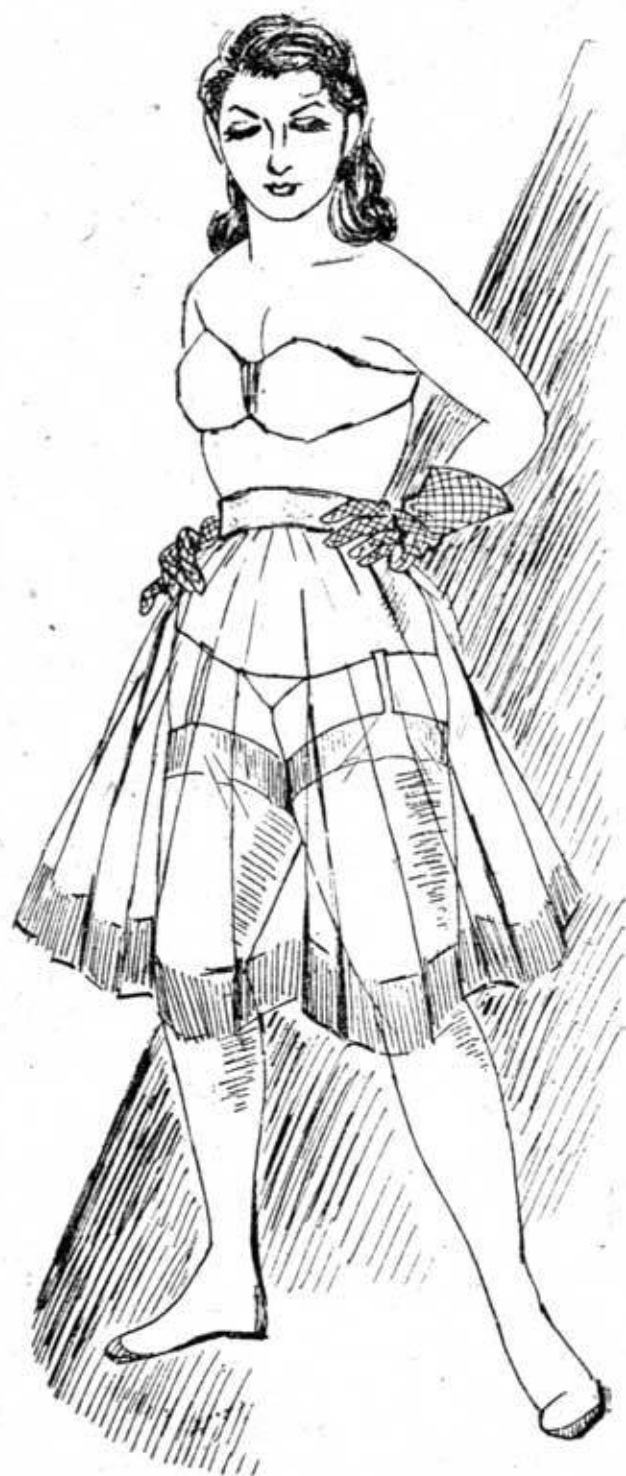


論文

下着と女性の進化を論ず

……或る猛烈なる女性愛好者が考察した、女性の  
下着に対する多少偽見に充ちた関心と希望……

S・S 生



一、ブームの真因  
昨年の夏頃、例の落下傘スカートの流行し

だした頃から、俄かに下着の整備が、これらの服飾美にとって、必要な事だと叫ばれた。

それまでは、日本に於ては、甚だ遺憾ながら、年頃のお嬢さんでさえ、ペチコートの存在を知らず、コルセットとガーターの組合せなどは特殊な婦人だけがするもので、一生縁のないものと思っていた人も多かった。

それが去年から今年にかけて、猫も杓子も下着の整容と優美を云い出し、終には下着文化論まで飛び出し、日本国中まるで、ナイロンスリップの亡霊に取り巻かれたようになってしまった。

何故かくも日本中、急に流行しだしたかと言うと……（ここが女性や女性的変性男子の多い服飾デザイナー達や、單なる繊維企業家には永久に解らない点であるが）……多少の費用や、煩瑣を厭わずこの下着流行を最も好意的に強力に後押ししたのが他ならぬ男性であったからである。

かつて昭和十年前後の狐の襟巻も、昭和二十六、七年頃の茶羽織も、男性が批判や冷笑に急にして、一致して肩入れしなかった挙句、單に女性だけの流行に終り、男性の働きに依存している経済的基盤の弱い女性にとつては充分に誰も彼もが享受できる楽しみとはならなかった。

しかし、下着の流行は、全くその基盤に於て、社会的に、経済的に、規模を異にしているのとなり、その根強さは比較にならぬものがある。

非常に卒直に、恋愛についての男性の一般的心理を述べるならば、世の独身者に於て恋人を有する者は、いつか何かの機会にその恋人を裸にして横たえ、その体を抱擁せんと願わない者は居ないであろう。

まして夫婦間に於て、お互いが睦まじければ睦まじい程、毎夜の抱擁の回数は多くなるであろう。

その場合、下着が美しいと云う事は、馴れた妻の体さえ、おやと眼を見張らせる力を持っている。

まして、これから露わにしようとする恋人の体が、泡雪のような美しい豪華な感じの下着に包まれていたら、その時の恋人の感激と喜びは、数倍にも膨れ上るであろう。

すべての女性に最大の欠点がある。

愛情の時間をより楽しいものにしようとする感覚を、むしろ恥ずべき罪惡と見なし、それを男の楽しみにまで同化させる配慮を欠くことをむしろ女の慎しきとする考えである。

外の勤勞を終えて疲れて帰ってくる主人を慰めるのが、この自分の体だと云う認識を、もっと強く誇らかに持ったら、その最後の裸身を飾る下着を、より一層真剣に研究しなければならぬ筈である。

それを、現実には、ただ單に表を歩く時の洋服の線の整容と云う、愚にもつかぬ理由から、現在の下着時代に突入したかのように考

えている服飾家や、女性が多い。もし男性の一致しての後押しがなかったら、このように早く空前のブームを巻き起さなかった事を良く考え、本末を誤らないようにしなければいけない。

男性は女性を愛するが為に働き、女性は男性に愛される為に着飾る。すべて人類の根本の問題にこれは帰依する。そして、繰返して云うが、下着の本来の使命は、裸身の美しさを強調する為にあるのだ。

デパートの女性用下着売場を、眼をちらつかせながら素通りする男性の顔を見れば、彼等が如何にこの新しい下着時代を歓迎し、ここ二、三年来新しく創り出された魅力を幸福に感じているか解ると云うものである。その事実を認識せずして、コルセットなどと云う、窮屈な精神病院の拘束衣のようなものを未だに、スタイルの為だなどと本気で信じて着ているのであるから、女性のお目出たさはいつまでたっても治らないものである。洋服を脱がせた時、真珠色の布や紐できっちり整容された女体の美しさと、それが男性に与える興奮の具合について、かつて女性自身、考えた事があつたのだろうか。

## 二、どんな下着が好まれるか？

さて、それでは男性は、どんな下着を好むか、事のついでに知っていた方が、どうせサ

ービス精神に徹するなら便利だ。

オールド・ミス志望者を除き、少しでも異性に愛され、同時にお互いが幸福になりたいと思う女性は、年の行った婆さんデザイナーのつまらない意見より、これから述べる事を良く熟読して戴きたい。少くとも、女性に對した時の男性の赤裸々な感情を充分に正確に伝えてあるつもりだ。

まず第一に、長い下穿は絶対いけないと云う事である。

それが、パンティーでもブルーマーでも、フレイヤー付きのものでも、レース飾りのものでも、スカートの線にすれすれや、膝小僧まで来そうな長いのは、何故か不思議に男性の氣持を佯しくさせる。男性と云うものはとかく残酷なもので、嚴寒の最中でも、我が愛する女性は、きりっと短いパンティーをしていることを本能的に望むものである。

たとえそれが厚ぼったい毛糸であっても、短かく可愛らしく作ってあれば、一層愛しさが増すと云うものである。まして春や夏に於ておや。

少くとも、寢床に寄り添う奥様方の時間になつたら、絶対に長いのは脱って、美しい縁飾りの、短い、透明に近いものを着用なさる位のデリカシーが無くては、世間に、安い値段でもっと美しい女性が一杯手に入るこの日頃、浮氣されたと泣き喚いてみても、それ



## 〔緊縛映画研究〕

## 縛られた女優達

## 大河原 珠 樹

読者諸兄に前もって御赦しを乞います。

今月は資料不足です。「清水港喧嘩旅」  
大映「忍術御前試合」東映「將軍家光と  
天下の彦左」新東宝、の三篇は仕事の都  
合上、残念乍ら見落しましたが、二月末日  
までは時代劇と名のつくものはつとめて観  
たつもりですから、さぞかし御不満で御座  
いましょうが御容赦下さい。

おけさ鴉（大映作品） 近藤美恵子

夫の借金のカタに悪親分に連れて行かれ  
扱帯で後手に縛られ、猿ぐつわも噛まされ  
て転がされている。胸の上と帯のあたりの  
二カ所を巻いて後手の縛り目は、子分の一  
人に体をもて遊ばされそうになって逃げ廻  
る時にチラリと見るが、本格的に縛ってい  
た。胸の巻きが弛みそうで気懸りだった。

飛竜鉄仮面（新東宝作品）矢代 京子

新選組の芹沢鴨に拐かされた、おみよを  
女目明しの姉の子分が救いに来る。直接縛  
りは見られないが、縄を解いたらしい場面  
がある。

花嫁殺人魔（新東宝作品）藤本の実

従姉妹殺しの疑いで、その夫と一緒に捕  
縛される。後手にギッチリ縛られて下っ引  
に棍棒で殴り責めにされる。縛られたまま  
苦痛に堪え兼ねて俯伏せに倒れてしまう。

花吹雪出世纏（東映作品）中原ひとみ

前号で紹介済みだが、油屋の娘お花が、  
悪人達に父を殺害された上に拐かされる。  
駕籠に押し込められる寸前に、ほんのIカ  
ットだけ後手にグルグル巻きにされ、猿ぐ  
つわを噛まされた姿が見られる。

浪曲忠臣蔵・赤穂義士（東映作品）太田

優子、赤木春恵

は奥様の方が悪いといっても過言ではないだ  
ろう。

スリットのあるスカートが此の頃多くなっ  
た。これも優雅な下着を展示する為と、我々  
は解釈する。それでは、裂け目から見えると  
云う条件では、どんなスリップが最も好まし  
く見えるか。人々によって好みは違うが、曇  
硝子のような半透明で裾ひだの多いスリッ  
プなどはかなり好感をもてる。縁取りや、花模  
様も透明であつたら良いが、木綿物の厚地を  
わざわざのぞかせている女性の頭の程度を疑  
いたくなる。

ブラジャーについて若干述べる。

絶対に金属製の三角に尖ったパット入りの  
ものは求めるべきでない。男の胸にガッンと  
衝撃を与えて、カチャカチャと胸の上で鳴つ  
て、どこに恋愛の甘さが生れると云うもので  
あろうか。乳首の形の全然出ないのも、やは  
り不親切なきらいを免れない。折角ある最も  
美しいものを何も殊更隠して押えつける必要  
はないではないか。

服に合わせて、スリッパや、その他まで薄い  
同色で統一するのも、時によっては、その女  
性の心構えが感じられて嬉しいものである。  
黒にしても、それを以て男性を悩殺せんとす  
る気魄が感じられる黒だったら、それは何よ  
りも悩ましい色になる。



討入り出発前の義士達が、そば屋の店員達を騒がないように一とまために柱へグルグルと縛る。勿論、形式的にだが、二人はその時の女中。猿ぐつわもされる。

#### 八人の花嫁 (大映作品) 阿井美千子

悪人達が銭形平次をおびき出すため、女房お静を拐かす。牢の中で前手に縛られている。胸の上をグルグルと巻き、前手首は帯のあたりで縛ってあるが、緊縛感に乏しい。

#### 鰐鯉 狂女 (松竹作品) 桜 京美

曲馬団一座が、將軍暗殺をはかる松浦藩の遺臣達のために小屋の中にとじ込められそれぞれ縛られているが、その中にコメデアンの桜京美がピエロの姿でいる。

#### 遊侠五人男 (大映作品) 中村 玉緒

映画の最初のシーン。拐かされたお千枝が小舟の中に後手にグルグル巻きに縛られ豆絞りの手拭で猿ぐつわされて転がされてぐったりしている。中村玉緒は、この頃よく縛られるが、悲しげな表情、救いが来て歓喜する表情など演技の進歩が見られる。

#### 江戸群盗伝 (松竹作品) 福田 公子

まだ映画は観ていないが、スチールから——大阪屋花鳥が梅津長門を逃がすため放火した罪で入牢、拷問にかけられる。灰色の囚衣でグルグル巻きの後手縛り (本縄縛

りではない) にされ、笞打ちの責め、吊し責めにあう。吊しは本当に一尺近くも吊り上げられるので圧巻だろう。この他、同心の一人が足を、花鳥の膝の間にグイグイと押し込んで行く淫らな責めにもあう。

#### 江戸群盗伝 (松竹作品) 嵯峨三智子

ラスト近く、將軍の落し種の雪姫が、旗本須賀嘉兵衛に拐かされ、救いに来た梅津長門と対決するため、須賀が姫を縛る。後手、足も揃えて縛り猿ぐつわも噛まされる。雪姫が縛りを解こうと、あせり身悶えるシーンもある。この他、強盗に押し入られた旗本とその妾が、しどけない姿で後手に括られる。

ともかく最近、縛りの観られない映画が多くなってしまった。御参考までに「任侠東海道」「緋ざくら大名」「素っ飛び笠」以上東映作品。「月姫系図」以上大映作品。「灰神楽荒神山」以上東宝作品。などには、縛り場面は御座いません。

(以上)

【註】本稿の追加続篇は本月号一一九頁に掲載してありますから御参照下さい。

### 三、女性 は 進化の途上にある

何を以て、女性の進化が下着と関係あるかと云う事を、結論として述べる。

下着ブームの到来によって、女性は、外に見える衣裳の美と、肉体の美しさを誇る裸体美との他に、裸身を飾る美しさを発見した筈である。

透明なスリッパ、ふわっと広がるペチコート (くり返すが、これは決してスカートを広げらす為のみあるのではない) 七色のパンティ、キリッとしまるコルセット、キヤミソール、ガーターベルト、すべて裸身に、それぞれのアクセントをつけて愛する人を一層楽しませる手段である。

更に今一つ大切なことは、優美な下着をつける事によって、女性の精神に、常に男の愛情を期待すると云う良き心構えを与えた。美しいスリッパ、高価なペチコートが、單に着の下に隠れて、誰の眼にもふれない方が良きものであるならば、こうも急激に発展する筈はない。いつかは誰かに見られたいからこそ美しいのである。それだけ、女性の心構えが良くなったことこそ、まず有史以来の女性心理の大進化であり、女性も始めて人生根源の姿に目覚めたと云うべきである。

下着優美時代、女性男性共に、圧倒的な支持をもって、今後も尚長く続くであろう。



# 赤いペチコート

(マリアンヌの手記 その五)

原作 セシル・サン・フォーレ

翻訳 鴉 嘔吐 夫

## 一

不幸という奴は、いつ突然やって来るか解らないものだ。

マリアンヌが、パリ郊外の、豪華なアパートで、女中のジュリヤと一緒にのんびりした生活を送り、時たま、趣味のために、あの丘の上のマダム家で、黒いペチ・コートを付けて、喜びの呻き声を上げていられたのも、すべて、夫が残した莫大な財産あったことだった。

それが或日、突然やって来た執達吏のため総てに封印され、やがて、長い裁判の後、彼女が無一文で町へ放り出されてしまったのは、そこには、一個の社会的尊敬を受けている夫

人の代りに、翼をもがれた、小さな鳥が、横たわっているだけの、哀れな有様になってしまった。

(彼女がどうして訴えられ、財産を根こそぎ取られたか、これはこの物語りに関係がないから詳しくは書かないが、要するに、甚だ巧妙かつ合法的な手段で、死んだ夫の親類縁者によってたかってむしり取られてしまったのである。)

——さて、彼女はこれから、どうして生きて行ったら良いであろうか。何の生業も持たず資金も持たず、住家さえ失ってしまった女にとって、生きて行くことは、甚だ難しい問題であった。

女中のジュリヤには早速暇をやったが、さ

し当って、この自分の明日の食事さえ見当がつかない。

思い惑いながら歩いていた彼女の足は、自然に、あの例の丘に向っていたのである。途中でハッと気づいた彼女は、どうしようかとしばし迷った。もはや、一日分の楽しみをあがなう会費さえ持ち合せていない。

だが、その時、彼女の胸に天啓のようにきらめいたことがある。……そうだわ、赤いペチ・コートを付けて、あすこで働く女になれば良いんだわ。それがどんなに辛いことでも私はきつとやって行けると思うわ。だって私は人に苦しめられるのが好きなんですもの。……彼女は俄に勇気を得て、丘に通ずる道を登り出した。



入口の扉を叩くと、例の如く愛想良くマダムが顔を出していった。

「おやおや奥様でしたか、暫く、お出でいただけませんでしたか、いかがでしたか」

「色々面倒な問題が起りました」

「そうですか、それはいけませんでしたね。」

それで久し振りに気晴らしにお出でになったというわけね、ホホホ」

マダムはこぼれるような愛嬌を見せた。

彼女は、おびえるような瞳で、そっと、ためらい勝ちに答えた。

「それが私、……あの、無一文になってしまったので、ここで働かせていただくと思った」

マダムはしばらくじっと黙ってマリアンヌの顔を見ていた。そうして、それが嘘でないと知ると、俄に乱暴な口調に代った。

「それでは、お前は、私の家の娘になりたいというのだね」

「ええ」

「とても辛いよ。それでも我慢できるかい」

「ハイ、する積りです」

「その代り、もうここへ入ったらずっとここに住んで外出も滅多に出来なくなるのだよ。」

そして、私の命令には、どんなことがあっても従わなければならないんだよ」

「ハイ、覚悟しております」

「お前は、今までの客のうちで、我慢心が強

い方だった。だから少しは勤まるだろうが、ただ、並大抵の決心じゃ、やって行けないことだけは知っておいて貰いたいね」

「ハイ」

「よし、それじゃ雇って上げよう。給料は最初にいった通り一日三千法、それも一月まとまって勤め終えたらあげるんだよ。だけど、その中から、最初は衣裳費として、一万フラン、その外毎月、食費、寄宿舎費で四万フラン、天引だから、手取りは月四万フラン位だよ。それでも良いかい」

「ハイ」

フランは、日本の円と大体同じ位である。

「その代り、毎日、体に精がつくようおいしい物を喰べさせてあげるし、仕事が終わったら特上等の部屋で、休ませてあげる。それも皆、あんたの方の体の若さと艶を保ちたいためなんで、皮膚に色艶が無くなり、顔に小皺なんか出て来たら、その日からお払い箱だから、それだけは承知しておいてくれ」

マダムに、さんざん、念を押された後、彼女は、マダムに連れられて、先ず、予備検査室へ連れて行かれた。

## 二

部屋は、赤いビロードで包まれた、柔らかなムードの小部屋であった。奥から、黒い皮手袋をはめ、皮ブルマーをはいた、この係

りの六尺近い大女が二人あらわれた。マダム自身、小さな針金の鞭を持って入ってきた。そして、心配そうにしている、マリアンヌに向って、

「さあ、さっさと着物を脱ぐんだよ。ここでは二度目は鞭だからね」

といった。マリアンヌは、慌てて、スーツ、ジュミーズ、ブラジャーを取り、最後のものも投げ捨てるようにして脱いだ。

大女が二人、マリアンヌの両足をそれぞれ掴むと、逆さ大の字に吊下げた。

「良いかい、ここでは、泣き声も、大事な仕事のうちなんだよ。良い泣き声を出し」

といって、柔かな、それだけに、刺激の強い内股の部分で、針金の細い鞭で、ピシリピシリと打ちすえた。

彼女には三重の苦痛が訪れた。すべてが、同性の前にむき出しになっている恥しさ、そして特に痛みのひどい部分への打撃、更に逆さになっていることによる息苦しさ……

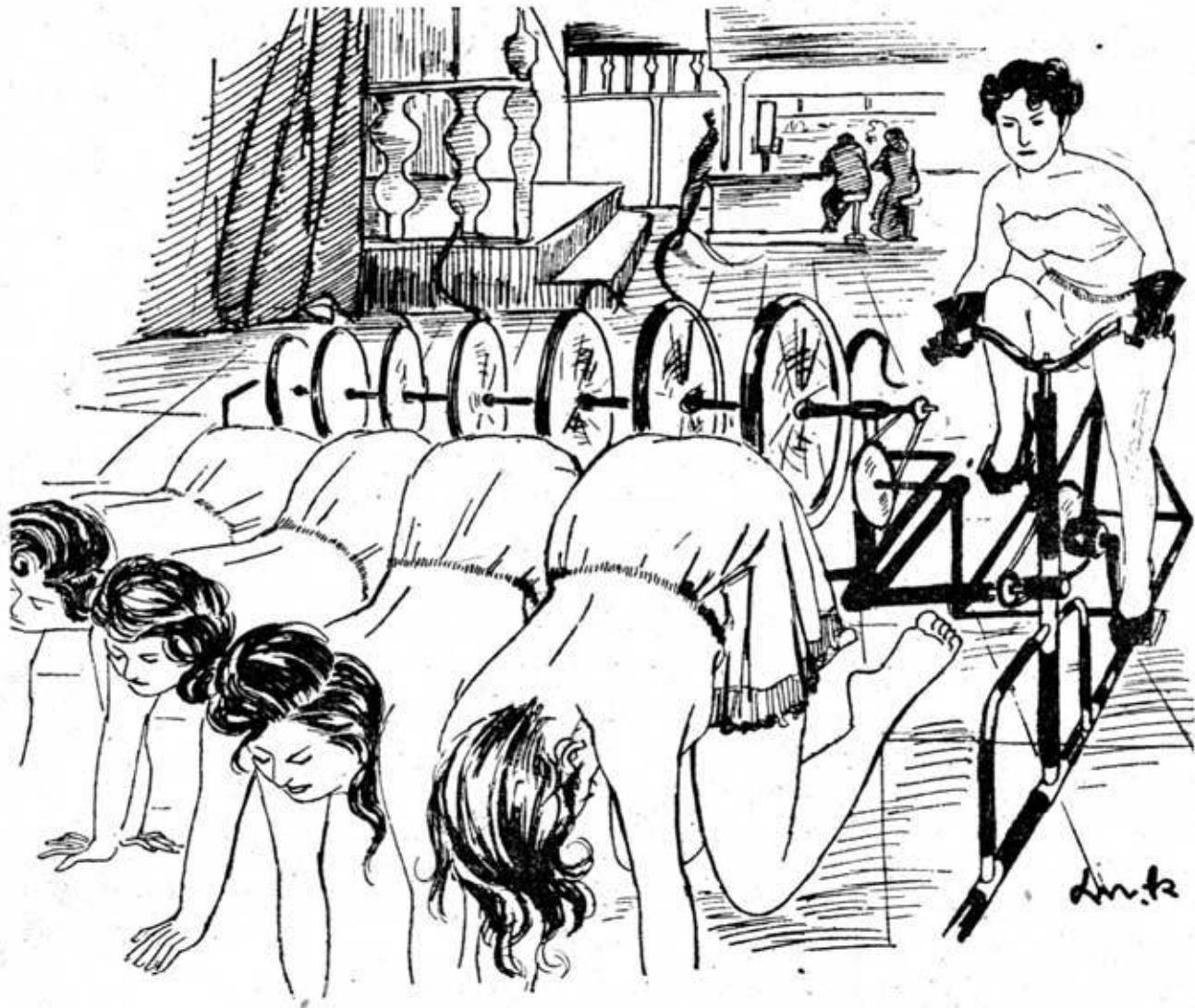
しかし、もがこうにも、すっかり両足を押えられては、もうどうにも身動きが出来なくなった。彼女は呻いた。

「もっと泣くんだよ。お客様に喜ばれるためにね」

彼女は大声で苦痛を表現した。二十分位たって、やっとその苦しみを許された。

「どうだい、これでも勤めるといふのかい」





「ええ、お願いします」  
「それじゃ、これで、正式な雇人にしてあげよう。私と一緒に二階へお出で。お前は泣き

声が良から、案外売れっ娘になるかもしれないよ」

彼女は、裸のまま、

マダムにつれられて、二階の部屋に行わした。

広いホールを中心にして、円型に幾つかの室が囲んでおり、その小室には、厚いカーテンがかかっていた。その室の一つをあけて中を見せた。四号と札がかかっている。「さあ、ここがあんたの部屋だよ。どう、良い部屋だろう」

成程、中は素晴らしかった。主姫が寝るような、天蓋付きの豪華な寝台、厚いじゆうたん、新しくてキラびやかな調度類、どれも皆、金がかかったものばかりである。

マダムは、部屋に備えつけの、赤い、良く透き通るペチ・コートを出して、彼女の腰にまわせた。

「良いかい、これが家の制服だよ。そして、ここ

に居る限りは、これ以外のものを着るのは許されないのだよ」

「どうも色々すみません」

「今日はお休み、明日から、厳重に日課通り、行動して貰うからね」

マダムは入口のカーテンをしめて出て行った。

彼女は内股の痛みを耐えながら、這う様にベッドに登った。いよいよこれから厳しい日課のなかに身を置き、被虐の毎日を送るのだ。身がひきしまるような喜びが湧き上ってきた。

それに、欠し振りの鞭の痛みは、彼女の体に永いこと眠っていた被虐心をかきたてた。体中が、燃え上るようにほてってきて、じっとしていられなくなった。

うつぶせになり、ぎゅっと枕をがき抱き、嗚咽を耐えるようにして、その激しい衝動を押えつけようと、体をくねらせた。

### 三

朝の五時。

まだ明けやらぬ室にうとうと、マリアンヌが眠りをむさぼっていると、ジジジとベルがけたたましく鳴った。彼女はびっくりして飛び起きた。どの部屋でも、女達が一せいに起きて中央のホールへ出たらしい。マダムのキンキンとした声が聞えた。



「さあさあ、二度目は鞭だよ。皆、全部何もかも取って中央に集りなさい」

彼女は慌てて、赤いペチ・コートも脱すと中央のホールへ出た。そこには、いずれも彼女のような美しい、均せいのとれた体の若い女達が既に六人並んでいた。マダムと、皮手袋の係員に連れられて女達は、階下の外れにある。広い浴室へ連れて行かれた。

係の女は、女達を外側を向いて丸く並べると、その手と手、足と足を、となりの女としばり合せて、自由に動けないようにした。

マダムが時計を持って命令した。

「冷水三分」

忽ち天井から、体が凍えつくような水がほとぼしり出て、彼女等の体に容赦なく振りかかった。しかしのがれようとしても、お互いにくくりつけられているので動くことは出来ない。てんでに悲鳴を上げ、ブルブル震えながら耐えていた。三分間が実に長かった。しかし、それも過ぎると、マダムは続けて、

「温湯五分」

といった。冷えきった体に、最初は、それは熱湯かと思われ程刺激して痛かった。が馴れてくると、体の毛穴がひらき、皮膚は、赤く色ずき、体の底からほかほかとあたたまってきた。そして、それにやっと馴れてうつとりしていると、マダムは冷厳に

「冷水三分」

と命令を出した。なまじ温まっているだけに、冷水は五臓六腑にひびく程冷たく感ぜられた。マダムはいった。

「良いかい。こうして、冷たい水で皮膚を収縮し、熱いお湯で、柔けて、交互に繰り返してゆけば、おまえたちの体は、いつ迄も、ピロイドのようにしっとりして滑かな皮膚を保って行かれるんだよ。少し位、辛くても我慢するんだよ」

三十分位、交互に水と湯を浴びた彼女等は、手足をほどかれて、洗面室へ連れて行かれた。「お前達は皆、商品なんだよ。だから美しくて、痛がれば良いんで、その他の人間的のことは、成可く、生活の中にうるさくもこまなないようにしないとね。お便所は、朝と夕方に一度だけしか許さないから、それですむように癖をつくっておくんだね。さあ、これから朝の分をすませなさい」

マリアンヌは流石に顔を赤らめた。七人のそれぞれの部屋の番号が書いた便器が、そこにちゃんと並んでいて、それをかくす扉も仕切りもない。美しい女達は、裸でそこに並んで腰かけなければならぬのだ。

彼女の部屋の番号は四号だった。

「二度目は鞭だからね」

といわれる前に、皆と同じにしないではない。

彼女は、左右に人々が並んで腰かけ、一つ

あいた四号の便器に腰かけた。

それでも、やっとすんで立上ると、皮手袋の女達の係員が、次々に、体を浄めてくれ、次の部屋に行った。

既に、ぼつぼつ夜があげようとしていた。テーブルには、スープや、オードヴル、その他さまざまな御馳走が並んでいた。

「さあ沢山お喰べ、労働は辛いんだからね」女達は皆、むさぼるようにして、思いがけない程多量の食物を喰べた。マリアンヌだけが、どうしても喰べきれなかった。

「良いよ良いよ。今晚から、とても食事が待ち遠しくなるからね」

マダムは少食のマリアンヌを見てそういった。

「さあ、これからまず艶出しだよ。いつもの通り解ったね」

といわれると、女達は三人ずつに分れた。

マリアンヌは一人余ったので見ていると、皮手袋の女が一人立って来て、彼女の相手になった。

「Aの組、打ち方初め」

その号令があると、マリアンヌの列は、皆手をその場につき、尻を高くあげて四つばいになった。相手側の女がそばへよってきて、その体を、隅から隅までくまなく平たく叩いた。ぺたぺたと、撫でるように叩くように、全身を平均して叩いて行く。体中のぜい肉を



取り、脂肪を体中に平均させて、滑らかな体を作るためには最上の方法らしい。

マダムが時々やって来て、霧ぶきで、強い赤い薬をかけて行く。それがついている所は体中がむずかゆく、耐えきれない程になる。

女達は、四つんばいになりながら、そのかゆみをのがれるため、

「ぶって、ぶって」と絶叫した。

一組が終ると次の組になったが、マリアンヌだけは念入りのため、続けてやらされることになった。体中、ポーウツと熱っぽくなる位叩かれ、皮膚全体がひりひりと熱かった。それが終ると、いよいよ、苦痛の耐性訓練だった。七人が膝をついて四つ這いになり、きっちりお尻を並べて体をつけると、そのすぐ後に、七つの車がついてある、機械が運び出された。車の外輪には、ひらひらとした皮が四つついており、その一つ一つが一人一人の体に当るようになっていた。七つの車の横軸のわきに、自転車用



のサドルと、ペタルがついており、そこに、係りの女が乗って、ペタルを踏み出した。

車がビュンビュンと、音をたてて回り出し皮が彼女達の体に、びしびしと当り出した。少しの休む間もなく、続けざまに当る。息つくひまもない程の連続の苦痛であった。

そして、彼女等の臀部は、強く美しく鍛えられて行くのだ。

夕方二時頃まで、このような、激しい訓練が続く、軽い昼食の後、二時間の休憩になった。四時から、九時までが、勤務の時間である。

#### 四

愈々勤務の時が来た。かすかなおそれと、一沫の期待を持って、その時間を待った。

四時のベルが鳴った。女達は、皆制服の赤いペチコートを着て、中央の広場に出た。

中年の肥った紳士や、力のありそうなマダムが待っていて、それぞれ女を選んだ。彼女は、頭の禿げた、でっぷり肥った、みるからに好色そうな紳士に選ばれた。

彼女の為の仕置台として紳士の注文で、特四号という椅子が運ばれて来た。これは、鉄のパイプで、木馬状の腰かけが出来ていて、



両足と両手は、四つの足にくくりつける。その木馬の角度を、ハンドルの操作一つで自由に動かせるようになっていた。

「わしは、肥った、脂の乗った尻が好きでな！」

紳士は、卑しい笑いを浮かべながら、自分の方へ、つき出された臀部を向けると、平たい木のヘラのような板で、ぴたぴたと打ち始めた。鞭のように鋭い痛みはない代り、体中はずしんとこたえるいたみであった。

途中から、男は、ヘラにべつとりと油を塗って打ち出した。痛みは、やわらかくなったが、不思議な刺激が体中に湧き上って来た。

どうしても我慢出来ない程強い甘美感である。苦痛にまじっての甘美感は全身にひびいた。彼女が苦痛と甘美に耐えかねて、

「うう——うう——」

とくいしばった歯から、嗚咽を耐えるような悲鳴を洩らすと、紳士は、

「どうじゃ、良いだろう」

と得意そうに尚も叩きつづけた。

そのうちに、彼女はこの薬が、皮膚の中の器官も刺激するのを知った。たまらない尿意が催してきたのである。彼女は、係りの女の人を呼んで貰ってそのことを訴えた。しかし女の返事は冷たかった。

「それは、時間がくるまで許されません」

彼女は絶望を感じた。

（ああどうしよう。夜の許された用便の時間まで、まだ四時間もある。それまではとても我慢出来そうもない）

しかし、そんな彼女の気持ちにもかまわず、紳士は、ヘラに、ますます厚く薬を塗って、彼女を叩き始めた。

薬の作用と、続けざまの打撃で、どうにも我慢出来なくなった。泉の水がわき出るように、彼女の体の外にそれは洩れて行った。

紳士は、待ってましたとばかり叩き始めた。彼女は、恥と苦しみのため、真赤になってその痛みに耐えた。

周囲では、もう大変な騒ぎであった。

大の字にしぼりつけられているもの、ローラーにかけて回されているもの、彼女の様に油をつけたヘラで打たれているもの、そしてその女の体の下も、水で、点々と濡れているのを発見して、彼女は、やっとホッとした。（きつと何かの薬なのだ。仕方のないことなのだ）

一通り仕事が終わると女達の間で、お客の休けい時間のお楽しみ用としての余興が行われることになった。

二人の女が、中央に出て、その乳首と、乳首を二尺位の絹糸でむすび合せた。

それで綱引をするのである。

女達は相手を自分の陣営へ引きずり入れるため、必死の力を出した。

乳房が張って乳首が千切れそうになった。そして痛みを耐えかねて、一人の女がずるずるひっぱられた。今にもその丸い玉が、もぎとれそうなので、見ているマリアンヌはハラハラしたが観客達は一せいに拍手して、自分のひいきに応援した。

そして負けた方は、仰向けに寝せられると乳房に、マダムの針金の鞭できびしいちようちやくを受けねばならなかった。

その余興は幸い一組で終り、次は、踊りであった。馴れた三人の女が出て来て、マダムの振回す鞭を間一髪でよけながら、巧みな踊りを展開した。

そして、余興が終ると、再び、勤務が開始されることになった。今度の行為はすべて集団が単位で、各個人の優劣が試されるのである。どうなることだろうか、彼女は早くも、胸がドキドキしてきて、じっとしていられない思いであった。

—— 未完 ——

（註）長らくお休みして申し訳ありませんでした。作者の本業たる映画の脚本の製作にかかっていたせいでお許し下さい。これから又、ボツボツ、書き続けます。

× × ×



千恵子より泰子への手紙より

## (續) 変ないたずら

三 隅 千 恵 子

泰子様、いつぞやは大変失礼なお手紙差上げまして、御免なさいね。あまりひどいことばかり書きましたので、すっかりお怒りになつていらつしやるのではないかと、心配していますわ。貴女にあんな変なお手紙差上げたのは私だけでしょね。でも貴女だってあんなことおきらいではないはずですから、びっくりはなさったでしょうけれど、珍しいやら面白いやらで、きつと最後までお読み下さったものと想像していますわ。

あれから私、貴女のことばかり考えていたものですから、或晩夢を見ましたのよ。思いがけもなく、貴女から御返事を頂いた夢です

の。其の時の嬉しかったこと、ほんとに胸がわくわくして、ぼうっとなる位でした。封をきつて見ますと、分厚なお手紙と一緒に、貴女がおかきになった奇麗な絵が何枚も出てきました。私はすっかり有頂天になって、貴女の絵を眺めながら、何度も何度も繰りかえしお手紙を読ませて頂きましたわ。そして、おしまいには隅々まで暗記する位になりました。でも朝になつて眼が覚めると、夢だと分つて、全くがっかり致しました。あれが夢でなくて本当のことだったら、どんなに素敵でしよう、残念でなりませんのよ。でも夢の中で読んだ貴女のお手紙は、目が覚めた後ま

でも大抵記憶に残っていますし、貴女がお画きになった美しい絵も忘れることは出来ませんわ。それで夢の中で貴女から頂いたお手紙を、貴女にお知らせしようと思ひ立ってペンをとりました。でも私、絵が下手なものですから、どうも巧くかけませんが、我まんして下さいませね。文中『私』と云うのは貴女のことですから、そのおつもりでお読み下さいませ。

千恵子様、先日は思いがけもないおたよりお寄せ下さいまして有難う存じました。あまり突然でしたし『何でしょう』と不審に思い



乍ら読み始めましたが、出しぬけに誰にも知られたくない私の秘密が書いてあるのですもの、私は恥しくて恥しくて、頬がかあつとなる思いをしましたわ。桂子さんも随分ですこと。貴女に私のこと何もかもしゃべってしまつたのですってね。でもあれは桂子さんが悪いのですわ。あまり意地悪ばかりするものですから、私がとうとうたまりかねて、あんな恥しいことをしてかしましたの。

それにしても、貴女が仰云います通り、女性が女性を組み敷くのは、全く愉快なものですわ。私も桂子さんを組み伏せた時のことを思い出す度に、もう一度行ってみたい衝動にかりたてられて、ほとほと困りますのよ。でもそんな都合のよいチャンスなんてめったにありませんし、あれ以来、親しい友人を何度か組み敷いた位ですわ。其の点、貴女はほんとにおうらやましいと思います。私もこれからは貴女の真似をして、ジャンジャン組み敷いてやろうかしらと思つています。でも随分親しい友人でも、一度私が下敷きにして押えつけると、大抵腹を立てるか、でなければメソメソ泣き出しますので全く困りますわ。

それから、貴女は薄い絹のパンティーをおつけになって、女性の顔の上にべったりお尻をのっけてお跨りになることに、何よりのお楽しみを感じていらつしやる様ですわね。そして相手の口と鼻を、息も出来ない様にびつ

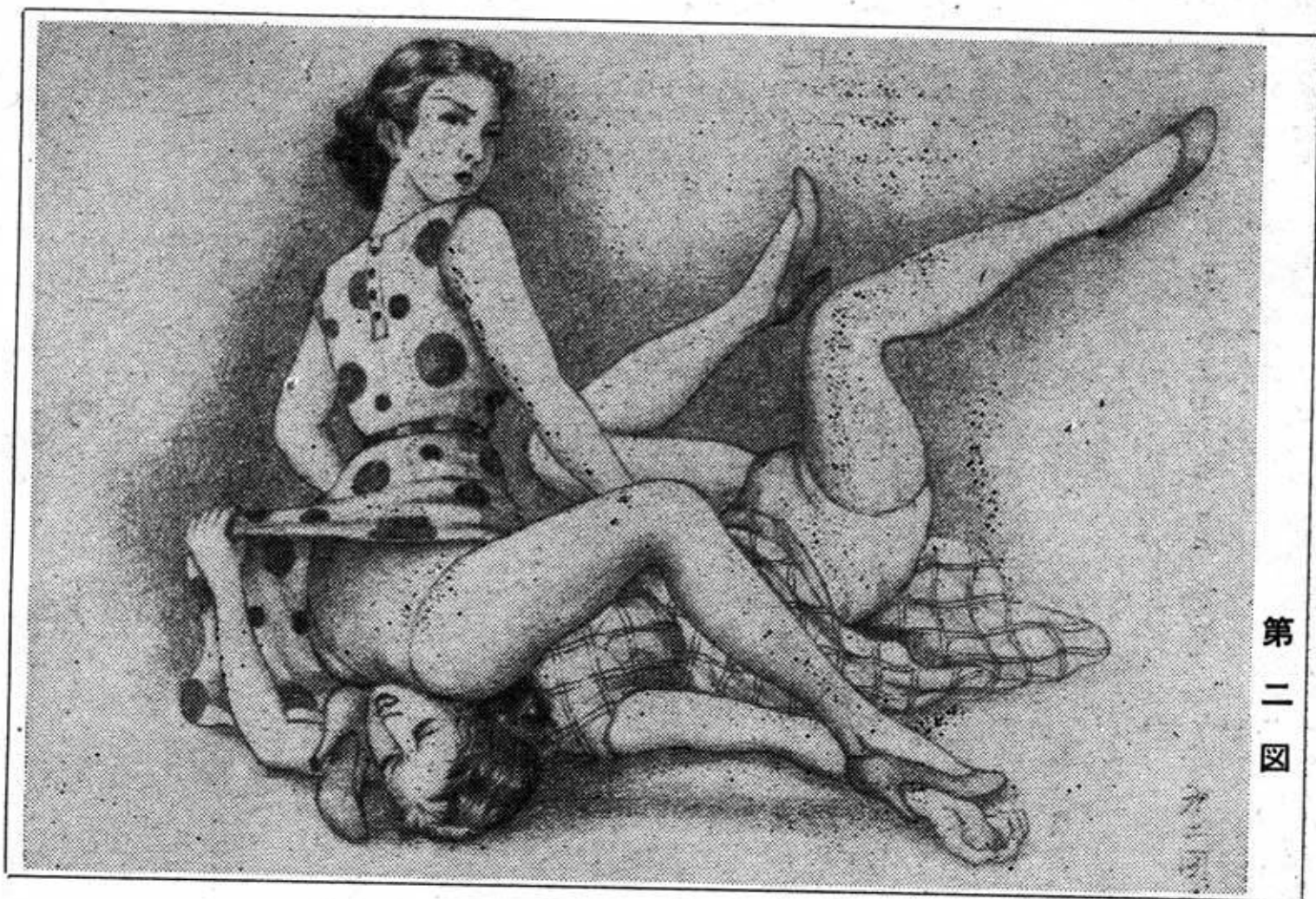
たりおさえつけになるのでしよう。私はまだそんな思い切つたことをした経験は一度もありませんけれど、今度誰かに断然実行してみますわ。どんなに素晴らしいでしようね。よいことをお教え下さいまして有がとうございました。

それに貴女は私と試合をして下さいますってね。本当でしたら、此んな嬉しいことはありませんわ。勝負がつくまで、思い切り争つてみましょうよ。でも私は案外弱いのですから、とても貴女には叶いませんわ。お手紙にありました通り、きつと私は貴女にやつつけられて、ギューギューひどい目に合わされるにきまつていますわ。でも弱い私がお強い貴女に負かされて、存分に征服されるのは当然のことですもの、御遠慮には及びません。私はどんな苦痛でもお受けしますし、貴女に屈服することを無上



第一図





第二図

の光栄とも感じるでしよう。

貴女と私が女レスリングもどきに試合をしている光景を色々想像して、何枚か絵を描きましたから、貴女に御送り致しますわ。あまり巧くはありませんけれど御らん下さいませ。大きい水玉模様のワンピースを着ていらっしゃるのが貴女で、チェックのワンピースが私なのです。共に下着はブラジャーとパンティーをつけています。

第一図は如何でしょう。力及ばず貴女に捻じ倒された私が、首を貴女の足の間にはさまれて、ぐいぐい絞め上げられている場面ですわ。私は身体を弓なりにそり反らせて、のがれようともがいています。でも貴女は足先と足先をがっちり組み合せて、ふっくりした両脚にうんと力をお入れになって、私の喉首をぎゅうとお絞めになるのです

もの、私は手と脚をじたばたさせるばかりでどうにもなりませんわ。私の顔は貴女の太ももの蔭になって絵では見えませんが、きつとあわれな表情でしょうね。

では次の第二図を御らんになって下さいませ。仰向きに押し転がされた私の首の上に、貴女が勇しく逆馬乗りにお跨りになって、私の右の手首をハイヒールで踏み付けていらっしやいます。私は右手の自由がきかないものですから、左手で貴女のスカートを掴んで押しのけようとする拍子に、スカートがくるつとめくれて、短いパンティーをぴっちりおはきになった貴女のお尻がむき出しになり、其の下から私の悲壮な顔のぞいていますわ。こんなあられもない絵を画いてと、お気を悪くなさらないで下さいませね。お勇ましい姿勢で馬乗りに跨っていらっしやる貴女よりは貴女の下敷きになって、じたばたしている私の方が、ずっとずっとみっともない姿ですもの、悪しからずお許し下さいませ。

次は第三図ですわ。随分奇抜な恰好でしよう。レスリングの海老攻めというのですか、私は腰のあたりから二つに身体を折り曲げられ、首の上にずっしりとお跨りになった貴女に、ふくらはぎのあたりをしっかり両手両脚で押えられていますわ。もうこうなっては、私に何が出来ましよう。全身動かせる部分は何処もありませんわ。僅かに両手だけが幾分



かは動くでしようけれど、そんなことが何の足しになりましょう。私は身じろぎ一つ出来ず、完全に押え込まれて、貴女のするがままになるより他はありません。此の時の私の苦しみは大変なものでしょうね。喉首の上には貴女の全身の重味がまともに押しつぶさて来ますし、両脚の後側は筋が切れる程の痛みにキリキリッと引きつることでしょう。それに抵抗したくても出来ないのですから、此んなひどいことはありませんわ。貴女の肩の後に高く持ち上げられた私のお尻が、ヒクヒクッと僅に上下に動く位がせい一ぱいではないでしょうか。貴女は、すっかり私を征服なさった嬉しさに、にっこり微笑んでいらっしやいます。反対に私の顔は火の様に真赤になり、眉をつり上げ歯を食いしばってみにくく歪むでしようね。思わず知らず、

『うう……むッ、うッ!』

と、苦しまぎれに呻き声を出すかも知れませんわ。

其のままの姿勢で、貴女がお尻をずらせて私の顔の上にべったりお尻をおのせになったのが第四図ですよ。すごいでしょう? 私は、眼も鼻も口も、殆ど顔全体が貴女のお尻の下敷きになって見えていません。僅かに額から上だけが、やっとのぞいているだけですわ。

私は息がつかまって声を出すことも出来ず、

苦もんにのたうち廻るでしよう。でもこのように身体を柏餅のように二つ折りにされて貴女の全身の重みでびったり押え込まれては、身じろぎ一つ出来ませんの死ぬよりつらい苦痛を味あわされるでしようね。私はやっきになって、首をねじ曲げて息をしようとしませんが、貴女のお尻が口の上にも鼻の上にもべったり張りついた様に密着してはなれません。私の額には、忽ちべっとり脂汗がふき出して、青い静脈がぷっくりふくれ上るでしよう。それでも私は貴女に何一つ抵抗も出来ないのですから、こんな悲さんなことであるでしようか。それに女性にとって命より大切な顔を、お尻の下敷きにされる程の屈辱は又とありませんわ。私はあまりの耐えがたい屈辱感に気も遠くなる思いをするでしようね。

でも貴女はさぞ素晴らしい



第三図



優越感を満喫なさいますでしょうね。女が女を征服するには、これ以上の方法はありませんもの。貴女の御満足は如何ばかりかと、負けた私でさえ想像が付きましますわ。それでも、まだ貴女はお許しにならないのです。全身の重味をおかけになって、身体を上下にゆすり乍ら、

『これでもか、これでもか』

とばかり、私の顔を押しつぶそうとなさるでしょう。其の度に私は鼻も口もごりごりつと、潰されて、恰かも潰された蛙さながら、それこそほんとに、ぐうの音も出ませんわ。

やがて完全に屈服し、息も絶えだえに力尽きた私は、お強い貴女に降参して、許しを乞うより他はありません。勿論私だって貴女に降参するのは、くやしくていやですけど、力のかぎり争った末、貴女に負かされるのでしたら、私の非力さのせいなのでもの、何も思い残すことはありませんわ。私嬉んでお強い貴女に屈従致しますし、貴女が私の顔をお尻の下敷きになさったことにも、おうらみするどころか、かえって非常な光栄と心から御礼を申上げたい位ですよ。其の時は苦痛に感じても、何時までも忘れられない喜びではないでしょうか。ですから、貴女も遠慮等なさらないで、思いのままに私をいじめて下さいます様、今からお願ひして置きますわ。

女だてらにはしたないことばかり書きまして御免なさいね。でも貴女からあんなお手紙下さったものですから、つい私も嬉しくなつて恥しさも忘れ、あからさまな御返事差上げるのですわ。お許し下さいませ、かしこ

千恵子様

泰子より

大体こんなものでしたわ。所々は夢の中のことって記憶が薄く、少しは違っていたかも知れませんが、あまり相違はないつもりですのよ。でもこれは夢の中の貴女のお手紙なのですから、貴女の本当のお気持ちと、一致しているかいないかは、私にも分かりませんわ。夢は逆夢とよく云いますから、本当のお気持ちとは反対かも知れませんわね。でも若し正夢で、貴女がお手紙の通りのことをお考えになって居られるのでしたら、私どんなに嬉しいでしょう。

ですから私、貴女のお考えを是非お聞きしたいわ。でも、ふく面をとって貴女の前に出るわけには参りませんから、こうしましょうよ。

若し私の夢が逆夢で、貴女の本当のお気持ちと違っていましたら、御面倒でも貴女は来週一ぱい腕時計を右手におはめになって下さいませ。反対に正夢でお手紙と一致していましたら、普通の様に腕時計を左手におはめになって頂きたいわ。私は来週中に一度は、

貴女を何処かでお見受けするはずですから、貴女の腕時計の位置を見て、貴女のお気持ちが分ることになりますわ。是非お忘れにならない様お願ひ申し上げます。

では御機げん宜敷く、何れ又おたより致しますわ。さようなら。

泰子様へ

千恵子より

私は此の手紙を前と同じ筆跡で書き終えろと、四枚の絵を同封して、又泰子さん宛郵送しました。

泰子さんは開けてびっくり、又々赤くなったり青くなったり、まるで七面鳥の様に顔色を変えたことでしょう。泰子さんにしてみれば、女が女を捻じ伏せて首を股にはさんで締め上げたり、はしたなく顔の上にべったりお尻をのせて馬乗りに跨った、あられもない絵を見せつけられたのは生れて始めてでしょうから、どんなにきもをつぶしたかと考えただけで、おかしくてなりません。

それから二三日して週が変わるのが、私には大変な楽しみでした。泰子さんは何うするかしら？ 平気で時計を左手につけて来るでしょう？ それとも逆に右手にはめているかしら？ そう思うと、私は胸がドキドキするのを感じました。

所が次の週の月曜に出勤して来た泰子さんの腕を見ますと、まあ、あきれるではありません



せんか、右手にも左手にも腕時計をはめていません。土曜までは、可愛い金側の小さい時計を毎日ちやんとつけていましたから、私の手紙で態と外して来たに相違ありません。私はまるで肩すかしを食った様子がっかりして、くやしかったのですが、泰子さんは私に下敷きにされた絵を見た上にひどい手紙を読まされて恥しいやらくやしいやら散々思い悩んだ末に、せめて腕時計を外すことで僅かなレジスタンスを試みているのだと、同情したりせいせいした気分になったりで、私はあきらめていきます。

数日してから泰子さんに、『今日は時計はどうなすったの?』と、聞いてみました。すると彼女はけろっとして、『故障で修理にやっていますわ』と答えました。私は内心、一本やられたと思いました。あまり深入りして感付かれて



第四図

は大変ですから、其れ以上は何も尋ねませんでした。でも何かこう、くやしう様な嬉しい様な、複雑な気持ちでしたわ。

此の次は泰子さんに、どんな手紙を書いてびっくりさせてやろうかと、考えをめぐらしています。何方か、よいお智慧を、お貸し下さいませんか。

勿論、私が泰子さんから返事をもらった夢

を見た等と云うのは、私が空想して作り上げたことで、ほんとにそんな夢を見たのではありません。

でも泰子さんって、私からの手紙を読んでいながら、しやあしやあと腕時計をはずして出勤して来られる程の芝居つ気のある方ですから、これから、どんな手紙を出してやろうかな、と私もとても楽しみにしてみですわ。

今のところ彼女から手紙の返事を貰えないのが残念といえど残念ですが、次には又よい考えをだして彼女を困らしてやりましょう。面白いことが起きましたら改めて御知らせすることにいたします。女だてらに、あられもないことばかり書きましてごめんなさいね。では、皆さまからのよきお智慧を拝借できますことをお待ちして今月はこれにてお別れいたします。

三隅千恵子





## マゾヒズムへのいざない

(第八回)

黒田史郎

「暗い欲望」は前後六回にわたって八あまとりあV誌上に発表した私の告白である。私は書かねばならなかったそれらの原稿を、なごらく手許にあつたために、遂に発表することにした、それにはかなりの勇気を要した。その頃の私は、まだまだ多くのためらいと羞恥と、それから恐怖を克服出来ずに苦しんでいたのだ……私は一回、二回、三回と掲載された自己の原稿を、心の底から厭悪した。そこでそれを中断しようと思つた。「暗い欲望」は私だけのものであり、他人へのサービスでは決してなかったから。ところが私の思いも及ばぬところからの反響を偶然耳にした私は、大いに元気づけられ、ともかくも先を続けたのである。一人は八あま

とりあVの挿絵画家、一人はかねて崇敬の念をいだいていた沼正三氏。どちらも全くの未知の人であり、現在もその通り素性はおろか顔さえしらぬ人達ではあるが、かような素晴らしい理解者が私の拙い原稿に好意と共鳴を寄せていられることを知った私は、一書き続け、「暗い欲望」の稿を終えると同時に、続篇の「幻炎」に手をのばし、漸く興が乗りかけてきた頃、雑誌の廃刊。未完のままうっちゃってしまったわねばならなかったのを口惜しく思いはするものの、それでもそれなりに有難いことと今でも思うのである。「暗い欲望」は十七・八才頃までの私の特異な遍歴の報告であり、それは私がマゾヒズムをはっきりと自覚するまでの一種模索状態にあった時

期である。対象は女性でなく少年である。今はやりのシスターボーイ好みとは全く違った性質のものである。根底によこたわっているのはマゾヒズムという大きな動脈だったのだ。それが続篇の「幻炎」になると漸く芽を吹き出す。私の対象は一転して少年から女性へと移る。私が書きたかったのはむしろ「幻炎」だったのだ。ところが「幻炎」は三回掲載された丈で雑誌が廃刊になった。肝腎の部分は空白のまま残された。「暗い欲望」の紹介、引用もいよいよ今月号でおわり、次回から「幻炎」の紹介に移る。そして、それから私は空白のまま残された部分に筆を入れるつもりでいる。私が本当に書きたかったのはこの空白の部分だったのだ。私はもはや孤独では



ない。多くの共鳴して下さる方々に支えられているのだ。私は何等の粉飾も脚色することなしに私の歩んできた途とその方向を大胆に語るのだ。

「暗い欲望」の最後の部分から……

(省略せざるを得なかった多くのエピソードに充分の愛惜の情を注ぎながら、しかし、先を急ぐ私の気持から、多くの出来事やその他を割愛し、暗い欲望の紹介はサワリだけの通り一ぺんなものとなったことについては深くお詫び申し上げたい。)

こんなことがあった。私は公園の並木の下を歩いていったのだった。すると木立の中から子供達の声がした。たしか四、五人はいたかと思う。私は柵を越え、草の根をふみしめながら近づいていった。彼等の最年長らしい一人は、直新しい帽子をかぶっていたが、どうもその恰好から××中学の生徒であるらしかった。その顔立のくつきりとかびあがるような輪郭が、私の胸をはやらせた。私はよろよろとよろけるように体を彼等の間へ泳がせながら、やがて下サリと尻餅をついた。私は憎れみを乞う犬のようなまなざしで彼等の一人一人を見まわし、最大の勇気を振り絞りながらこう言った、というより泣き出したのである。

「イタイ、イタイヨ」

彼等は一様に吃驚して、この思いがけぬ不意の闖入者を見守った。……

私は尻を撫で撫で起き上りながらも絶えずしやくり上げていた。滑稽な道化！私は跛ひきひきこの珍妙な道化をあきれたような表情で見送る彼等から遠去かる二、三十米も離れたろうか、私は立止まり徐々に振返った。

「パーカー」出来るだけ間のびのした云い方でそう云う。重ねて二度、三度「パーカー」を繰り返す。そして、より効果あらしめるように右の目に指先をあてがい、アカンペーをした。これでは彼等もだまっていられまい。一番年少らしい小さいのが、強がりと言った。

「なに、そんなこと言おうとぶったたくぞ」

とはいえ、この大きな薄馬鹿は流石に気味悪いらしく誰もがよってこない。私はこれまでの私の道化た演技に、大急ぎで仕上げを施さねばならなかった。

私は再び「パーカー」を繰り返えし、ヨタヨタと逃げ出した。逃げれば追う、これが本能である。少年群のサディズムを誘発するような逃げっぷり、私の演技は完璧である。私は少年達に追いつかれる前に草の上に転倒した。足をさすりな

がら半泣きの態であった。……

………(中略)

さんざん詫びをいれた私は、ついのことだと思いきって言った。

「おチチがのみたいの」

「どうして」

私を取り巻く輪の中の少年の一人が口を開いた。私はすっかり嬉しくなった。

「頭がよくなるから……」

私はあくまで大真面目だった。

「男にはオチチなんかいいよ」

「あるよ、ホラそこんところ」

差し出された私の指先、一直線の指先、ワイイ、と一齊に喚声をあげる子供達、私はもう夢中になって指先をつき出したままだった。

「暗い欲望」最後の場面である。附記としてつけ加えておく体験二つ、公園の草の上で少年の尿を顔の上に浴びたこと二件、映画館の便所で用を足す少年の背後から、顔を差し入れたこと一度、又もう一つ、神社の境内で、蟬とりの少年が馬乗りになつた私を掴まえて、私の眉間をひどく叩き、あまりにも度をこした行為に私は泳えきれずに起き上り、ほうほうの態で逃げかえったことなど、弱い者いじめの本能は子供において特に強いようだ。



体験にてらしあわしてみても、そのことははっきり言える。それは又次のように言うことも出来るだろうと私は思う。子供の環境に対する順応度が特に高いということ。ひき出させる何かの機縁さえあれば、あらゆる分野にわたって極度の振幅をみせながら彼等の感情は際限なくたかまるということである。私はその中のサディズムの面のみを、さながら実験室における科学者のように細密の注意を払いながらひきだしたのである。このことは少年の場合にのみ当て嵌まりはしない。女性の場合にだって立派に言えることである。追々と回を重ねるにしたがってこのことは述べていくつもりでいるが、ただ女性を観るに、その一面のみを理想化して考えないことが肝要だと思う。女性の残虐性は男性よりも強いという風な言い方が出来ることは、必らずしも残虐的人間が女性であるのではない。そのままの状態では、少年はあくまで少年であり女性は、あくまで女性である。その限りにおいては、如何なる女性だって決してサディストではないのだ。マゾの衝動が命ずる身を灼くようなあの熱望がそれに、とものう工夫と努力、それに勇気を伴ったとき、はじめて如何ような女性も我々の前にサディストとして現われるのだ。私はマゾです。どうぞあなたの奴隷にして下さい、といった棚ボタ式の懇願では、決して望を達することは出来ない。

契約が出来たにしても、それは單なるプレイにしか過ぎない。一時的な契約による、そのようなプレイで充分満足出来る、という人には用はない。何故なら、その人達はマゾヒストではないからだ。幸なるかな！ 彼等は正常人であるからだ。変った仕方での遊びを好む正常人であって、決してマゾとは言えない。マゾヒストは、契約によるというような人工的な取決めとか、何時から何時まで女性というはつきりした時間の区割りで制御することの出来ない意識の所有者であり、奴隷にしておきたい式の、通り一遍の挨拶で取交わされるプレイには結局のところ幻滅しか味わうことの出来ぬ、そのような孤独なる者の魂をこそ言うのだ。

生れながらの男勝りというM過剰の女性がいたとする。声は野太く、動作は荒々しい。絶好の女王である。果してそうか。本当にそう思うのか。巴御前や川島芳子の場合、前者は知らず、後者の場合、たしかに芳子は男勝りではあった。しかし、やっぱり男以上に体の線は荒くはなかった。男装はしていたが、男と同じ声ではなかった。彼女は彼女であって決して彼ではなかった。男装することによってより以上に強調された彼女の女の部分にマゾヒストは気を惹かれるのであって、決して男勝りという、その勝りに女王を見い出すのではあるまい。川島芳子がより以上に女性

であったが為にマゾヒストは随喜するのであって、男らしい、その男へではない。男らしいことによるその女に随喜するのだ。私は川島芳子をそれほど高く評価しない。しかし、これは同じマゾでも、その中での好みのちがいであって、芳子を好まれる方があって別々に差しかえはないと思う。男と同等みたいな女は結局のところ女王の資格はない。女王たるべき者、それはまず女であることが先決だ。男みたいな女を相手にすれば、マゾ的雰囲気をつくるに手っ取り早い。何の手段ひまなく、頼まれずとも男の横面の一つや二つは簡単に殴りつけるだろう。しかし、マゾヒストは考えるべきだ。男みたいな、ただそれだけのかたわな女と、勝気ではあるが、そのことによってより一層女であるという、そうしたみずみずしい女性とは、絶対に峻別してかからねばならぬということ。

週刊読売の記事の中から二つの場合を考えてみよう。その一つ、新聞にのらなかったニユース欄から、

魔女にそそのかされた十五才の狂信的少女が親類の女たちと共謀し、自分の父を殺して死体を食ってしまったことが発覚、ボンベいで捕縛された。警察の調べによれば、さる九月、魔法使いの老婆から暗示されたと称し、麻酔で父を謀殺、共犯の女たちとともにその血をすすり、



肉を食らい、頭蓋骨と体の骨をボンベイから七十五哩のジャングルに遺棄、なにくわぬ顔をしていたもので、さすがの当局もその無知、狂信、残虐ぶりにたまげているという。

#### もう一つの記事

足の形を整えるために古くから伝わっているビール瓶乗りも楽しい方法です。ビールの空瓶を床にころがして、その上に両足を揃えて軽く乗り、足で調子をとりにながら瓶を前後にころがせるのです。この運動は足の形を美しく整えるだけでなく、土フマズのない人に自然に土フマズをつくる効果があります。

### 絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略面の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えありません。)(編集部)

如何でしょうか。この二つの記事。前者のグロテスクな事件にそれほどの興味を湧かせない私も、後者の何気ない美容記事には妙によるめきを覚ゆることは何を意味するのか。答は明白だと思う。父を食った女に、私は女を感じないからだ。猟奇趣味としては満点のこのニュースも、マゾ記事としての意味は零に等しい。女達に殺され、食われた少女の父に聊かの羨望の気もおきない。ところがである。ビール瓶乗りの美容法には見逃すことの出来ぬ或る戦慄を感じる。マゾヒストは本質的に夢想家なのだ。そこに連想させられる理想的女性像にひそかな想いを託するからだ。我々は、ドミナを待望するのあまり、真の女性を見失ってはいけない。無知で兇暴であるにしか過ぎないイルゼ、コッホのような女を不必要に理想化しないことだ。彼女の写真のどの一つにだってお世辞にも美しいと云えるものはなからう。ニュース価値だけのものから彼女を美人にしたててはいけない。参考資料としての意味でなら、彼女の行為は無限大の価値と可能性を孕む。しかし、夜と霧の問題はマゾの本道とずれるはしないか。再び私は言う。我々の待望するものは真に女性の中の女性なのだ。新派もどきの無性格な女性をではない。あでやかで冷く澄んだ女性の瞳なのだ。彼女の中から我々は忍耐と努力と勇気をもって我々の望むものをひきだそう。

沼氏と麻生氏との間に交わされた論争について、すこしふれたいが紙数がない。何か両者の間では論点以前に何か喰いちがいはなかったろうか。ただ言えることは、翻訳も立派に一つの創作だということだ。極論すれば、訳者が原作に一つのヒントを得て、別の実人生を樹立することだ。アンデルセンの「即興詩人」は立派に森鷗外のものになりきってしまったている。ところが、すくなくとも治洲氏の「ヴィナス」は立派なものとはいえない。誤訳があるなしの詮索も重要だが、誤訳が一つあったから二つあったからで、その翻訳のすべてを言うのは間違ではないか。よし例え治洲氏の訳が完全により近くあったとしても、あの索莫たる砂を噛むような思いは私には我慢できない。あれは学者のなすところの翻訳ではないのか。原忠正氏も「ヴィナス」をめぐる論争に言及しながら、中途から気兼ねをしいしい、まあまあといったかたちで引込んでおられるのが気がかりだ。私は沼氏を敬愛する。氏の大フアンの一人だ。しかし、「ヴィナス」問題だけは氏の意見に釈然とし得ないのだ。意見は、はっきり表明した方がいいのだ。

(未完)

×

×

×



魔<sup>マ</sup>教<sup>キョウ</sup>圈<sup>ケン</sup>ナンバー・エイト  
No.8

(その三)

## 土 路 草 一

## (一) 裸身の戦き

美加子はぶるっと身震いした。肌を通して凍つくような寒気が躰の芯を揺すぶった。ぼんやり知覚が戻って、頭がずきずきと痛い。それに節々が抜けたように痺れていた。美加子は無意識に躰を拗った。

「あっ！」

腕にぎしっと痛みが走って、思わず声を割ったが、通り魔のように脳裏を、麻酔前の記憶がよぎった。

はっと、棒を呑んだように乙女は自分の今置かれた境遇に思い至って、全身を硬直さし

た。

誘拐されたのだ、此処は何処だろう？

昂ぶった頭脳がそれでも動物的な本能で四囲を確かめようとする。だが、墮った筈の網膜には何も映じて来ない。光りが全然見えないのだ。なんとということだろうか。焦りが湧き、幾度か瞼を瞬いてみて、どうやら眼帯らしいもので視覚を完全に閉じられていることが解った。

幾分、落着を得てくると美加子は自分の惨めな姿態がはつきりして来た。

腕は後へ廻って、壁に植わった鉄環に留められているらしく、脚は正座させられて、足

首と膝がきっちり固定されている。口中には金属の渋酸い味が舌を押さえて、涎が唇を濡らしていた。

すべすべと擦り合う膝頭と腿、二の腕を通って来る腋と背の体温。

裸なのだ。衣服はすっかり取払われて、乳房も腰も露わの儘、括りつけられているのだ。

寒い！ ぶるると身震いした美加子は齒の根も合わぬげに骨にも及ぶ律動を織身で耐えていた。

自分の姿を見る眼を持たぬせいか、羞恥心よりも、底知れぬ恐怖と激しい寒さが潑刺としていた乙女心を真黒に苛んだ。



「これから何をされるのだろうか？ タツーマに辱かしめられるのだろうか？ 鞭や鐔のある檻とか云ったけど、どんなことをされるのかしら？」

人間の悪心や汚れを知らぬ純真な乙女心には想像もつかぬことだった。只、おどおどと悪夢のように蔽いかぶさっているものに脅かされているだけだった。

厳しい寒気が純白な肌に粟粒を撒いて若々しい血を凍らせる。

生れて二十一年間、暖い被布で愛しみ、温湯で拭い、クリームで手入れし、美容のため食物迄、気付かって育ててきた柔肌が今、直接に凍るような空気に曝され、鋭い寒気に襲われ、わなわなと紫色に戦き収縮する。

新鮮なビジネス・ガールは顎をふくよかな胸に着け、動かぬ凝脂の背を丸め、儘ならぬ白磁の膝を抱えこんで泳える。そして、見えぬ眼を眼帯の下で瞬き、きよときよと不安を身悶えする。

と、靴音が聴えて来た。

美加子はぎくつと豊かな頭髪を上げ、身を固めた。足音はゆつくりと彼女の前で停った。

膝が緩み、壁との緊縛が解かれると冷徹な男の声が鋭く耳覚を打った。

「立て！」

弱腰を棒状なものでこずかれる。あつとめりそうになって、足の痺れを片膝立てて泳

えたところを、ぐいと後手の鎖を引き絞られ逆にのぞけた臀部を蹴上げるように突き飛ばされる。思わず前かがみによるけると棒がぎりっと柔い背を挟むように押す。麗体は、たたらを踏んで歩き出した。

美加子は息をつく暇もなかった。意志を無視され、急所急所を巧みにつかれて、まるで反抗する間も意志も与えない相手の見事な手際。それは圧倒的に畏怖を虜囚に植付け、抵抗心を殺いだ。

じやらじやら足鎖が鳴った。ざらついたコンクリートが柔い蹠に痛く感ずる。冷く凍っていた感触だった。纖弱な白い素足が乱れながら歩んで行く。

「右へ曲るんだ！」

方向を命ずる苛酷な声と共に、男は囚女に思考の時を与えないように、終始背をこずき鎖を引いた。意志を完全に剝奪された囚人は只管支配者の命令によるめきつつ軀を支え、歩くことだけに専心する。

五分くらい進んだらうか、温気が肌を包んだかと思うと、前方でぴんと錠を脱す音がした。

「塹へ入れてやる。それ坐れ！」

遮眼と裸身の拘束と云うことで日頃の鼻息をすっかり霧散させた女は力なく脆く。

「上体を倒せ、その儘、膝で躰って前へ進むのだ」

背を棒で押しつけられて蟻蛙のような恰好で美加子は這いずった。

固い鉄棒が脛の下に当たった。

「そらっ！」

いきなり尻を蹴飛ばされて、豊麗な肉体は鉄棒の上に転がりこみ、頭蓋骨が鉄と火花を散らした。

ぴいんと錠が閉った。

## (二) 書記官の疑問

丁国駐日大使館付一等書記官タツーマは淡い後悔をしていた。

つい調子を合わせ男の口車に乗り、眼隠しをされた上に黒眼鏡をかけされ、何処とも知れぬ場所に連れこまれてみると、自分の職責が痛感され、生命を握られているような不安が心を怯かした。

酒を出され、幹部らしい連中に紹介され、この秘密団体、黒塔会の売春機構を説明されてみると、相手の組織が容易ならぬものであることが解り始め、自分の迂濶さに今更ながら臍を噛むと共に、彼等の魂胆が奈辺にあるのか計れない苛立ちと、自分に対してもこれきりで済ますことなく、次々と新しい要求を出すのではないかと深みに落ちそうな慚愧が先に立った。

その上、彼等はどうやら日本人ではないらしく、美加子を扱った冷酷非性さから押して



も、又偶見した組織体の劃然さからしても、何か信念的な行動を共にするグループらしいと判断された。

「まあ、一杯どうですか？」

改めて名乗った処に依ると、日本名を勝谷と称する黒ジャンパーの男が、ジョニー・ウーカの角瓶を取上げながら、語を継いで、「貴男のペットはもうお眼々を醒した頃ですよ。どうです、一度検分されますか？」

タツーマは心の動揺をあらわにした眼をあげたが、それでも外交官としての体面上胸を張ってポーズをとらした。

「何ですか、望みの品が手に入ったと云うのに……」

と軽くないなして、隣席の年若い男女を示しながら

「このお二人は共に十九才の春を迎えたばかりなのに、仲々、やり手で正に好一对、好敵手の間柄なのですよ」

タツーマは眼を向ける。

少年は十九才にしては大柄で筋骨逞しく書記官よりは、ずっと上背があった。何処となく、陰険な表情が一層この少年を齡よりはふけて見えさせていた。醜いとは云えない容貌ではあったが、唇が薄く、瞳の奥に嘲弄が宿っていた。

少女は、と云うより婦人はと云い直したいくらい、この乙女も落着いて見えた。



黒いワンピースにびっちり細身の軀を包み髪をアップに結い上げたそのスタイルは、二十五、六才の女の持つ脂粉を漂わせていた。それにその話振り、その謎めいた媚は十九才の女性のものではなかった。そして、石膏に刻みこまれたように白く冴えきった美貌である。しかし、謎の微笑を消した後の、能面のように表情を動かさぬ面皮の下には、ざら雪

に似た冷血が流れているに違いない……。

「南城君は身近から集め、黒山嬢は行きずりを拐う、と手段方法も対照的なんですね」

と勝谷は学生服の青年へ横眼で笑を送りながら、

「南城君の初仕事は、高校の担任女教師ですよ。女にとつちや立場が逆転どころか、生徒の面前で地獄の呻吟、腕きのストリップです

sm, k.



からね。誇りの為に涙を、体面の為に汗を随分と流したらしい。でも、今は教え子の差し出す鞭に、おとなしく、じやれついていますからね。最近の傑作は、兄貴の嫁御寮を式場から拐って来たことでした。何でも兄貴とは一年来の恋人だったらしいのだが、三三九度の盃を前にした姉となるべき処女を祝福の門から畜生の柵内へ引摺り落してしまったのだから、彼も仲々豪の者ですよ」

聴いていた青年が奸佞の唇を歪めながらぼつりと云った。

「その姿に相応しくしてやっただけです」

勝谷は、にんまり眼を崩すと、今度は細面の女性に視線を流しながら

「黒山嬢はデパート、洋服店、美容院を獵場とする有能なハンターですよ。同性としての気易さで警戒を解いている相手は、彼女にとって餌をしやぶっている赤児と同じなんです。それに、此頃は社長秘書として各会社、官庁に出入りするものだから、獵には困らないらしい。又、彼女は一度狙った獲物は絶対に逃さない。この間も綿密な計画の末、某シャノン歌手を手に入れてしまいましたよ。それと……」

話続けようとする勝谷を、ワンピースの女は遮って

「およしになって、偶々このお仕事の目的と私の趣味とが合致しただけの話ですわ」

と興味なさそうな声で、ぶっきらぼうに云った。書記官はふと疑問を覚えた。

「仕事の目的って何ですか？」

勝谷が素早く引取って

「小娘の売買、まあ一つの営利事業ですよ」

タツーマはそれに相手にならず、真摯な眼を黒山谷子に向けて

「それだけですか？」

「まあ……ね」

谷子は謎のくぼみを頬に浮べた。

「それだけで、こんな危険な仕事を？」

「だから先程申し上げましたわ、私の趣味だよね……」

「趣味？」

「何物にも変え難い私の衝動と申上げてもよろしくってよ」

タツーマの話が途切れた。谷子は男をとろけさすように婉然と口許を綻ばす。

空白を埋めようと何か云いかけた勝谷の方に向き直るとタツーマは鋭く問うた。

「それじゃ、私に船籍を依頼したのは？」

黒ジャンパーは面倒臭そうに

「娘を輸送する為と申上げた筈ですが。さあタツーマさん、そんなことにこだわらず美加子の検分でもやりましょう」

強引に話を打切って、片隅にある電話の受話器を取り上げて気ぜわしげにダイヤルを回し出した。

大使館員の疑問は、かえって女のはぐらかしに挑発されて、黒塔会への探求心を唆り立てられた感じだった。

### (三) 入檻された麗女

間もなく低いベルの音がしたと思ったら、壁の上部がぼっかり割れて開いた。

気をつけて見ると、一条のレールと索縄が天井を這っていて、開いた空間から室外へ延びているのである。

う、う、うと小型モーターの音がして索縄がぴいんと張って動き始めた。

書記官は見るともなく見ていた。

黒い鉄の格子が索縄に曳かれて室内へ移動して来た。

檻らしい。上下四方を鉄格子で組んだ、野犬を入れるような小さな檻なのだ。

内部に白い物体が見える。わずかに蠢めいている。

あっ！ 女だ。素裸に剥かれた女だ。それも極度に狭い檻の為に背を倒し、脚をきっちり折り曲げて窮屈を通り越した圧迫を苦しく呼吸している。

繊細な手首は背で重なり、胴を巻いたベルトで留めてある。踝の可愛い足首からは、だらんだらんと鎖が下っているが、装着された左右の鎖は直接噛み合って、身動きを禁じて



いる。歩かせる時は鎖と鎖の錠を脱し、鎖の長さだけの歩幅で運動させるのだらう。

鉄檻は書記官の頭上へ来ると停つて、がらがらと滑車の音をさせると徐々に床に近づいて来た。桃色の爪をつけた愛らしい足指が格子からはみ出している。豊かに充ち張った臀部が鉄棒で割れている。嫋やかなふくりとした掌がしっかりと握り締められている。

凝脂ののった滑らかな背肌が、タツーマの足下になって金属音が床に響いた。

黒髪の脇から覗かれる頬に二筋、轡を締める紐と眼を覆うサングラス型の器具が耳から後頭部へ廻っている。

サングラス型と書いたが、左右別レンズの眼鏡式なものでなく、最近、冬山などでよく使われる風防を兼ねた巾長い一枚の色プラスチックで両眼を覆う式の眼鏡である。

そのガラスが黒色に塗り潰してあるのだ。檻内の動物は自分自身では見えないのだから折り畳まれた骨の腕きを荒々しく息吐きながらも黒髪を回して透らない視覚の怯えに悶えている。

「貴方のペットですぞ」

タツーマは、はっと胸を衝かれた。

陶器のような二の腕、附根を絞られて盛上ったムッチリした肩、波打っている細く緊った脇腹、すべっこく張り伸びている脚。

それが黒い鉄棒と対照的に純白なのだ。そ

して青春の血潮を弾んで流している絨肌なのだ。

書記官は照り返しを受けたように眸を下したが、どくどくと心臓が波打っているのが自分でもよくわかった。

これが、セーターに隠れていた乳房、これがスカート揺らめかせていた臀部、ほん此の間まで自分を熱狂させた肉体のすべてが露出されて其処にある。

この肩、この腰、この腿、どれもが未知層を含んだ咲き香る女体なのだ。あの、高嶺の大輪の花のように自分の夢を注いでいた女体なのだ。

奇抜な趣向に動揺していた頭脳が、なまなましい生肌に触れて、ともすれば乾きがちな咽喉へ唾を送りこんで舌なめずりした。

とうとう檻の中へ監禁してしまった。もう俺から逃げることは出来ないのだ。俺は気の向く儘に来てこの囚われの女体に好き勝手なことが出来るのだ。あつ、何と素晴らしいことではないか。

書記官は、出入りの懸念の多い『エンゼル』の地下室とは違った安心感で、湧き上ってくる衝動を制御出来なかった。

「どうです？　こうやって見ると、ラジオ帝都で見るのと格段の違いでしょう」

勝谷は、格子の上部を横に引いた。中央の一部が、ぽっかり丸い穴をあける。

黒ジャンパーは手を差入れて、美加子の整った髪を掴むと、ぐいと引張り上げた。

「あっ！」

放つ悲鳴をかまわず、顔全体を格子の外へ出してしまおうと扉を開める。円が丁度、乙女の細そりした頸に嵌った処で掛金をかけた。二十一才の美女は、晒首のように檻の上に顔を載せて静止した。

「御主人を拝ませてやりましょう」

勝谷は、サングラスの上のつまみを挟んですっと引開けた。黒いガラスは引戸になっていて、その下に素透しのガラスが嵌っているのだ。ガラスは細いフェルトで縁取られているだけなので美貌は損われず表出する。

主人の都合に依って、犠牲者の眸を開けたり閉じたり出来るように作った器具なのだ。

美加子は突然、射しこんで来た強い光りに眼が眩んだ。ぱちぱちと二、三度瞬いてから「あっ！」

と声を挙げる。

耳に入っていた会話から少しは予期していたことではあったが、乙女はやはり声を発てずにはいらなかった。

テーブルを囲んで男、四、五人と女一人が無遠慮な凝視を自分の乳白色の全身へ注いでいたからだ。

かっさ羞恥がのぼり、穴をみつきたい屈辱が全身を駆けた。



俯向き勝ちになった髪を掴まれて、ぐいと正視させられる。

食卓の上には中華風な色彩の濃い料理が並べられ、グラスには赤い酒が酌がれ、カップから温かそうな湯気が立上っていた。

その前にゆったり腰を据えた一等書記官が、てかてかと酔の脂切った顔でじつくりと自分を見下していた。

美加子は、ぎりりと唇を噛むと臉を床に落した。

まるで動物園の獣のように檻に入れられている自分、それもあらなく秘していた胸の膨らみも腰の姿もすっかり曝け出して……

タツーマの物狂わしそうなあの眼、垂涎せんばかりに舐めずっている部厚いあの唇、美加子は身慄いが出る程嫌らしかった。それなのに、まざまざと顔前に置いて外らす術もない。自分の無垢な全身の隅々まで貫通しているあの眼から一寸たりとも隠れる術もないのだ。ああ駄目、もう私は逃れられない。あつ、私の愛しんで来た肌は、純潔は檻で動物並に処分されるのか……ああ……

美加子の心に啾々たる絶望が吹き通った。

美囚は首が伸びて、折り曲った筋骨の痛みが多少緩んだ気持だったが、頸で動きを停められてみると、かえって中腰になっている筋肉が強く腰部で疼き始めた。

形よい脚を擦り合せ、臀部をずらし背を伸

ばそうとする。

そうした身じろぎする豊麗な肉体は檻内で奇妙な曲線を描いて観覧者を楽ませる。

室にはヒーターが燃えていた。併しそれは衣服を纏って酒を酌むに適当な温度であつて、素肌を温める室温ではなかった。

乙女はぞくつと胸震いしてすべすべした美肌を疎めていた。

「こいつは、こんなふうな檻で飼える代物なんでしょう、貴男がそうしたいと仰言れば、一生この中へ入れててもいいのですよ。この顔を御覧なさい。まだ二時間と檻の暮しをしないのに、この哀っぽい顔は……」

屈辱と寒気と限界にきた関節の疼痛。若牝は露出を瞳に湿ませて、弱い呻きを嚙の奥から洩らしていた。

勝谷はその態に、ぎらつと不満の眼を光らせて

「こんなんでも弱音を吐くようじゃ、末が思いやられる。おい、どうせ鳴くんなら、もっと美声を張り上げろい！」

握っていた髪の毛を小さく束ねて、ぱりつぱりつと痛みの廻るようになんわり引抜く。

「あっ！ つつ！ わっ！」

乙女はびくつと眉を落して悲鳴を挙げた。「もう一度」

今度は毛を分けて地肌へ煙草の火を押しつける。

「あっあつい！ あ、ああう！」

じりつと頭骸に拡がる熱さ、脳天が直接に燃えて美加子は麗姿を凝固させて切れ長い絶叫を遡らせた。

タツーマは鼓動を停めて、眼を放たず見ていた。

手が触れ合うのでさえ逡巡し、視線の合うことすら考慮していた貴やかな女性を勝谷は遠慮会釈なく牝豚のように取扱う。そして女は、つい先刻迄のナイーブな気品を零にして、鳴き悶え哀願の眼眸を向けている。

タツーマの心に混乱が走ったが、次第に女体に注ぐ眼が妖しい煌きを強くしていった。

「タツーマさん、こいつを恋するとか、愛するとか、笑止千万だと思いませんか？ こうやって馴らしたほうが相応しいとお思いませんか？」

書記官はごくつと生唾を呑みこんでこくりと頷いた。

髪が乱れて白い理知的な額に垂れている。愁を宿している長い睫毛、荒い呼吸をしている小鼻、紅い爛やな唇と磨かれた皓齒。

タツーマは虚脱したようにゆらりと立上つて、檻の縁に腰を下す。スポンの横には女の顔がある。そろつと緑の髪を握り、やわらかく額を撫でた。温くまるやかな手触りだった。

五月の微風が頬をなぜるにも似た感情のどよめきが走った。



女は観念したように眼を瞑っていた。  
ああ、これが求めていた美貌なのだ。男の

手は力を籠めて顎を掴み、頬を挟んだ。  
心に確信のある所有感が生れて、嵐のよう

な喜悦が心の中で乱舞した。

いきなり鞭柄を差こんで、牝の乳房を挟った。弾む柔い手応えだった。

「あっ！」

女は胸をくねらせた、タツーマはうふっと喜びの声が出て、全身が火のついたように燃え熾った。

#### (四) 路子の不安

西和化学の本社は芝田村町にあったが、研究室は東横線中目黒駅の近く目黒川に添って建てられていた。五十坪程の近代的な建物が四つ、それぞれ病院のように白く清潔な壁に囲まれていた。

比奈地路子は走らせていたペンを止めて、ぼんやりと視線を川向うの高台の緑樹に投げた。瀟灑な住宅が鮮かに蒼空と緑庭を添景にして、絵画のように美しく展開していた。それは、こよなく平穏に見えた。

路子はふっと溜息を洩らす。

防衛庁の査察で部員は殆ど出払って、少数の事務員しか席に残っていなかった。

「どうしたらいいのかしら？」

生れて以来、明るい主題しか宿ら





なかった令嬢の頭脳は怪電話で一挙に底深い奈落の恐怖に突き落されて、総ての思考を閉ざしていた。

「どうしたらいいのかしら？」

いざとなると明らかに打明けて相談出来る知人と云うものは案外数少ないものだ。まして、根拠のない電話であり、千一夜のような脅迫である。路子は採るべき行動も判断も浮上ってしまったて只悪魔の牙の前に狼狽しているに過ぎなかった。

「それにしても美加子の奴、無責任だわ」

昨日電話がなかったので待ちきれずかけてみたら二日続けてお休みだと云う。約束を反古にするなんて今迄になかったことなのだ。それが一層路子の心を苛立てる。メモをめくって美加子の自宅の電話番号をたしかめるとダイヤルを白い指先で廻した。

「もしもし、あ、小母様ですの、比奈地で御座いますけど」

すると、うわずった美加子の母親の声が戻って来た。

「あら路子さん、今お電話しようと思っただのよ」と、此方の応答も聴かず、

「美加子が二日も帰って来ないんですよ。」

会社も休んで何の連絡もないと云うし、こんなこと一度もなかったものだから、路子さんに訊いたら何か解ると思ひましてね」

「電話もしないのですの？」

「ええ、あんなお仕事ですから遅くなることは時折あったのですが、必ず電話をくれまして泊るなどは全然なかったですのに……」

「一昨日の夜、逢いましたのよ」

路子は怪電話のことは話さずに、一昨夜の経過をかいつまんで説明した。

「じゃ、それから何処へ行ったか解りませんか」

「ええでも、あのお友達と逢って何かお仕事が出来たのではないでしようか？」

路子は、母親を心配させないように気休めを云って

「心当りがありますから探してみます。余り御心配なさらないで」

路子は電話を断って、又考えこんでしまった。

何だか厭な予感がする。自分に降りかかった暗霧と思ひ合わせて、美加子の身にも何事か起ったような胸騒ぎがするのだ。

路子は強いてそれを打消して小耳に挿んだ一昨夜の若者達のアルバイト先へ番号をくって電話してみた。行友と木貝と云うそのアルバイト学生は意外な電話の主に吃驚したらしいが知らぬと云う。そして成行を案じて友人を早速当ってみますと云ってくれた。

もしや、私に紹介すると云っていた津田さんの処へでも行ったのかもしれない。

路子は又ダイヤルを廻す。津田は幸い在社

していたが、やはり知らないと云う。

育ちの慎しみが哀れっぽく自分の煩悶を伝えることを躊躇して、受話器を置こうとしたら力強い男の声が響いてきた。

「それじゃ、僕の処へ行くとか、何とか話題に載ったんですね」

「ええ、私を津田さんに逢わせてくれる約束をしたのですの」

「すると僕に何か？」

「はい、思案に余っていることが御座いましたので美加ちゃんに相談しましたら、津田さんをお願いしようと申しましたので……」

「何です？ それは……」

「お電話ではちよっと……」

「そうですか」

津田は考えこんでいたようだったが

「じゃ、五時頃貴女の会社へ伺いましょう」

「でもわざわざお越し願っては……」

と恐縮するの、押被せるように屈托のないう声が明るく伝ってきた。

「そんな御心配いりませんよ、新聞記者は人を訪ねるのが商売ですからね。それに美加子さんのこととなると僕としても捨てておく訳にもゆきませんでね、は、は、……」

受話器を置くと路子は幾分か心の澱みが晴れた思いだった。津田の人柄の滲んだ磊落な笑聲が仄かに耳の底に残って、何か解決をつけてくれるような期待が持てたからだ。



が、凝りがすっかり消えた訳ではない。自分の暗冥の上に美加子の安危が加って、清白な乙女心に黒い悲しみの程が種子を吹いた感じだった。

彼女は時計を気にする。今は一本の葉にも似た思いで津田の来るのが待遠しかった。脅えて膨んでいる胸中をいささかでも軽くしたかったからだ。

### (五) 美女と魔女

どやどやと事務室に靴音が雪崩れこんだ。防衛庁の査察が終って皆戻って来たのだ。

「やれやれ、しんどいこっちゃ」

「御無理御尤もは日本古来の慣例とは云いながら勝手な御託を並べてやがって」

「全く御役人様々だからね」

「妬くな妬くな官員様になりたかったら、秀才に生れてくるのだな」

無事重荷を降した気軽さから室内はざわめいて好き勝手な言葉を吐いている。

龍田係長が廻転椅子を回して背伸びしていたが、

「比奈地さん」と路子を呼んで

「第二研究室に天山機械の社長が来ているから例の青写真を持って行って燃焼部の設計変更を依頼してくれませんか」

「はい」

路子はスチール・ボックスから設計図を取出すと扉を排した。

天山機械とは乾燥設備、真空装置及びその充填器、分析器械、その他各種の化学機械の製作をする会社である。西和化学とは昨夏取引を始めたばかりだったが、商売熱心とその器具の精巧さに依って、ぐんぐん注文高を伸張させている会社なのだ。今日も防衛庁の査察を傍聴して注文方向を知り器械の不備を訊そうと来社していたのだ。が、併し注文方向を訊すことは防衛計画の一部を聴くことになるのだが……

天山機械の社長は直口技師の説明を訊いていた。路子を見ると福々しい相好を崩して、「やあ」とにこやかに迎えたが、路子の手にある設計図に眼を留めると

「おや、何かいけない個所でもあったんですかな、だが美人のお叱りなら喜んで受けますよ」

と腰低く手を揉む。

路子もつりこまれるように思わず天性の微笑を零して

「いえ燃焼機の着火装置を変えて貰いたいのですの」

と図面を拡げかけると

「黒山君！」

と社長は、後に控えている若い女性を呼んで

「君、メモしてくれ給え」

と命じたが、気付いたように

「あ、紹介して置きましょう」

と、黒いワンピースの女性を引き寄せて

「今度、秘書に致しました黒山谷子です。私の代りに参ると思いますがよろしく願います」

黒山谷子は冷く冴えた美貌を慎ましく下げて会釈した。路子は挨拶を返しながら、女性の直感で、ふっと相手に肌合の違うものを感じたが、この時は、そんなことに拘わりもしなかった。

勿論、この女が彼女に怪電話した者の一味であることも、案じている美加子の所在を知るところか、その純真無垢な肉体を弄んだ魔性の女であることは知る由もなかったからである。

路子は、図面の説明を始める。糺しながら聴いている社長の脇で、妖精はちらちらと本性を出した眼で清潔な乙女の横顔を窺った。

魔女は桃の花にも似て可憐で清楚なこの女性、黒塔会本部のリストに載って居り、既に期限付の予告が当人になされていることを知っていた。

が、はしなくも、こうして会い、こうして眺めてみると、その育ちの良さに加えて、磨かれた美しさには眼を瞠った。同性としての競争心と嫉妬心を覚え、黒塔会員としては偏



執的な所有欲となつて疼いた。

何と云う肌の白さ何と云う伸び伸びと発達した四肢、それに愛らしさと知性の交った白眉の魅力を湛える天質の美貌。ああ、欲しい。たまたまなく入監させたい。

この弾んでゐる胸に、この純良に充ち張っている腰に鞭を当て踏みしだいたらどんな呻きをたてるだろうか、どんなにどんなに胸が騒ぐだろうか。

このしとやかさ、この聰明、これを私の靴底で粉碎出来るのだ。

谷子は、ふいっと或る考えが浮んだ。そうだ。この女に関するあらゆる主導権を獲得することだ。その為には――。谷子の頬に謎めいた微笑が浮んだ。



設計依頼が終った。部屋を去ろうとする路子を魔女が呼びとめる。

がお見えになることになっていたのですけど比奈地さんにお逢いして、噂にたがわず、美

「城美加子さんから貴女のお噂は聴いて居りましたのよ」  
「あら、美加ちゃんを御存知でしたの」  
路子は意外そうに美眸を拡げた。  
「ええ、うちの社がスポンサーになっている『歌の翼』のことで時々お逢いしますの」

妖精はぬけぬけと恍けた。実際には一昨夜檻に入ってるのを始めて見たのだ。

そして彼女等が親友であることは美加子の所持していた手帳から知ったばかりなのだ。

「そうでしたの」  
路子は深く詮索もせず、親しみの笑みを送った。

「今日、社へ城さん



しい方だったってこと報告しますわ」  
谷子は、はしやいだゼスチュアで話の穴を作った。

「あら、困りましたわ」  
と気障なお世辞に途惑ったが、話にうまく嵌って

## 私のアイデア

## 磔 縛り 七 態

## 奈加多須磨尾

つまらない頭をしぼって考えた七種の磔刑のアイデア。例によって例のごとく、特別に秀でた奇抜きわまりない案であるという自惚れは持ち合せてはいないが、前月号では、その七種の中で、「時代物」四種の御披露に及んだので、今月は、「現代物」三種の趣向をお目にかけよう。勿論、人一倍智能程度の低い男の頭から考え出したことですから、荒唐無稽とまではゆかなくとも、変物の寝言として一笑に付されるかもしれないが、それはもとより覚悟の上、なんにしても、花恥しい娘達を磔に縛ってみたい（筆の上だけです）という強い欲

「でも美加ちゃんは今何とないと思いますわ」

「あら、どうしてですか？」

と小首を傾げてみせる。

「会社を休みましたの」

「御病氣なんですか、なら、お見舞に行かな

望のままに書きなぐったわけです。

若し幸いにして絵画化されるようなことがあったらこれ以上の幸せはないのです。挙げたモデルのスターは私としての好みを言ってみただけ。

### 【現代モノ】

⑤令嬢の磔Ⅱポニー・テールの快活そうなお嬢さん。年は二十才前。セータイもスカートも、下着まで次々とはぎとられ、ブラジャーまでも足もとに投げ捨てられパンティ一枚のあられもない姿。恥かしさにすぐにも拾いたい気持はヤマ／＼なれど、肝心の両手はT字型の磔柱の横木

くっちや」と追打ちをかける。

路子はちよつと判断に迷った。二日ばかり家を空けてることは失踪とは云えないし、始めて会ったこの女に美加子の行方不明を云っていいものか、どうか。でも素直な気質は相手を疑えなかった。大分親しそうな口振りだし、それに暗い脅威に拉がれている気持は、一つの連がりにも安否を預け合いたい気に追込まれていた。下請会社の社長秘書だと云う信頼感も手伝って

「二日程帰らないのですよ」

と話を引出されてしまう。

「御旅行？」

「いいえ、行先が解らないんです。お母様もそれは心配なさって。」

「え！」と殊更、驚いてみせて

「明るくって朗らかな方だけど、城さんは無断で外泊されるような人ではなかった筈ね」と心配そうに云う。

「そうです。黙って帰宅しないなんて始めてなので氣にかかっていますのよ、貴女にお仕事の方で心当たりありません？」

路子は愁を含んだ睫毛を瞬く。深く澄んだ瞳だ。疑いを知らぬ湖水のように清らかな瞳だ。谷子は思わず魅了されて、次の言葉がとまどった。

社長が呼んだ。秘書は返事をしてから「思い出しましたわ、多分、あそこじゃない



両端にとりつけられた鐐に手首を結びつけられては、せん方ない風情。他の処は自由なれど、ただ一カ所の縛りが総てを支配している。もがき疲れた令嬢は首うなだれて可憐。人っ子一人見当らない薄暗い部屋中。晒し者にされた令嬢にやがて訪れる責は何か、興味をそそる正面の磔姿。モデルは山鳩くるみ（松竹）に似せてもらいたい。

⑥女秘書の磔 倉庫の中か殺風景な天井の高い部屋の中。スーツにタイト・スカートの、ハイヒールの二十五、六の女が部屋の柱に応急造りの磔柱にY字型にハリツケにされている。身体検査でもされたのである。スーツのボタンも、下地のブラウスのボタンもとれ、スカートも脇フオックをとられてシュミーズがあらわ。足首を揃えて縦柱に両手を斜め左右上方に伸して手首だけ横木に、それと縛つてあとに縄目なし。ただ顔を正面に向けてため、髪は頭上に束ねて横木から吊り下げられている。羞恥にゆがんだ顔には涙がつたわる。荒くれ男達の淫らな眼がなめるように集中している。中に一人だけ紳士風の首領らしい男が、ジャックナイフを右手に近づいて来た。彼女の体を一寸刻みに傷めて責めようというのか。

モデルは司葉子（東宝）に似せてみてはどうだろう。

⑦女学生の磔 セーラー服姿の女学生がX型の磔柱に大の字のハリツケ。両手首、両足首、両腕、両太モモを縛られている。しかも、スカートは、すっかりめくり上げられ胴を縛った縄目は股間縛りに背中へ廻して、髪を後で束ねた縄につながっている。顔はやや仰向き加減で正面を向いている。この姿で責を待つ彼女。又あどけない顔で、ジッとみつめている彼女の足もとに、もう一人の女学生が裸にされて同じようにハリツケに縛られて仰向きにねかされている。彼女は目下のところ灸責めをうけている。臍を中心にもうくモグサの煙りがたちこめ、頭をふって泣き叫んでいるが、ここはどうやら山小屋の中らしい。そういえば彼女達はピクニックに来ての受難か、リックサックもころがっている。責め手は学生風の若い男。ニヤ／＼笑いながら手には笞を握っている。次は笞打ちの責めと行くところ。モデルはセーラー服で浅丘ルリ子（日活）その下で裸にされて縛られているのは雪村いずみ（東宝）に似せて貰いたいところだけれども、どうだろうか。

かしら……」

と思わせぶりに云って

「社へ帰ったらすぐ訊ねてみますわ、御返事するのに今夜にでもお逢い出来ませんか？」

と、きっかけを作ろうとする。

「ええ、でも夕方、美加ちゃんのお友達と約束がありますので……」

「どなたですの？」

黒塔会員は行動を追求する。

「U新聞の津田さんって方」

路子は、なにげなく洩らす。谷子の眼が、きらっと光った。

「じや夜にでも、お宅にお電話致しますわ」

と、くるとと踝を返して、魔女は、にたりと快心の笑を刻んだ。

路子は、自席に戻ってから時計が気になって、壁時計に何度も視線が走った。

ところが、約束の時間が過ぎても津田は現れなかった。六時迄待ってみた。併し、とうとう待ちに待った彼は姿を見せなかった。

その頃、津田は社旗を立てた車を麻布六本木に向けて飛ばしていた。

日イ油田開発株式会社発起人総代、元公爵千代小路綾雄氏が自宅で何者かの手に依って惨殺されたからである。

（次号へつづく）

# 残虐なる女性たち

ヨハネス・ビリングエル博士著

森 本 愛 造 訳 註

グスタフ・ニーリッツ<sup>(1)</sup>は彼の自伝の中で、ドレスデン<sup>(2)</sup>の戦の後、女達が戦いの熄んだばかりの戦場へ押寄せた事について、次の様に記述している。

その翌日、ドレスデンの殆んどすべての住民が昨日の戦場へ押寄せた。地を掩うばかりに無数にころがされていた死者の衣類は悉く奪い去られ、裸身のままに放置されていたが婦人達は祭日の如くに着飾って彼等の間を無恥な目付で眺め乍ら歩きまわったのである。

婦人達が、神聖であるべき戦死者の裸身の屍体を冒瀆する様は、其の状況を叙述せんとする私の筆も、為に赤変するのではないかとさえ思われる。これらの女性の中には多くのこれまで品行正しく、礼儀に厚いと考えられていた良家の娘達や、教養のあると考えられて

いた婦人達も多くまじっていたのである。彼女達が手足を硬直させ、身体の方々を斬りとられて横たわっている戦士の姿を好奇の眼で見回る様子は、宛ら百花繚乱の花園を鑑賞するかの様であった。そして、彼女達の仲間には、私達の宿の主婦も、二人の娘をつれて加っていたのである。

併し乍ら、この様な好奇心な見物よりも、数多く実証され、その数に於いて遙かに勝るものに婦人達の処刑場の参観が指摘されよう。

特に、彼女等の興味は、肉体に苦痛を与える刑の執行、特に罪人が男性であるときに異常に発揚せしめられる事に注意せねばならない。

女性に於けるこの様な慾望は大別して二つに分類することが出来よう。其の一つは單に

想像や推測で残虐な行為を喜ぶ人達であり、もう一つは、実際に残虐な行為を見たり、自ら手を下して、そうした行為を實踐する人々である。想像や推測による慾望の発散の実例は、女性による手紙、女性による著書、回想的な文学に多く見出せる。

そして又我々は、婦人の心の中こうした慾望の発現を第三者の記録によっても発見することが出来る。

フランスの女性についていうならば、数多くの残虐な女性達の中でも、アンリ四世<sup>(3)</sup>の妃が注目されてよいであろう。彼女は、その時代の甚だ残酷な形式の死刑を当然すぎる程当然なものとして解していたし、屢々、その意に反する者を左程の理由なしに死刑に処するべく王に進言したのである。又、彼女は与えられた権力を用いて、王に提出された赦免請願を勝手に却下し、後に弱年の王ルキ八世<sup>(3)</sup>の世に至って自ら政治を壟断し、後に自ら女君主として君臨するに至ったのである。そしてその時代には赦免の請願に耳を籍することは無かった。

バティフオル<sup>(4)</sup>の記録によれば、彼女は、常にその夫たるアンリ四世の絶え間ない情事に悩まされ、一国の元首として、その乱行が悪い影響と前例とを残しつつあることに憂いを感じざるを得なかったとはいえ、テルム<sup>(5)</sup>という男爵が妃の女官の一人サゴンヌ<sup>(6)</sup>と情を通じ



たことを知ったときは、激怒して、王に勧め、直ちにテルムの首を刎ねさせたのである。後に王がラヴェイアック<sup>(7)</sup>という男に暗殺されたときにも、妃は裁判官達に判決に先立って自己の意を示し、皮剥ぎの刑を強く求めた。この記述は稀覯書である「アンリ四世の横死」の一六一二年の章に見られるものである。

即ち、

裁判官は、妃に、一人の死刑執行人が犯人を生きたがら皮剥ぎの刑に処する執行を志願したこと、且つその皮剥ぎの刑を出来るだけ緩慢に実施し、皮剥ぎの後に、未だ犯人が生きており、死刑の執行に耐えるだけの力を残している様にやる事を約束したことを報告した。

王妃のこの残酷な願望は理解し難いものを含んでいるが、彼女が王の死に当って極めて冷静であったこと、冷酷な性格から発する色々な希望や行為を一時的に簡単に申訳するのが常であったことなどを併せ考えると理解が出来る。

この王妃、即ち高名なマリア・デイ・メデイチ<sup>(8)</sup>のこうした感情の方向だけは、我々を驚すものともいえまい。併し、一人の更に有名な夫人、ルキ十四世治下にあつて、優雅と才智によって知られるセヴィニエ侯爵夫人<sup>(9)</sup>、十七世紀の生ける新聞、美しき侯爵夫人、の冷酷無残の半面は、我々を驚倒せしめるに足り

るであろう。夫人は、家族に対して、献身的であり、ごく僅かな書翰の跋粹によってさえ、精神的に非常に高いものを有していたと信じられている。他の多くの書翰については一般に知られる処となっていないが、更に彼女の残忍、冷酷な特長については恐らく全く知られていないという方が当たっているのではないであろうか。ヴィクトル・ユウゴ<sup>(11)</sup>は、セヴィニエ夫人が、火刑と車裂きの刑の実施を眺めながら化粧したと書いている。フンク<sup>(10)</sup>ブレクタ<sup>(10)</sup>は、こうした見世物に対して、著しい偏愛を示したと記している。これらの判断は、直接、待女の書翰から判断されたものである。

【訳者註】ヴィクトル・ユウゴ<sup>(11)</sup>はフランスの有する最大の文豪の一人である。彼の長編小説、レ・ミゼラブル<sup>(12)</sup>は同時代の人々のみならず、今日に至るまで、輝かしい栄光を担って愛読されつづけている。そして、その短い序文に示された比類のない卓越した名文章と強烈な愛の精神は、フランス大革命の完璧な精神の発露でもある。ユウゴの魅惑的な才能は又、初期の詩作に烈しく燃焼した。エクトール・ベルリオーズ<sup>(13)</sup>は、その中の幾つかに蠱惑的な音楽を付して二つの巨大な天才は白熱的に燃え上ったかと思わせる。ミゼラブルの序に曰く、「フランス革命は、すべての人に、自由、平等と友愛を齎らしたかに見

える。併し、ここに綴られた様な悲しい人々が存在する以上、この物語もまた無用のものとは思われない。即ち、前科者、不合理な貧困による不幸の根絶なくして、革命は完遂されたとは云えないと断じているのである。そのユウゴは又、「ルイ・ブラス」<sup>(14)</sup>に余りにも高貴な女性を描いた。セヴィニエ夫人の書翰の件りに符合して興味深いことと思うので付言する次第である。猶、初期の詩作には、ベルリオーズ好みの怪奇的な要素はないとしても、可成りネオ・ロマンティスムのグロテスクな美しさを持った作品が数えられると思う。」

一六七五年、夫人の所領ランヌ・ド・プレタアニユ<sup>(15)</sup>で、新租税に対する反感から暴動が起った時、彼女の親しい友人であつた総執事シヨオルヌ一家が脅かされた。夫人は、娘の勧告をふり切つて領地に赴いた。それは、夫人が、主人の庭に石を投げる悪者共の顔を見たいからであつた、と伝えられる。

この旅行に先立って、夫人は、娘のグリニアン伯夫人<sup>(16)</sup>に宛てて次の様な手紙を与えている。

低部ブルターニュ地方には絞首刑にせねばならない青頭巾が五、六百人もいるそうです。

【著者原註】青頭巾とは、ブルタアニユ人が青い帽子を冠っていたために、青頭巾と呼ば

れた。ここでは叛徒を指す。】

更に、領地に到着した時に再び娘に送った書翰には次の様に述べている。

「状態はひどく悲惨なものです。シヨオル又執事は、市議會を解散してしまふことによつて市民を罰しました。けれども、悪い者共の大部分はすでに市外に逃げてしまつてゐるので、この罰によつて苦しむのは、どちらかというと善良な市民だということになります。けれども、この市にやつてきて、私が森の中を散歩する時に、四千人も集められてゐる兵隊達が護衛につきまとわなければ、こんな叛乱のさ中に居るとは思えません。」

さらに、逃走した叛徒の代りに全く無実の人々が処刑された事実が、一週間経つてから同じく娘に宛てた書翰から判断される。即ち夫人は、市民の中から全く何の秩序もなく、二十五人から三十人の男を掴んで、絞首する心算であると、何の躊躇もなく書き送つてゐるのである。

この娘もまた夫人のこうした素質を受け継いでいたのであつたが、夫人は更につづけて、昨日はこの叛乱を始めたと思われるヴァイオリン弾きを車裂きで殺しました。その身体は刑が終ると四つに引き裂かれたままで市内の四つの街角にさらされました。

六〇人の市民を捕えてありますので、明日彼等を絞め殺す予定です。この地方のこうい

う状況は、他の地方の住民達が、執事の庭に石を投げ込んだり、支配者を侮辱したりせぬ為、又彼等の支配者に尊敬の念を持つ為によい前例になることでしょう。」

そうして夫人は更に二、三日の後に、こう書く、

「この市には執事夫婦はもう居ません。叛乱への弾圧は、間もなくゆるやかになるでしょう。その証拠に、型式通り絞首した後で更に死体を辱しめることは、もう今はしてゐないのですから。」

もし、お前が、お前の方での最初の裁判官の話を書き送つてくれるのでしたら、私は早速、車裂きにしたヴァイオリン弾きを唄つた小唄をつけて、悲痛な物語りを送つてあげます。」

そうして翌日、更に新しい手紙はこう述べてゐる。

「昨日、執事のシヨオル又一家を殺そうとした男を、又車裂きにしました。死刑はこういう者共にはよい御褒美です。」

流血の刑について面白い氣の利いた言葉を書いてきた娘に、夫人はこう書き送る。

「貴方は、面白可笑しい言葉で、此処の処刑について書いて来ましたが、今現在では、車裂きの刑は余り見られません。ただ一週間に一回だけ、裁判の厳正さを示す為にやつてゐるだけなのです。絞首刑もただ私の疲れた神

経を励ます為にだけ行われているのです。それに貴方の処でやつてゐるガレーレ船の刑は卑しいものだけでなく、身分の高かつた者達をも含めて、者共を俗界から離れた処で瞑想的な境地におくのです。」

【訳者註】この一節は、身分高い対等の者達を苦しめる方が、卑しい叛徒を殺すのを見るよりずっと面白いことなのだという意味に解してよいと思う。又、ガレーレの刑はかつて沼氏や、他の諸氏が詳述されたので改めて述べる事はしないが、極く簡単に云うならば、罪人を集めて櫂をもつて漕ぐ船の漕ぎ手とし死ぬまで漕がせる刑のことである。多くの古代劇の映画に出てくる数十人又は百人に達する漕ぎ手を要する大櫂船はすべてこの種の刑に利用されてゐる事を描写してゐる。難をいへば、此の種の映画に出てくる革紐の多数に着いた鞭は中世英国に於いて、鞭刑の為に考案されたもので、古代には存在しなかつたことは注意すべきである。ガレーレに類似の刑は古代埃及の画にもたしか出てくる筈であるが此の場合の処刑者はすべて戦争による捕虜と奴隸とである。」

ブルタアニユ地方の叛乱については以上を以つて終るが、ずっと後に至つて、夫人が矢張り手紙の中で刑について言及してゐることを逸する事は出来ない。この手紙は夫人の娘の婚ぎ先の良人が女性犯罪人の火焙刑につい



て、女をゆっくりと焼き殺すのは些か残忍ではないかと質問したことに対する返事であるが、その中で夫人は、自分が裁判官にきいてみた処では、女の場合は少しく苦しみをやらせる為に、薪を多く使ったり、薪を頭の高さまでつみ上げたり、時によっては、鉤で女の首をもぎったりしてやるのだそうだから、決して残酷にすぎるとは思わないと書いてゐるのである。

トクヴィユ伯<sup>(19)</sup>は此の様な夫人の性向について、此の様な記述の部分については今日我々が知っている限りの最も残酷薄な人間達の粗野な蛮的な社会ですから眉をひそめられる種類の事である。と為し、これらの書証が夫人の許し難い欠陥を適切に指向しているというとき、伯爵の断定は正当であるとすべきであろう。が、併し我々は、これらの引用や例証によって、セヴィニエ侯夫人が、当代の最も残忍な婦人であつたと為すことは出来ない。夫人の場合には、善かれ悪しかれ有名高位の婦人であつたが故に又、文筆に才を恵まれたが故に後世に注目されただけである。夫人と同様な或はそれ以上の残忍な性格を持つ婦人は他にも多数居り、只、夫人はその中の一人にすぎないという事は冷静に、且正当に判断されるべきである。

【訳者註】訳者はこれまでも屢々実例を引いて、前述の様なビルリッゲル博士の<sup>(20)</sup>所説を

立証して来たが、ここに博士のいう所、即ち大多数、又は支配的な数の大勢に偏向的な傾向が現われた時には、可成り社会的地位を有し、又道徳的に厳格な女性でさえ勇敢にその内在する偏向性を露呈するものであるということ、そして、有名な女性達の偏向性のみが後世に宣伝される為に、その女性のみが偏向的であり、時代の風潮とかけ離れて異常であつた様に思われるものであるということは現代にも引きつづいて見られるという实例に再びナチスドイツの強制収容所に於ける女看守囚人監督(カポオ)<sup>(21)</sup>収容所職員、及び幹部等の实例を引証しよう。

英国で出版された「オデット」(ODETTE)という書物は、ドイツの後方に敵中降下した英国の女子宣撫員が、占領下のフランスで捕われ、ラアヴェンスブリュック(Ravensbrück)やアウシュヴィッツ(Auschwitz)Oswenski等<sup>(22)</sup>の収容所で辛酸を嘗め、遂に間一髪でドイツの敗北によって救われる実見談であるが、フランクフルト博士が書いてゐる様にゲシュタポの女子隊員の果しない残忍性を報告している。又、同書の中にはハムブルグやニュールンベルグの戦犯裁判に出席している悪名高きドロテア・ビンツ、エリザベト・マレシヤル等<sup>(23)</sup>が揃つて写っている写真が添付されており、之等の女性達が、決して特殊な女性でなく現在も猶ドイツのみでなく全

世界に存在していることを示している。この様な記述は、フランクフルト博士の「夜と霧」の序説に付された解説にも、彼女等の多くが収容所の給与の良い事をのみきかされて募集された平凡な女工や看護婦等であつた事を記してあり、「痛ましきタニエラ」「人工地獄」等の同様出版物についても、右と相反する記述には当たらないのでまずく真相を記したものと断定してよいと思う。猶ここに「人工地獄」として挙げたものは沼正三氏が「逆世の鞭」として紹介されたものと同一であるから詳しくは其項を参照されたい。

本書に現れて来る数多くの例は、其の儘、現代にも発生する可能性を潜在的に持っているという事を念頭に置いて読んでみると、この美しい過去——一九〇〇年の初頭——に出版された書籍が、猶今日の魅力を存していることに気付くのである。そうして又、此の大戦が、数多くの例証の資料を提供した事によって、私達は現代が猶、特筆すべきサディスティンの黄金時代である事をも理解出来るのである。】

#### 【編集部註】

本月号の「残虐なる女性たち」の「原名註」(1)―(22)までは、誌面の都合により来月号の分と一緒に、まとめて掲載いたします故御承諒願います。

## あるマゾヒストの手帖から

沼

正

三

## 第二百二十八 答を揮う美女

(「今昔物語」から)

今は昔、平安時代の話だ。三十位、丈高く少し赤鬚の、侍らしい男が歩いて行くと、とある戸口の蔭から鼠鳴して手が招き、女声で「戸を押せば開きますから、押して中に入つて頂戴」と言う。そして錠を下させると、上に案内した。『簾の内に呼び入れたれば、い

やんと用意して来てある。食べ終ると女中めいたのが後始末して出てゆく。又二人で床に臥した。夜が明けると又門を叩く音、昨夜とは別の者が入って来て、掃除したり食事を運んだりする。男が知人の所を訪問したいと言うと、女は装束や馬や供の男を貸してくれた。その男達もひどく気の利く奴等ばかりだ。こうして、不自由なしに二十日程経った。女が言うには「思い懸けずこんな仲になりましたが、やはりこうなる因縁があったのでしようね。この上は、生きるも死ぬも、妾の言うことを否とはおっしゃらないでしょうね」男「勿論、私を生かすも殺すも貴女の御心一つです」と答えると、女「嬉しいわ」とて、充分食事させ、「さあ」と奥の別屋へ連れて

行って、『此の男を髪に縄を付けて、幡物と云う物(磔用の木柱と思えば良い)に寄せて背中を出させて、足を結び曲めて、したため置きて、女は鳥帽子をし水干袴を着て、引繕いで答を以て男の背中を慥かに八十度打ちてけり。』「どんな気持?」「悪かないです」休養三日、答で打った傷痕が癒った頃に、又連れて行って、幡物に縛り付けて、元の傷痕を打つ、『血走り肉乱れけるを八十度打ちてけり。』「我慢出来て?」「出来まします」と平然と答えると、前より賞めて、更に四五日、又もや同様に打たれたが、「我慢出来まします」と答えると、引つ繰り返して腹を答打った。それでも「平気です」というと、ひどく喜び賞めて、充分養生させた。



女は男を指図してある所に行かせる。行ってみると、それは強盗団の一味の作業中であつた。『見ければ、只同じ様なる者二十人ばかり立ちたり。それにさし退きて(少し離れて)色白やかなる男の小さやかなる立てり。それには皆畏まりたる気色にてぞありける。其の外に、下衆ぞ二三十人ばかりありける。』その夜の分捕物の配分の時、男は「自分は新参で……」と辞退した、首らしい離れて立っていた小男は、その男の態度が気に入らなかつた。帰つて来ると、例の女がいた……

女は鍵を男に渡して、ある場所の蔵を教え、必要なものは自由に使わせる様になつた。こうして一二年経つた。

ある夜、女は、「急にあなたと別れることになるかも知れません」と悲しそつた。

男は、その時は本気にしなかつたが、一寸旅に出て二三日して帰ると、驚いたことには、家も蔵も跡形もなくなつていた。……『この女は変化の者などにてありけるにや、一二日が程に、屋をも蔵どもをも跡形もなく壊ち失いけむ、稀有のことなり。亦若干の財、従者どもをも引具して去りこむに、其の後聞かずして止むにけむ、あやしきことなりかし。……それに只一度ぞ行き会いたりける所に、さし退きて立てる者の異者ども(他の人達)の打畏まりたりけるを、火の焰影に見ければ、男の色ともなく(男の肌らしくなく)、いみ

じく白く厳しかりけるが、頬つき、面様、我が妻に似たるかなと見けるのみぞ、然にやあらむを思えける……』

× × ×

今昔物語集巻第二十九の第三『不レ被レ知る人女盗人語』である。谷崎潤一郎が「恋愛及び色情」という随筆で既に指摘していることだが、これは女性鞭撻者に関する説話としては、世界的な文献と言へるものである。

性欲の爲の(女性による男性の)鞭撻というだけなら、もっと古い文献はいくらもある。例えば、ペトロニウスの「サチュリンコン」(西暦一世紀に成立)には、主人公エンコルピウスが、性的無能力に苦しんで女から鞭撻を受けて人為的昂奮を得ようとする場面がある。然し、これは——よく誤解されるのだが——マゾヒズムとは関係がない。何故なら、鞭撻が「男の性的昂奮の爲に」行われているからだ。サドの「ソドムの百二十日」には、男が鞭たれたり、女の排泄物を口にしたりする場面がいくらかもあるが、殆んどマゾヒズムが感じられないのと同じことである。

この話は、従つて「女の性的昂奮の爲の」鞭撻として読むべきである。この面でも古典的古代の文献は必ずしも少くない。然し私の知る限り、それらは奴隷を対象としての女主人の放恣な鞭打欲を扱っているに止まる。(その一例が第百二十三項で解説したエヴエナリ

スの詩篇である。)下つて、本項の話(鎌倉時代即ち十三世紀の成立である。)と余り時代の異らぬ一夜物語にも、女の性的昂奮の爲に男が鞭撻される話は多々存するが、これらでも、貴族の女性と平民の男性という両当事者の設定が、女による男の玩弄の契機を強くし過ぎていて(後に改めて紹介する予定であるが、例えば、バートン版第三一夜「床屋の第二兄の話」等を参照されよ。)、本項の話とは余程趣を異にするものになっている。

本項の話では、女は男と夫婦になつて睦み合つてゐるのであり、男の同意を得て後、嗜虐的鞭撻を行うのだが、途中で「どうか」と訊き、「構わない」という答を得て、更に鞭撻の度を強めている。これは夫婦間における特殊な愛戯としてのサド・マゾプレイが「女性の爲に」行われた例として考察し得るのであり、その意味では実に珍らしい文献としなければならぬ。

男を手段化している程度が低いから、その点からいえば、マゾ味は減じているのだが、それを補つて余りあるのが、この女の正体だ。女だてらに強盗団の首領なのである。男装して数十人を随使する女丈夫なのである。鞭撻の場面でも男装している(これは性科学的には大切な所だ。)位で、極めて男性的な性格を持った、まぎれもない嗜虐女性である。この男の肉体は強健で(精神的に被虐的だった

からとも見得るが、能く彼女の鞭撻に堪え通したから、彼女の愛情を繋ぎ得たが、彼以前に幾人かの弱い男がこの鞭で叩き殺されていくかも知れぬ。男がこの屋に招かれた時に何の必然性もなかったことも、この様な推定を許すだろう。サドマゾプレイの遊戯性が、この話のマゾ的感興の妨げとならないのは、その為である。

最後に、この女が眷属諸共消えてしまう所も、マゾ的に見てプラスである。古今著聞集巻十二にある偷盗説話中に、時の検非違使別当(今の警視総監兼検事総長)隆房大納言の邸の奥女中が強盗団の首領だったという奇話がある。ある家が襲われた時家人の一人がそ

の仲間に紛れ込んだ。一味の中に『いとままやかにて声けはいより始めて世に尋常なる男の、年二十四五にもあるらんと覚ゆるあり、胴腹巻に左右こてさして、長刀を持ちたりけり、緋緒括りの直衣袴に、くくり高くあげたり、諸の強盗の主領と思しくて、ことわきて(指図して)ければ、みなその下知に従いて、主従の如くになん侍りけり。』家人はこの首領の跡を附けた。何と検非違使邸に入った。次の日搜索すると、血痕がある。局女房の中に、かくまった者がいないかと詮議したら意外にも上臈の一人の部屋から、血の附いた小袖や、例の直衣袴や、お面が出て来た。『顔を隠して夜な〜強盗をしけるなりけり。』

：二十七八ばかりなる女のはそやかにて、丈立ち髪のかかり、すべて悪き所もなく、優なる女房にてぞ侍りける。……これは実伝らしいが、本項の話のヒロインと似ている(そこで両者を連絡させて一篇の小説としたのが連報二五番であげた海音寺潮五郎「女賊記」である。)然し、発覚して捕縛され処刑されてしまうのでは、いくら美人の強盗団首領でも、マゾヒストには感興のない人物になってしまう。本項の女主人公が変化の者の様な神出鬼没を見せるロマンチスムには到底及ばないと言わねばならぬ。

(おわり)

## 『続・女優と磔刑』

# 磔にされた二人の新人女優

奈加多須磨尾

二月号で私は『女優と磔刑』に、磔に縛られた女優は極めて少いと書いた。その舌の根が乾かぬうちに、映画では二人の新人女優が、磔にされた。今年に入って、邦画時代劇ではこれで実に五人の女優が縛られ、洋画「カルタゴの女奴隷」のマリナ・アラシオを加えると六人の女優の磔を觀賞？することが出来たわけである。

さて主題の二人の新人女優『天馬小太郎』の中村玉緒と『鬼面竜騎隊・後編』の円山栄子についてだが、兩人とも、これまでまともに縛られたことの少い女優だけに、興味深く



観察した。共に役柄はお姫様、反逆者に捕えられ、味方の勇者を誘い出すための敵方の囚のために、十字の柱にハリツケにされ、火焙りの惨刑に処されるという、まったく同じ条件が揃っている、この二つの磔シーンの比較はかなり面白があると思う。

二つを比較する前に、場面の情景描写からのべてみる。

まず『天馬小太郎』の中村玉緒から。この人は決して美人じゃあないが、可愛らしい人である。それだけに磔にされた姿は、実にあわれだった。川原の刑場に竹矢来が組まれ、その中央に磔にされた中村玉緒の全身大写が最初から現われる。白木十字の柱に悲しげな表情で、横木に左右水平に拡げた両手を肩の高さで真直に、しかも力なく伸し、掌は表に向けて指先まで揃えて伸していた。その両手を容赦ない縄目は手首を巻き、さらに腕の付根の、すなわち肩から腋下にかけても同様に縛っており、胸部は頭から両肩を通した縄を胸で本縄型式の網目をこさえ、その続きで腰と膝頭の二カ所を縛っていた。まず、これだけ丁寧な縛った磔は私はまだ観たことがなかった。それに特に腕の付根を縛った縄が、グット胸をそり返らせるのに効果的であり、また、ややもするとたれ下る両手を水平にささえていた、言葉そのものの「縛られた」というより、柱へペタリとハリツケられたとい

う実感がこもっていた。それに、中村玉緒の「あわれ」を誘う演技が実に巧く、磔シーンでは今年作品中の最上の出来だともみる。上半身クローズ・アップが2カット、全身大写が5カット、遠景で数カットと時間的にもかなり長く、ことに救いが来ながら容易に救われず、むしろ足もとに火がかけられ煙にむせぶシーンもあり、さらに救助方法が投縄で柱を横に引倒し、仰向けに倒れたところを縄をといてもらおうという一寸みられない方法で内容的にも豊富。なお書き遅れたが刑衣は真白で透し模様の入ったあまり袖の長くない振袖。髪はほつれた切髪を束ねたもので自然的だった。

一方『鬼面竜騎隊』の円山栄子も、中村玉緒とよく似かよった、まだあどけなさの残っているマスクの小柄な女優だが、やはり磔にされた「あわれ」さは良く現れていた。このほうはい長丸太を組合せた十字の柱に、純白の囚衣、切髪、跣足で本格的な罪人扱い。しかし縛り目は、両手首と膝頭のやや上の二カ所だけで略式、何時もの東映調。ただ上背がないためか、左右に引っぱりぎみに張り拡げて横木の両端に袖ごと縛りつけられた手首の位置は、肩の高さより心持高く、これが両腕の脇があまり曲がらない効果を表わしていた。また丸太組の柱が角柱と違って横木が縦柱の裏側にあるので自然に胸をグツとそらす

形になっていた。両拳は掌を前に向けて握っていたのが中村玉緒の場合と違っている。刑場は木立に囲まれた広場で竹矢来はわざとない。足下に柴束をうず高く盛られて、かなり長い間、火焙りにされている時に救いが来る。遠景と顔のクローズアップが各5カットで全身の大写は1カットだけ。しかしこの僅か1カットが白衣の神々しいまでの美しさをみせてくれた。足もとからパンアップして全身を写し、さらにアップにもって行くこの撮影法はいただける。大写的な顔は仰向き加減に絶望的表情で思わず眼を閉じる演技が痛々しさをよく表わして良い出来だった。

さて両者の比較。共に十字の磔による火焙りで、火焙りの型としては正統ではない。でも映画としては、この方が「あわれ」を感じさせて効果がある。時間的比較で中村玉緒は救い主が来たら火をつけられ、せいぜい煙にむせぶ程度だった。しかし円山栄子の場合には救いが来ない前からもう焙られ、遠景ながら火の手がドツと最高潮になる場面もあった。ただ中村玉緒の場合は縄をといて救い出されるところまであったが、円山栄子の場合には悪人達にも彼女を殺してしまう気はなく救い手が現われると奪われないうちに、さっさと磔柱から降して連れ去ってしまう。だから一寸心残りの気もしないではないが私としては後者の方がよかったようだ。次に角材の柱と丸

太の柱。磔柱には目立つほど大きい柱は禁物だが、この程度の太さなら甲乙ないようだ。

磔柱の高さが違い、中村玉緒の時は足もとにも薪束があるという低い柱に縛られ、円山栄子は柴の束とやや間隔があいている高い柱に磔られていた。「あぶる」という意味からなら高い柱なのが順当かも知れないが、残虐性は低い柱で体を焼く方がグツと強く、現実にも焙り殺すのでなく焼き殺したらしいから中村玉緒の方に軍配が上がる。

次に縛り方だが、これも一長一短で、中村玉緒の雁字搦目の縛りは罪人の自由束縛の意味では優れているが、磔の定法的縛りではない。かといって円山栄子のように緊迫感の薄いものも考えものだが、一面ではもだえの動作が容易で効果的ではないかとも思われる。それにしても円山栄子の磔は、やっぱり槍突きの刑に向いているから、これも中村玉緒の縛られ方のほうが出来が良いようだ。

演技力では雰囲気表現は円山栄子、処刑者の心理表現では中村玉緒、まず五分の出来だが、筆者自身のマスクの好みから円山栄子に分が良い。衣裳が円山栄子の白衣筒袖の刑

衣なのに比べて、中村玉緒は同じ白衣でも振袖衣裳だから、これは円山栄子の方が上だ。

それに円山栄子は素足が明瞭にわかったことが良かった。

どちらにも共通した欠点として、火と罪人との間隔が開き過ぎていたことと足台付きが指摘される。

さて比較はこれくらいで終って、さて私が書きたかった事は、最近、映画も磔刑が大衆性のあるサド・シーンとして認識してくれたらしいことだ。劇構成上でもこのようなシーンは、どうしてもクライマックスとか、一つのヤマ場になる場合が多いからだ。ここに書いたこの二つの映画のすぐあとで、さらに二つの磔シーンのある映画が製作されている。

東映作品で『竜虎捕物陣二番手柄・疾風白狐党』と『忍術水滸伝・稲妻小天狗』がそれである。『疾風白狐党』では新人の五条恵子が丸太の磔柱に振袖姿で磔に縛られる。また『稲妻小天狗』では東映の可憐女優のうちでもNO1の丘さとみが久々の縛り。それも白の囚衣で引廻しになったあと刑場で白木の十字架に磔に縛られ槍突きの刑にされようとする

そうだ。新春の楽しみである。このように磔シーンのある映画がどしどし企画されはじめて目下のところマニヤの筆者は幸福である。今後も続いてもraitたいものだ。

なお追信として二月号で書いた『磔刑と女優』に追加として題名喪失のミュージカル作品、仮に『踊る龍宮城』（三十二年十二月号から参照）でSKDの川路龍子と曙ゆりの二人が現代風俗の男装で十字架に縛られて火焙りにされるシーンがあった。縄が二人の体を柱ごとラ線状にグルグルと巻いていた変った縛りだったことを記憶する。

また質問として河村操氏に三十三年新年号「映画女優緊縛に関する一考察」のうち高千穂ひずるが磔になった映画題名とその時の縛り方などをお知らせ願えませんか。それから東映作品『地獄谷の豪傑』で磔にされた女優の名前を御存知の方がおられましたら、誰かお知らせ下さいませ。

またまたクダらない文章を披露しておそれいます。では同志諸兄からの磔に関するお便り御意見などを楽しみに待っております。



# 私の体験したフェチズム

とやま・かづひこ

## バスの中での獲物

私のつとめる会社では春秋二回、社員の慰安旅行が行われるのが例である。

ことしも、二月の第一日曜日を利用して、大型観光バスをつらねて、十国峠から熱海へ抜ける旅行が行われた。

その車中での出来事。

総務課のT子さんが、バスに酔って戸塚のワシマン道路を過ぎる頃から苦しみ出した。

車内係を承けたまわった私は、周囲の人から、

「T子さんが苦しってます」

と報告を受けるまでもなく、彼女の座席によりそい看護役に廻った。

T子は、社内三美女の一人。

殺風景なオフィスガールなんかにしておくよりも、映画界へでも送り込んだら忽ちスタアだろう、と私はいつも溜息まじりに眺めていた美しい女性である。

そのT子が、バスに酔い、殆ど正体を失っている。

彼女は吐き気を催したらしく、苦しそうに身もだえしている。

バスの車掌は慣れたもので、用意のバケツを取り出して私に手渡し、

(これに吐いた方がラクになりますよ)

小声でささやいた。

私は、その小型バケツを受取ると、中にビニールの風呂敷をひろげ、T子の胸のところにあてがってやった。

やがてT子は、

「ゲーツ」

と、口から茶いろのものを吐き出し、バスの中の人目をはばかるように、バケツにもどす。何回も、何回も。

そのもどしたものの匂いが、何かアップルジュースのような甘ずっぱい味で、妙に私の味覚をそそのかすのだ。

T子は、もどすだけでもどすと、やや気持がおさまったらしく、眼に涙を一ぱいためて、はずかしそうに私にバケツを返してよこすのだった。きつと、中身を捨ててバケツを車掌に返して頂戴と云うのであろう。

私は、極めて事務的にそのバケツを受取りビニールを手ぎわよく丸めて、足もとに移し平然と車掌の手にバケツを返した。

バスは進んでいる。

会社の同僚は、何事もなかったかのように窓の外の景色に見とれ、今は、T子の吐いたものに注意を払う人は一人もない。

私の胸は、早鐘を打ち、全身の注意はビニールに注がれていた。

「人間の吐いたもの、これこそコプロ派にとって、最高のプレゼントであるにちがいない」私は一刻も早くバスが目的地に着くことをねがって、何回も何回も足もとのビニールを見やるのだった。

案のじよう。

T子のそれは、見た目にはみにくい嘔吐物そのものだったが、私が人目を忍び、宿のトイレにかけ込んで、目をつぶり、舌を伸ばして猫のごとく舐めたそれは、ホロ苦く、甘くすえた果物の味。

私は、ただ夢中で、それを食べつくしたのであつた。

固形物や、液体を口にした経験は、私には数限りなくあるが、T子のそれを味わい得たことは、私のひそかな楽しみに又一頁を加えてくれた。

T子、私は心の中から吠え、人のからだから出たものを尊しとしてむさばり食べる自分のみにくさに泣きながら、しかも身を灼く快感にひたりつつ、まっくらなトイレのドアの

中に立ちつくしたことだった。

### わが愛するメニュー

東京の山の手のある邸宅で、会員制のSM愛好家のクラブが特設されたと聞き、相当の人数をかけて、その規約書を入手した。

要旨はS対M、M対Sの会員組織で、その会を中心として生活をたのしみ、相互の足らざるを補うという同感できる団体をのぞむ向きは意を強くするに足るものと思う。

会費は月払五千円、その他にプレーの相手に謝礼がいる。細則はくわしく、これを読むだけでも興味はつきない。全文の紹介は後日に譲るとして、面白いのは、申込者に記入を要する申込希望者の趣味の分類表で、それを英字ローマ二字で略号にしてあり、申込のさい必ず自己の趣好をこの略号にして併記することが規定されている。

その略号は次の通りで、私はこれを「アブのメニュー」と呼び、時々一人取り出しては楽しんでいるのである。

(最上階)

SD ヤチイヌム

WN 女座

MN 女座

MZ マンヒスム

FSH フェチイシスム

BYは身体の一部

ACは身に付ける物

緊縛

RO レスボス

RE (女子同姓愛)

AN アーヌス

(HE門)

K クリスター

(流腸)

EK 腹部加虐

KE 同 被虐

SO ソドミー

(男子同姓愛)

HO ホモ

SS 窃視

EP 露出願望

CO コプロラグニー

(汚物尊重)

FU ふんどしマニア

SP 切腹マニア

JM 女装マニア

DM 男装マニア

○

大略以上の通り。

コプロラグニストたる私は、このように堂々と相手を求める組織があり、会費を払い込んで、汚物尊重を楽しむ人々のあることを思うと、それだけで胸がおどるのだ。



少からぬ金を投じ、受取った双方が、人目  
はばからず、自己の趣好をみたま。そのすさ  
まじいシーンを胸にえがくと、心に迫るもの  
ある。このような会があることは、吾々の悩  
みを充たすためには誠に有り難いことであり  
健在を祈るものである。

### コップに抱く空想

人々で賑わす東京駅の名店街。

コーナリーの片すみに、ある牛乳会社の立呑  
みスタンドがある。

ビールでよい加減酔った私は、酔いをさま  
そうと、つめたい牛乳を一杯求めてそのスタ  
ンドに近よった。

サービスの女の子が、小柄ながら、スマー  
トな制服姿で、ハッと目をみはらせる美し  
さ。

ちようどラッシュを過ぎた時刻で、気がゆ  
るんだのであろうか、彼女はつい今しがた自  
分が呑んだ紙コップに、何を間違えたのか、  
そのままコックをひねって新しく牛乳を注ぎ  
足して私にすすめるのであった。

私は、ためらうことなく、金十三円を支払  
い、彼女の使ったコップをそのまま使わせて  
もらったが、そのうまいこと。

私は得意の想像力を縦横に働かせて、つぎ  
のようなストーリーを設定した。

このコップのなかみは彼女の液体。  
おれは彼女の液体を強制的に吞まされる。  
反抗力のない弱い男。

この液体を仲立ちに、彼女の一切の不浄が  
トクトクと音を立てて、おれの身体の中に流  
れてゆく。

○

このスタンドは、彼女専用のWC。

彼女の液体を求めて、おれは有りたけの金  
をはたいて彼女に捧げる。

金を受取ると、彼女は冷めたく笑って、コ  
ップを取り、じかにコックにあてがって排泄  
をする。

その液体が、このミルク。

おれは聖なる水に唇をふれ、洗礼される有  
り難さに彼女のもとにひれ伏す。

タッタ十三円の牛乳でも、現実に、彼女の  
手から渡されると、私の空想癖は、活潑に動  
き、このように楽しい幻想を生んでくれる。  
だから散歩はたのしいのだ。

### 新聞にひろう

日本観光新聞の連載読物、福田蘭童氏作  
「うわばみ行脚」二四七回から。

——ニューヨークの或るアパートでは、変質  
者たちが集まって相手の体臭をかき合っては  
満足しているという話をきいたことがある。

またパリのあるホテルの一室では変質者たち  
が集まって相手の排泄物をお互いにつかみ合  
い悦にいつているというハナシも耳にしたこ  
とがある。云々

○

同紙連載コラム「異色温泉の旅」新川温泉  
の項から——。

鹿児島県の新川温泉には桂離宮同様の砂ト  
イレがある。トイレの底が砂と石で出来てお  
り、時おり砂をかえるという仕組み。

「若い女性にはイヤがる人もいますがね」  
オシッコのあとよりウンチのあと歴然とい  
うことになるからだろう。但し

「砂トイレの砂をかえるのは客の役目」  
ということになっている。

若い婦人の場合など砂はらいが楽しみとい  
うもの。昔は恋しい女性の砂を紙に包んで大  
事に持帰った人もある。

こんな記事をよむと、私もこの温泉へ行っ  
てみたくなるが、正味のところ東京から二十  
九時間四十分、片道車代だけで二千四百円と  
聞いては一寸手が出ない。

しかし、何もそうまで手をかけなくも、砂  
トレイを彼女に使わせるくらいワケのないこ  
と、何とかマネてみようと思っている。

(おわり)

## △体験告白手記▽

## 続・病者の獄

## 手術病棟

一九五六年十二月第二週の火曜日が、私の手術の日であった。入所のとときから、充分に覚悟はしていたつもりでも、いよいよとなると、不安が重く心を締めつける。最近肺外科の進歩はめざましく、手術の失敗率は非常に減っているとはいっても、それはあくまで数字の上のことなのだし、事実先月の手術で一人死亡しているのだ。

しかし、患者の気持にはおかまいなしに、手術の準備は刻々と進められていく。

「剃毛です。すぐ来てください」  
と看護婦に云われ、私は寝巻の上に丹前を

はおると、処置室へいった。

蒸気がモウモウとたちこめる明るい室内で

二、三人の看護婦が働いている。

「裸になってください」

さっきの看護婦が、熱湯にタオルを浸しながら云った。

手術を受けるかぎりには、その前後に、何度か恥かしい嫌な思いをしなければならぬだろう。それが避けられないものならば、眼をつぶって我慢することだ。そして、すぐに忘れてしまうことだ。私は、自分に繰り返すう云いきかせていたのだが、その一つにぶつかる毎に、やはり強い抵抗を感じてしまうのは、どうにもしかたのないことである。

青葉 楨 一

「早くしてください。時間がありませんから」

先程の看護婦にせきたてられると、私はひと思いに寝巻を脱ぎ捨て、そのいきおいで、手早くパンツも脱り去った。

「アラ！」

振り向いた看護婦は眼を丸くすると、  
「そんなに全部脱いでしまわなかったっていいんですよ。剃毛は上半身だけなんですから」

「ス、すみません……」

私は、大あわてにあわててパンツを穿いたが、もうそれからは看護婦の顔を見ることができなかった。前に、盲腸の手術のときの



話を聞いたことがあり、裸になれといわれて  
 気持ちがあがっていたので、ほとんど無意識  
 に裸になってしまったのだが、脱らなくても  
 いいパンツを、しかも女の見ている前で脱  
 てしまった自分の馬鹿さ加減が、恥しいより  
 も口惜しく、私はもう頭がガンガンなって、  
 腋毛を剃られているのも気づかない程であ  
 った。ソドミアにとって、異性に裸体を見ら  
 れることが、どんなに屈辱であり、それはも  
 う、肉体的な苦痛でさえあるということは、  
 ノーマルな人には、とうてい理解しえないで  
 あらう。たとえばマゾヒストである場合で  
 も、それがみじんもそういった気持ちを伴わ  
 ないのだから、救いようがないのだ。  
 やつとこのことで剃毛が終り、逃げるよう  
 に病室へ戻ると、そこにはまた嫌なものが待  
 ちうけていた。

浣腸器を手にした別の看護婦が、すでにベ  
 ッドのそばに立っていて、

「浣腸しますから」

といとも事務的に云ったのである。

私は、もう半ばヤケクソになり、どうに  
 かなれと、ベッドへあがった。

寝巻の裾がはじめに捲かれた。私は固く眼  
 をつぶり、情けなさに、泣きたいような気分  
 になっていた。

基礎麻酔の注射が射たれ、もう一度小便に

いかせられると、いよいよ担送車に乗せられ  
 て、手術室に向うのである。

頭の上を流れていく天井を睥めながら、そ  
 のとき私が考えていたのは、親のことも家  
 のことでもなかった。ただひたすら一つの  
 ことを、警官の裸体を一眼なりとも見ない  
 ちは死んでも死ねないと、そのみを思い続  
 けていたのであった。

警官というのは、特定の人物があるのでは  
 ない。警察官ならば誰でもよく、あの厳めし  
 い制服につつまれた肉体を、一糸纏わぬ姿に  
 して眺めるのが、私の少年時代からの悲願で  
 あったのだ。全裸の警官を一眼見さえした  
 ら、いつ死んでもいい。だがそれを果さぬ  
 ちは、どうしても死ぬことができないのだ。

手術は無事に終った。

十日も過ぎると、手術後の疼痛は、かなり  
 楽になってきたが、回診の後で婦長が、とう  
 とう恐れていたことを云いだしたのである。  
 「Nさん。まだ便通がありませんね。浣腸を  
 してもらいなさい。苦しいでしょう。十日も  
 しないんじやア」

大抵の患者は、三日めぐらいに浣腸をし、  
 挿入便器でとっていた。私は、むろん、看護  
 婦にしてもらおう浣腸が嫌さに、断っていたの  
 だ。

婦長に云われた看護婦が、すぐにやって来

た。

「Nさん。浣腸しましょうね」

しかし、私は、なお強情をはって断った。  
 「便意はあるんです。便器を借してください  
 ませんか」

「そうですか——浣腸したほうが楽にでる  
 ですけどねエ」

看護婦はそう云いながら、便器を持って来  
 ると、ベッドの下におき、

「じゃ、ごゆっくりと——」と、カーテンを  
 閉めて出ていった。

私はホッとして起きあがると、ベッドをお  
 りて丸便器にしがんだ。腹は、はっている  
 し、便意もあるのだが、どうしてもでてこ  
 ないのだ。十分あまり、そうしていただであ  
 ろうか。疲労が激しくなったので、私は諦める  
 とにした。

「それくらんなさい。やっぱり駄目でした  
 でしょう」看護婦は云ったが、

「明日、便所へいってみます。もういいん  
 でしょう。便所へいって——」

と私は云いはった。私には成算があったの  
 である。

翌朝。私は、売店の売子に届けてもらった  
 イチヂク浣腸を、二コ袂にしのばせて便所に  
 いった。手術後初めて歩くので、足がフラフ  
 ラし、息切れのために、戸の前で暫く立ち止  
 らなくてはならなかった。

自分でする浣腸は、一寸やり難かったが、二個分を注入してチリ紙でおさえていると、まもなく猛烈な便意が起ってきた。

何度も身ぶるいをしながら、大量の便を排泄し終った頃、外から看護婦が声をかけた。

「Nさん。大丈夫ですか？」

「大丈夫です。もうすみしました」

「できましたの？」

「ええ。たくさん」

「そりやそうでしょう。十日も溜ってたんですもの。でも、よくでたわね」

私は、イチジク浣腸のことは誰にも云わなかった。そして、一日おきに、ソツと二コづつ持っては便所へ通うのが、何よりの楽しみになったのであった。

一ト月近く経つと、私は大分元気を恢復した。

ある朝、検温のとき、若い看護婦が、ふくみ笑いをしながら、

「Nさん。麻酔のとき、嘘言云ったんですってネ」と云った。

私は妙に、ドキリとしたが、

「嘘だろう。病人を揶揄うもンじゃアないぜ」

「アーラー嘘じゃアないわ。巡查がどうか云ったんですってよ」

今度こそ、私はドキンと胸が鳴った。

麻酔でよく嘘言を云うものだと聞いていた。

「お母アさん」と云ったり、女の名を呼んだり、自衛官の患者が軍歌を唄ったり等、療養所内には事実として広がっていた。しかも、彼女が「巡查云々」と云うところをみれば、私が嘘言を言ったのは本当に違いない。もしかして、「裸が見たい——」などと云ってしまっただけではあるまいか。私の腋の下には冷汗が流れ、顔が火照ってくるのがハッキリ判った。

若い看護婦は、私のよう、すに気づくと、

「アラ、気にすることンかないわ。大抵の患者さんは、何かしら喋ったり歌ったりするのよ」

と云って、サッサと行ってしまったが、私としては、気にしないわけにはいかない。その日は一日中憂鬱であった。

まったく、私は、手術病棟では、サンザンなめにあったかたちである。

## 倉庫

私が、手術病棟から、元の第二病棟へ移されて来たのは、五月の初めであった。

体力が戻ってくるにつれて、私の性向は、

一時落ちこんでいたマゾから、二再サドの方へと、向きを変えたしていた。

私は、誰か浣腸してやる相手はないものかと、ウズウズする気持を、もてあますように

なったのである。

療養所も、殊に外科病棟となると、入所退所が頻繁で、常に患者がいれかわっている。空いていた私の隣のベッドにも、じきに新しい患者が入って来た。

四十前後の、色の浅黒い、額の禿げあがった男で、建設省関係の役人であった。一見瘦せているように見えるが、寝巻に着更えると、き見ると、よく発達した筋肉が固く締って、若い頃はスポーツでもやっていたのに違いないと思われた。

「Kといえます。どうぞよろしく」

やがて、私の餌食になる運命とも知らず、彼は、にこやかに自己紹介した。

勿論、私だとて、最初からKを相手に選ぶと考えたわけではない。それは、まったく偶然だったのである。

朝の検温のとき、便通、喀痰等の有無や回数報告するのだが、Kは、入った日から、便通は毎日きまって「ナシ」なのだ。

それを聞いていたうちに私は、とうとう我慢できなくなつて彼の耳に囁いたのである。

「便通が無いようですね」

「ええ——」

「便秘、よくなさるんですか？」

「時々。でも、こんなに長く無いのは初めてです」

「環境が変わると、そういうことはあるらしい



ですがね。でも、気分が悪いでしょう」

「ええ、そりやア—」

「あまり長ければ、浣腸してくれるかもしれないよ」

「浣腸……」

Kは、一寸眉をよせた。

「経験はおありですか？」

「いや。今までは、便秘といったって、一日か二日でしたから——看護婦がやるんでしうね？」

「え？——」

「イヤ、浣腸をです——」

「アア、そりやそうですよ。そんなことで一々医者が来やしません。ここは回診だってロクにないんですから」

「この部屋でやるんでしょうナ」

「そりやアそうですネ」

「かないませんア……」

彼がそう云ったのも無理はない。私達のいる部屋は、四十台のベッドがズラリと並んでいる大部屋なのだ。いわば衆人環視の中で浣腸されるのだから、これでは誰だって辟易する。

私は、はやる胸を抑えて、さらに声を低めると、

「どうですか。よかったら、僕がしてあげてもいいですよ。誰にも知れないようにね」

「え？貴方がですか？！……」

Kは驚いて、私の顔を覗めた。

「大丈夫です。僕には経験がありますから。」

それに僕がするのだったら、恥かしくなくていいでしょう」

「それはそうですが、でも、悪いなア。そんなことをしてもらっちゃア……」

「僕はいんですよ。医者が志望だったくらいだから、注射とか浣腸なんかが、好きなんです。退屈してたときだしネ、やらしてもらえたら、僕もありがたいんですよ。じゃア、今夜脱糞（無断外出のこと）して、浣腸器や何んか買って来ましょう」

半ば一方的にきめてしまうと、その夜、私は胸を躍らせながら、病舎をぬけだし、薬局へと急いだのである。

三〇〇〇の浣腸器と、グリセリンを二〇〇〇CCばかりわけてもらって帰って来ると、グリセリンを別の壇に移して倍に薄めてから、Kを促して、倉庫へ連れ込んだ。

倉庫と呼ばれているその部屋は、便所の隣にあつて、色々の備品がしまつてある、物置といったほうが相応しいような処であつた。

鍵は毀れたままだが、立入禁止になっているから、人のはいって来る気づかいはないし、看護婦などもめつたにははいらない。人知れず浣腸をするのには、まあまあ恰好の場所なのである。

「サア、お尻を出してください。寝てやれば

一番いいんだが、ここじやそうはいかない。

しかたないから、四ノ這いでやりましょう」

私は舌舐めずりをするように云いながら、浣腸器へグリセリンを吸いあげた。

Kはさすがに具合悪そうにして、パンツを脱ぐと、寝巻に重ねたセルの着物を捲つた。

私は、小型の懐中電燈を適当な位置に置くと、ゴクリと唾を飲み込んだ。

円い光芒の中で、固肉のKの腎筋がピクピクと痙攣する。

たつぷり三〇〇CCを、二本注入し終ると、そのあとをチリ紙で押さえ、すぐにも便所へいきたそうにするKをおしとどめて、私はゆっくりと云つた。

「充分に薬がいきわたるまで待たないとね、液ばかり出て、肝心の排便がうまくいかないんですよ。僕がいいと云うまで、我慢するんですよ。もう少し、もう少し——」

ハアハアと喘ぎながら、便意を憶えていたKは、

「サア、いいです」と私が云うなり、真剣な顔をして、便所へ突進した。

少し遅れて、私が大便所の戸の外に立つと中から爽快なKの排泄音が響いてきた。

翌朝の検温のとき、Kは明快な口調で、「便通一回」と報告した。

その後で私達は顔を見合し、二人だけに通じる微笑を交した。こうしてKと私は、誰よりも親しい友人となったのである。

その晩も、私達は、ソツと人眼を忍んで、倉庫に潜り込んだ。

今日は三〇CCだけでもいいとは思ったが、それではものたりない気がしたので、私はやっぱり昨夜と同じように二回注入した。そして、Kが便所へいくのでパンツを穿いた頃になって、外で人声が生じた。 (まずいな) と思って、戸の隙間から覗いてみると、運悪くすぐ前の廊下で、夜勤の看護婦が立話をしているのだ。

「いけない! 看護婦だ。いま出ちやまずい。Kさん。もう少し辛抱してください」

私が囁くと、Kは



泣きそうな顔になった。

「ええッ! も、もう我慢できませんよ」

「しかし、見つかったら、まずいことになる! 頼むから我慢してくださいよ。ナニ、すぐいきますよ」

「そんな、そんなことを云ったって、君

! 無茶だよ!」

「シッ! 静かに」

私も気が気ではなかったが、Kの苦しみは大変なものであったろう。広い額に脂汗がベツトリと浮き、眼には涙さえ滲んでいた。

「Kさん。しかたがない。ここでしちやいなさい。コンクリの床だから、後で仕末すればいい。ね、そうしなさい」

「でも、まずいよ。ま、まだ、いるのかい?」

「チキシヨ! まだいやアがる。いいからKさん。ここで—」

「だ、だって—ア、アア、……」

ついにたまりかねたKが、あわててしやがもうとしたが、ときすでに遅く、パンツを脱らぬうちに、脱糞してしまったのである。

「君。とうとうやっちゃったよ。アア、ひでエことになったもんだ……」

Kの泣き笑いの顔を見ると、気の毒にもなったが、それよりも、汚物の仕末を手伝いながらも、酩酊に引きずり込んでいくような昂奮から、私は、逃れることができなかったのである。

## 林

七月になって、暑い日が続いた。

それが慣例で、夕食後に入所患者の紹介があったが、中肉中背で血色のいい、その男は特別に私の注意をひきはしなかった。Eという名前さえ、すぐに忘れてしまっていたくらいである。

だから、二、三日して、Eが巡査であることが耳にはいったときは、正直に云って、顔の色の変る思いであった。急に胸がドキドキと騒ぎだして、自分でもおちつきを失ってしまったのがよく判った。

Eのベッドは、私の処からは随分離れていた。それで、あれ以来ほとんど顔を見ていない。私は、その近くにいる古参の患者に用のある振りをして、それとなく彼のベッドのそばを



通った。第二病棟は木造病舎で、風通しがきわめて悪いから、大抵の患者は、丸首シャツにステテコといった半裸姿で、寝巻や浴衣を着ている者は、素肌へじかに着て、腕や脛を捲っている。仰向けに寝ていたEも、掛布団はとって、浴衣の裾を捲りあげ、毛脛をつきだして週刊誌を読んでいたが、私が通ったとき、ちょうど寝返りをうったので、そのひょうしに、腿のほうまで脚が見え、チラと越中禪らしいものがのぞいた。

私が思わず立止ると、その気配で彼は眼をあげ目礼した。私は、いかにも先輩らしく、鷹揚にベッドの端へ腰をかけると、微笑しながら声をかけた。

「大変でしょう。まだ馴れないから——」

Eはあわてたように急いで起き直ったが、今度はハッキリと越中禪が見えた。

私が、Eに異常な関心を持ちはじめたのは、云うまでもない。それは、彼が警察官であるという、たった一つの理由からである。噂言にまで云った、巡査の裸体を見るチャンスが、眼の前にぶら下っているのだと思うと私は、ほくそ笑まずにはいられなかった。

大体入所患者は、病状の如何を問わず、最初の二、三週間は、入浴が許可にならない。その間は看護婦に清拭をしてもらうのだが、週に一回ぐらいしか番が回ってこないから、殊に夏期などは不潔になりやすい。私は清拭

場が空いているときに、コッソリ行水するのであることを教えて、喜ぶEを清拭場へ連れていった。

Eは早速浴衣を脱ぐと、無造作に禪を脱ぎ捨てた。

「石鹸もつかうといいよ。湯はいくらでもあ

るんだから——」  
ステテコ姿の私は、自分の心を相手に知られぬように気をくぼりながら、湯に濡れて艶々と輝く男の肌を、息をつめて眺めた。

（ああ、これが巡査の裸体なのだ！ 私はついに見たのだ。一糸纏わぬ警官の肉体を、いま見ているのだ！……）

私は、何度か心の中でそう叫びながら、あくなき視線の答をEの裸身に浴びせ続けた。

何も知らないEは、軀を拭き終ると、私のほうを向いてニッコリし、

「ああ、おかげでいい気持ちになった……」

と云って、体操のまねのように手足を動かしている。

私は、前に、秘虐という言葉を用いたことがあるが、Eが警察官である故に、そのときの私は、秘かなる加虐に酔ったのである。

Kとの浣腸による交際は、その後もずっと続けられていたが、倉庫の中は暑苦しいし、飽きてもきたので、私は、多少人目にふれる危険はあっても、戸外でやったらと思ひ、K

に云ってみた。最初のうち尻ごみしていたKも、結局は私の意見にしぶしぶながら従うことになった。

私の選んだのは、解剖室の裏側にある林の中であつた。そこは、アベックもめつたに出来ない場所であつたし、いざという場合には、身を隠すにも都合がいい。

「Kさん。今夜は、なんでも僕の云うとおりにしてくれませんか？」

林の真ん中あたりで立止ると、私はそう云って、Kをふりかえった。

「うん。そりやア、もうここまで来てしまったんだ。いまさら君に逆しても仕方ないサ。御意の召すままだヨ」

「フフ、Kさん、大分——」

「なんだい？」

「いいえ、なんでも——」

（マゾ的になりましたネ）と云おうとして、やめてしまうと、私は、ただ、いたずらっぽく笑いながら、繁みをゴソゴソいわせて、ビニールの包みをひっぱり出した。昼間のうちに売店で買って隠しておいた、荷造り用の麻縄である。

Kは不審そうに顔を近づけると、

「なんだい、それ？」

「縄ですよ」

「ナワ？」

「エエ、荷造りしたり、人間を縛ったりする

「オイオイ——」

「なんでも、僕の云うとおりになる筈でしよう」

「ソ、それはそうだ。ヨシ、俺も覚悟をきめたよ。何をされるか知らないが……」

「フフ、そうこなくっちゃね。サア、では着物を脱いでもらいましようかネ」

「ハイハイ……」

私は、Kの両足首に縄を巻き、股をできるだけ開くようにして、木の幹に吊り上げ、しっかりと括りつけた。勿論、頭や肩は地面についているが、彼は大げさな悲鳴をあげた。

「ワッ！ これじゃ、まるで何かの刑罰みたいじゃないか。これで浣腸されるのかい？ ダ、大丈夫だろうね。浣腸がすんだら、すぐ縄を解いてくれよ」

私は、かまわず浣腸器を突き立てると、いつもより一回多く浣腸した。一〇〇CC近いグリセリン液が、注入されたわけである。

「Nさん、早く！ 何をしてるんだ。解いてくれ、早く、早くッ……」

Kの必死になって急ぎたてる声を聞きながら、しかし、私は縄に手をかけようとしなかった。

「Nさんッ！ どうしたんだ。早くしてくれ。もう我慢できン！ 早くッ」

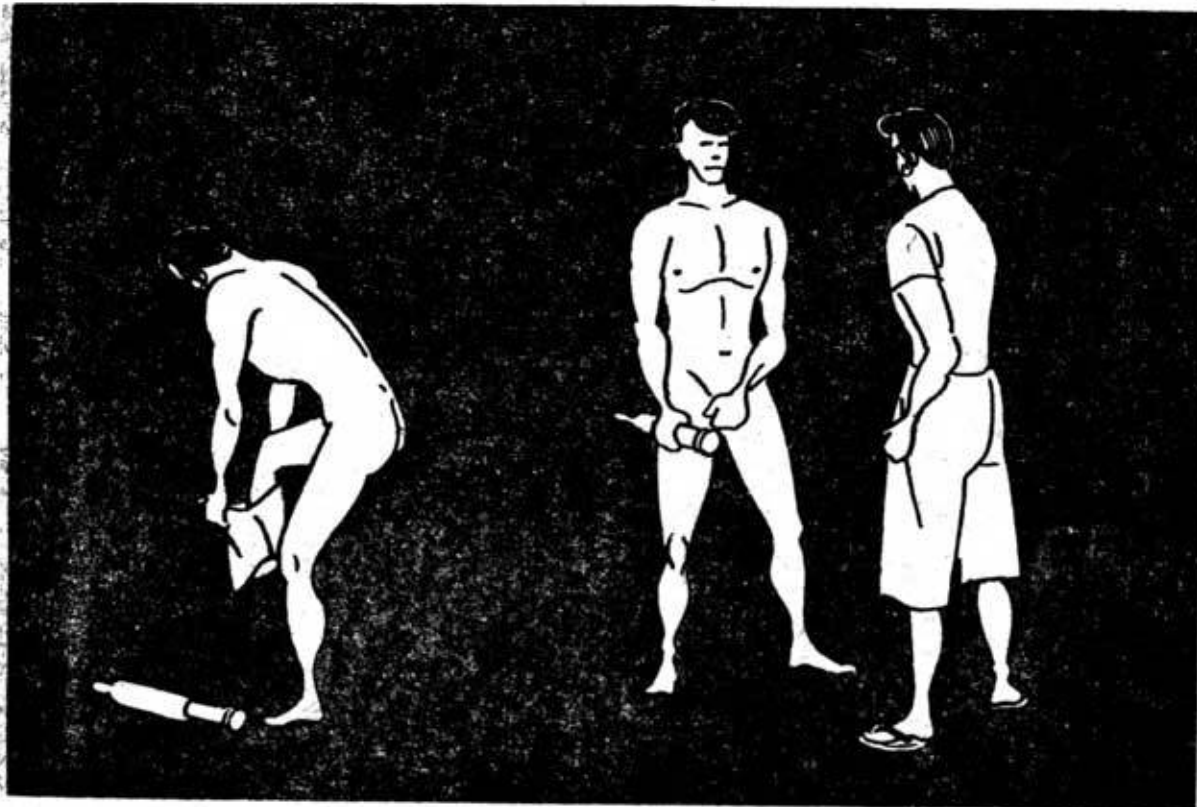
焦れて叫ぶKの声は次第に高くなる。誰か

に聞かれてはまずい。私は、やむなくKの口に猿轡をかませた。

Kは恨めしげに私を睨むと、全身を波うたせて、便意と斗っていたが、それも長くは続かず、急に奇妙な音がしたかと思うと、異臭が私の鼻腔に快くとび込んできた。

一方、私の退所も近づきつつあった。私は最後の思ひ出にと、ある晩Kを誘って脱糞し簡易旅館に上がった。その帰るさにもう一本の浣腸器をもとめたのである。

翌日、夜になるのを待ちかねて、私とKは二本の浣腸器を携え、例の林へいった。そこで二本の浣腸器へグリセリンを入れると、その一本をKにわたし、下草の上に仰向けに寝かせようとし



たときである。樹間に、チラと白い人影が動くのを認めた私は、

「待った！ 誰か来る——」と、低い声でいい素早く立ちあがった。

人影は、ゆっくりと近づいて来る。白く見えるのは、シャツにステテコであることが判ってきた。

「Eさんか——？」

私は、何がなしにそんな気がして、声をかけてみた。

「そう。オレだよ」

その声は、果してEであった。

Kはあわてて寝巻をひっかけると、

「悪いが先に帰ってるよ。君、うまくやっといてくれ」

と云って躓き乍ら反対側へ駆けていった。

「誰だい？ いまの——」

Eが煙草をもみ消して云った。

「ウン、マア、誰でもいいサ。しかし、女じゃないぜ」



「何してたんだ？ あンた、真ッ裸じゃアないか。パンツ穿いてないのか……」

「いま穿くよ——煙草、持ってる？」

「アア、ソラ」

「まア、腰でもおろせよ。ところで、あンた、やっぱり職業柄だね。尾行して来たのか——？」

「イヤ、Nさんの姿を見かけたンで、どこへいくのかと思って、来てみただけサ」

「じゃ尾行じやないか。まアいい、そんなことアな——ところで、Eさん。あンた娑婆じや、いつも手錠もってたんだろ」

「ウン……」

「それ使ったことあるかい？」

「いや、まだないんだ」

「そう、しかし、これから先、使わなければならぬときがあると思うがね。人権のやかましい時代だ。警察官として、手錠をかけられた人間の気持がどんなものか、一度は経験しておくことも、大切だと思うね」

「そうかナ——でも、どうしていま急にそんなこと——」

急にそんなことを云い出したのには、わけがある。そのとき、私の手には浣腸器があった。私の脳には、まもなく手術を受けるEが看護婦から浣腸される連想が浮かんだのである。私は看護婦に嫉妬を感じた。Eは、結核になるまで病気をしたことがないと云うか

ら、浣腸の経験もないに違いない。警官へ、一番最初に浣腸をする看護婦に、憎悪の感情すら私は覚えた。私はそれに耐えられない気がした。考えると脳がカッとしてきて、もう何かなんでも、看護婦より先に、この私の手で、彼に浣腸してやらねば、気がおさまらなくなつたのである。気違いじみているかもしれない。しかし、これは、私の真実の告白なのだ。

「ここに手錠はないが、この手拭がその代りだ。これで、あンたの手を、こうやって縛る——ホラ、どんな気持がする？……」

「どんなって……あンまりいい気持はしないナ」

「そうだろう。それが屈辱感というものだ——」

私はうわのそらで云つたが、單に手を前で括つただけでは不安であつた。見回すと、すぐ裸になれるよう浴衣を着て来ていたので、帯が解いてあつた。私はそれを拾うと、Eの手首の結目に通し、その端を近くの幹に括りつけた。

「Nさん。もう判つたよ。そんなに、木にまで縛らなくてもサ」

まだ何も気づいていないEは、木の根元に腰を据えたまま、ボサツとした声で云う。

「うん。まだもう一つ、経験させてやるものがあるんだ」

「ええ？ なんだい——気味が悪いな……」

「浣腸さ」

「カンチヨウ？」

さすがに驚いたのだろう。Eはとびあがり、そうなる声を出した。

「ワアッ。勘弁してくれ！ オレ、浣腸なんてしたことないんだ……」

足をバタバタやって暴れていたEは、越中禪を脱ぎされると、どうしたのか大人しくなつてしまった。

朝になると、私は一人でソツと林へいった。そして昨夜の場所にかがむと、Eの排泄物に指を触れながら、なんともいえぬ満足感に、しばしば浸つたのである。

私は、八月に退所した。

(完)

### 三条春彦画

### 未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十円(送共)

- 一、女スリと岡引き、二、八百屋お七
- 三、淀君と千姫、四、小紫と悪旗本連
- 五、犬公方と侍女、六、新選組と芸妓
- 七、山法師と静御前、八、十郎左衛門と腰元。(以上八枚一組)

# 悦虐クラブ

## 陽春例会報告

泉 かよ子

編集長様

よい気候になりました。ごきげんよろしく御過しのことゝ存じます。

これまでお便り差上げました私共の集りも、その後順調に毎月続いて居ります。真面目な社会生活を営む紳士淑女のささやかな秘めたる愉しみであります。男性は女性を縛るたのしみ、女性は男性に縛られる喜び、それを主題とした遊びごとで普通の人が抑制している欲望を満たして健康な生活弁?としています。そして病的なサド・マゾに陥らぬように様々の注意が定められています。

○



am.k



陽春三月の土曜日の午後、会場に集りました。

例によって仮面をつけるわけですが、今日は仮面の代りに大型のサングラスを渡されました。それから全員がお揃いの制服に着換えしました。

紳士達は白のトレーニングズボン、白の運動靴のいでたちです。婦人は之も白の半袖ブラウスに白のテニス用短スカート、白いソックスに、白のブラットシューズという軽装であります。

爽やかな陽の光を浴びつゝ、緑に囲まれたテラスで卓を囲み、お茶をいたゞきました。これまでの着飾った夜会に比べて、今日は珍らしく新鮮な感じで出席者一同、此の趣向のすばらしいことをほめました。

申しおくれました。出席者の仮名を記しますと、紳士のシャツの胸には頭文字が一字ずつ、R・S・T・U・V・W・X・Y・Zとあつて九名であります。婦人もブラウスの胸にJ・K・Lの文字を一字宛つけています。男女各一名欠席のようです。

R氏とS氏が、最近の外国雑誌を持参して皆で回覧しました。アメリカとフランスの写真雑誌ですが、素晴らしい肉体の女優さん？が下着姿で、様々な姿態で緊縛されているポーズが載っています。大きく張った胸、極度に細くくびれた腰、長い足。若し私がこんな身体だったら、何と素晴らしいことでしょう。でもこれは、どういう女優さんなのでしょう？

「こんな姿を見たら、私達の貧弱な身体は興ざめでしょうねえ」何気なく漏らした女性の嘆声でしようが、それをきくとR・S両氏はあわてゝ奪うようにして、その雑誌を取りあげてしまったので一同啞然とし、それから大笑いしました。

「イイエ、どういたしまして、外国婦人は写真では綺麗ですが、実物はウブ毛が生えていて、それ程美しくはないのです。貴女方のお美しい姿を見せていたゞく私共は光栄です」

T氏が、とってつけたように弁解したので一同また大笑いです。「まあイヤらしい。Tさま、レディに向つて失礼よ」

「どうも、これはこれは……矢張り昼間はいいけませんな、本当に今日はよいお天気で。」

とほけた返事に、また笑いがわきます。屋外の集いは明朗です。それからR氏の、御宅で雑誌の蔵い場所に苦勞するという話に、紳士方が共鳴されました。皆様それぞれ秘蔵していらつしやる様子です。本当に男性は、まじめくさつたお顔をしていらつしやうて、油断できませんわね。

ひとしきり歓談の後、司会者W氏からアンケートが配られました。

- 第一問 この集りはあなたの生活にプラスになりますか？
- 第二問 開催回数は何回がよい？
- 第三問 時間は何時がよい？
- 第四問 人数は男女各何名がよい？
- 第五問 演技はどの程度がよい？
- 第六問 現在の禁忌条項はこれでよい？
- 第七問 これまでの集りでどれが最も楽しかったか？
- 第八問 どんな演技を希望しますか？
- 第九問 会場はどこがよい？
- 第十問 其他の希望なり御意見を御記し下さい。

一同鉛筆を握つて考え初めました。学校の試験のようで、立派な紳士方が真面目になつて考えたり、記入したりしている姿は一寸エーモラスであります。アンケートの結果は、すぐ集計され発表されました。御参考までに記します。

## 第一問

- ①生活にプラスになる
- ②プラスもマイナスもなし
- ③マイナスが大したことではない
- ④マイナス 止めたいが止められない
- ⑤マイナス 機会をみてやめる
- ⑥其 他

〇〇一二六三

止めたいが止められないという方は次回から通知をあげるなどの意見ができました。ところで一体誰なのかと詮索しましたところ三名も僕だと名乗ったので驚きました。

「止めたいが止められないのは煙草と同じさ」

「晩酌と同じさ。適量にやれば薬、度を過せば害になる。」

「それじゃ妾達はお酒ですの？」

「そうです。貴女はスコッチウイスキー醸造五十年」T氏

「まあ私、そんな年寄ではなくてよ。」

「オヤオヤ、ほめたつもりですが、また失敗」

第二問

①月一回がよい

②月二回

③週一回

一一〇

「週一回を希望する勉強家は誰だね。」

「僕さ」

先刻「止めたい」と名乗ったうちの一人、V氏が答えたのでまた大笑いでした。

W氏が真顔でV氏に、

「会合の間が待切れなくて何か他のことをされますか？」  
「イエ、イエ、あの、その間は真面目に働いています。会のお蔭で家庭円満です。」  
先生に質問されてあわてた生徒のように答えたので、またく哄笑です。

第三問

(始) 午後一時がよい

三時

五時

六時

七時

(終) 午後八時がよい

九時

十時

六六一一五三二一

「会のあった夜は家庭円満さ」S氏

「そこらを飲み歩いているのに比べて遙かに健康的だよ」X氏

結局、今後は五時半集合、九時半閉会ときまりました。ときどきは今日のようなアフタヌーン・パーティーもするそうです。

第四問

男 一二名

一〇名

女 一〇名

六名

五名

四名

二七二一一一



男子は、これ以上増加するのを望まないようです。

「誰だ、婦人一〇名を希望するのは？ダンスでもするつもりかな。T君だろう。」

「いや僕じゃないよ。僕は現状で満足だ」

「うそをつけ」

「女一〇名は私よ」J子さん。

「だって、女が少くて淋しいんですもの。」

「婦人は今日のように欠席があるから、矢張りもう一、二名ほしいな。」

「婦人は条件が難しいから、容易に得られないな。新人紹介者には賞を出すか？」

「では、私にも賞品を下さいますわね」

「あゝそうだ。こんな素敵な人を紹介したのだから」私の隣に座っているY氏です。私こまってしまうました、イヤな方……。

#### 第五問

①演技はもつと激しくせよ

②現状でよい

③ゆるくせよ

「満場一致だね、コリヤ」 T氏

「今度はT氏、失言せずか」 S氏

「野党うるさい」 T氏

気を許しあつた男性同志の会話は本当に羨ましく思います。

#### 第六問

①禁忌条項をふやせ

②現状でよい

③ゆるくせよ

「ゆるくせよが一票か、何をゆるくするのかな。」 S氏

「そうだな、色々あるな、エート」 T氏

W氏が、いそいで「現状でよいが大多数でありますから、このまま続けます。その次。」……

#### 第七問

これまでのうち最も楽しかったことは、

①あらびあの奴隷市

②人工衛星の実験

③キング・コングの祭壇

④金閣寺

①、②は、私も参加した演技です。③、④は知りません。恐らく昔の映画キング・コングの筋書で、土人が美女を捕えて祭壇にくゝりつけて、キングコングに生贄として供える劇でしょう。また金閣寺は歌舞伎で雪姫が桜の根方に縛られる状況を真似たものと思います。あとでききましたら矢張りそうでした。

「Y氏のストーリーとZ氏の衣裳、小道具のお蔭です。」 W氏

#### 第八問

希望する演技

①ロマンチックなもの

②現代モード調

③歌舞伎、時代調

④中国風

⑤アラビアンナイト

- ⑤アメリカ・レビュー風 九  
 ⑥空想科学調 六  
 ⑦芝居がかりでなく静かに  
 遊びたい 一

これは幾通りにも答を出した人があって、結論づけるわけに参りません。それでも皆様の好みが大体わかります。改めて企画委員を三名選ぶことになりW氏、Y氏、Z氏が選ばれました。

#### 第九問

会場は、他に適当な場所が得難い。御迷惑でも引き続き此の邸を提供してほしいというのが一同の希望でした。

温泉地へ一泊旅行がしたいという意見もありましたが、気兼ねせずに演技のできるホテルがあるかということで行詰りました。矢張り他の方に覩見されたりすることは困ります。

#### 第十問

其他の希望意見

主なもの挙げますと

規律の励行を戒めるもの、W氏に感謝するもの、会費の増徴をす



すめるもの、婦人に対してもっと厚遇せよとの主張(男性より)、雑誌、写真を蒐集し文庫をつくれ、等でありました。予定時間がきまりましたので、これは企画委員に一任することにして、次のプログラムに移りました。

○



Y氏が説明します。

「今日はいつもの趣向を変えまして、ストーリーイはありません。皆様御一緒に、研究問題を考えていたゞきたいのであります。研究のテーマは、婦人を縛るその縛り方の分類整理であります。これまで何十回か婦人の手足を縛らせてもらいましたが、その種類は一体全部でどのくらいあるのか？これを分類整理してみたいのであります。婦人が三名、男子が九名でありますので、これを三班に分けますと、各班婦人一、男子三で四名宛となります。第一班は立姿が、どの位あるか研究します。柱に縛りつけるもの、たゞ縛っただけで立っているもの、その手のあり方、足の状況を詳しく分類整理して下さい。第二班は、座り姿と椅子にかけた姿を研究して下さい。第三班は、たゞ今の二つの班の縛り方のほかに、どんなポーズがあるかを研究して下さい。例えば、縛ってねかせる、物に跨らせる、其他種々あると思います。各班のテーマお判りですね。次は縛る道具ですが、これは布紐に限ります。外に鎖等色々ありますが、手足を縛る要領は同じであります。また眼かくし、猿轡も用いせん。これは基本的な縛り方に対して、眼かくしをする場合は、応用変化と考えるのであります。でありますから、縛られる婦人の服装もまた全部単一で、服装による変化は此の際、考慮に入れせん。最後に一言、蛇足でありますが、私共が平常、禁忌としている所の、苦痛を与えるような縛り方、肌を傷つけるような縛り方、又見苦しい、醜い形に婦人を縛ることは一切除いて下さい。個々の判断は各班で検討していただきます。では説明はこれ位にして班をきめます。」

抽籤の結果は、

第一班 立姿、J嬢、S氏、T氏、Z氏。

第二班 座り姿、椅子姿、L嬢、U氏、V氏、W氏。

第三班 その他の姿。K嬢、U氏、X氏、Y氏。

班長はZ氏、W氏、Y氏ときまりました。

「ひとつ／＼実際にレディを縛るのですか？」 T氏

「イイエそれでは時間がかかりますから、話あいだけですすめて下さい。但し、形の構想がつかみにくい場合には、各班の婦人に協力していただいて、ポーズを研究して下さい。では、只今から一時間とします。一時間たちましたら、結果をもちよって全体で協議します。」

テキパキと指示するY氏の説明を理解した一同は、屋内に入り夫、室の各隅に分れて班をつくりました。

第二班長W氏を囲んでU氏、V氏、L嬢が協議します。各人が思いつくまゝに様々のポーズを交々述べますと、W氏がそれを一つ残らずメモしました。

「もう何かありませんか。………それではこれから一応、簡単に実地をみてみましょう。L嬢、御苦労ですがモデルになっ下さい。Uサン、Vサンは演出をして下さい。………エエ其儘の服装で結構です。では、この紐を一本宛、L嬢の手首に巻いて下さい。いや片手に一本宛、そうです。………そうして手首を揃えと、縛った感じがでるでしょう。本当に縛ったり解いたりしていると時間がかかって間にあいませんから。」

基本が座り姿でありますので、低い台に毛布を敷いた上に靴をぬいで、ソックスだけでL嬢は正座します。若しハイヒールをはいたら、このようには座れないでしょう。でも紳士は、ハイヒールをはいた女を座らせるのが御好きです。

紐を巻きつけた手を前に組んだり、後に組んだり、上方にのぼしたり、左右に延ばしたり、W氏がよみあげるメモの通り、次々にポーズを変えます。U氏とV氏がこれを眺めて、良いポーズを選定します。

次に膝を縛ったり、足を揃えてのぼしたり、あぐらをかいしたり………このあぐらポーズは、ちよつと恥しい姿でありますので本選定

とせず保留分としてもらいました。

それから椅子に腰かけた姿です。これは案外恰好が悪くて、苦心しました。結局、三十種類のポーズがきまりました。

「ごくろう様でした、休憩しましょう。」

あちらでは、第一班と第三班が検討の最中です。J嬢は壁を背にして、大の字に立っています。両手首には、私の場合と同じく紐がまきつけてあります。S氏とT氏がさかんに議論をしているので、J嬢がくたびれてポーズを崩すと、すぐS氏がポーズをつけます。K嬢は、天井から下げた紐につかまって背延びしています。それを囲んで討論している紳士達。

各班の報告が出揃ったところで早目の夕食となりました。婦人達はすぐ食事をいただきますが、紳士方はチビリ／＼グラスをなめる方が多いございました。

夕食の後、全体の会議でY氏が議長となつてすゝめられました。第一班の予選五十五姿、第二班三十二姿、第三班四十三姿、合計百三十姿を、もういちど検討して百姿を選定します。

J嬢が、先程の要領で五十五のポーズを次々に演じ、先づ第一選抜三十二が決定しました。

L嬢が座り姿、椅子かけ姿、三十二のポーズをして、その中より第一選抜二十が決定しました。

K嬢が四十三ポーズの後、第一選抜二十が決定しました。合計七十二が決定したので、つゞいて残りの中から二十八を選びます。

疑問のあるものや、選別に迷うものは重ねてポーズを要求されまして、熱心な討議の末、遂に百のポーズを選抜決定しました。

第二班で保留になっていた、座りあぐら姿は三つも本採用になりました。その都度ポーズをさせられるのはL嬢であります。初めに申しましたように、テニス用のショーツスカートでありますから、あぐらをかきますと膝こそうが露出して恥しい姿となります。いっ

そスカートがなければ、却ってそれでもよいのですが……。恥じらいためらうL子に繰返し強要して、まじめくさって眺める男性達の意地悪……。

選定した百態は次の通りです。

#### 美女の緊縛百態解説

一、姿によって大別すれば、立姿、寝姿（仰臥、俯臥、横臥）、座り、腰掛、馬乗り、吊りの六態です。

二、壁・柱・寝台・椅子・木馬等に直接四肢を固定緊縛するものと、ある間隔をおいて繋いであるものと、何物にも繋がっていない自由姿と三種あります。自由姿といっても手又は手足を縛ってあることは勿論です。

三、手の縛り方は頭上で手首を一つにするもの（A）、両手を真直に上にあげるもの（B）、前縛り（C）、後手（D）、後手胸まで縛る（E）、両手を水平にのばすもの（F）、両手を上に広げる（G）の七型あります。

四、足の縛り方は両足を揃える、両足を揃え更に太ももも縛る、両足開くの三型の外に、足を縛らないものと合計四型です。

両足を揃え更に太ももを縛るのは両足揃えの応用であります。が、それぞれに独自の風趣があるので二つに区分しました。後手縛りと後手胸縛りを区分したのも同じ理由です。

五、姿、繋ぎ方、手、足の各型態を組合せて美女緊縛百態を選びました。特に美女とことわる理由は、若く美しい女性の容姿を觀賞するための縛り方であつて、男性を縛る場合や犯罪者を縛る場合とは目的が違うからであります。

六、私共の主義として女性に苦痛を与えたり、傷つけることを禁じていますので、そういう懸念のある縛り方は除きました。例えば逆はりつけ、逆吊り、海老責め等、被縛者を苦しめるものは採用しません。



吊り姿が七態ありますが、これを実際に演技する場合には、完全な宙吊りをせず足下に目立たぬように足をのせる台を設けて爪先で立たせます。

最後のA三十二番の四肢吊下げは、全くのお愛嬌で実演はいたしません。

七、ことさらに足だけを開かせる不自然な縛り方や鼻・耳を吊ったりするポーズも採用しません。この辺に私共の遊びの限界があるわけです。

八、猿轡、眼隠し、首・胸・胴・腰・上膊部等の縛りを附加しますと、基本の百態は数百数千の応用変化が生じます。更に又、縛る道具のバラエティ、婦人の服装の変化によりまして、興味津々尽きるところを知らないでしょう。

(Y生記)

△編集部註△添布の図解は都合により省略しました。

○

紳士達が百態図の分類整理を始めると三人の婦人達は休憩室へ退きました。暫くしてW氏が退いたが誰も気にとめませんでした。

それから一刻たって百態図が完成して一同が雑談しているとき、W氏が入ってきて告げました。

「皆様御苦勞様でした。只今より御疲れ直しに、奥室で美しいものを御覧に入れます。尚、その際にクイズをさしあげますから、先程の鉛筆を御もち下さい。」

紳士達は何事かとあやしみ乍ら、奥室に導かれます。カーテンが奥室を二分しています。カーテンに向けて、ライトが二基据えてあります。

「皆様、カーテンの中に何があるか御想像がついたでしょう。さあ、それは只今選定の百態の中の何でしょうか、あてて下さい。時間は五分間で切ります。適中者には素晴らしい景品をさしあげます。」

「百態では範囲が広すぎます、ヒントを下さい。」 S氏

「そうだヒント、ヒント。」

T氏

「では、ヒントを差上げましょう。自由型です。ひとつだけ記入して下さい、ひとつだけです。」

「では皆さん解答が全部すみしましたか。ではXさんYさんライトを願います。Zさんカーテンを引いて下さい。」

カーテンが引かれました。

二台のライトが燦然と光芒を出します。

正面台上に三人の婦人が、お揃いの薄い繊細な下着姿で、真白いブラジャー、パンティをびっちり肌につけ、腰に締めた細いガーターベルトが肌色のストッキングを吊っています。華奢な形のよいハイヒール……。サングラスは恒例の金色仮面に変っています。

J嬢は両手を拡げてふくよかな胸をおさえています。その手首は銀色の鎖で一つに縛られています。すうりとした形のよい片足を、軽く後へ引いた立姿の美しいこと！ 8C型であります。

K嬢は、J嬢の足下に横たわっています。これも同じく両手首を前に揃えて、銀鎖で縛られています。豊かな胸の隆起が、ブラジャーを裂くかと思われまします。恥しげに重ねて少し折り曲げた、膝のあたりの線の柔かさ！ 同性でも惚れ惚れします。17番C型です。

そしてL嬢は26番C型で、小さな椅子に腰かけて、両膝をぴたり足先まで揃えて、鎖で縛られた両手で、肩をかき抱くようにしています。

乙女の柔肌を、灼き焦すかと疑うばかりのライトの照射！ 紳士達から、思わず漏れる溜息がきこえます。

「おまちどうさまでした。如何ですか。どなたが正解でしょうか……」

……立姿前縛り、自由……T氏ですね」

「パンザイ、ハハハハ。」T氏の歓声。

「これはダメ、これも外に……腰かけ自由前手……S氏。」

「どうだい。ハハハ」嬉しそうなS氏の声。

結局、J嬢の姿を  
T氏。K嬢をU氏、  
V氏。L嬢をS氏と  
U氏が云いあてまし  
た。

「賞品は何ですか。  
この麗人を、くれま  
すか？」

「いや、この御婦人  
方を差上げるわけに  
はゆきません。適中  
の方に賞として、こ  
こで麗人達を、私の  
指定するポーズに縛  
りかえていただきま  
す。外れた方は御見  
物下さい。」

「ブラボオ、僕はJ  
嬢ですな。」T氏

「では御婦人方、下  
りて休憩して下さい

あ、K嬢はそのまま……。K嬢の姿を適中したV氏とU氏どうぞ  
……。お二人でK嬢を起して縛り直して下さい。指定する型は1G  
型です。どうぞ。」

拍手のうちにU氏とV氏が進み出て台に登り、K嬢を助け起こし  
ます。そのはずみに、手の銀鎖が解けました。もとく三人共、各  
自が手首に巻きつけていたので、本縛りではないからです。

K嬢は両手をとられて、二、三步後退し、されるがまゝに両手を



もなく動かします。

「これをつけて下さい」

U氏が受取ったのは金色鎖ののネックレース、V氏が受取ったの  
は革に鉄の尾錠のついた仏蘭西式猿轡です。

ネックレースを嵌め、猿轡を喰まされると、K嬢は三度下半身で  
もだえました。

「次はJ嬢、T氏どうぞ」

高く上げました。二  
人の紳士は背のびし  
て、その手首を横梁  
に銀鎖で固定しま  
す。今度は勿論、本  
縛りです。K嬢が少  
し腰をよじらせま  
す。痛いのでしう。  
「鎖は錠をかけて下  
さい」

まあ鎖をかけるの  
ですって！ 私はJ  
嬢と顔を見合せまし  
た。  
U氏とV氏はそれ  
ぞれ錠を受取って鎖  
を固定しました。錠  
は鎖から垂れ下りま  
す。もういちどK嬢  
が下半身をよじらせ  
て、形のよい足をあ



T氏に介添されてJ嬢は台に登ります。

「J嬢を2F型に縛って下さい。」

T氏の大活躍が始まりました。J嬢をK嬢の右隣に導き、柱の前に直立させると、先ず華奢な靴をピタリ揃えさせて、足首を銀鎖でぐるぐると柱に縛りつけました。J嬢は不安定な形になって、思わず片手をT氏のかがんだ背中にあてて支えます。こんな縛り方であるでしょうか？ T氏が二本目の鎖をとり足もとを離れますと、J嬢は安定がとれず手を背にまわして柱をつかまえて、辛うじて立っています。恥しさに仮面の下の顔はもとより、首筋まで真赧になっています。かわいそうなJ子。

ひどいTさん。次は手を縛るかと思うと、そうではなくて太ももです。Jさんの豊かな太もも、ストッキングの端がガーターベルトに吊られて山形になって肌に接しているあたり、肌も靴下も見さかなく銀鎖が喰込んで、二重に柱もろとも締めつけます。

最後にやっと手です。水平に延ばした右手の手首が、横梁に銀鎖で固定される間、自由の左手は右肩のあたりを覆っていました。それもつかの間のこと、直ぐ反対側に引かれて……。

手足の鎖の縛り目に都合四箇の錠をかけられる間、J嬢はただ首を左右に弱々しく振るだけでした。四肢はすっかり固定されました。

「猿轡を下さい。」

大声で叫んで受取ると、J嬢の顔の前に猿轡をひろげてつきつけます。「これから喰ませてやるぞ！」と云うように。

J嬢は、また弱々しく首を振ると、右に捻じあげました。拒否の横顔です。

T氏はJ嬢の右側にまわって、また猿轡をつきつけます。左をむくJ嬢。

散々いじめた末に、J嬢の可愛らしい口を押しあけ、むごい猿轡がかつちりと喰まされました。

最後はL嬢——私の番です。

S氏とU氏に左右の手をとられて、台に上られます。W氏が、前同様にポーズを指示したのでしようが、耳がカーツとなって聞きとれませんでした。

U氏が後手にねじあげます。そのまゝ縛られるのかと思っていまずと、そうではなくて、口をこじあけて猿轡を喰まされました。「アアアウ」口中に押込まれるゴムの感触！ この猿轡は、私達めいめいひとつ宛専用用品が用意されており、使用前に消毒してセロハンで包んであります。S氏が銀鎖をもって近寄ります。思わず目をつぶります。後手にまわした手首に冷たい金属の感触！ ああ嬉しい。矢張り私の好きな後手縛りです。

あ！ 二の腕からブラジャーの上にかけて鎖が！、二重にお乳を上下から夾みます……もつと強く締めて下さってもいいのよ。イエエ、そんなこと恥しくて云えません。それにまた、本当に猿轡を喰まされていますもの。

それからV氏に縄尻をとられて、台の上をソロソロ歩きます。三時もあるハイヒールの危かしいこと、S氏が、二の腕と胸の間の僅かな鎖のすき間に指をさし込んで、支えて歩かせて下さいます。腋の下に汗がにじんでいます。S氏の指に汗が触れわせぬかと心配で一パイです。

J嬢とK嬢の固定されている、その間に立たされてから先は夢中でありました。錠をかけられたかどうかともわかりません。両足首を鎖で締めつけられたのと、首に鎖のネックレスを嵌められたときだけ覚えています。

三人の若い女は、こうして半裸の下着姿でそれぞれの形で曝ものとされ、むざんにも九人の異性に心ゆくまで観賞されたのであります。

一時間も縛られているかと感じましたが、実際は最後に私が縛ら

れてから、十五分間だそうでした。

解放するとき、鍵を男性に分配しましたので、鍵穴をあわせるのにまた一騒ぎの遊びがあつて、やがて漸く自由の身となりました。

お化粧を直して服装をととのえ、連立って邸を出たのは八時過ぎでありました。昂奮にほてった頬に早春の夜風が気持よく、J嬢も私も自動車家が家に着くまで黙っていました。

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

それ以上のことを云うと、何かが漏れて失われるような気がしました。感激をひとかけもこぼすまいとするように、黙って家の戸を押しあけました。

Jさんもきつと同じ気持だったでしょう。

では、これで筆をおきます。またこの次に、おたよりします。

さようなら。

## 切腹風土記

壬生三郎

### 介錯

チヨンと斬るとボンと飛ぶ介錯を問題にしない切腹マニアは、自分で切りたいが人から斬られたくはないからだろう。

介錯には須田、寄田、伊勢、小笠原その他の流儀があつて、専ら斬り方を研究していた。たかが首をチヨン斬るくらいと簡単に思うが、さにあらずで、心得のないものは失敗している。堺事件のときもさんざんだった。普通の斬首でも高橋お伝などでは失敗している。

介錯にはチャンスがあつて、多くの本には腹切刀を取ろうとする時、左の下腹を見たとき、突込んだときの三つを挙げているが、もっと詳しく九つのチャンスを挙げた伝書もある。

どうしても斬れぬときは咽喉を掻切ったり背から刺通す場合もある。

中にはいざとなつて逃出したり、隙をうか

### 凄絶な切り方

一文字、二文字、すだれ腹、十文字など名前前のついたさまざまな切り方があるが、これはまた名のつけようのない凄絶極りなき切り方をしたのがたった一例ある。

文安ごろ和田と二階堂の両家が戦ったときに多珂八郎という武士が三尺余の太刀を刃を前にむけて左の脇から右の脇へ一気に突通しわれとわが身を串ざしにした上、左手を柄に、右手を突ぬけた刃先にかけ、気合もろとも前方へ太刀を押したので、腹は上下真二つに裂け、腸はどつとあふれ出した。

藤葉栄衰記に出ている話である。

腹はいくら長く切ったからといっても限界がある。私の調査では三〇センチが男四九三人中三人、女八三人中一人、記録保持は三六センチ切った女一人である。もっともこの女は妊娠中で腹が大きかった。

切り方だつて限界があり、背中へ芋刺しにした十九の娘やUの字形に切つて弁を作った堺事件の土佐藩士などの異例もあるが、普段から新発明の切り方に没頭しているやつもないし、とっさの場合に新形が浮ぶはずがないのは当然だ。切腹マニアの方のコンクールでもやったら、とんだ面白い腹切デザインが現ることだろう。



がって手向い、介錯人の力を奪って暴れるものもあるから油断がならぬ。

切腹人の姿勢が悪くてあごを強く引いていると首をはねたとたんにあごを斬ってしまうことがあり、爪立ちしていると首を斬られて立上ってしまうこともある。伝書を調べるとなるほどと思われるような細かい注意が行届いているのに驚く。

## 委託切腹

頼んで腹を切って貰ったというと、外科医はなんだ詰らないと思うが、心中で合意の上、相手に自分の腹を突かせたとなるとKK愛読者は目をかがやかせるに違いない。

例えば明治三十六年三月十一日横浜で夫婦心中を図り、夫(三七才)は菜切庖丁で内縁の妻(二八才)の臍下三寸の所を長さ四寸その他二カ所斬り、自分も腹部を三四寸ずつ三カ所と咽喉を切った。

かかる例は相当に多く拾い出すことが出来る。合意の上なら自殺幫助、無理心中なら殺人になる。

昭和十四年十月四日朝、東京で魚屋の雇人(二五才)が「突然商売用の出刃庖丁で主人の妹(二四才)の下腹部を突き刺し、瀕死の重傷を負わせ、自分も腹部をかき切って絶命」(読売新聞) ような無理心中は掃いて捨てる

ほど多くの例がある。

合意で人目をひいたのは昭和十三年七月十五日東京の旅館で牧師(二七才)と派出婦(三五才)が

「布で目隠しをし、細紐とネクタイとで互いに首をしめた上、西洋かみそりで男は女の、女は男の下腹部をえぐってグロ心中を遂げた」

(報知新聞)

東京日々新聞は「心中お定型」の見出しをつけている。

その時の女の切腹創は、脱衣して水平真一文字に十八センチ、臍を通過しており出血多量、腹膜を破って小腸は殆ど全部脱出、腸管の一部は切創を受けていた。

女は奇蹟的に助かり、男は死亡した。

## 入学試験問題に

### 切腹の仕方

入学試験に腹の切り方という問題が出たとしたらまず誰でも胆をつぶし、予備校には奇クのそうそうたる切腹マニア諸兄姉が引張りだこで講師に招かれ、実演、実技演習ということになりそうだが、この話は本当にあったことで、時は明治三年、大阪の幼年学校の試験問題である。

試験官は山田顕義、曾根荒助、受験者は当時十三才の本庄道三であった。この人は本庄

將軍となり戦争中大いに活躍したことは記憶に残っている人も多かるう。

本庄道三が見事これに答えることが出来たのは母から教っていたからである。

この話で、昔は母が我子に教えたことがわかるが、その母には誰が教えたかがわからないので残念である。

本誌に瀬川泰子氏が稀書婚姻之儀という文字通りの奇書を紹介されたが、それは結婚当夜花嫁が花婿の面前で切腹して見せるという儀式的習俗があったことを示している。

もちろん死んでしまったては困るから、わずかに皮膚表面を傷けて少量の出血を見せればよいのだが、とにかく初耳である。婚姻史にくわしい中山太郎氏とはすぐ向い合いの家に住んでいて懇意だったが、中山氏も亡って尋ねようがない。

江戸時代に武士が切腹の稽古をした例証は若干あるが、果して花嫁が実演して、やがて生れる子供に伝授したものであろうか、先輩の御垂教を乞う。

### 〔伝言板〕

久留木栄氏の「美容病院」は原稿の到着がおくれましたので本号に間に合いませんでした。次号に掲載いたします。

女体切腹  
の創作

夕<sup>ゆう</sup>陽<sup>ひ</sup>に散<sup>ち</sup>る華<sup>はな</sup>

(前篇)

藤 山 秀 緒

悲しい宿命

時は満洲事変当時。

処は関東軍の参謀長の室。

重苦しい沈黙が部屋を包み、向かいあつて坐っている二人の人。

一人は参謀長井上喜久蔵、そして一人は馬賊の女頭領李麗輝こと牧田美千代です。

「牧田君。君が、父君源八郎氏の遺志をついで、軍に協力してくれて来た事に深く感謝する。軍が、手を下さずに、注意人物を処理することが出来たのは君の武力があつたからこそだ。しかも君は満人の怨みと敵意を一身に負い、軍のためにたえがたい恥辱をしのんでくれた。御礼の申しようもない。——その君

に、こんな事を、いまさら云えた義理ではないのだが……。実は、満洲が独立する。その礎となつて貰いたいのだ。」

「と申しますと——。」

「うむ。実は牧田君。満人は君を怨んでいる。『なぜ李を関東軍は黙って見送っているのだ。李と関東軍は馴合いか。そうすれば、李が殺した要人たちは関東軍が殺させたのだらうか。してみれば、今度作られる満洲帝国は日本にとっては領土と同じことではないか。日本は我々満人をだまして、国土を掠奪したことになるではないか。』——と、満人の間に不審の聲がたかまっている。そこで。」

「わかりました。父源八郎が、亡くなる時に申しました。この仕事は、最後に必ず日本の名が出る。その時は、いさぎよく極刑に服して死ぬ。そして日本とは一切関係のないことを満人に知らせて、祖国の名誉を守らなければならぬ。——。私、覚悟は出来ております。関東軍の手で私を捕え、私を大衆の面前で処刑して下さい。そうすれば、私が日本人であつたとしても、関東軍の名誉は安泰です。関東軍は満洲帝国の為に、日本の国の人間さえも容赦なく処刑してくれた……。これほどの満足を住民に与える方法は他にはありません。私、喜んで死んで行きます。」

「牧田君。有難う。どうか日本の為に立派に最期を上げてくれたまえ。そして、君が蒙る不名誉のすべては、永久に雪がれることのないものであることも、どうか諒承してくれた



まえ。」

「わかつております。私慾のために、日本軍を利用して満人を苦しめた牧田美千代として、甘んじて刑に服します。」

井上参謀長は、美千代の潔い態度に打たれて、しばらくは言葉もありません。

彼女は、千騎にあまる彼女の配下の馬賊たちを厚く待遇してくれるならば自分は、大衆の面前で自決する、と井上参謀長に云い切ります。中国服に包んだしなやかな肢体を、たおやかにかがめて一礼した美千代は、静かに司令部を辞したのです。

## 胃 洗 滌

翌日の新聞は、女馬賊李麗輝の逮捕を大きく扱っています。日本人である李麗輝を、日本軍が逮捕したのですから、満人の日本軍に対する見方は一変しました。そして、日本軍の名誉を傷けた者として裁判にかけられることも報じていました。

裁判は公開され、牧田美千代の要人数十名にのぼる殺人が起訴されました。それでも、満人の一部には、日本のお手盛り裁判では、せいぜい無期懲役か、執行猶予ぐらいであろうという論評も見受けられます。

美千代は、カーキ色の乗馬服、乗馬ズボンに、太い黒革のベルトで乗馬服のウエストをしぼり、黒の乗馬靴をはき、白手袋を持った

男装で法廷に立ちました。そして、起訴状のすべてを認め、罪に服したのです。

判決は死刑。

覚悟の彼女は、片時も乗馬服を脱がず、独房に遺書のペンを走らせるのでした。

民心は、彼女の死刑確定によって、日本軍への不信の念を払拭し去り、この女馬賊の死刑が、いつ行われるかを評判しあうようになりました。そして、その死刑が、公開されると聞き、女馬賊の最期を見ようと、その日の来るのを誰しもが待ちわびているようにさえ見えるのでした。

美千代は、自分が暗殺した要人たちへの償いとして、自決の前に、鞭で打たれることを希望しました。そして、彼女の決意はゆるがず、遂に関東軍は、暗殺された者の妻、又は娘の中から希望者を募ることになりました。

美千代は毎晩、胃と腸を洗っていました。

美千代は、自決の際に汚物を流すことを怖れていたのです。夕食も軽いものでませ、体を屈伸させて体操に時をすごし、やがて夜のふける頃、彼女は、卓上のコップを取上げて決心したように、一息につめたい水を呑み込みます。ぐーっど冷水が胃の腑にしみ渡るやジョッキから更にもう一杯の水のコップに注ぎ、再び息もつかせず飲み干すのです。

二杯。三杯。四杯……

ぐっと飲んで、ふうっ、とつくその息も

四杯、五杯、六、七八九杯に達しては、顔も蒼ざめ、体を直立させて、歯をくいしばり、切なげな肩の喘ぎにかわって行くのです。

ごく、ごく、ごく……。ア、アア……

カーキ色の乗馬服のウエストが恐ろしく、くびれています。ベルトをゆるめ、ほっと一息。

再び、息をつめながら

ごく……ごく……ごく。む、むう……。

彼女は、よろよろと洗面台に立寄ります。彼は、そこで、唇も噛み切るばかりに歯をくいしばるや、両手を脇腹にあてがって上体がかがめます。腹中の水は、どうなっているのでしょうか。何度も何度も体をくねらせ、悶えつづけるのです。

やがて彼女は、顔をひきつらせながら、右手を花びらのような口もとから、のどの奥へとさし入れ、がばっ！と大きくけいれんします。堰を切ったようにほとほと生暖い水。

ジョーッ！ジョーッ！

彼女は必死に体をしごき、胃から溢れる水をほとばらしています。両の脇腹を揉んで最後の一滴までもと吐きつづけるのです。

もう、噴出する水の量も減って来ました。

まだ足らぬ！彼女は、乗馬服の上にしめている武装用の革ベルトを、力一杯締め上げます。身をふるわせ烈しくけいれんする彼女。

「う、うう、ウーッ！」

げえっ、げえっ！残りの水が、ものうげに吐き出されて来ます。

彼女が、片時も乗馬服をぬがず、武装用の革ベルトをしめ、「武人の名誉のため」との理由で、いつも馬装していたのは、このベルトを使うためでした。そしてこのベルトをしめた乗馬服姿が、彼女の死装束となる筈なのです。

「うっ、うっ、うっ……」

彼女は洗面台にのしかかって、喘いでいます。……苦悶のあとのすがしき。ほんのりと赫らんだ美貌には、ひそかなやつれが見えます。

「牧田さん。お覚悟お察しします。しかし胃洗滌も、あまり毎晩つづけてはよくありません。さあ、もうお寝み下さい。」

彼女の護衛を命ぜられている相馬少尉が、心配そうに独房へ入って来ます。

「ああ、相馬さん。……いいの。牧田は、もうすぐ死んでしまうんですもの。たとえ、胃がただれても、見苦しいものを吐くよりはましよ。」

「牧田さん。あなたは本当に切腹されるんですか！」

「ええ。……私、最期だけは切腹と、かねてから考えていましたの。介錯も断るわ。切れるだけ切って、内臓をつかみ出して、うめきのたうち、やがて襲う死の苦しみに、もたえ

て。……ねえ、相馬さん。切腹って苦しいですよ。苦しくても、どんなに苦しくてもいいわ。血を吐くわ。腸をさいなむわ。そして、女下しも、日本人らしく！」

美千代は、烈しく云いすてて立上ります。

### 死を見つめて

相馬少尉を去らせた美千代は顔をゆがめながらヒマシ油を飲み、ほっと息をつきます。

彼女は、暫く瞑想にふけていましたが、やがて抽出の奥から浣腸器を取出します。

戦場で穿くように特殊な仕立ての出来ている彼女の乗馬ズボンは、ボタンをはずすだけで、こんなときには、非常に便利なのです。

「ウ……」

ぐっと浣腸器の水が吸込まれて行く。水が完全に腸へ流れ込むと、抜取って、再び同じことを繰返します。

彼女は、見る見るうちに息づかいも荒く、苦しげになって行きます。乗馬服のベルトがゆるめられ、何本目かの浣腸が文字通り、のたうつようにして打ち込まれます。乗馬ズボンはがばがばと水をふくんで、彼女の、固くひきしまった両肢へ搦むように波打っています。

彼女の下腹は妊婦の腹のように張りつめ、もはや一刻の猶予もゆるされぬまでになりました。

彼女は必死に唸えながら、その苦しみの中で「君が代」をうたいます。

「き……。君が……代は。」

ち、ち、千代に、や、八千代に……

さ、さ、れ、い、し、の……

い、わ、をと、ななりて……

こ、こ、こけの……む、す、ま、で！て、

天皇、陛下！ば、万歳……」

もう唸えきれない！

彼女は、よろよろとよろめいて定め場所へ崩れます。夜のしじまを破って烈しく断続する雨の音。

美千代は、夜毎に、自分の体を責めつづけてきました。それは、数日後にせまっている死の苦しみへのトレーニングであり、武人として汚物を露出させぬための、たしなみでもありましょう。でも、うら若い美千代にとって、それがすべてでしようか。いいえ、美千代として、人の子です。死にたかろう筈はありません。迫って来る「死」への恐怖。頭を拾げようとする生への執着。——それを振切って、潔く初一念を貫く事こそ、美千代の永遠に生きる道なのか。一旦承知した自決を、いまさら拒んだとて所詮は死刑を免れぬ今の立場。あれやこれや、考えあぐねた彼女が、残された唯一つの道として選んだ「自虐」。

彼女は、自分を襲う雑念と闘うために、そして、女性としての最後の悩みを自ら解決す



るために、この道を選んだのでした。

## 鞭打ち

当日は刑務所の広場に高い処刑台を設け、中央に太い柱を立て、左右に、鞭打ちの応募者が並びました。

群集は、開門と同時に広場を埋め、此の美貌の女馬賊の処刑を待ちこがれています。

流石に、女性で鞭打ちに応募するだけあって、六人の代表者は、いずれも怒りに燃えた眼を輝やかせて、勇ましいスタイルで並んでいます。

鞭打ちも、美千代については生への執着をたち切るための涙ぐましい努力なのかもしれません。やがて時刻が来ると、美千代は、新しい乗馬服、乗馬ズボン、黒革の乗馬靴、拳銃ケースのついた太いベルトでウエストを絞り、髪を束ね、薄化粧をして、後手に縛しめられた姿を処刑台にはこびます。

罵声。それと共に、美しい彼女への、そこはかとなき惜別の嘆声が洩れています。

執行官相馬少尉は、型の如く人定尋問を行った上、鞭打と自決をいい渡します。

直立してきき入る美千代。そして、相馬少尉は、鞭打ち志願の女性たちに向って、顔を打ってはならないこと、一人につき十回とすること、鞭以外の方法で危害を加えてはならないこと、などを云い渡します。

美千代は、悪びれる様子もなく、中央へ進みます。

真紅の乗馬服、純白の乗馬ズボン、黒光りのした長靴に身を固めた最初の女性が鞭を採って美千代と相対します。うら若い女騎手。後手にしぼられたままの美千代。

「伯父様の怨みッ！」

烈しい語調で真紅の乗馬服は、美千代をにらんだかと思うと、発止とばかり打ちました。ピシッ！

「あッ……」

よろめく処を下腹めがけて横なぐりに……

「ウッ……」

上体がのめつたと見るや、背中へ打ちおろす革鞭のすさまじさ。

ピシッ！

「ううっ！」

真紅の乗馬服は、「むう、むうっ！」と次第にエキサイトして行く様子です。美千代がよろめくたびに、群衆の中に起る拍手。

つづいては、若妻風の女性。褐色の乗馬服にグレイのズボン、黒の長靴と、これも馬装です。

「夫を返せ！」

呻くように云って美千代の肩を打ちます。

流石の美千代もたえかねて、よろよろと膝をつくや、すかさず

「思い知れッ！」（ピシリッ！）

腰を打たれた美千代は

「アアッ……」

と云って横転します。

あとは、次々に

ピシリッ！ うむーっ！

ピシリッ！ うむーっ！

リンチを思わせる凄惨な光景がくりひろげられるのでした。

こうして六人の鞭打ちが終る頃には、美千代は息もたえだえに台上をのたうち、六人の女性たちも、あまりの強烈な刺激を目の前にして、流石に色蒼ざめて立ちすくんでいます。それでも勝ちほこったように観衆に手を振りやがて彼女たちは台上から去って行きます。

美千代は、ようように起き上り、衛生兵から水を貰い、喘ぎながらも一息に飲み干します。末期の水を飲んだ彼女は、両手の縛しめを解かれ、いよいよ自決の準備にかかりました。

## 立ち腹

相馬少尉が渡す白サヤの短刀。美千代は、押戴いて鞘を払います。ぎらりと無気味に光る刀身。

「ああ、いよいよ最期の時が来た。この刀が私の血汐を吸うのか。苦しかろう。いいえ、どんなに苦しくとも人手をたのまず、立派に

死んでみせるのだ！」

美千代は、一人、心に云いきかせながら、白布を採って刀身に巻きはじめます。井上参謀長は、高い建物の一隅から、ジッと此の様子を見守っていました。あの覚悟なら、見苦しい最期はとげまい。しかし、方一のことがあれば、自分が介錯して、せめてもの手向けにしたい、というつもりであります。

彼女は、襲いかかる妄執と斗うように、白布を巻きしめた短刀を胸に抱き、立て膝してしばらく眼を閉じていましたが、やがて、短刀を置き、軍服に似た乗馬服の金ボタンを一つずつゆっくりとはずします。

濃紺のネクタイほどこき、ワイシヤツの前をくつろげて行きます。

ワイシヤツの下は素肌です。乗馬ズボンを腰のあたりまで押し下げてベルトを固く締め、乳房から下腹、更に下腹から乳房へと、両手で揉み上げ、揉みおろして、心静かに自決の準備を終わりました。

彼女は、短刀を執って、静かに立上ると、立合う軍人たちに一礼し、殊に相馬少尉を近



く招いて固く握手します。

「永々有難うございました。お別れですわ。お元気で！力のかぎりかき切って御覧に入れます。」

「いつでも御介錯します。御安心下さい。」

「いいえ、介錯だけはゆるして！一人で死なせて。お願い！その代り、日本人として恥になるような振舞はしないとお約束しますわ。女だてらに、男装で死ぬからは、苦しみも覚悟の上。では、ごきげんよう。」



小声で呟くように云うと、美千代は再び台の中央に立てられた太い柱に背をもたせかけ、立身のまま身構えます。

ざわめきがびたりと水を打ったような静けさにかわり、美千代は大きく息を吸い込みます。そして、ぐっ！と突込む短刀――

「うっ！」

短刀は左の脇腹ふかく突立ち、腹腔に達する深傷を泳えた健気な呻き。

柱にもたれ、乗馬ズボンの両肢をふんばった美千代は、小さきみにふるえる両手に力をこめて、ずぶずぶと短刀を引廻しはじめます。

「……うう……っ。……ッ、ッ、ク、ク、ク、クッ！」

歯をくいしばり、腰をしごき、きりきりと刀身を右へ引けば、傷口は白い厚い脂肪層が上下に裂けて口を開き、やがて、紅の血汐が、噴き溢れて行きます。

「くくくく……。ア、ア、ううっ！」

凄惨な呻きにつれて、血汐は乗馬ズボンを伝って床の上に滴り、引締った美しい頬は、紙のように蒼ざめています。

「ううむ、ううむ、ううむッ」

押泳えた呻き。遂に右脇腹に達したのでしよう。彼女は、大きく腰をしごき、

「ううむッ」

一声。血みどろの短刀を抜き取りました。息をはずませながら、今度は、燃えるように

固く凝った両の乳房の間へ短刀を押しあてます。二三度喘いだかと思うと、

「ムム。ウーッ！」

がばとのめって、泳えかねたように片膝をつきます。グッ！と切下す鳩尾の肉。

「うむーっ、なんの。うむーっ……」

美千代の固い決意は呻きのうちにも察せられ、いたましげな軍関係者の眼ざしに見守られながら、男も及ばぬ十文字腹を、いま、ものの見事になしとげたのでした。

彼女は、

「むむっ。」

と短刀を引抜き、矢庭に右の手を、ぐっと腹腔へさし入れます。

「ウーッ。」

手首まで傷口へ突込んだ美千代は、烈しく呻いて、血まみれの臓腑を掴み出しました。

ウーム、と永く呻いて、彼女は、どきりと床に倒れます。

十文字に口を開いた傷口から、血の尾を引いて腸が床を這って行きます。

「ウーッ、ウーッ。」

壮烈なけいれん。男のような凄惨な呻き。

どきり、どきり、と長靴が床を蹴って、乗馬ズボンの両股が空を泳いでいます。

彼女は、短刀を両手で握み、

「あうっ！」「あうっ」

と異様な呻きをあげながら、太い腸管をガ

バツとばかりに切りました。

ああ、彼女の悲願は叶えられました。腸管は血汐と、粘液をほとばしらせたのみで、汚物のかげはありません。

群集も、あまりの凄惨さに、気を奪われて棒立ちになっています。

彼女は、ウムー、ウムー、と息をはずませながら、襲いかかる苦痛と闘っています。

「もう、これまで！」

美千代は、腸管をかき切った頃から、こわばりはじめた両の手に、喘ぎ喘ぎ短刀を取り直し、乳房の下へあてがいます。

「ウムッ」「ウムッ」「ウームッ」

もはや力つきた両の手は、押せども引けども、彼女の意志通り、心臓へは達しないのでした。何回かの浅い突き傷が、乳房を朱に染めて行きます。

「アアッ……。シ、死にたい！ 死にたい！」

彼女は、のたうち廻ります。

時刻は次第に過ぎて行きます。本人の意志であれば、介錯も出来ません。

相馬少尉は、正面に進み、群集に向って、やむなく、執行の終了を宣言するのでした。

「女囚李麗輝こと、日本人の牧田美千代にかかる死刑執行は、本人の壮烈な自決によってここに終了した」

群集は、まだ苦しみつづける美千代に、心を残しながら、退去させられて行きました。

# 断末魔

美千代は、刑場から担架にのせられ、屋内へ運ばれます。血みどろになったこの男装の麗人は、取乱してはいませんでした。白哲の美貌を苦痛にゆがめ、乗馬ズボンの両股をあられもなくふんばり、担架の上で呻きつづけています。

運ばれた一室には、彼女の遺体を安置すべく井上参謀長のはからいで特に香華が用意されていました。所詮助からぬ美千代の生きながらの告別式。担架は、人々の間を縫って、正面のベッドへと進みます。軍医が、苦悶の彼女をベッドへ移し、脈を見ます。もはや、断末魔も近いようです。軍医は、

「まもなく意識を失います。牧田さんにお別れをなさる方は、お集り下さい。」

井上参謀長は、たまりかねたようにベッドにすすみ寄り、血糊にこわばった美千代の手をとって、

「牧田君！わかるか、わかるか、井上だ！わかるか。有難う。有難う。井上は、井上は。」

「ううむ、ううむ、う、うれしい。ま、ま、

牧田美千代……。り、りっぱに……。お、お約束……。果しました。ほ、本望……。ううっ……

……、ううっ、部、部下を、部下を、お、お、おねがい……。」

「わかっている。みんな日本へ帰して生活も

保障する。安心して逝き給え……。」

「は、はい……。これで、これで、お、思い残す……ことは……。ない……。き、君……が……

……代……。うたつて！き、君が代を！」

見守る幹部将校の間に男泣きの声が洩れ、やがて君が代が高く低く流れはじめます。

美千代は、必死に呻きを泳えて、君が代にきき入っていました。口もとをゆがめ、体を硬直させて、のけぞり、

「ウ、ウーッ！」

とばかりに絶叫します。

「牧田君！」

「ウーッ！ウーッ、ウーッ、ウーッ。」

「牧田君！しっかりするんだ！」

「あうっ、あうっ、ウムーッ！」

井上参謀長に抱き起こされた美千代、

「ウーッ！」

一きわ烈しく呻いたかと思うと、両手に乳房をかきむしりながら、どくどくと、血を吐いて、乗馬服の肩を鯉のようにふるわせるのでした。

「う、う、ウーッ……。アアッ！」

がくんと、上体がこわばり、両眼が、かつ

と天井の一角をにらむ。

「牧田、牧田！」

ああ、彼女は答えません。云いようもない興奮が室内をつつんでいます。

美千代は、まだ意識がある両手を必死に合

掌しようときぐっています。

「牧田ーッ」

「ク、クッ」

長い長い時間のようには思えました。

再びおこる君が代の齊唱。

井上参謀長は、涙乍らに自ら美千代の長靴を脱がせ、上衣を除き、ベルトをゆるめて乗馬ズボンを抜取ります。ズボンの下には、鮮血のにじんだ真新しい白褌が、きりりと締込まれていました。汚物を脱したあとはなく、ただ鮮血が溢れています。

井上参謀長は、白無垢の小袖で彼女の遺体を包みはじめます。

グワツと口をひらいた腹部。軍医の手を借りて、腸管を腹中へ納め、さらしを巻く。

ぐったりとした美千代の全身からは、脂汗が流れ、電燈の光をうけて妖しく輝いています。

す。黙々と立働く将校たち。

どす黒い血汐を含んで、ものうげに壁にか

けられている彼女の乗馬ズボンや上衣。

すべては呻きと興奮のあとに押寄せた死の静けさの中です。そして美千代の、あの身を

ふるわせて絶叫した断末魔の声は、いつまでも将校たちの耳の中で呻きつづけているので

す。(つづく)

(註)「戦雲アジアの女王」からヒントを得て、この創作を着想しましたが、勿論、全部フィクションであります。



# 日本印象記

—外人の見た女はらきり—

(承前)



純 方 南

やがてこの庭の入口から立派なさむらい二人と真紅な衣をつけた僧侶一人が入ってきて小屋の前におかれた椅子に腰をおろして彼女の方に向いた。このさむらいは検使即ち彼女の刑罰が完全に遂行されるかどうか見とどけ

る役で、今夜の最高責任者である。

萩野は鄭重に彼等に向って礼をし、彼等もこれに對し頭をさげてこたえた。ここで死刑宣告文を読むのが普通だが今夜は先程既に座敷においてこの申し渡しは完了したそうであ

る。

僧侶が進み出て彼女を案内して来たさむらいから薄い木片で作った台（訳者註三方のこと）に陶器のさかずきをのせ彼女の前に持って行き、酒をつぐ道具で彼女に給仕した。最初これは酒かと思つたが堀の説明によれば唯の水だという。日本ではこれを末期の水というそうである。僧侶は彼女に向って極めて簡潔な言葉で最後の説教を行った。彼女は頭をたれ聞き終るとさかずきを取り上げ一口飲みその台に戻した。僧侶は台を持ち去り、次に介添のさむらいがそれと同じような台を目の高さにささげて彼女の前に持って来た。今度の台の上にはさかずきの代りに短刀が八分通り紙に包まれて、ただその先の尖った部分だけ一時位出してのせられてあつた。これが彼女自らその腹を引裂く道具となるわけである。彼女は両手を上げてこれを受取り自分の前一呎位の処に据えた。

気がついて見るとこちらから見て彼女の右の後二、三呎の所に一人のさむらいが黒の上着で袴をはき二呎余りの刀を抜いて立っていた。これは介錯人といって罪人の首級を打落す役である。ここで誤解してはならないのはそうはいってもこの介錯人はわが国の死刑執行人とは必ずしも性質が一致しないことだ。死刑執行人の場合は本人の望まない刑罰を強制的に行う役であり、彼とは敵対関係にあ

る。しかしこの介錯人の場合には罪人が名誉として受けた刑罰を過ちなく完遂させるための補助人で彼とは協力関係にあるわけである。彼女は振返って介錯人に対し極めて鄭重に謝辞を述べた。

古いこの国の作法によれば、罪人はこの場合合衣服をぬいで上半身全部裸となるのであるが、この頃は必ずしもその作法が守られておらず、ただ上衣を脱ぐ程度のことが多いそうである。われわれが見ていつも奇異の感を禁じ得ないのは、男女混浴の浴場や、鏡に向っての化粧において、この国の女性が極めて大胆に皮膚を露出してはばからない点である。しかしさすがにかかる身分の女性においては肌を見せることはやはり慎むべきこととされているらしい。

彼女は勿論上半身を全部露出してはらきりを行うわけはない。これは後から聞いたことであるが、身分の高い女性の場合——稀有の例ではあるが——はらきりを行う時にも全く肌を表わさず短刀又は扇子を衣服の上から腹に当てようとする時介錯人が首を斬ることになっているそうである。今度の時も当然そうすべきであったが特に彼女の願いにより男子と同じに正式にはらきりが行われるようになったということである。

萩野は胸まで高く結んだ帯を静にほどき右に置き、ついで白い上着をぬぎ袖を座つてい

る膝の下に差し入れた。下着も白い絹で出来ていた。彼女は下着の前をひらいた。豊かな乳房が見え、雪のような下腹の皮膚が現われた。白い布の小屋、白い敷物、白い衣裳、そして白い肌の色——わたくしは魔法の国にまぎれこんだのではないかと自ら疑うほどであった。咳一つするもののない沈痛な空気がみなぎった。虫の声だけが哀れな女性の最期を悲しんでいるように聞えてきた。

萩野は右手で短刀を逆手に持ち、左手で台を後に片附けた。今度は左手で強く腰紐を押して下げ、下腹部を徐に右から左に撫で臍下丹田に力をこめて皮膚をぴんと硬直させた。最後の思考をこらしているのである、眼を閉じて緊張した数秒間が続いた。

ああ、ついにその緊張は破れた。次の瞬間右手の短刀は左の脇腹にぐさりとつきささっていた。まことに何人も感動を禁じ得ない瞬間であった。何と静かな動作であろう。顔色平然、少しも恐怖の色を浮べていない。彼女は左手をも添えて短刀を下腹部の真中即ちへそのやや下のあたりを横一文字に引廻した。皮膚における末梢神経の分布という面から見れば腹部は比較的希薄な場所であるから、刃物が鋭利であれば苦痛も案外少いのかもしれない。しかしその衝動が脳に与える影響は強烈なものであり、殆ど常人には耐え得ない処であろう。

彼女は左の脇腹から右の脇腹まで美事に切り開いた。創口からは鮮かな血潮がおびただしく溢れ出て、白い衣裳も白い敷物も見え、狂い咲きのダリーリヤのように彩られていった。

#### (4) 異教徒が十字架を描いた ということ

流石にこの段階になると、肉体的苦痛が忍耐の限度を超えたと見えて、いままで感情を表さなかった顔にも苦悩の色が次第に深くなってきた。くいしばった歯の間からはせつなそうな呻き声が断続してきこえてくる。

彼女は下腹から血のしたたる短刀を一度抜き取って膝の上に置き、刃が下に向くように右手を持ち換えて今度はみぞおちの処に当てがい左手も添えて、逆に体の方から刀を迎えるような形で上半身を力をこめて前にかがめた。何でたまろう、短刀は乳房の谷間に食い入った。ここにすさまじい光景が展開された。彼女はかがめた上半身を次第におこしながら全身の力を両手にこめ短刀を下へ下へと押し下げて行く。横に一文字に切った時と違い突き込み方が深い上に力も衰えてきたので一息に下まで切断してしまうわけにはいかない。じりっじりっと短刀は下に行く。幾度かはっと荒い息をし手を休めては又思い直して力を入れる。ついに短刀はへその中央を切り



開いて横一文字の創口と合し、腰紐の位置にまで達した。恐るべき十字架。わが主イエス・キリストの象徴たる十字架がこの異教徒の女性の肌にくく描かれるとは、ああ何ということであろう。

堀の説明によれば十字のはらきりが最も作法にかなったものであるが、異常な困難性を伴うため、殆ど近頃では行われないそうである。珍しい女性のほらきりをしかも最も作法に適った法式で行われるのを見る機会を得たことは幸運であり、堀に大いに感謝したい。通常十字のはらきりの場合は心臓を突き刺して絶命するのであるが、今は短刀が心臓に触れない為これだけでは息が絶えない。

萩野は血に染った短刀を抜いて下に置いたと見るや、何を考えたか右手を大きく開いた創口に差し込み、血みどろの臓腑をつかみ出し、渾身の力をふるって前にたたきつけた。

この時彼女の後に控えていた介錯人はこの狂わしい動作を見て少しあわて気味で刀を振り上げ彼女の頸部をねらって打ちおろした。彼女の体は勢におされてぼったり前にのめった。しかしこの打撃は失敗であった。それは時期の判断を誤っていたのだ。彼女の体が前後に大きくゆらいでいたので、切りおろした時には、少し体が前によりすぎて刀は頸部ではなく肩先に切り込んだ。下着の肩の所にはいたましくも血がにじみ出て来たがこれは勿論

致命傷とはならない。

彼女は手をついて体をおこし、失敗にあわてて今一度と刀を取り直した介錯人を振り返り落着いた声で「おいそぎあるな」と云い、乱れた髪を撫でつけ、両手を前で合せ、仏教の祈りの姿勢をとり、眼を閉じ、首筋を前にさしのべた。

この勇敢な態度にはげまされて、介錯人は充分な身構えをし、大きく刀を振りかぶって打ちおろした。心も氷るばかりの恐ろしい瞬間であった。たった今までかくも美しくかくも勇敢だった女性が、見よ、もはや物云わぬ首となつてそこに投げ出されているのだ。唯一人声を発するものはない。虫の音さえばったりとだえた、ただ五呎も先に飛んでいった死首からふき出す血潮がしゅっしゅつとかすかな響きを出すのみ。だがそれもすぐに聞えなくなつた。

介添のさむらいが進み出て、彼女の首を取り上げ、左手で長い髪をつかみ、右手に紙を重ねたもので首の切り口に当て、検使の方に横顔を示した。検使はこれを見て「よし」と威厳を見せて大きくうなずいた。これですべての儀式が完了したのである。しずしずと検使と僧侶は退散する。介添人は首を鄭重に体の傍に供え、紙のスクリーンを前に立てて死体をかくした。

わたくしは刑罰について考える。シヤムで

は公文書を偽造した者の手首を切つて臍物にしているのを見たことがあり、シナやこの国で罪人を斬首して大衆の見せ物にしているのを見たことがある。いずれも死の醜悪さが犯罪の見せしめに役立っていると思う。しかし今度の場合は少し違うようだ。それは余りにも美しすぎるということだ。検使をもふくめてすべての者が彼女を哀み、彼女の死に最大の敬意を表している。そこには何ら彼女の犯した罪を憎む感情が出ていない。これを果して刑罰といえるであらうか。

わたくしは夢を見ているような感じであつた。若い女性が一体どうしてあんなにも無惨に自分の身体を引裂くことが出来るのであるうか。果してそれが苦痛ではないのであるうか。いや苦痛でない訳はあるまい。あの苦しげな呻き声は――、だが、とわたくしは思う。彼女が十字に腹を切つて、両手を合せ、首筋を延して介錯を待っていた時には何と満足し切った表情が見えたことであらう。ことによると彼女は、この苦しみの中にそれ以上の楽しみを、感じとっていたのではないだろうか。わたくしはいつまでも彼女の白い首が血を吹いて飛んでいった最後の光景を忘れることが出来ない。

(終)

## 創作

## “虹のつゆあと”

皆川のぶ子

あらゆる生き血を吸いにとって、何時迄も若々しく生きている美しくい悪魔なのです。貴女は——。あやしい魅力を全身にみなぎらせて、貴女は私の生き血を吸つくしてしまいました。ああ、じつと、こうしていると気が狂いそうです。

のぶ代さん。

貴女は一人の女の人生を、メチャメチャにしてしまいました。貴女を知る前の私は、平凡ながら良き妻であり、母だったのです。そしてかつては、健全な毎日の生活に、誇りさえ抱いていた、ごく当り前の女だったのです。それなのに——。でも貴女は、こうした私の愚痴がおきらない性質の方。サッパリし

て、いや味のない、その上、美しい方。私は初めて貴女にお逢いした瞬間、そんな印象を深くしました。

のぶ代さん、

本当に不思議な方ね。貴女という方は！いえ、それだけに底知れぬこわさを感じますの。私は貴女を知ってから、この世の最高のよろこびを発見し、同時に、この世の最高の切なさ悲しさを味わってしまいました。人を愛する事の切なさ、人に愛される事の幸福感は、人に愛されぬ悲しさになるのです。今、こうしてペンを取って、私は一体何を書くかとしているのかしら、ああ切ない。

のぶ代さん

愛しているのです。貴女に愛されなくなつた。今でも、貴女のすべてを愛しております。私は、浅草の大きな花緒問屋の一人娘として大切に育てられました。何不自由なく育てられたと云うことは、世の中の裏を知らずに育つた事なのです。幼稚園、小学校、女学校、花嫁学校と、私の人生の半分は、学校めぐりで占められた様に思います。箱入娘のきゆうくつきにも、別に不満がなかった程ですから、私って、ずい分消極的なんですね。花嫁学校も無事卒業した頃は、もう結婚する人が、きまっています、私は別に不平も感じる事なく、親のきめて呉れた人と、それが当然のように見合結婚しました。そして今日迄の十二年間



その間に二女をもうけて、平和に暮して来たのです。事実、夫は親切で、私は夫に愛され守られて、子供達に慕われて、名実共に、幸福な一家庭夫人でした。それなのに、忘れもしません。長女が小学校入学の日——貴女に初めてお逢いしたのです。その日は、入学式にふさわしい良く晴れた輝やかしい日でした。それぞれ、我が子を誇りとして、七分のよろこびと、三分程の不安を胸に、小学校の門を子供と共にくぐった事は、貴女とても、同感ではなかったでしょうか。とに角、私は我が子以上に緊張して、担任の先生の話を一言も聞き逃すまいと、耳を傾けておりました。その時、私は躰のどこかにしびれを感じたのです。しびれなんて変な云い方ですが、でも本当に、その時はそう感じました。電車の中など、じっと自分を見つめてゐる様な視線を感じる——そう、あの感じでした。私は、「誰かしら」と思いながら、フトその方を見ました。そつと憶病氣に見た私の目とかち合った時の貴女のお目！私は何故か、ギョツとして思わず躰がふるえてしまいました。私の弱々しい視線に、グイグイ迫る様な貴女の目！私は貴女の顔全体が、目だけになって私に迫って来る様に思いました。私は思わず「ああッ」と云って両手で顔を、おおいました。突然、そん

な得体の知れぬ声を出した私を、皆はシロジ口見つめました。私は皆の注目を浴びてうろたえた時、貴女は私のそばへ来て、ニッコリ

「そうですか、急に、あたくしの方を御覧になつて、お驚きになつたりして、私、どうされたのかと思つて」



と笑い乍ら云いましたね。

「どうなさいました？ お気分でもお悪いのですか？」

「いいえ」

私は息がつまりそうな声で答えました。全くどうしてあんなにうろたえたのでしょうか。

何を云うのでしょうか。貴女に見つめられたからこそ私は——と私は心に叫びました。でも言葉に出しては云えませんでしたわ。

「奥様、失礼ですけど、お名前は？ ホホホ私は露木さよ子の母で露木のぶ代でございます」

貴女のお声は低くて、歯切れが良くって、魅力的なお声ね。

「ハア、あの私、新堀でございます」

私は、やっとの思いでこう答えました。そんな私を、貴女は面白そうに御覧になっていらっしやいましたね。そして帰り道——私は自分の記憶力の良い事に自信があります——帰り道、貴女は、

「ねえ新堀さん、さっきはゴメンナサイネ、じつと貴女を見たりして、本当にゴメンナサイ。だって、私ね、こんな事、始めてお逢いした方に云うの変だと思ったけど、矢張り云ってしまいますわ。私ね、貴女が好きになってしまったのよ。変な女でしょう、私って。私ね、貴女が好きだわ。一目見たときからの。一目惚れっていうのかしら」

ああ、私は生れて今日迄、貴女のような人は知りませんでしたの。何と云う大胆さ、何と云う卒直さ、私は完全に、圧倒され、貴女に魅せられてしまいました。

のぶ代さん

貴女が、ごく当り前に仰言る言葉が、どんなに強く私にひびくものか、お考えになった事がありでしょうか。

私は、あの日から、何か悲しい日を送りました。何をしても張り合いなく、何を食べても美味しくなく、子供達に慕われる事さえ、かえって、わずらわしく思った——ことは何

と言う心境の変化なのでしょうか。何が原因で？——私は沈む気持の中で、答を求めました。何が原因——そう、貴女なのです。私は、貴女を恋してしまったのです。何と云う事か、女が女を恋する——とは。私は自分の心の異常さに総気立ちました。平凡な女——だと思い自らその名に甘んじていた私——それが夫にさえ感じた事のない恋というものを同性に感じたとは！私は気が狂いそうでした。

私は、たまらない自己嫌悪におそわれて、四、五日寝込んでしまったのです。何日か経ったある日、学校からの通知書を長女から受け取りました。それには、第一回の母の会を×月×日×時本校講堂にて開催、と書いてありました。私は、行くまい……と心に誓いました。行けば貴女に逢う事だろう。そして私は苦しまねばならない。あの方は何の気もなくごく普通に言った言葉だったのかも知れない。

あの日の言葉に迷った私が恥しい——私は自問自答しました。私はわずかの間に、一貫目もやせました。でも、その日——私は朝から気が落ちつかなくて困りました。行き度い、行つてはならないという気持の葛藤に苦しみながら。やがて、その時刻になりました。私はじつと目をつむりました。心の平静を保ち度いと願ったからです。でもダメでした。私の頭の中は貴女の顔、貴女言葉、身のこな

し、そしてあの目。私の頭の中は荒れ狂って、果ては、貴女とお話をするであらう、誰か？にさえ激しい嫉妬を感じました。私は苦しさに負けて、身づくろいして家を出ました。

「奥様、お躰が無理ですわ。サトが代りではいけませんでしょうか」

そう言う女中の言葉を振り切る様にして私は出かけました。太陽の光は、今の私には強すぎる程でした。もう会が始まって居りました。居て欲しい、居て欲しくない、そんな事を、ブツブツ頭の中でくり返しながら目は貴女の姿につかれていました。貴女はやはり居られましたね。ずっと前の方で熱心に、メモをとって居られましたね。私は只、貴女だけを、そう先生のお話等どうでもよかったのです——そして閉会——。ガヤガヤと散る人波の中で、私はボンヤリ窓の外を眺めました。校庭の人の動きを只ボンヤリ見ていたので、そんな私の前を貴女は通りすぎたのです。私は、ハツとして、何か言おうとしたのですが、貴女は私のそんな気持におかまいなく只、儀礼的に、目礼したまま通りすぎてしまいました。全く無関心の様子のまま……。

のぶ代さん

私はかつて、味わった事のない恥しさと淋しさに、目がくらみそうになりました。

ああ、矢張り私の思いすごしだった。あの



人は私の事なんか、何とも思っていないのだ。それなのに私は、やせる程あの人を想ったりして、バカな私。でも、あの日の、あの人の目。あの人は、私をからかったのだろうか。ずい分ひどい方！私はもう絶対に、貴女を忘



km ね

れようと思いました。そんな事を考え乍ら、校内を出た私は、本当に「アッ」と叫んだまま立ち止ってしまいました。だって、貴女が立って居られたからなのです。  
「さっきは、ずい分お澄しだったのね」

まいりましたわ。

「お止しなさい、泣くの。さあ、御一緒にしましょうね」

貴女は、そう云って、静かに歩き出しました。そして丁度、坂道の、人通りもない家並

貴女はどうして、そう意地悪なのでしよう。初めの時も御自分が先に私を見ていたくせに、私のせいになしたり、今又、澄ましていたのは御自分だったくせに。私は胸の中でそう云いました。私は、だまって通りすぎようと思いました。そうしたら貴女は、「ダメッ」って、私の腕をつかんで、グッと御自分の方に引きよせました。そして、  
「ねえ、新堀さん、なぜ逃げるの。私がこわいの？」と仰言ったのです。「ええ」と私は、小さな声で答えました。「まあどうしてかしら」「でも」「フフフバカね貴女、私ね、あの日から、ずっと、貴女の事考えていたのよ。おかしいでしょう」  
貴女は、あのひくい、とろける様な声で、私の耳にささやきましたわね。私は涙が出て涙が出て、本当に恥かしくなってい

も少ない所へ来た時、

「ねえ、新堀さん。貴女、私みたいな女、軽蔑する？」私あわてて云いました。「いいえ」「本当？」「ええ」「そう、安心したわ。フフ貴女って、おとなしい方ね。たまらないわ。ねえ新堀さんッ」「えッ」私はその時の声の様子が、只事でない事に気がついたのです。貴女は私の手をぐっと引きよせて、抵抗する事も忘れた様に驚いてしまった私の唇の上に、熱い貴女の唇を重ねたのです。私は、ああ私は、あのまま、よく死んでしまわなかったものだと思います。私の目の前は、かすんで躰はグニヤグニヤと力なく、貴女の腕に支えられました。貴女は驚く程の力で、私をしっかりと抱き止めました。そして又、私の唇に、まぶたに、頬に、エリ足に、接吻し続けたのです。

のぶ代さん。

私は、あの様な接吻は始めてです。でも、それ以上のよろこびを後に知りました。「女だけが知る秘密よ」貴女はそう云って教えて下さったあの素晴らしい感激！貴女の家へお伺いした日、お子さんは、どこかへ行かれて貴女お一人でしたね。勿論、御主人はお勤めで――

「新堀さん。ね、こちらの部屋がいいわ。寛ろいで」

と云い乍ら案内して下さった奥の部屋。一

歩、その部屋へ足をふみ入れて思わずハッとしました。ビックリして、出ようとした私の肩を、貴女は強くおさえて、「どうしたの？こわいの、ねえ貴女、私のことおきらい？」私は返事が出来ませんでした。「そう、おきらいなのね、それなら、いいわ。さあ、お帰りなさい」

貴女は別人の様に冷たく云って、御自分だけ室へ入り、襖をしめてしまいました。取りつく島もない程の冷たい態度を示された私は、云い知れぬ悲しさにおそわれて、思わず叫びました。

「露木さん、私、こわい。でも貴女がきらいだなんて、ひどいわ」

返事がありませんでした。私は、そっと、襖を開けました。そしたら、貴女は、いきなり私の腕を抜ける程引かれましたわね――

その烈しいことったら、そして、うわ言の様におっしゃった言葉。あの時、貴女も御自分で、何を仰言っているか判らなかったのではありませんか。私とても、自分が何をして、されているのかさえ、ボーッとしていて判らなかつたものですもの。すべて、夢の中の、出来事だった様に今でも思います。「ねえ新堀さん、私の云うこと何でもきいてね」そう云って、貴女は私を思うままになさつたのです。今も残っている乳房の下の傷跡も、腋の下の傷跡も、二の腕の縄ずれの跡も、みんな、

貴女との思い出のあと――なつかしく、恋しく、時々、じっとそのあとをさすります。

私は、世の中には、ずい分不思議な女の人も居るものだと思います。実際、普段の貴女は、そんな事、想像すらさせない程の、明るさと、適当な、しとやかさがありますもの。そして、委員会等で、テキパキと発言する貴女に、誰がああ、不思議な力があることを信じる事が出来るでしょうか。私は、貴女なしでは一日も居られなくなりました。何かと用をこしらえては貴女を尋ね、如何にして、より貴女に愛されようかと、ところをくだき、気を配りました。でも、貴女のような気性の方には、そんな私が、だんだん面倒臭く、わずらしくなられたのでしょうか。私が貴女を慕う度が烈しくなればなる程、貴女は、私からはなれて行ってしまいました。ある日、貴女はこうおっしゃいましたね。

「新堀さん、貴女って、もつと、深味のある人かと思ったのに案外ね。私ね、女に惚れる間はいいんだけど、反対に、相手から惚れられると、とたん熱が、冷めちゃうのよ、ゴメンナサイね。でも本当に私、ウジウジしてる女の人、きらいなんだもの」

貴女は、とても普通、口で云えない事を、平気で、ツバツバ云う人なのです。その時、私は、目の前が、グラグラとゆれる様な悲しみにおそわれました。私は辛うじて



「そんな、ひどいわ。こんな私にしたのは、貴女なのに」と、口ごもり乍ら云いました。

「ホラ、その顔、そう云うメソメソしたの、私大きらいよ」と。実に冷淡におしやいました。私は、少女の様に何時迄もすすり泣いていました。それっきり、たまに学校で逢う事があっても、貴女は知らん顔して、わずか八カ月たらずの間に、貴女は私の心を、こんなにも狂わせて、ずたずたに引きさいてしまわれました。そして今では、生きる事さえ、無意味に思う女に変えてしまわれました。それなのに、御自分は、初めてお逢いした時と、少しもお変りにならないどころか、益々若々しく、美しくおなりになって——。その、あやしい美しさは、女の生き血を吸って保たれる悪魔の美しさなのかも知れません。貴女はそう云う方！

のぶ代さん。

貴女を知ってから、私は全然、夫に対しては妻ではありませんでした。信じて下さい。それは貴女に愛された、このいとおしい躰が、たとえ夫でも、貴女以外の手にふれられなくなかったからなのです。そう、私は、貴女の為に操を守っているのです。（今後、貴女に愛される事のない躰だと判っては居ても——貴女に、この切ない気持が、判って頂けるでしょうか。妻であって、妻のつとめを果さぬ女、当然それは、そのままであるわけはあり

ません。結婚以来、平和な家庭であり平和な夫婦間に、人に明かす事の出来ない冷たいミゾが出来ました。貴女を知ってから私は、いいえ、私の家庭は、まれに見る平和な家庭から、まれに見る冷たい家庭に変貌しました。仲の良い両親の間で、安心して甘えていた二人の子供は、何時の頃からか、両親の顔色をみて、ものを云う子供に変わってしまいました。妻に親切で優しくした夫、子供んのだった夫、酒は一滴もたしなまず、妻子と共に、甘いものをお茶でものみ乍ら食べる事が楽しみだった夫は、毎日に気が荒くなり、毎夜の様にペロペロに酔っぱらって来て、何かと云っては、子供達に迄当り散らす夫に変わってしまいました。みんな貴女を知ってから——と云っては、あまりに、自分勝手な云い方かも知れませんが、もう書くの、止めます。でも、私は、自分が、こんなに、一本気な女だとは今迄、気がつきませんでした。私は生きている間中、貴女を忘れず恋しているでしよう。そして、家庭を破ってゆくことではしよう。恐ろしいと思いますの。だって、それでは、あまりに罪深く、夫や子供達に済みませんものね。私は、昨夜からある決心をしました。そう、自らの命を絶つ事なのです。卑怯な様ですが、今の私には、そうするより外、逃れる途はないのです。何も云わずこうして書き綴ってしまいました。八カ月ばかりの間に、

貴女が知らぬであろう数々のギセイの大きさを貴女に判って頂き度い為にかくも真剣に、一途な愛情を貴女に捧げて死ぬ迄、貴女を恋し続けた女の居た事を、何時かは想い出して下さりはしないかと、いじらしい願いをこめて、この書を綴りました。でも、こんな願いは私の空しいひとりごとで終ってしまいそうです。それ程、貴女は冷淡な方、一度きりだった花は見むきもなさらない性質の方です。の。短く淡い幻の様な八カ月！烈しい夕立ちの後などで、美しくかかる虹のはかなさ。その虹の様に、たまさかの喜びを教えられたこの私！その甘美さにウットリと我を忘れ、忽ち消えた虹のあとを、オロオロと、もの悲しく未練げにおろかにも求めようとしている私。そんな私を、貴女はきつと軽蔑なさることでしょうね。ああ、あらゆる限りの犠牲を捧げて尚、満足なさらない冷たい冷たい貴女だと知りながら、どうして私は、こんなに恋してしまったのでしよう。正常の恋でない魔性の恋に、自ら命を捧げて悔いない私！お笑い下さい。

さようなら、限りなく憎い貴女！そして命をしばらくかける程、恋しい貴女！たとえ、私の身が、もういもうい白骨に変わってしまった頃であっても、私は貴女を愛しております。この手記が、女中の手から貴女に直接渡される時には、もう私は静かに静かに眠って

いることでしよう。深い深い永久に、めざめる事のない眠りに——さようなら。  
お健やかに、最後に、私の大好きな詩を、私の想いをこめて贈ります。さようなら。

### 「狂乱の抱擁」

愛して頂戴、微笑や、笛や、花束  
で愛するのは厭、あんたの心と佛とで愛  
して頂戴、妾が胸と呻きとで、あんたを

愛しているように。

二人の乳房が、重なり合い生命が互いに、ふれ合うとき、或はあんたの両膝が、妾の背中を昇るとき、その時妾の口は喘ぎ、あんたの口を吸うていることさえ解らぬ。抱き締めて頂戴、強く、妾が抱き締めているように。洋燈も燃え尽き、暗闇に転がり廻る。けれども妾は、身をくねるあんたの肉体を緊めつけて永遠の呻きの声を聴いてい

る。呻めいて、呻めいて、呻めくもの、女の性よ。エロスの力に引摺られ、女は苦悩の中にまみれる。愛を生む床の辛さに較べれば、子を生むことなど、それ程の苦勞とあんたは思わぬだろう。

「ピリチスの歌の中より」

ピエール・ルイス作。

江戸時代の刑罰に『五十敲』『百敲』というのがあった。比較的軽い刑罰である。

これは、その処刑情況を書いた映画シナリオの一部。二月号の「読者通信」で小山矮男氏が、特に刑罰に関するものに興味を持つと書いておられたので、何かの御参考になるかと御紹介します。

作者は戦前、時代劇脚本の鬼才児とうたわれ四十一才の若さで散った山上伊太郎氏（この人の代表作には浪人街、仇討崇禪寺馬場などがある）昭和七年に片岡千恵蔵の主演で千恵プロで製作（監督稲垣浩）した『時代の驕児』のファースト・シーンである。

○場面（F I）

モノミ高い「群集」が、押し合いコンボ

締めきあう。ソレをキヤメラ煽って、既に移動で後退してる。

これは、伝馬町牢屋敷の表門に『敲五十』のいま所刑が、行われるのだ。

（牢屋敷門外小石を敷いた上へ藁蓆をT字形に敷き、その上へ輝ひとつの裸体の罪人を俯伏せにして打役の同心が、藁を紙捻で巻いた長サ九寸、太サ四寸五分の敲箒で、敲くのを、数取役人が一ツ、二ツと数える。罪人の四肢は四人の牢下男によって圧え、さらにいま一人の下男と医師が気絶した場合に備えられてる）

通りすがりの人数が二人三人尚立どまる。悪タレの一団が駆けつけてモグリこむ。打役同心が何遍目かの敲箒をくれた。数取りの同心が、コレは両手を袂にツツコンで

る。

字幕 三十八

ノンビリしやがる数取氏。

字幕 三十九（移動以下全部）

ピシリッ。骨にこたえるソレをムと耐えたらし。数取氏が、ヨソミをしながら気だるく。

字幕 四十

群集、ひとがきに、立寄った富有そうな半白の商人氏が『ナンですな』ときいたら、すると植木屋らしいのが若い——

字幕 どれぼうなんですがネ……

「ハハアン」

字幕 こそ泥か

で離れた——『チヨロ松やナニしてなさる早く来なさらんか』見てゆきたいチヨ



ロ松は進物らしい風呂敷包み。(チヨト覗かしてくれたってええやろうに)若い植木屋の職人氏白い眼で睨んで鼻で笑った。

『ヘエン!』

字幕 この泥がどうしたといいやがるンでえ

『てめえンちにはわかるめえが、こいつア大物になるってことよッ覚えときねえ千両箱をいかれねえようによ』

門内から次の罪人が——でっちり権氏である。オロオロと魂身に添わぬ態らしくビシリッ。白い肌を打つ——

それを見た聞いた、デッチリ権氏の方が、悲鳴をあげた、逃げ腰になるタスケテエ。

字幕 四十八

と数取り同心。打役がビシリ。歯をくいしばった次郎吉の顔。

お次の番のデッチリ権氏が引据えられてふるえてる。カチ、カチ、カチカチ歯が鳴り、涙。

字幕 四十九

打役がチクシヨウ思い知れと、とめの一打。ウムーとくいしばって次郎吉氏、眼をあけず。

たたき  
敲

五 十

香 野

緑

字幕 五十

数取り同心氏、お役目から解放された、気になった。皆もソノつもり、部署からのきます。トタンに打役氏ナニを怒ってかいま一打ビシリ浴せたモンだ。あわてて数取り同心が『これナニを』と出るのを耳にいれず。

字幕 しぶとい奴ッ

憎悪にゆがんだ、さらに一打!

動揺する人垣、騒ぎ立って暫く喧騒。

『静マレ、静マレ、ええっ、静マリオラヌカッ』これは別の同心二人、(デッチリ権氏の打役と数取り同心です)が、叱り懸ったのである。人垣は尚ゴタツク。威丈高になった同心氏、どなったモンだ。

字幕 黙れ! 黙りおらぬか、お上お仕置をア

レコレはざきおるに於ては、どいつこいつブチコンでくれるぞ、いま一人の同心氏が

字幕 ここを伝馬町牢屋敷御門前とわきまえおらぬか

『アーン』コレハお愛嬌、緩和剤になる。人だかりもザワツキおる程度である。悪あがきにあがく、でっちり権氏を、蛙つぶしに圧えつけた。モウバタつけぬ。(OL)

無声映画当時のシナリオだから、読みづらいかも知れない。字幕とあるのがセリフである。刑執行の模様がこれだけくわしく適切に描かれているのは、さすが山上氏ならばこそ。さらに周囲の弥次馬、執行吏達などの動き、心理まで——たしかに残虐であると受けとれるが——詳細に記されている。残念ながら昭和七年の作品とあっては小生はまだ満一才になるやならず、この映画を拝見していない。けれども、もし御年配の方だったら、中には映画を御記憶の方があると思う。

小山氏の御意見にはたして御参考になるかどうか。ともかく貴殿と同志の一人としてお寄せしました。

レーゼ（読物）シナリオ

御<sup>ご</sup> 用<sup>よう</sup> 盗<sup>とう</sup> 異<sup>い</sup> 変<sup>へん</sup>

海 野 築 朗 作

## 仮 想 配 役

平野半次郎	中村錦之助
益満休之助	片岡千恵蔵
松平吉之丞	大川橋蔵
森田屋剛造	進藤英太郎
駕籠舁 A	原健策
〃 B	藤田進
酒井左衛門尉	月形竜之助
黒覆面 A	清川莊司
〃 B	月形竜之助
取次ぎの侍	徳大寺伸
お銀	千原しのぶ

## ◎鳥羽街道

砲 弾 の 炸 裂

三葉葵の旗印、宙に吹ッ飛ぶ。

天地を覆う、小銃音、砲音、そして砲煙にだぶってT（字幕）

鮎忠 内儀	花柳小菊
伊勢屋の娘	丘さとみ
遠州屋の娘	若水美子
近江屋の娘	長谷川裕見子
別の娘	中原ひとみ



慶応四年一月、徳川將軍慶喜の大政奉還は成ったが薩摩藩長州藩は幕府勢力を根底から破壊することにより、維新は達成するとして、大阪にあった慶喜に対し、辞官納地を要求した。

幕府側諸藩は激昂し、薩長を退けんとし、慶喜上京を名目に出版入京せんとした。

かくて鳥羽伏見街道に新旧両者の砲声は響いたのである。

### ◎同 街 道

戦すんで、死のような静寂に占められた道には、死屍累々として武器が散乱している。

砲弾にうちぬかれて、ボロの様になった三葉葵の旗印が泥にまみれ、地にへばりついている。

死体の一つが、ふと動き出して、刀を杖にやっと立上る。

「薩摩ッぽの大馬鹿野郎！」

と、声をふり絞り叫ぶが、再び力尽きて、バツタリ倒れる。

### ◎薩摩屋敷の表

門に「薩摩屋敷」と大書した標札。

T 江戸。

その門に、筒袖、薩摩紵の野暮臭い田舎侍が二、三人肩で風を切って入る。

と、その後に、バラ／＼と小石が飛んでくる。

### ◎道

江戸ッ子が五、六人、石を投げている。

そして口々に

「薩摩ッぽの馬鹿野郎ッ。」

「芋侍！」

と威勢良く叫ぶが、屋敷から出て来た侍共に「こら！」と一かつされて、蜘蛛の子を散らす様に逃げる。

### ◎江戸の夜

中天に皎々たる月。

その下に眠る江戸の町。

### ◎土 手

「えんはい」「えんはい」と掛声にダブって走る駕籠昇の足。走る足、足が走る。

それが乱れ、入り乱れて次の場面へ。

### ◎境 内

観音堂らしいものがある。こんもりとした木立が墨絵の様。急いでやって来た駕籠がピタッと止る。

先「おっと、後棒ここで店を拡げるか」

後「そうだな？」

と見廻して人影一つないのを見届けると

後「よかろう」

トンと駕籠を下ろす。

先「おい柳橋のお銀姐さん、用があるんだ。一寸駕籠から出ておくんせえ」

押しつける様にいうと、垂をパツとめくってスクツと降り立った江戸前姿の粹な女。芸者のお銀だ。

「おや／＼今夜に限って、馬鹿に威勢よく走るとしたら、これは

一体何の真似だい」

ひるむ気配もなく柳眉を逆立てる。

後「へへ、何の真似って、大方見当がついているだろうぜ。痛い目

を見ないうちにあっさり、諾と云っちゃアくれまいか」

「何を世迷い事云ってるんだね、一年前迄は、姐さんに駕籠に乗って貰う丈でも有難くて冥利が尽きると云ってたのは、何処のどいだい」

後「こりゃ御挨拶でござんすネ。柳橋でも一番物判りの良いといわれるお銀姐さんは、一体、今日の御時世を何と思ってるんですネ。

今年の正月、上方の、鳥羽伏見の戦争とやらで、さんざんに將軍様が打破られてからというものは、徳川將軍三百年来の御威光は全くと地に墜ちて、斬取強盗付火はおろか、欲しい女は自由にしろと有難い御托宣が下りている、雲助様万々才といたい御時世を知らねえのかい」

と得意で捲し立てるのを引取って

先「その通り。姐さんさえ諾といえ、俺達二人でさんざん可愛がって、堪能させてやる事は受合だ。尤も雲助なんぞは肌が荒くて厭だと云つても、こちとらにや、こんなものまで用意してあるんだ」と懐より一卷きの縄と、二本の手拭を出してお銀に見せる。

お銀は思わずハツとする。

先「だがよ、それでも下手にシタバタすると、その白い喉先に手がかかるかも知れねえーぜ」

二人でせいぜい強面で凄んだ。

お仙は、とっさに頭の簪を抜いて逆手に持ち身構える。

「ふん、黙っていりゃ、利いたご托を並べやがって、將軍様の弱身につけ込んで、いろ



んな悪事を働くなんて、犬畜生にも劣るけど、ものだよ、そんな野郎に、誰が、死んだって自由になるものか」  
先「じゃ、どうしても俺達二人を亭主に持つ事は嫌だっただな——後棒、仕方がねえ、早えとこ荒療治だ」  
後「合点だ——。さあ、この阿魔」

二人餓狼の様に、お仙に飛びかかる。

in k



中天にかかる月に雲がかかる。

やがて、雲から月が出る。

地面に落ちてゐる簪、櫛、引っくり返つてゐる吾妻下駄。

そして、その近くに後手に縛られ猿轡を嵌められたお銀が、無残に転がされて腕に付いてゐる。

その姿を、淫らな目付でシゲ／＼と覗めてゐる駕籠舁。

乱れた裾。くびれた腰。縄で一層ふっくらした胸。そして頬に喰い込んでいる猿轡。

二人は、涎を垂らさんばかりに、それ／＼胸元と裾へ手を入れ様とすると「勇ましい事をやっちゃよるの——」

と太い声に、ぎよ／＼と跳ね起きる。

見ると粗末な衣服の武骨者らしい一見して判る田舎侍が立っている。

先「あっ野郎！」

後「うむ、邪魔するか！」

など口々に喚いて、息杖拾つて打かかるが、あつと云う間に二人は、息杖をあべこべにとられ、脾腹をうたれて引っくり返つて仕舞う。

侍は、倒れてゐるお仙を抱き起して猿轡と縛しめを解く。

侍「えらい目に遭われたですな」

縄を解かれて、ホツとした様に衣紋を急いでつくろつていたお銀は、侍の言葉になまりのあるのを聞いて、一瞬、引き締った顔になる。

「あの、ぶしつけに、つかぬ事をお伺いしますが、御侍様は九州薩摩藩のお方では？」

侍「左様、三田にある薩摩屋敷に住んでおりますと」

とたんにお銀の態度と語調が、ガラリと変る。

「矢張りね……、それではお侍様、もう一度妾をもとの様に縛

つて、猿轡も嵌めて下さいな」

「何だと？」

侍は吃驚する。

「妾は、何も、お侍さんに助けてくれと頼んだ訳ではないんですからね……」

「何を、ば、ばかな？」

面喰らつた侍の様子を、鼻先で冷笑して

「えゝ馬鹿で結構ですとも。妾はこう見えても、江戸っ子ですからね。徳川様の御恩は死んでも忘れない江戸の女なんですよ。その徳川様を滅ぼそうとする薩摩ボの情なんか、受け度くありませんよ。（と、自分で手を後に廻し）さッ、もと通り、縛つて貰いましょう。猿轡もキチンともと通りにして貰いましょう」

侍は呆然と、お仙が身を摺り寄せるのを見詰める。

#### ◎薩摩屋敷の一室

机をはさんで椅子に坐つてゐる益満休之助と最前の田舎侍、平野半次郎。

益「ハツハツハツハツ。それは面白い……」

半「益満さん、笑い事でない。我々薩摩の者がこれ程迄、江戸人に嫌われているのは、一体何故です」

半次郎、きつとして膝を進める。

益「ハツハツハツ。そうむきになるな」

と、次にふつと調子を変えて、

益「貴公、わしが去年、西郷さんから頼まれて打った江戸騒がせの大芝居を聞いた事はないか？」

半「江戸騒がせの大芝居？」

満「うむ。貴公は最近九州より出府されて来たので知らぬのも尤もだが、我々の目的は云う迄もなく幕府を倒し、天朝の御世に返す事にある。所が機を見るに敏な徳川慶喜は昨年先手を打って大政を奉

還した。然しな、それだけでは新しい日本の黎明は来んのじや。是が非でも幕府を怒らせ、天朝に対して飽く迄謹慎の風ある慶喜に剣をとらせねばならん。それには方法も種々あるが、我々は西郷さんの依頼により、江戸の治安を乱し幕府を怒らせる事にしたのだ。其処でだ、我々は手分けして関八州に流言を放った。即ち、幕府は此度、窮民救恤を思い立って、江戸の米倉を開放し、且つ市中の大商人に命じて金品を出させる事になっているとか、幕府は長州征伐の為、兵を関西に送り江戸の警備は全く手薄だから、強盗なり放火をするのは今だというようにふれ廻ったのじゃ。それがまた面白いほど利いた。噂というものは輪に輪をかけて拡がるというのが本当じや。関八州の浮浪人や無頼の徒は、いい御時世に廻り合った、江戸へ行けば押込みだらうが、強盗だらうが勝手に出来る。金も貰えるし米もただで食える。そればかりか、女郎芸者は勿論の事、武士の娘や町娘でも、腕ずくで自由に出来ると、まあこんな噂になってぱつと拡がった次第だ。それから江戸は、強盗が横行する、放火がはやる、斬取と火事のない晩はないと云って良いくらいだった。首一つ落ちぬ日はなし江戸の秋。という落首まで出た位、市民は恐れて昼も戸を鎖し、夜もおちおち眠られぬ有様だった。市中取締の町奉行酒井右衛門尉が必死になって、秩序の回復に努めたが……今もってどうして仲々のこと。我々も薬が利き過ぎて些か戸まどいした形じゃったよ、ハツハツハツ」

得意げに話す益満を、半次郎は段々不快な色を浮かべて聞いていたが

半「益満さん。御話し中ですが、江戸騒がせと云っても目的は幕府を怒らせることに在る以上、江戸市民の苦しみを少しでも小さくさせようとするのが武士の情けと云うものでありませんか！」  
やゝ激した様に机を叩くと  
益「ほう！」

目を睜るようにして

益「おれは、目的さえ成就すれば、それで良いと考えるし、又大事の前の小事とも考えるのだが……」  
半「拙、拙者は異論で御座るッ。」

益「ハツハツハツ。すでに済んだ事を今更いっても始まるまい。然しな、これがやかで暮の二十六日、この薩摩屋敷の焼打となり、京では明けて正月三日から六日へかけての鳥羽伏見の戦争の口火となったのだぞ！」

極め付ける様にいう益満。だが何かまだ割り切れぬ表情の半次郎。

#### ◎夜の町（夜）

軒並の家は大戸を下している。

拍子木を持った火の番が、歩いている。

#### ◎両替商近江屋の店の前

そのくぐり戸が明いている。

火の番が、その明いた戸を見て、はっとした様に立止る。

#### ◎家の中

寝巻姿の家人が縛られている。

拔身を下げた五人の覆面がいる。

その中の一人は、後手猿轡の娘を横抱きになっている。

覆「俺達は薩摩の御用盗のものだ。軍資金調達の為、娘を連れていく。」

#### ◎家の前

逃げ様とする火の番。と

ばら／＼飛び出した覆面が、有無を云わさず叩き斬る。

断末魔の悲鳴に、野犬が応ずる様に吠え始める。

#### ◎呉服商遠州屋の前（夜）

くぐり戸が外れている。



猿轡の娘をさらって、出てくる五、六人の覆面。

◎道（夜）

別の娘を担いで走っている覆面。

◎薩摩屋敷の中

一室で益満に突っかかっている半次郎。

半「益満さん、あなたは本当に御用盗を知らないと言うんですね」

益「うむ。近頃、江戸市内を荒している娘さらいの御用盗などは知らんな」

半「然し益満さん、聞く所によると去年、この薩摩屋敷より、御用盗が出たというではありませんか」

益「うむ。去年は確かにこの益満が御用盗を出した。それは前にも話したとおり、幕府を怒らせる為に江戸を攪乱せしめたので、我々の御用盗は決して何処へでも、やたらに押し込んだというのではない。私欲を以て人民の財貨を強奪するを許さず、婦女子に手を付けるを許さず——と云う二項がちゃんと厳守されて、幕府に武器を売り込む豪商とか、軍資金の用達融通をする幕府の御用商人に限られたので、隊を堂々と組み、他の財貨には手を触れず、いわんや娘を奪うなどという大それた真似はしておらん」

半「とすると、今の御用盗は偽者と云う事ですか？」

まだ、疑念の消えぬ半次郎

益「平野君、この益満を信じ給え！」

その時慌だしく取次ぎの侍が入ってくる。

侍「益満さん。今表門へ、江戸市内見廻組と称する旗本共が二、三十人血相を変えて抗議を申し込んで来ていますが……」

益「何だと、見廻組だと、よしすぐ行く」

◎表 門

薩摩藩士と旗本共が対立している。

益満と半次郎やってくる。

旗「しからば、どうあっても、今年の御用盗は、知らぬと申されるか！」

益満進み出る。

益「左様、何かの御間違で御座ろう。無法な云いかけりは近頃迷惑千万」

と相手の殺気立つのを冷かに嘲笑する。

旗「おのれ！」

刀の鯉口を切らんばかりの旗本共。

益「第一その御用盗が、此の門から出て、此の門へ入ったというのを見届けた者が御座るか、ハハハ、それも見届けずに、どうして御用盗が薩摩と判る。然し、どうしても喧嘩を売りたいと申すなら、当方も作法を考えて応待仕ろう。武士は武士らしく刀に掛けて御答えしよう」

剃刀の如く、語半かばに鋭く云い放って身構える。

殺気が充滿する。

カツ、カツ、カツ、

と蹄の音と共に走ってくる一頭の馬。

乗り手は、江戸町奉行酒井左衛門尉。

酒「待て！。しばらく待て！」

と大音響に叫ぶ。

◎質屋伊勢屋の前通りの角（夜）

一方の道から平野半次郎歩いてくる。

角をまがろうとして、ふと、伊勢屋の上手下手に分れて往来を見張っている二人の黒覆面に気付く。咄嗟にパツと角へ身を寄せて、様子を窺う。

息を凝らして見付めている半次郎。

（おや？）

という様に目を瞪る。

えんはい！えんはい！と一挺の駕籠が伊勢屋の方へやってくる。

気が付いた二人の黒覆面は、寄って何か耳打ちしている。

駕籠が伊勢屋の前を駆け抜け様とした時

A「待て！」

ばら／＼と黒覆面が飛出す。

とたんに

「わあッ、出た！」

と叫び乍ら、駕籠かきは一散に逃げ出す。

A「おい駕籠の中の者、これへ出る！」

と、はらりと垂を刎ねて、横ざま滑べり出たのは、お高祖頭巾の女、しなやかな身のこなし、夜目にも素人女と見えぬ。

「何か御用でござんすか」

女は、夜の黒覆面に怯む色なく

静かに訳り返す。

A「何処へ行く？」

「家へ帰るんですよ」

A「芸者か？」

「はい、柳橋のお銀と申します」

聞いて半次郎は思わず苦笑する。

A「詰らん所へ来たものだ……どうする？」  
と連れを振り向くと、



B「後がうるさい、斬れ」

「あ、何をなさるんです」

お銀はシリ／＼と退って、駕籠に身を支える。

A「因果と諦めろ！」

白刃を振り被った覆面。



半次郎は、咄嗟に手頃の石をつかんで、パツと礫をくれて、飛出す。

A「だ、誰だ？」

よろめき乍ら嚇と怒鳴る覆面。

「失礼。通りすがりの薩摩ッぽです。無益の殺生、許してやって下さい」

と素早くお銀を背に庇う。

薩摩ッぽの言葉にぎよッとした覆面、それも一瞬で、激しく半次郎に斬り込んでくる。

半次郎も無言の抜打ち。

二人の覆面は、それぐ、右左に突んのめる様に泳いで地に倒れる。

「その侍、我々の邪魔をするな」

と、ふいに声がかかる。

見ると何時のまにか、くぐり戸の前に三人の覆面が立っている。

先頭の首領らしき者は、手に短筒。

後の二人は、伊勢屋の娘らしき女に、猿轡を嵌め、後手にしてあゝるのを抱いている。

「ほほう、今評判の御用盗ですな」

半次郎は、斗志を燃やし乍ら、ニコツと微笑した。

短筒は、冷く半次郎の胸元を狙っている。

「行け！」

「そうですか、飛道具にはありません。一先ず引上げますが、いつかは、薩摩をかたる、偽の御用盗の正体を暴いて見せますぞ」

「行け！」

短筒は又、顎をしゃくる。

「では失礼する——そこまで一緒に参ろう」

半次郎は刀を納め乍ら、お銀を振り返った。そしてわざと鄭重に

会釈して歩き出す。

#### ◎夜 道

半次郎とお銀歩いている

「又、逢いましたな！」

「えゝ」

照れ臭そうなお銀。

「いつも物騒な夜道ですね」

「えゝ、お座敷が遅いものですから……」

と身を寄せる素振り。

「家まで送って下さいますか……」

「薩摩ッぽは嫌いな筈ですが」

「でも、今夜は何だか怖くて……」

「そうやたらに出来ませんよ」

「ね、お願い」

お銀の手が、フと半次郎の手をつかんだ。

#### ◎柳橋の料亭

掛け行燈に「鮎忠」とする。

#### ◎一座敷

妓達が交って賑かな酒席。五人の侍達。

一番の上座には、三葉葵の白面の侍。

襖が開いて、内儀が入ってくる。

「松平の殿様、森田屋さんが参りました」

「うむ。通せ。これ、妓達は下って居れ」

ぞろ／＼と引退る妓達と、入れ代りに森田屋剛造入ってくる。

#### ◎別の一室

半次郎一人で飲んでいる。

襖が開いてお銀が顔を見せる。

「やあ！」

微笑する半次郎。

お銀も、鮮かな笑顔を見せる。

白襟に黒の裾模様、その裾を長く引き、燃え立つ緋の長襦袢を艶  
冶とこぼし、淑やかに横手の座につく。

「酒は飲めんと、仰有っていたのに良く来て下さいましたネ」

「うむ、自棄七分、少し飲みたくなつてな」

「まあ、何の自棄で？」

「薩摩を騙る、娘さらいの御用盗が、未だに判らん、あの晩以来、  
足を棒にして夜道を歩いているのだが、一足先に町奉行配下の者が、  
とう／＼何か掴んだらしい」

### ◎前の座敷

白面の侍の話を聞いている侍達。森田屋剛造。

一様に、緊張の面持ち。

「將軍家には、先般来、朝廷に対して恭順の意を示されているの  
に、憎くむべくは薩摩、套竜の袖に隠れて私腹を肥やさんとする。  
さらば薩摩の奸策を根本から打破る為、是が非でも一戦し、薩摩を  
追いはらねばならぬ。そして天下を清むるの火、浄火となつて天に  
騰り、徳川の天下は万代となる。その為には精鋭な武器、堅牢な軍  
艦を外国から買入れる為、百万両の軍用金が必要である。その軍  
用金を借入れる為、余は責を一身に負う積りで、御公儀の名を持  
つて、オロシヤ人から一先ず金を借り受ける覚悟を定めた。そのオ  
ロシヤ人とは、貿易の為、しばしば函館を訪れるオロシヤの船長だ  
が、余の申出を承諾した代りに、日本の美女を五名、人身御供に出  
せとの事じや……」

その時森田屋剛造ハタと膝をうって

「それでは、近頃お江戸に流行御用盗は、殿様の仕業で……」

「これ！声が高い。」

厳しく刺した白面の侍。

「声が高い、仮にも前將軍家を叔父に持つ、松平吉之丞じゃ、余人  
に知られれば、徳川の名に傷が付く……」

と、四辺を窺うと、さっと顔色を変えて立上った。

ガラリと荒々しく襖を開けると、其処に水飲を盆に捧げて立つて  
いる芸妓。

お銀だった。

### ◎料亭鮎忠の前

松平吉之丞、見送りの内儀に何かいい含ませている。

「よいか、お銀の身がらは当分の間、余があずかる。他言は無用だぞ」  
と、おどおどする内儀の手へ、金包みを握らせる。

一挺の駕籠を囲んで侍達、森田屋がいる。

駕籠には縄が掛けられている。

垂の間からお銀の袖が見える。

### ◎駕籠の中

顔の半ばを覆う猿轡。後手で腕しているお銀。

### ◎歩いている一行。

森「殿様、丁度良い案配じゃ御座いませんか。お銀を入れて五人  
に……」

松「うむ」

森「で、ほかの四人の娘は？」

松「余の邸に閉じ込めてある。明日の晩にでも、其方の持舟で函館  
へ頼むぞ」

森「へい。万事抜かりは御座いませんが……一体お銀の奴は、何だ  
って立聞きなどをして居たんで御座いますよう」

松「うむ。少し気になる、一責めして見るが良い」

森「へい」

と森田屋ニツタリする。

◎鮎忠の一室



酔って寝ていた、半次郎起上る。  
手を叩くと、内儀がくる。

「お内儀か、お銀さんはどうした」

「は、はい……」

と狼狽して

「さっき、か、帰りました」

「帰った？」

不審そうな半次郎。

ふとお内儀の素振りに、鋭い目を向ける。

### ◎松平吉之丞の邸

その長廊下。

お銀、縄尻をとられて、歩かされてくる。

### ◎その一室

猿轡の四人の娘が、柱につながれている。

その中に荒々しく突き飛ばされるお銀。

暫く畳に頬をすりつけると猿轡がやっとずり落ちる。

口から小巾れを吐き出して

「娘さん達は、御用盗にさらわれたのかい」

一様に、こっくりする娘達

「そうか、畜生、矢張り……」

と唇を噛むお銀。

### ◎鮎忠の一室

お内儀を口説いている半次郎。

「頼む、お内儀。云ってくれ。お銀さんを連れて行ったのは誰だ？」

「？」

お内儀、口を一文字に結んでいる。

### ◎松平邸の一室

娘達と、お銀のいる部屋へ森田屋へ入ってくる。お銀の猿轡が外

ずれているのを見て

「ホウ柳橋のお銀姐さんには、縛り方がゆるかったとみえるな」

と咽喉にかかる手拭をゆっくりほどくと、畳に吐き出された小布

れを拾う。

「うむ、これでは小さすぎるな……」

と呟いて、フと、お銀の裾に手をやる。

ハッと目を閉じて、突ッ伏すお銀。

それをニタニタし乍ら、わざとゆっくり裾を開き、長襦袢をまく

って、湯文字を掴み出すと、ビリビリと引裂いた。

「お銀、顔を上げる」

俯ッ伏しているお銀の襟上をつかんで、無理に顔を上げさせよう

とする。

そうされまいとして抵抗するお銀。

丸い肩が半分程、覗いてくる。

「ち、畜生、何をするんだ」

あまりのしつようさに、とうとう負けぬ気のお銀、ぐッと上体を

起こして森田屋を睨むと

「お銀姐さんも猿轡はお嫌いに見えるな」

薄気味悪く笑う森田屋。

そしてすきを見て、お銀の口に引裂いた湯文字を無理矢理に押し

込むと、その上から手拭を三つ折にして、息もつまれと縛り上げた。

### ◎鮎忠の一室

半「お内儀、お銀さんを連れていったのは、御用盗に関係ある者に

違いなんだ」

はっとした様に顔を上げるお内儀。

### ◎松平邸の一室

「どうだお銀、白状するか？、何故、殿様の話を立聞きした。知らせたい相手がいるんだろー」

「……」

お銀はかぶりを振る。

「かくすな、お前の目が、白状しているよ」

森田屋はニンマリ笑った。

「然し、どうしても云い度くないのなら、無理にはきかぬよ、お前の肌聞いて見るぜ」と、ドンと不意にお銀の肩を突けば、

「うー」

と花模様を裾が描いて倒れるお銀。

「へ、へ、へッ」

森田屋は涎を垂らさんばかり。

◎道

駈けている半次郎。

◎一室

森田屋に帯の端をとられて、ごろごろと畳を転がっているお銀。

◎道

駈けている半次郎

◎一室

帯も、腰紐も散って、無残にも胸から下、すっかりはだけているお銀。

湯文字をつかんでいる森田屋。

◎汗を拭つて、必死に走る半次郎

走る足。

半次郎の走る足。

◎お銀の足が必死に膝を固くしている。

◎走る足

◎湯文字を引剥ぐ森田屋。

咄嗟に、必死に俯ッ伏すお銀を、髪を掴んで仰向けにしようとする森田屋。

テラテラした悪鬼の様な形相。  
目をそむけている四人の娘達。

「どうじゃ、お銀、まだ云わぬか、フッフ、隣りの部屋にはな、木馬が待っているのだぞ」

喘ぐ様な声。

◎隣室。

荒削りの木馬が無気味に置いてある。

◎松平邸の前

やっと半次郎が駈けつける。

◎隣室

木馬に乗せられて、身を突ッ伏しているお銀。

猿轡の下から、苦痛の呻きが洩れる。

森田屋は、木馬の横に立膝して、お銀の片足を掴んでいる。  
かすかに右手が動いている。

右手に握られている鳥の羽毛。左手で足首を掴んで、足の裏を羽毛で、くすぐっているのだ。

と、慌だしい物音にギョッとして立上る森田屋。

◎邸内

取巻く白刃の中を、進んでくる半次郎。

「お銀さん！」

と、立廻りの合間に叫ぶ。

次々と襖を蹴破って、やっと娘四人の部屋へくる。

「おっ、今助けるぞ」

と、二三人の侍を叩き斬って、娘達の縛しめを解く。  
猿轡をかなぐりすてた娘の一人が

「隣りにも、女の方が」

と半次郎に教える。

半次郎、頷いて、入って見ると



「お銀さんか？」

と、走り寄ってお銀を木馬から降ろし、縛しめ猿轡を解く。

再び、半次郎は刃の中に斬って入り、激しい立廻りが続く。

或る、襖のかげより、松平吉之丞の短筒が半次郎を狙っている。

ふと、それを見たお銀、簪を抜いて夢中で投げれば、その拍子に

狙いは狂って銃声だけいたずらに、邸内に響く。

と、馬の蹄の音と共に、江戸町奉行酒井左衛門尉門姿を現わす。

大喝一声。

「上意！」

と上意書を高々と捧げる。

◎薩摩屋敷の一室

益満と半次郎が話している。

益「平野どん、おはんの力で皆うまく、まとまり申した。松平吉

之丞は閉門、森田屋は遠島。官軍が遠からず、江戸人に迎えられて

江戸城に錦旗を押し立てるであろう」

半「すべては時勢の流れです」

取次ぎの侍くる。

侍「平野さん。柳橋のお銀と云う女と、近江屋の娘、伊勢屋の娘

遠州屋の娘、そのほかもう一人、合わせて五人の美しい女子が逢い

度いと来て居りますが……」

益「ハツハツハツ、平野どん、薩摩ッぽが、これ程江戸の美人に

好かれる訳は、一体何故でござす、ハツハツハツ」

苦笑する半次郎。

益満の笑い、一段と高く。

(終)

## 臨時増刊号「責小説特集号」大好評発売中！

(表紙色刷、本文中質紙使用)売切れぬうち即刻お申込を！ 定価一部二百円

「責小説特集号」は主として昭和二十七年度

に発行しました本誌の中から悦虐作品とし

て好評を得ました作品二十篇を選び出し全

部新しく挿画を描いて再録したものであり

ます。いずれも力作揃いばかりで、この特集

号一冊によって昭和二十七年度発行の本誌

の主要な作品を網羅していることになりま

す。八葉の口絵は内容から取材して、滝れい

子氏、北原純子氏の二人を煩して描いて頂

いた力作ばかりですから、これだけ独立し

ても十分に観賞価値のあるものと思えます

### 巻頭口絵

拷問 (片矢薫・作)

滝れい子画

吸血女流画家 (岡田咲子・作)

北原純子画

ある奇術師の恋 (吉丘垣根・作)

滝れい子画

鬼兵衛刺青異譚 (二俣志津子・作)

滝れい子画

遊女葦水の最期 (片矢薫・作)

北原純子画

縛られた妻 (早川新一郎・作)

滝れい子画

巫女屋敷の責絵巻 (岡田咲子・作)

滝れい子画

読切傑作責小説

拷問 (特高刑事の惨虐行為)

片矢 薫

賭博 (淫奔マダム狂騒曲)

二俣志津子

巫女屋敷の責絵巻

岡田 咲子

老いらくの恋異聞

復讐のドラマ

鬼兵衛刺青異譚

吸血女流画家

ある奇術師の恋

惨虐戦慄の徴用女工

遊女葦水の最期

囚 衣

奴 隷 妻

悪魔と口紅

縛られた妻

廊の灯影

M と S

責 苦

記 録 係

赤に憑かれた男

榛ノ木参一

片矢 薫

二俣志津子

岡田 咲子

吉丘 垣根

片矢 薫

古川 裕子

片矢 薫

桂 牧次郎

岡田 咲子

早川 新一郎

片矢 薫

岡田 咲子

竹谷 十三

岡田 咲子

上村 久秀雄

# 現代マゾヒズム芸術時評 原 忠正

## 復刊第五十項

米映画「Z旗上げて」アン・フランシス他 所謂、戦意昂揚映画の一つで、第二次大戦の直前から末期に至るまでの間、米海軍宣伝部員と、看護婦部隊との恋愛事件を中心にして風俗記的に描いた作品である。

アン・フランシス扮する看護婦の中尉に恋する水兵のエピソオドが特殊な興味をひく。階級によって逢瀬も儘ならぬ此の二人のやりとりが一般的にマゾヒスティックな心理に迎合して、特有の魅力を発散していることは注目に価する。このアン・フランシスという女優、デビウ当時——「嵐を呼ぶ大鼓」——からマゾヒスト向きの役柄を買っていることを付言しておく。

## 復刊第五十一項

米映画「愛情の花咲く」エリザベス・テイラー他 極めてロマンチックな映画。モンゴメリ・クリフトが共演する。古来支那から移植されたと伝えられる「雨の降る樹」は、幸福を齎らすと信ぜられている。クリフトとテイラーの夫婦はその樹を求めつづけ

る。時は南北戦争の勃発期、有色人種問題に端を発したこの戦争中、テイラーは有色人種との混血児であるというコムプレックスに発狂してしまう。遂に夫婦は愛情こそ雨の降る樹——レイントリー——であったことを知るのであるが、この作品の中で、白色人種の女性の中の美女と騒がれているテイラーが混血児を演るというのも一寸変ではあるが、それよりも、有色人種に対する白人の差別観念が中心主題となっている点は特に注意すべきである。ジャイアントの如く烈しい描写はないが、オブラートに包んだ劇薬ともいうべき一篇である。

## 復刊第五十二項

東映映画「樹曲馬団の娘」月丘千秋他 戦後で始めてのサーカス映画と銘打った例の東映スコープ。「空中ぶらんこ」の二番煎じを狙ったのであろうが、まずまずそんなに誇るべき作品でもあるまい。但し女猛獣使いや、象使いが場面的にあるのでごく簡単に茲に紹介するわけである。——二月二十二日封切——

## 復刊第五十三項

ソ連「モスクワ・国立サーカス」

来日 — 東京新聞 —

モスクワよりのニュースとして、本年六、七月号にモスクワ国立サーカスの訪日が伝えられた。曲芸及曲馬総員五十名というから大がかりなものである。「猛獣使いの手記」の著者ボリス・エーデル（因に麻生保氏が、氏の時評で触れたがあれは男女の別が逆である。ボリス・エーデルは男であって女性ではない。氏は恐らく同書のエーデル夫人の写真をみて誤ったのだと思う。同書の本文でエーデル夫人についての記述は甚だしいし、多くエーデル氏の助手となったのはタマラ・ブスライエーヴァ女史であることが一読すれば判る筈である）が団長となつて来るのであるが女猛獣使いが来るか否かは判らない。筆者は早速タス通信東京支社と、モスクワのトルード出版局へ問合せたが、未だにその返事を貰っていない。しかし、もしイリナ・ブルヂーモヴァ、タマラ・ブスライエヴァの何れかが来日するとしたら、これは見逃せないものである。猶もう一人の高名な女調教師マルガリタ・ナザロヴァ女史は虎を使うのが有名であるが、記事にライオン六頭の記載だけであるから、女史は恐らく来日すまいと思う。

猶犬使いの女性調教師と、ダンタンの女性騎手の来日は恐らく間違いない。いずれにせよ、私は態々モスクワまでゆかねば到底観る事が出来ないと諦めていた国立サーカス



の来日を知って驚喜しているわけである。映画によってしか知ることを得なかった伝説的な曲馬団の訪日は正しく本年の大きな話題であろう。

#### 復刊第五十四項

#### 出版物「強制收容所の十三ヶ月」

ヴォルフガング・ラングホフ著

舟木重信、池宮秀意共訳 創芸社刊行昭22

屢々語られてきたナチス矯正收容所——反国家分子にナチス精神を叩きこむ為の收容所——の十三ヶ月を描いた実話小説。ラングホフは俳優であったが、大した理由なく、收容所に入れられた。人間抹殺のこの工場の毎日が、手に取る様に書かれているが、如何にせよ、戦前の著作であることと、男子收容所についての手記である為に、サディスチンの描写は全くない。ドロテア・ピンツ、イルゼ・コッホ等の典型的な嗜虐的女性の生るべき素地を知ることが出来るに留まる。

私達は革の鞭の代りにゴムの鞭が（棍棒と訳しているが、他の典拠から推して、鞭であった場合もある）使用されていた事を知ることが出来、征服者達の言葉が全く対蹠的であったことにも注意を喚起させられる。私達は又、同書の末記によって同じ著者が「沼地の兵士」という收容所ものの作物を刊行していることを知り、他にもブレーデル著「試練」ビルリッゲル著「保護検査者八八〇号」ヒンリクス著「第七国立強制收容所」等の著作のあることを知る。この中ビルリッゲルが果

して「残虐なる女性達」の作者ヨハンネス・ビルリッゲルであるか否か判らないが、之等が何れも未訳の作品であることは残念である。最後にスイスに脱走した著者が記しているハイネの詩は、本書の性質を鋭く示していると思われるので引用しておく。

夜更けて 独乙を想う。

予は寝ねやらず

我が眼 冴えわたり

熱涙の溢るるを如何にせむ。

そして云う。

私がドイツを愛するならば、何故に私はこの様な報告を書いたのであろうか。今日ドイツで起りつつあることは、ドイツそのものの出来事なのである。今日祖国愛を、ドイツ精神を謳歌する人が、殺人、裏切等あらゆる野蛮な行為をその戦いの武器にしている人が、ドイツの誇るべきドイツ人だとされているのである。時は、その是非を証明するであろう。

確に、ドロテア・ピンツは誇らかに犬の鞭を以てて女囚に君臨した。イルゼ・コッホは男囚の中に馬を馳り、男囚を虐め殺した。時はその理想的な環境を提供することによってよき夫婦、好ましい人道主義者が、よく長靴で、人を踏み殺したり、獣の如く人に革鞭を当て得ることを、又、彼女達が進んでそうしたことを証明した。今日、政治的な非力がドイツでのそうした力を妨げているが、私は同様の推測をすることによって、二つの大國でかくれたアウシュヴィッツやベルゼンが存在することを知ることが出来る。

時は、今日の総勘定の残が示す以上に十五年の歳月によって、その由来と経過とを明かに示したのであった。

#### 復刊第五十五項

#### 映画「第二世界大戦の真実」

映配配給 記録映画

前項に関連する映画である。「夜と霧」で禁止された收容所の一部、この作品の一部入っていると伝えられる。公開は二月二十二日より東宝系封切館にて。

殺人工場について、最早、語るべきことはない。人が人を如何に扱い得るか、その極根に於ける実写は、十分に鑑賞に耐えよう。

#### 番外追記

#### 「ベン・ユセフの妾妃虐待」

モロッコの首長ベン・ユセフの女奴隷処刑について、二、三の実話雑誌が、貴誌よりの転載らしい記事をのせている。サイの皮の鞭で打ち殺されるまで、二百数十の鞭をうけた美女虐待は、何方へも紹介する価値はある。

#### ・「世界神人育成会」の真相

旬刊シンニチ紙と、日本観光新聞の両紙が相次いで紹介した我国新興宗教の一断面。信者にネコがついていると云って、打ったり蹴ったり、性交を信者の前で営ませたり、それを司る神様が女装の三十男だったり。面白い要素は十分あると思われる。但し、記事の信憑性は余りありませんから、御注意下さい。

(以上)

# 強盗団？に襲われた若後家

岸 本 青 柳

『二十八日午前九時九時半ごろ大阪府泉北郡高石新町、会社員広谷雅さん（四三）方へ二十五、六歳の男が留守居の妻ツヤさん（四三）に刺身包丁をつきつけて二万四千余円を奪ったのち、ツヤさんにサルぐつわをはめ、身体を縛り奥の間にあった背広上下、レインコートなどを盗んで逃げた』との新聞記事は、×月二十八日発行、朝日新聞夕刊第二七三五一号の三面十段目中央に『高石町に強盗』との見出しで掲載されていたのを、丁度早い夕飯を終えた男女五人相集って、幹事宅で将棋や雑談を交わしていた奇談クラブの会員連が強盗事件の記事を、順送りに次ぎから次へと読んで、何れも意味深の

薄微笑を洩らしていた。中には、その記事も二、三度繰り返し熟読する者もいた。誰も口火を切る者もなく、唯だニヤニヤ笑いながらお互いの顔を見比らべるのみであった。稍々暫くしてから、伊藤月当番幹事が座に居並ぶ男女の顔を見詰めながら、伊藤幹事「どうだい、この新聞記事のように実地に演って見る気はないかナ……」と開口一番切り出すと、待ってましたといわんばかりに、真向に座を占めていた井口久次君が、ニコニコ笑いながら、いうのであった。

井口「僕もそう思っていたんだが今、幹事のいわれる様に一つ実験してみたらどうだ。しかし、いくらなんでも、強盗の真似は誰でも嫌だろうネ」

と幹事説に一応同意しながらも、その点では二の足を踏んだ。他の者は無言の行を続けている。幹事は自分が切り出した事なので、溜り兼ねたのであろう。

伊藤幹事「では、こうしたらどうだろうか井口君一つ、君が真ッ昼間にコッソリ会社から帰って、若い細君、而かも美人の細君を縛って、強盗の真似をする。僕等は私服警官や近所の人となり、君を捕えるという趣向の芝居を演ってはどうかだろう」

井口「僕に演って見ろというのかネ、これは痛み入る。だが縛られる役の君子が可哀想だ



ヨ

伊藤幹事「ソコだよ、細君に前以って知らせては興味が無いネ、これは無断借用、否、抜打ちに演る方が面白からう?」

井口「家内が後で僕を恨むだろうネ、第一、近所に知られては不味い、だから次ぎの土曜日の晩あたりにして貰えないだろうか、夕飯も入浴も終ってラジオを聴いているノンビリした頃が可いんじゃないか、僕も縛られても可いから、君らが外から忍んで来て、僕ら夫婦にサルぐつわ、縛りを演ってくれた方が、家内も真ものと思つて一層真実味を与えるだろうと思うんだが……」

などと二人の話を熱心に聞いていた森口亀蔵が、ソレが可い可いと合槌を打って一人で張り切る。するとその側にいた浦田松恵という最近このクラブ員となつた三十四、五歳の銀行員の未亡人が、一膝乗り出して、

浦田松恵「妾で可かつたら、妾の宅をお使いになつたらどうでしょう。皆さんの顔継ぎにウンとゴ馳走しますから……」と勇敢に申し出る。

井口「ソレが可い可い、何でしたら僕と浦田さんと二人俳優になりますよ?」

松恵「ええ、そうして頂ければ——」

伊藤幹事「二人の八百長ではネ、どうですか」

井口「実演の日と時刻とを浦田さんに予告

しなければよいと思うが……」

伊藤幹事「浦田さん、いいですか」

松恵「妾の方は結構で御座います」

伊藤幹事「浦田さんの折角のゴ好意だからゴ馳走の方は遠慮するとして、某会員に明日秘密通牒テナものを出しましょうか、然し今晩の話合は、この場限りに願いたい」と念を押して、この話を打ち切り、また雑談に花を咲かせて、十時ごろ引揚げた。

その翌日、男三名の会員諸君へ伊藤幹事から秘密通牒なる一枚の騰写版刷りが配布された。その通牒を受取った会員連は小躍りしてその日、その時刻の到来を一日千秋の思いで待ち詫びるのであった。が、自ら被縛者を買って出た浦田松恵女史は一種不安やら楽しいやら何だか訳の解らぬ、焦燥の日を送っていた。幸い兄妹の子供は京洛の親戚に托して学校へ通学させており、宅では未亡人一人暮らしの気楽さから、朝晩の化粧に身を入れ、着物もなるだけ若作りで、背は普通よりも高いし、その上肌色は雪のように白く髪も黒く身体は常に香水と髪の香が漂い、一見二十四五歳ぐらいに若く見え、女盛りの甘い匂いに溢れている。色気もタツプリという艶姿、十数年振りだという長い秋雨が漸やく晴れ垣根に雁来紅や赤、白、桃色とりどりのコスモス、真紅の鶏頭が今を盛りに競い咲き、白菊、黄菊も蕾を開き、金木犀の香りも高く床しい、

春日山の麓の一見別荘のような一軒家の裏庭の瓢箪池の辺り、池と名付けているが、実際は長さ十間余、幅三間余の古風な泉水でありその山裾の松並木の蔭に、夕暗に紛れてジツと最前から待機する頰冠り男三人が、便所の粹な窓から洩れる電燈の明りを頼りに無言でその家の様子を窺っていた。手に手に懐中電燈を持ち、懐中には麻縄、緒縄、手拭などを用意しており、一見して俄か強盗らしい物騒な代物揃いである。降り続いた雨も止み、数限りない星の光が、キラキラ輝いている。連日の雨で泉水の水嵩も少し増していた。

夜の黒幕が下され、月が出ないので四辺は真ッ暗闇になって来る。長い秋の夜も段々更けて、真夜中の二時すぎ頃犬の遠吠えの止んだのを好機に、覆面の三人組はソロソロ腰を上げ、その家の裏縁戸袋の下から手を突ツ込んで、戸の下棧の施栓を外そうとしたが容易に外れない。詮方なく一人が腰をかがめて踏台となり、一人は介添役を承わり、一人はその男の腰から背中に登り、両手を延ばして小窓を開けにかかると、案外にも中から錠がかかっていなかったのを幸い、難なく二枚のガラス障子を開け、外側の黒竹枠を外してから便所内に侵入した。そして、外縁の手洗鉢前の戸のくぐりをソツと中から明け、外の二人を縁内に引き入れた。三人は拔足、差足、恰かも猫が鼠を捕えるような恰好で、懐中電

燈を照らしながら室内の様子を窺った。見ると表玄関側の四畳半の電灯が点っている。その光りで隣室八畳の間に床の方を頭にして一人の美人が寝ている。布団を額の上まで覆っている。その顔がハッキリ分らないが、此家の主人公、松恵女史に相違あるまいと、なおも凝つと様子を窺っている。と一人の偽強盗が右手にしていた懐中電燈を不覚にも、襖の敷居の上に落した。ハッと思うのと同時に室内の電燈がパッと消され、四辺は忽ち真ッ暗となった。三人は暗がりの中に互いに顔を見合わせていたが、手探りを合図に三人は忍び足で、一度に室内に侵入し爪先で布団の端を探って見たが、今まで寝ていた女の姿が消え失せ藻抜けの殻となっていたのに失望した一人は、早速電燈を点けて、室内を見廻わしたが女は勿論、猫の子一匹も見えないので強盗団?は落胆の予一匹も見えないので強盗団?は落胆の予

やら憤慨やらで、自身達の失策を棚に上げ、松恵未亡人の背信行為を口々に非難攻撃し始めた。それも何れも室内で立ったまままでカンカンになって怒っていた。

すると隣室から一人の若い美しい娘が現われ、強盗団?の前にキッチンと座り両手をついて、頭を下げ小さい声で、

から、妾にお留守居して下さいと言われまして、隣室に弟も泊って居ます。あなた様方がお越しになったのは、伯母さんがお帰りなされたのかと思ったんですが、どうも違うようなので恐ろしくなつて布団を被つて寝た振

りをしていました。けれど、お話のようでは物盗りでもなく、予て伯母さんから聞いていました、お心易い方々だと思ひまして失礼しました」

との意味を含んでのお詫び挨拶だったので





三人連れの一団は呆氣に取られたのであった。そしてこの娘に送られ表玄関から引揚げて行った。その時、表道路で一人が「伯母さんにまたお伺いします」と娘繁代に伝言を依頼してサッサと引揚げて行った。

一方、松恵女史はその翌朝帰宅して繁代から侵入者からの伝言を聞かされ、唯だ一言、

松恵「そう、それはどうも御苦労さま」

と簡単に応答しただけであったが、繁代とその弟秋雄には、手土産の柿を与え、二人を帰宅させたのは可かったが、その晩から松恵女史は夜もマンシリとせず、強盗団?の侵入を今か今かと待ち受けていたが、一週間を経過しても侵入者が現われないので、焦慮を半ば不安の日を送っていた。そして彼女は平常通り夕刻少し前に銭湯に入り、厚化粧して帰って来るのを日課にしていた。

松恵女史は十日間余も経った夕刻銭湯から帰り大鏡の前で紅白粉で厚化粧を施し青磁色の細かい白線の入った碁盤縞の袴(袖裏は白)に塩瀬の大柄帯を締め、淡水色の帯揚げ、緋の扱帯を用い、大柄牡丹の白襟長繻絆、紅厚絹のお腰を纏い、白足袋を履き髪は電髪的美装に、黒色のハンドバックを携え、程遠からぬ劇場に開演中の歌舞伎見物に出掛けようとして、今一度大鏡の前で化粧直しをして大鏡に赤い刺繍の覆いをかけた途端、その背後から忍び寄った一人の怪漢?が無言のままタオ

ルで美貌の脂ぎった彼女の口に猿轡をはめ、他の一人は繊弱な両手を高手小手にビニール縄で縛り上げた。また残りの一人は彼女の前から後から側面から幾枚かの写真を素早く撮影するのであった。

今度は猿轡、後手に縛られた松恵を荒くれ三人男が力を合わせて、押入から引ッ張り出した大柳行李の中へ押し込み、上向けに寝かせ腰部から下を上部に折り曲げ、顔と両脚とを接触せしめ上蓋をしてから、別の細縄で大行李を十文字に括り、生きた人間を行李詰めにし、裏庭の松の根元にエンサと運び、ここでも写真を撮る。その時、松恵の右の袂の端が大行李の外側に見せているところをまたパチリと写真に収めた。そして松恵を大行李から抱き起すと、行李の中に充滿していた女の脂粉の香りと、脂ぎった中年女の体臭とが一時に、男三人の鼻に何ともいえない臭覚を与えるのであった。

行李から引き出された松恵の顔は青白く、髪は乱れ額に幾筋かの冷汗を流していた。両眼をカッとにらんで恨めしそうな顔付で、はだけた着物の間から、ふくよかな乳房が上から少しく覗いていた。猿轡も縛り縄をも解かないまま、松恵の柔かい身体を側の松の根元に堅く縛り付ける。と横尻に座らせられた松恵の割れた白い両膝の間から、赤い腰巻が青苔の上にヒラリと見せ、身体を稍々前屈み

にして、白い襟足を見せた姿は絵にも画けない風情であった。この艶麗な姿をまた写真に取ってから、猿轡と縛り縄を解いてやったが、松恵は何ともいわず両手を腰の辺りに廻わしてホッと一息を入れているようであった。

荒くれ強盗団?も銘々手拭で冷汗を拭いた後、最後の責めに取りかかった。一人は松恵の後から再び厳しく猿轡をはめ、二人は女を立たせて数間離れた大の字型の太枝のある檜の木の下に連れて行き、二人の男が下から六尺ばかりの太枝へ、左右に両手を拡げさせ二人がかりでその太枝への松恵の両手を堅く縛り付け磔にした。女は少し俯向き両足の踵を爪立てにして苦痛に堪えている。行李から引き出された姿のままの乱れ髪、胸はだけに加えて、白い両足が左右に少しく開いたが、殆んど直立の姿勢であり、長繻絆の裏の桃色を覗かせており、帯揚げも前から右側で下に垂れている。このなまめかし、姿に魅せられたのか、一人の男が松恵の腰部を蹴り上げたので、松恵は顔をしかめて強い痛さに身体を左右に揺り動かす。これを眺めていた一人の男が両手で狼狽して之れを制止する。また他の一人は、磔姿の女の艶姿を写真に二枚収めやっと、責めの実験研究を終って、猿轡と両手の縄を解いてやり、慰めながら室内に戻って来た。が、女は矢張り無言のままに捌けた着物や、崩れたお化粧を直してから、お茶と

お菓子を三人連れの強盗団?の前に差出すのであった。

男達も無言でお茶を飲んでから、初めての男の一人が笑顔で彼女に感想を聞き出した。

男会員「奥さん、強盗の真似なんかして済みませんでした。だが座敷で縛られても、柳行李に入れられても、磔にされても一言も何とも言われなかったのは何故ですか」

松恵「猿轡されていたので声を出すことも出来ませんでしたのヨ」

男「最初後手に縛られた時は?」

松恵「まさか本当の強盗だとは思わなかったワ、でも突然でしたので吃驚したことは吃驚しましたワ」

男「行李に押し込められた時は?」

松恵「随分苦しかったワ、早う出して欲しいと思いました」

男「では磔にされた気持はどうでしたかネ」  
松恵「両手を肩の上まで持ち上げられ、拡げて縛られたんでしょう、それに足は爪立ちでしょう、随分苦痛でしたワ」

男「今ではどう思ってますか」

松恵「彼の時、私の家でお話や稽古をなさるのだから位に思って、私の家へお集まり下さっても可いと申したまでで、妾が縛られたり、行李に入れられたり、おまけに磔までされようとは思っていませんでしたワ、でも縛



られて責められるのは苦しいものだと思っています

男「では、もう懲々でしょうか?」  
松恵「ええ、怖いようなスルリのあるよう

で何とも申し上げられませんが気分です」

男「では、もうあんたが責めの実験台に、つまり後手に縛られたり、吊し責めにされたり、いろいろの責め折檻されるのは、お嫌

hm k



いでしようネ」

松恵「はじめてだったので、唯だ怖い恐ろしいのと、随分苦しんだので痛かったと思うだけヨ、でもねえ、一度吊し責めとかにされて見たいと思うワ」

男「吊し責めなら、息も詰るし、それこそ惨酷な責めだから、我慢出来るのカナ」

松恵「死ぬほどのこともないでしょう、時間さえ短かいのなら、少し位の辛抱は出来ると思うワ」

こんな責め折檻の話で時の移るのを忘れる位だったが、男の上手な誘導に乗った松恵女史にとっては、責めに逢う実験を今一度実際に演じて見たいような口吻であり、満更責め遊戯を嫌っている訳でも無かろうと察知した強盗団？の三人男は、尚も映画や演劇などで見る女の責め場に就いての興味ある話題に花

を咲かせ、夜の十一時ごろ、後日を約して一同は松恵女史の宅を引揚げた。

その翌晩から松恵女史は独り居の寂しさから、強盗団？の巧妙な責め場の話に興味を感じたのか、手製人形で責め場を見て独り時間を過すのであった。

責め場は先ず自分がその時着ていた濃茶色地に太線と細線との二筋の白筋基盤縞に、黄裏を打った袷、鹿の子絞りの長繻絆、緋ネルの腰巻を薄い掛蒲団を丸めて着せ、昼夜帯に水色の扱帯、桃色の腰紐を締めて等身の人形を作り、行李用の麻縄でその人形の両手を後手に縛り上げ、鑓で、その人形を居間の欄間に吊し座敷簾で、人形の胴、首、肩、腰、足など所嫌わず突いたり、叩いたり番町皿屋敷のお菊の吊り責めを連想しながら、全神経を人形に集中していた。遂に人形責めに満足せ

ず、吊した人形を下してその人形と一緒に、別の緒縄で自分の身体も縛り付け、恰かも猫が鼠を捕えたように転んだり、起ったり座つたり暫らく楽しんでいたが、それにも飽いたのか自分の両足を大黒柱に縛り、首にも縄をかけて柱に巻き付け、両手を後に廻わして柱縛りの責めを演じては悦にいら、夜も更けて、後手に縛った人形を自分の寝床の横に寝かせて朝遅くまでグッスリ寝込んで終った。

表を通る農夫達の話声にフト目覚め、早速飛び起きて寝巻姿の儘、その人形を前晚自分が押し籠められた、大柳行李の中に二つ折に押し込み、押入れの奥に蔵い上から蒲団を冠かせてホット一息吐いたことがあったと、その後の奇談倶楽部総会の席上で自分の体験談を発表したので、会員一同は今更ながら、松恵未亡人の能動的な行為に舌を巻いたのであった。(おわり)

## 縛られた女優達

大河原 珠 樹

(追加)

七人の女拘摸 (松竹作品) 中川 姿子

野衾一家の腕利き七人の女拘摸の一人おすみが恋人の清次と世帯を持ちたいために、拘摸から足を洗おうとして発覚、捕えられて物置きに押し込まれる。胸を二巻、帯の上を一巻き後手に縛られ梅ハチ模様の手ぬぐいで猿

ぐつわをかまされ、おとなしく座っている。

素浪人忠弥 (東映作品) 三浦 光子

昨年度の古い作品ながら見たいと思っていた矢先に再映されたので——ラストシーンに白い囚衣本縄をかけられ馬上引廻しになる。個人の意見だが、縛られた女の美しさは白衣で本縄(胸に菱形の網目形に縛る)がその極

致だと考えるが？。数年前に題名を忘れたが花柳小菊がこのように本縄縛りにされて美しかった記憶を甦えらせてくれた。

このほか数年前の旧作で謎の折鶴頭巾(新東宝作品)をみたが残念ながら縛りはみられなかった。

予告として

毒婦高橋お伝(新東宝作品)若杉嘉津子最後に殺人の罪で警察に逮捕連行される。

## 映画にあらわれた

## 男性責シーン

菅 良 太

映画にあらわれた女性の責シーンについて大分研究されているので、この辺で男性の責シーンについて少し調べた所を書きます。

何と云っても最近の男性責シーンの圧巻は新東宝作品「憲兵とバラバラ死美人」の中で殺人の容疑者である下士官が憲兵隊の取調室で拷問を受けるシーンで、主役ではないにもかかわらずかなり拷問シーンを綿密に撮っている事でした。まず拷問台に手足を縛られシヤツを引裂かれ、鞭で背を殴られるのであるが、鞭の音とともにうめき声などすばらしい効果があった。次に逆吊りシーンになるのであるが裂かれたシヤツの中から露わになった胸、咽喉仏が大きく撮られ、これも鞭を受ける度に逆吊の身を反らせる所が我々ファン垂涎ものであった。

日活作品の「裸女と拳銃」でスチールには

水島道太郎の新聞記者が菅井一郎らの密輸団に捕われ、上半身を裸にされうしろ手に縛られピストルを腹に突きつけられているシーンがあったので見た所、カットされたのかそうした場面はなく、ただ手を前で縛られる丈なので失望した。

名作「真昼の暗黒」で無実の容疑者を刑事が代る代る柔道の手で投げつけるシーンは息づまるようだった。戸外が朝であったり夜であったりするのも一日中責め続けられている感じですがに名匠今井正作品だと思った。同じ独立作品の「真空地帯」で木村功の一等兵が衛成監獄で受ける拷問シーンの水責は野間宏の原作に見る執拗なものが欠けていた。両手を吊られた吊責やガスの焰で胸を焼く火責も鬼気迫るものがなかったのは、演出の非力であろう。しかし監獄に送られる前に床の

上を引摺られて殴り続けられるシーンは凄惨であった。

古い作品で吉村公三郎の名作「わが生涯の輝ける日」という作品で宇野重吉が特高の取調を受ける所で柔道場の板敷の上で逆吊にされ、竹刀で連打される場面、続いて後手を縛られて両足を八の字に開かせられた股の上に板を載せられてその両端に人が一人ずつ乗って責めるシーンは、やはり見ものであった。

洋画シーンの最近ものでは「虐殺の砂漠」の私刑の場面で、この映画は映画の大半がじわじわ責のような意地悪く主人公を責める場面があるが、鞭打のような派手なものでなく「天日焼き」という箱の中に仰向けに寝かせて顔を砂漠の太陽で焼く刑罰で息苦しいような場面であった。「熱砂の舞」のヴィクター・マチュアがラストで鞭で打ち殺されるシーンがあったが、T字型の刑架に両手を縛られて鞭で打たれるシーンは凄かった。打ち手が額に油汗を流して五人も六人も交替する所など生唾を呑むような場面であった。同じヴィクター・マチュアが「聖衣」で奴隷になり大の字に縛られて鞭打たれるシーンがあったが、体軀の隆々した俳優だけに半裸で鞭打たれるシーンになると彼の独断場と云える。

少し古いものでバート・ランカスターの「欲望の砂漠」という映画でランカスターがハムフリー・ボガードに捕われて半裸(?)



下半身が映らないので全裸か否か分らなかったが、逆大の字にされて鞭打たれる場面があったが、逆になったランカスターのアップは苦痛に充ちて見事だった。その他では「**壮烈カイパー銃隊**」の捕虜将校に対する投槍による突殺シーン。ゲリー・クーパーの「**平原児**」の土人のために両手を竹に縛られて火を焚いた穴の上に吊られてのあぶり責のシーンなどあの種の活劇ものには多いと思う。

戦前のものでは、シヨエル・マックリーの「**南海の業火**」という南海ものでマックリーの白人の青年がドロレス・デルリオの土人の女と一しよに縛られて晒物にされる。女は梯子のようなものに両手を一緒に縛られるが、男の方は大の字の磔柱に縛られる。二人とも短いサロン一つという全裸に近い姿なので、一そう興味が深かった。二人は神の祭壇の前に焚かれた火の上にあぶられる。土人たちは遠火で二人を幾度もあぶるシーンは十何年経つ作品だったが未だに忘れかねている。もう一つ古い少年時代に見た映画で未だに忘れかねている作品は、ルドフ・ヴァレンチノ出演の「**熱砂の舞**」(現在の同名の作品ではない)という作品でヴァレンチノがジプシーに捕えられて半裸に剥かれ両手を吊されるので豊かな腋毛が見える。鞭打たれる前に小人の道化がいて彼の臍や腋をつめたりくすぐったりする場面は、鞭打つ場面以上に煽情的であった。

た。何しろ天下の美男であるから女性は今もだえしたり、ため息をついたりしていた。その後にはげしい彼の胸は痛々しい鞭の跡が幾筋もついた。もう古いもので筋さえ覚えていないが、この場面の印象は未だあたらしい。

往年の名作「**無防備都市**」ロッセリーノ作品で、秘密結社の党員に対するナチの拷問は何と云っても映画史上の圧巻であろう。この作品はロッセリーノがナチに対する満身の怒りをこめた作品だけに凄じいものがあった。上半身剥がれて椅子に緊縛された青年が胸部をガスの焰で焼かれる場面は、凄じいものであった。その前に釘抜や得体の知れない小道具で責めぬかれたらしく顔は歪み上半身傷だらけという姿で思わず顔を掩った程だった。俳優は名を忘れたが一寸ジャン・ギャバンに似た美男だった。

映画の責は鞭責が一番多く次は吊責で案外逆吊が多い。新東宝作品「**化物峠の秘宝**」での嵐寛寿郎と「**地獄花**」の山村聰の逆吊責等最近の傾向であるが、逆吊を見ると吊責など平凡で見ていられない。責シーンは何と云っても活劇物に多いので、新東宝、日活の作品に多く、それもスリルを盛る程度の責だからすぐに救手が出てくるのでがっかりさせられる。やはり独立映画の反戦物の責シーンの方が実感がこもっている。それから男の責場は着衣のものが多いがやはり上半身剥かれ隆々

たる筋骨をあらわしたものがよく、更に云えばパンツ一つとか褌一本という姿であつたら魅力は百倍する。二等兵物のような喜劇的なもので越中一つの姿で罰を受けたり、海軍の精神棒を食う場面など今後もあることと思うが、若い青年俳優の越中一つの姿はすがすがしい魅力である。責られる俳優では河津清三郎や水島道太郎等の中年俳優が最も魅力がある。外国俳優では、モンゴメリー・クリフト(責シーンではなかったが「**地上より永遠に**」で上官に虐めぬかれる下士官はよかった)ウイリアム・ホールデンやバート・ランカスターが最もふさわしく、これらの俳優の半裸の姿は見事なものであるだけに思い切り責められるシーンが見たいものである。

時代物には女の責場の方が多く、男の責は少いが、これ等も悪旗本に捕えられる鳶の者とか、新選組に捕えられた勤王の若侍等が純白の六尺一本の姿で竹刀や割竹で責められるシーンは先ず女性ファンが熱狂すると思う。興行者がこうした方面に目を注いで映画を製作したならば興行的にも大ヒットする事疑いなしである。現在こうした点に注意して製作している所は日活とか新東宝とか、どちらかと云えば低俗な作品を作っている社に多いが「**真空地帯**」や「**真昼の暗黒**」のような深味ある芸術作品で男性の責シーンが作られることをのぞむものである。

創作

## 結婚の条件

近藤 一

○ K夫妻の住居は家並みの混んだ街中にある。二階もなければ、勿論、地下室などという結構な遊び場所もなく、六帖、四帖半、玄関台所と便所、それに押入という極くありふれた平屋を借りているのである。家主は一軒おいた東側に住んでいて、留守勝ちのKの家を絶えず気にかけてくれる。

K夫妻は、夫を敏彦、妻を万里子という。夫は某製薬会社の営業部員、妻は女学校時代の友人がやっている喫茶店に九時から三時まで手伝いに出かけている。生活は別段苦しいという訳ではないが、やはり妻としては幾分でも生活に潤いをと希うのも自然であろうしそれが一つのアクセントにもなり、更にまた彼女のアルバイトたる洋裁の註文もとりに易いという利点もあった。

夫は二十八才、妻は二十三才、子供はないし、また欲しいと思う望みも許される環境にないのでまず当分はお預けという処である。大学を卒業と同時に、就職と結婚へゴールインした敏彦は、現在手取二万一千円ちよつとのサラリーマン、月々の収入は確実に保証されているとは云うものの、楽しみはボーナス以外会社に望むことを許されていない。

それに引代え万里子の方は、妻となつてから志した洋裁だけに習得の意気込みも違い、上達も殊の外に早い。現在では、どうかすると敏彦よりも多い収入を挙げることもある。何よりもまず、万里子は惻口であつたし、そして彼女は敏彦を愛していた。

敏彦も万里子を愛している。その愛情は、文字通りこよなく拡りと深みを持っていた。敏彦が万里子を育て上げるために三年もの月



日を費やし、忍耐強い努力を繰返して来たことや、二人の愛情に隙間風の如く忍び込んだ危機を未然に取り除いてから今日まで、そして今もなお続けつつある温みのある生き方は、万里子の全身を幸福の中に包み込んで放さなかった。

二人の生活環境は決して特に恵まれたものではない。経済的な、端的に云えば月収の面では二人はまず中流階級に属すかも知れないが、しかし、二人の秘めたる楽しみに対しては、余りにも制約が多すぎる。隣近所の耳、目、口というものを、やはり社会人としては恐れずにはいらなかった。結婚後三年目に訪れた危機も、やはり「世間」に起因していた。それを彼等、つまり敏彦と万里子は、如何にして切り抜け、そして今日、平和に愛し合って生活しているか、そういうことを覗いてみようという訳である。

結婚当時敏彦はまだまだ学生気分が抜けきれなかった。時折は我儘も出て、万里子がやり場のない悲しみを台所の隅や手洗にいらしくもて余しているような事態には、どうしていいか判らなくなつたものだった。学生時代抜群の沈着さと物判りの良さを囁かれた彼ではあったが、やはり現実には夫として、一人の女性を妻と遇することとは、全く未知の世界であった。つまりは彼が若かったのである。

万里子は、しかし、更に若かった。否、むしろ稚かったというべきかも知れない。昔流に数えれば二十才ということにはなつても、所詮高校卒業と同時に強引に結婚へ抛り込まれてしまった彼女は、淋しさと悲しさが先に立って、決して幸福などに見舞われるとは思えなかった。華やかに社会へ巣立った就職戦線の友達、選ばれた少数者として最高学府へ進んだ友達、しっかりと地に足をつけて花嫁修業に励む友達、いずれを見ても皆自分より数等自由で優越した世界に思うように思えた。まるで周囲のすべてが先へ先へ進むのに自

分独りが取り残され、そして後へ後へ退いて行くような寂寥感に襲われた。彼女にとって父も母も恨めしい存在だった。自分の結婚を計らった仲人、祝福してくれた兄妹、親戚、友人たちも恨めしかった。そして、自分の自由を奪い取った夫の敏彦が、憎めないだけにより一層恨めしかった。妻としての自信も未成熟なうちに年令に相応しく成育してしまった自分の肉体さえも、やがては恨めしい存在になった。それ程に彼女も稚かったのである。

夫妻生活に見出す「女の歎び」などというものは、「世間」で云う程容易につかめるものではない。無理もないことではあったが、結婚後数ヶ月というものの、万里子は友達から妻の座の幸福感について感想を求められても答える術を知らなかった。とはいえ、彼女にも誇りがあった。だから、その頃の彼女は頻りに夫の美点を並べ立て、自分がいかに幸福な立場に立っているかということ述べ立てたものである。それは全く彼女が抱いていた理想の結婚——少女時代にほのかに感じた憧れともいうべきものを遙かに超越して、唯空想の中の観念の戯れに過ぎないものであった。それでも未経験な友達は、素直に受取って「万里子は甘ちゃんね」とからかったりした。

結婚後約半年ほど経って、一つの事件があった。その頃敏彦は酔って帰ることが続いたし、時には、その帰宅も十一時、十二時に及ぶ有様だった。

万里子は、もともと酔っ払いが嫌いだった。少女らしい潔癖感も強く、父や兄の酔態に出合うと、幾ら先方が愉快さを示していても急いで自分の部屋に引籠って、その癖、胸をどきどきさせながら、母の応対に聴耳を立てるのが常だった。考えてみると、万里子は酒臭い吐息が馴染めないのだ。酒自体の匂いは香ばしくて、むしろ好きであったし、酔いの適度というものが、日頃謹厳な父や生真

面目な兄を愛すべき平凡な俗物に仕上げる処など非難する理由もない。つまり酔っ払いの吐く息が厭だった。また、そう思うせいか、万里子は酔った人達の吐息には驚く程敏感で逃げ足は早かった。その嫌悪の情は、敏彦のそれに対しても、もとより変わりようもない。だが、今は逃げ出すことができなかった。二間しかない家で



なっている。彼女は、するすると伊達巻を解いた。白地に千羽鶴を染め出した浴衣を取り上げるとそっと膝を落し、それまで着ていた肌襦袢までを一まとめにするりと肩からはずした。浴衣の袖に手を通す素速さは、自ら経験で会得した艶とでも云おうか。万里子は、寝る時にパンティのほか、すべてを脱ぎ去らなければ気分が悪いの

も、それは敏彦と万里子の城郭である。そこには、母の介入すら許されない。とすれば、敏彦の身の廻りの世話は、万里子をおいて他に引受ける者がいない。万里子は思いがけぬ事態から、自らの「妻」を意識した。敏彦は万里子の酔払い嫌いを知っていた。そのために、彼は足許のおぼつかない晩でも、衣服の着換えを手伝ってくれる妻には、なるべく顔をそむけるようにしていた。そして時折は、白く柔い万里子の手を払いのけて独りで着換えようとして、布団の上に尻餅をつき、ふうっと息をついたりした。

初夏の或る暖い晩だった。万里子は敏彦の帰りを待っていた。床をのべ、敏彦の寝巻を前に置いて新聞を読んだ。隅から隅まで読んで茶籠箆の上の置時計を見上ると既に十二時を廻っている。布巾をかけたまま、小さいお膳を片隅に押しやって、万里子は立上った、六帖の間が寝室に



である。幼い頃からのこの習慣は、結婚後もそのまま引継いだものであった。

万里子は右手で前を合わせながら左手で黄色の扱帯を取り上げたが、思い直したように今解いた伊達巻を、くるくると巻きつけ、きゅっと締めた。

どこをどう帰って来たものか、敏彦が、それでも何一つ持物をなくすこともなく、玄関の上り端に崩れ伏したのは、既に一時近かった。戸閉りをして、万里子は靴を脱がせようと狭い玄関の三和土に蹲った。敏彦が、やはり自分で脱ごうというのか大きく寝返ったので、不意をつかれた万里子は敏彦の右足首をかかえたまま、横坐りに倒れ、浴衣の裾に土が付いた。

自分の体重よりも、遙かに重い敏彦の体を六帖へ抱きあげるのは容易でなかった。夫の身に手当り次第に力を加えて引摺り上げるには、妻は余りにも優しく初々しかった。

漸く六帖へ抱き入れた夫から、万里子はスプリングコートを脱がせる。次に背広、そしてズボンを脱がせた。敏彦はいかにもうれしそうに、利かぬ体で万里子の手を払いのけようとする。ネクタイをはずした。

ノーネクタイのワイシャツにズボン下というだらしない恰好で前後不覚でいる夫の顔をじっと見ていると、万里子はふっとおかしさを感じた。それまで味わせられ続けて来た淋しさが心の片隅に追いやられていた。五つ年上の夫に時には父に似た威厳すら感じているものが、衣服を剥いでみると、確かに一皮むけば自分と何の変りもない平凡な人間であり、むしろ万里子の手を借りなければ何一つ――寝床に就くことさえできないところなど、まるで大きな赤ん坊ではないか、と思う。

暫く夫の顔を見守っていた彼女は、思い直してにじり寄った。ワイシャツを脱がせて、寝かしてしまおうと思ったのである。シャツ

のボタンをはずすのを、何やらぶつぶつ呟いて拒む様子は、「本当に赤ちやんみたい」と思わせた。

が、突然、「いやだいやだ、ボクは帰るんだ！」と叫ぶと敏彦は万里子の胸を強く突いた。万里子は自分の布団の上に倒れた。その上へ敏彦が棒を倒したように折重った。不意の事であり、組敷かれた万里子は敏彦をはねのけようともがいた。二人はそのままでもつれた。いつの間にか敏彦の手に万里子の布団の上の扱帯が拾われていた。

両方の腕は抵抗しようとした形のままで、その上から二重に扱帯が胸に巻きついていった。右腕の処で大きく花結びになった結び目が浴衣に映えて美しかった。両脚も踝の上の辺を、ネクタイでこれも丁寧に括り合わせて、夫は安心したように自分の布団の上に倒れてすでにイビキをかいていた。

万里子は体全体を引摺るようにして、布団の上に坐り直した。もとより正座であった。顔色は案外に平静であった。

「貴方」万里子は夫の寝顔に呼びかけてみた。応答を待つまでもなく、少し間をおいてもう一度呼んでみた。

「あなた。」敏彦は寝返りをうって向うを向いてしまった。その背中へ囁くように万里子は声をひそめて云った。

「ねえ、解いて、こんな、酷いわよ。」

動かない夫の背に見入っている時、妙に落着いている自分の姿を発見して、万里子は、それが「妻の甘え」かも知れないと思った。右手は背に、左手は胸に、扱帯の二巻の中で留められているだけで、柔かい肌触りの扱帯と、浴衣に包まれた弾みの強い肉体に抑えられただけでは、嫺やかな万里子の四肢の解放は目の前にあった。彼女は敏彦の背へ微笑みかけて云った。

「ずるいのね、自分ばかり……」

左掌で胸を合わせ、何ということもなく、乳房を撫でてみた。左

手首を背に廻して右手首を抜く時、締めつけられた乳房がちよつと疼いた。手首の動作だけで扱帯は膝の上に落ちたが、二の腕の辺りに疲れを感じた。彼女は、そうと手首を見、腕をさすった。

ネクタイを畳んで夫の枕許においた。背広、コート、靴下を明日に揃え、それから万里子は伊達巻を扱帯に締め換えた。夫の掛布団を直し、自分の床に入る。横になる前に、一度シーツの上に坐り直して、夫の寝顔を見やった。

夫が何か云った。「万里子が待ってるんだ。」と云ったように思えた。「え？」と聞き返したが寝言だったのだろうか。万里子は左掌で、そつと髪のはづれを撫でるようにした。スタンドの灯りに換えると、いたずらっぽく、くすつと笑って敏彦の手を採った。敏彦は「万里子が……」と云った。

「おやすみなさいね。」二人は手をつないで眠りについた。

次の日から敏彦が酔って帰ることは少なくなった。出張とかやむを得ない残業のほかは、帰宅の遅くなることも殆どなくなった。理由は簡単である。この事件を利用して敏彦が万里子の教育を開始したためであった。

事件の翌晩、二人はこんな会話を交したものである。

「今日はお早かったのね。」

「うん。」

「ゆうべのこと、考えるとおかしいみたい。」

「何が？」

「ひどかったのよ。ゆうべは。」

「そうかい？うん、そうかも知れないな、何しろ、ゆうべは散々飲まされたし、第一どうやって帰って来たものか、まるつきり憶えがないんだから……」

「そうよ。随分ひどく酔っていらっしやったわ。でも、そればかり

じやないのよ、ひどいのは……」

「え？」

「私にひどいことなされたのよ。貴方が……」

「どんな？ ひどいことって……」

「乱暴なされたのよ。私を縛ったりして……」

「？・？ 僕が君を縛ったって？」

万里子はこっくりと頷いた。二人の間に暫しの沈黙が流れた。

「痛かった？」

「ううん。」

「どうだった？ こわかったかい？」

ちよつと小首を傾けて考えるような仕草を見せてから万里子は云った。

「貴方がとびついて来た時は、何だかこわかったし、それに抑えつけられて結かれた時は、やっぱり痛かったと思います。でも、乱暴されても、それが貴方だと判っているから抗いようもなかったわ。第一、貴方は酔っていらっしやったんですもの。」

「酔っていなかったら？」

「さあ、きっと恐しくて泣いちゃったかも知れないわ。もしかしたら……」

「今だったら？」

万里子は咄嗟に応えに迷った。

「どうする？泣くかい？」

「その場になってみなけりや判らないわ。」

万里子は強いて引き出された答に、にっこりと笑った。それは諦めとも誘いともとれる微笑だった。

こうして万里子は縛しめを受けた。素面にいる夫から懲しめのためではなく子供の遊びとも違った拘束を受けた。一面では確かに苦痛であった。本当の初歩の被縛者に対して夫の手加減は物理的な痛



苦をさほど感覚に与えなかったけれど、むしろそれ故に、万里子の羞恥の情を激しくゆすぶったことは事実であった。それでも、この身もだえするような大きな刺戟は、万里子にとって何かしら他人に云えない秘密を持った時のようなスリリングな歓びを感じさせた。

万里子は、この激情が、やはり「妻」に由来するものかも知れないと思った。

もともと万里子は、敏彦との現実の結婚によって、自分の稚さを悲しく思っていた。そこからは、自らの肉体にも精神にも、自虐を容れる何ものかが生まれていた。それに反抗する心の片隅では、自らの向上のために何か総てを忘れて打ち込めるものを求めてやまなかった。具体的に云えば、自分が友達に遅れないよう彼女達と同じ水準に立つか、それとも彼女達の知らない世界の高い水準に立ちうるような、許されれば「夫」との共同作業を欲していたのである。更に、時は夏に向っていた。自然界は挙げて開放を叫び、盛りを迎える。人間も自然を求めること頻りであり、極言すれば、屢々獣性をすら露呈する季節であった。最も大きなことは、結婚生活半歳を超えた時の流れが「夫」と「妻」を大きく成長させたことであった。「夫」は理想的な夫になるべく努力し、万里子に対しては、この上ない調教師になり得る自信を抱いた。「妻」は、漸く女として愛される歓びを識りかける程



に育って来た。

こうした諸々の条件が合した時、生来の素直さと適度の空想力を備えた万里子は、優しく、しかし厳格な「夫」の誘いに従って、悦の緑地へ導入されて行ったのである。

緑地には山もあり谷もあった。「妻」は、女性特有の粘りと辛抱

強さを見せ着実に一歩々々進んで行った。「夫」も忍耐強かった。急激な傾斜に出遭って「妻」が迷っていると、せっかく進みかけた地点を諦めて、また振出しに戻り「妻」の足ならしを待って出直すのであった。

当時の二人の生活では、人跡未踏の地へ娛しみを求めて出かける程の余裕は何処にもなかった。必要な器具や道具類の購入さえ望めなかった。とにかく与えられた条件は、窓越しに言葉の交わせるような、そして新婚夫妻を殊更に注視するような、しかも親切な家主が折にふれ気をつけてくれるような、そんな環境の中の一軒の借家と、結婚祝いに貰ったカメラが一つ、それに和服の紐類と荷造り用の古縄くらいが総てであった。

悲鳴は、もとより許されよう筈もないし、呻き声も少し高ければ善意の隣人が慌てて見舞に駆けつける周囲の中では、何かしら、異常な荒さを持つ響きは心して避けなければならなかった。答を振る時のひゅっ！という音はともかく、肉に弾ね返るびっし！という音は、たださえ過敏な神経の二人にとって夜のしじまの中の実行を遅れさせた。かなり登りに馴れた「妻」が、幾度か挑もうとしても「夫」はその峰を諦めて迂廻させた。

迂廻に選んだ途は、切り立つような傾斜だった。余りにも多過ぎる制約の中で、当然のこととは云いながら、拘束の痛苦は急激に倍加して行った。扱帯に腰紐が代った。やがてベルトも利用され、そして荷造り用の材料が持ち出された。

冬になると、二人は長い夜を大いに楽しんだ。敏彦は会社が退けると真直に帰途についたし、万里子もそれを待ち詫びていた。荒縄や細引の使い古しが常用される頃になって、それらは屢々素肌になじかに巻きついたりした。硬い麦藁のとげが肌に刺さって、ぷつぷつと赤い斑点を並べ、いかにも疼く痛みを思わせたが、しかし「妻」

は少しもひるまなかった。却って敏彦が励まされる程になった。

「夫」が投入する力は、限界まで使っても遠慮の要らない程になった。これまでの変化と云うか成長というか、とにかく刺戟に富んだ経緯というものは、結婚後二度目の夏を迎える迄に起ったものであった。つまり緒についてから丸一年という歳月が経った訳である。それだけの時の流れから見れば、或いは強烈な亢進に見え、或いはもどかしい蠕動に見えるかも知れないが、しかし現実には破綻のない歩みを続けていた。

「夫」には翌日の出勤があった。「妻」には、そのための家事があった。休日にも世間並の家事があったし、それに、やはり正常な？娛しみを求めた。映画、音楽、スポーツ等々。つまり二人の共同作業は夜の間に、駆け足で行われた訳である。これならば、たとえ連夜になされても、敏彦はもとより、万里子も充分に耐え得る程健康であった。しかも、間には、時折の出張や單に話し合うだけの晩も挟まっていたし、正常な和合が、翌日の活力を生み出す熟睡へ誘ってくれるのであった。

二度目の夏のボーナスで、二人は前以て決めておいた三脚とセルフタイマーを買って、愛用のカメラに取りつけた。この頃になると敏彦のカメラに関するテクニクもかなり上達した。ただ、何分にもこの種のフィルムは街の写真屋へ頼めないもので、現像も焼付も自分でしなければならなかった。押入から布団を出したあとを臨時に暗室にしているのとやってみた。最初は勿論失敗の連続だった。内容はともかく、万里子にとっては、それが何にも換え難い記念すべきものだけに思い出しては残念だった。引伸しだけは如何ともなし得なかった。

「夢」に向って一歩踏み出すと「夢」は、なお一歩先んじて招くものであった。二人は三脚とセルフタイマーのお蔭でフラッシュガン



への欲望をかき立てられた。しかしそれは、半年の辛抱によって実現の可能性を見込まれていた。ポーナスが頻りに待たれた。

数多い失敗の挙句に、二人はセルフタイマーを利用したカメラのフアイダーに、具合良く収まる位置を体得した。そうなれば、自然の成り行きとして、ポーズの変化を求めるのも人の情であろう。

乳房の上下と上膊部の緊縛、それに連結した後手のリストの固定という、所謂高手小手の縛しめが、衣装を換え用具を換えてカメラに収まり、やがて二人の胸に「馴れ」から来る不満を起こさせた。

この時になって、敏彦が万里子に与えたテキストが奇譚クラブという異色誌であった。モデルの若い女性は大体が裸身を曝していたが、万里子は、それらを美しいと感じ、批評を述べたりする程の余裕を持つようになっていた。グラヴィアページはヴァラエティに富んでいた。口絵は勿論、実写のフオートにも奇抜なアイディアが示され、卓越した緊縛の美が満たされていた。

以前、敏彦は同名の雑誌を時々見かけた記憶があった。「りべらる」とか「千一夜」と云うような雑誌と同様な大きさで、似たような内容だったと思っていたものが信じ難い程に変貌をとげていた。装丁も見事であり、何よりも真面目な雰囲気というようなものが汲み取れるようになっていた。不満な、愚劣だと思われる記事がないでもなかったが、長所は欠陥を補って余りがあった。

敏彦はグラヴィアを見せるばかりでなく、告白だの創作だのを選んで「妻」に読み聞かせた。そのような時「妻」は文中の「悲劇のヒロイン」の状態に立たされていることも珍しくなかった。

興味ある多くの記事に劣らず二人の指針となったのは、巻末を飾る読者通信の欄であった。人間性の複雑な内面を如実に示す頁には各種の性向の人々があり、中には二人を驚嘆させ、或いは嫌悪の念を起こさせるものもあったものの、いずれもが切実に訴え、悩み、娛しみ、そして希望に燃えていた。

二人はまず高手小手に首縄を加えて見た。その効果は従前の刺戟の比ではなかった。「妻」は、堪えんとする必死の努力を嘲笑うような魔力に、膝を合わせるたしなみも忘れ果てて、身悶えして転げ廻り、息も絶え絶えに呻いたのである。

必要に迫られて、次には万里子の発声の大部分が奪われなければならなくなった。彼女は、絶対に呻き声を立てないからと口中に布を噛む事を拒んだが、その誓は一度として守られなかった。彼女は屈服の意志を示す方法が失われることを恐れていた。だから、唯、口の上を覆うだけの布帛ならば、最後には誓を侵しても許しを乞うことが可能であった訳である。しかし、度重なる破約に、遂に彼女自らが花の唇を開いて敏彦のハンカチーフを詰めるように希った。耐えきれず頬に溢れ落ちる涙を屈服の表現と観る約束ができたからである。

刺戟は馴れによって反応を小さくして行ったら、反応は馴れによってより激しい力を刺戟に求めた。頸に廻された縄は、殆ど細引であつたけれど、むっちり脂肪を貯えて女らしい柔らか味を見せ始めた万里子の喉の肉にきりきりと喰い入って、溝を作ってかくれる程であった。その実践には二人は忠実にテキストの教えを守った。テキストには俗に謂う喉仏の上には絶対に縄をかけてはいけないと繰返し警告されていた。或る時、試みに敏彦が指で禁じられた部分を締め上げてみた。その時の万里子の苦しみのような物凄さは、決して忘れられるものではない。喉に廻した指先に徐々に力を加えるにつれて、万里子は頸を伸ばしたり縮めたりした。瞳はきゅっ！と上ずって眼のふちから赤味が満ちて来た。自由を奪われた四肢が縛しめの中で悶える有様は、恐らくは七転八倒という形容に匹敵するものだろうし、ぎゅっ握り締めた両手の指はもとよりびくびく慄える足の指からも、脂汗が絞り出されるようだった。手を放すと万

里子はそのまま突つ伏し顔を畳へすりつけるように匍い廻って縛しめの身で苦悶し烈しく咳入った。それ以来、万里子の喉に廻される細引は細心に一定の範囲を保って嚴重に強烈にだけなつて行つた。

その後、二人は或る機会にアメリカ映画の「ダイヤルMを廻せ」を観た。確かヒッチコックの評判のスリラーということだった。その中で思いがけぬシーンが演じられた。妻のグレス・ケリーが夫のレイ・ミランドから謀殺されんとする。夫に頼まれた男が背後から妻の頸をネクタイ様のもので、いきなり力任せに締め上げる。妻は突然の強襲に呼吸も停まり、苦しまぎれに伸ばした手に触れた鉄を男の背に突立てる。男の死体も、頸に巻きついた布もそのまま烈しく咳入り、喉をかきむしって部屋を転げるように出て行くケリーの迫真の演技に、夫と妻は闇

の中で思わず顔を見合わせたものであった。

夕食後、就寝前までの間に殆ど毎日一定の時間を占める「夫」との共同作業は、万里子にとって楽しみとか好ましいというようなものでは断じてなかった。恐れ戦く激しさを持って迫る一種の期待というべきである。恐怖と戦慄に満ちた快楽というものは、識る人ぞ知る、互いに矛盾した概念から成り立った不可解な存在であった。



ふん

一般の楽しみのように、時には忘れることができるようなものではなく、片時も脳裡を去ることのない苦渋の愉悦であった。

もう、その頃には、悪魔の爪跡は「妻」の肌に馴染んで離れなかった。両の手首、二の腕、喉から胸元は、夏は露出されるのが普通である。少くとも万里子の年令で、それらの部分を夏の陽光から被覆することは大変な努力であった。万里子は淑やかな人妻であった。殊に夫に対しては、心身共に従順で貞淑な妻になつて行つた。



困るのは入浴であつた。只でさえ汗ばむ暑気の中で、清潔を好む二人は如何にすれば良いのだろう。二の腕は勿論のこと、胸の隆起から腹部そして太腿から消え去ることのない「夫」の贈り物は、どの様に衆人の凝視から逃れられようか。二人は屢々狭い台所で行水を使った。それが不充分であることは云う迄もなく、「妻」の髪の毛に汗の臭いが残るようになった。敏彦は万里子の髪を特に愛していた。初めて逢つた時でさえ、万里子の愛らしい目鼻立ち以上に、良く手入れの行き届いた髪が印象に残つた位である。その髪が汚れてゐることは、敏彦にとって我慢ならないことであつた。

「妻」は、勿論、敏感に、それを悟つていた、いろいろと努力をして見ても、清潔は充分でなかつた。そうなれば、これらの愉悅の印を消す以外に途はない。そして、それは不可能な途であつた。既にここまで登りつめた道を引返すことは到底できそうになかつたし、出発点に引返し得た処で悔を残すことは目に見えていて、第一、一旦経験した高地への登攀の苦難と快感は何としても忘れ得ぬ人生であつた。

打開の策を「妻」はこう考えた。つまり、この際の多少の嫌悪はより強烈な魅惑によって克服される筈である、と。それに、そのように思い悩まねばならぬ。「妻」には、「夫」に対する不満が徐々に醸成されつつあつた。

限られた時間内で最大の愉みを得ようとする努力は確かに強烈な刺激であつた。だが、恰も山頂の見晴し台を目前にしながら下山の途に着かされたような、文字通り後髪を曳かれる想いを毎夜万里子は感じた。敏彦に依つて育てられた「妻」は、最近の「夫」からは常に空腹に近い状態を強いられ続けていた。それは「夫」の予想を超えた迅速な成長であつた。

「妻」は貪婪だつた。舌の曲がるような印度のカレー料理を、満腹する迄食べてみたいと夢見ることもあつた。勿論「夫」が忘れずに

持つて来る、わさびのたっぷり利いたとろの握り鮎の味覚も欲しかつた。しかし、また、時には自然の甘味を持ち、芯から温まる甘酒の酸っぱい甘さも欲しいと思つた。それは、時間のかかる仕事として「夫」から禁じられていたのである。

「妻」の焦燥は、次第に大きくなつた。姿態に疲れとやつれが見えて来た。秋は特に髪の毛が脱ける時と云われる。顔や手の皮膚が荒れて、かさかさ云いそうで、こすると白い粉が飛んだ。いかにも痒そうに櫛を入れる。「妻」の姿を見ると、敏彦は哀れになつた。しかもその一方では、そんな惨めな女の肢体に心中快哉を叫び、更にその夜の暴虐に心躍らせるのであつた。

冬も近づいた或る日、一つの事件が持ち上つた。

十一月ともなると五時には日の落ちる程になる。敏彦が家へ帰りついたのは、家々に夕べの灯がついてからだつた。我が家は、雨戸が立ち、窓はカーテンに覆われていた。昼の長い夏ならば極めて異常な状態である。全くの空家ではない証拠には、幽かに電燈の漏れ灯が見られるが、恐らく、それは六帖の間のスタンドでもあつたろうか。

敏彦は表のガラス戸をがたがたとゆすぶつてみた。案の定、開きそうもない。台所へ廻つてみる。

「妻」は寝ていた。六帖の間に布団が敷いてあり、枕許には、スタンドが点つていた。万里子は枕をはずし、俯伏せになつていたのである。

彼女は玄関の戸ががたがた鳴つた時、びくっと体を縮め、全身の神経をそばだてるかのようにして物音の主を聴き分けようとした。毛穴の一つ一つまでが、緊張で収縮したかのようにだつた。その音が止んで、次に台所の戸が軽く揺すられ、そして自分と「夫」の二人だけが知っている、或る方法で戸締りが開放される物音に変わった時

「妻」は全身の緊張を解いてもぞもぞと動いた。起き上って「夫」を迎え入れようとしたのである。しかし、その動きは無駄だった。敏彦は既に六帖の間に立っていた。「妻」は、自らの手で施した拘束に自由を奪われ、無益な労力の果てに、それからの脱出を諦めていた。

テキストが一部、枕許に開かれていた。そのページの挿絵のように頸部に喰い入った細引の端は、隙間なく合わせた足首を背後を通して括り上げていた。その中間、腰よりやや上の辺で幾重にも作られた輪の中へ、両手は手首まで完全に差込まれていた。そのために体全部がぐっと背後に反り返っていて、頸も手も脚も、どの一箇所を動かしても愈々締めは緊く締まるようになっていた。そのために自分で差込んだ手首が、焦りもあつたろうが自分の意志に反して抜けなくなつて了つたのである。

万里子は見下す「夫」の視線を、痛い程の思いで背中に感じていた。さっきまで、自分が意識して作っていた喘ぎが、今は自らの意志に関係なく全身を波打たせ、多すぎる布を押し込んだ下から、喉が「あううっ」と呻いた。

敏彦は、万里子のヒップの盛り上りを寝巻の上から踏みつけた。骨までの柔かな肉付の反撥が快く足の裏に伝つて来た。その蹂躪につれて万里子の全身は、背後の細引を弦にして弓なりに反った。敏彦は右足の先を万里子の腹の下へ入れると、万里子を仰向けに裏返してみた。腰紐のために寝巻の前は一応合つてはいたが、背中が出る程、肩脱ぎにされた寝巻は、胸元も露わで乳房の隆起がぶつくりと並んでいた。敏彦は、万里子の肉づきのよい柔肌を足の裏で感じて行つた。万里子は眼を閉じたまま、ぴくぴくっと慄えた。

戸締りをもう一度確かめ、着換えをすませた「夫」が傍にしゃがみ込んで声をかけるまで「妻」は目を閉じて動かなかつた。「妻」が就寝中強盗に襲われ、更には毒牙に曝されたという想定的行為で

あることを「夫」は最上の伴侶として識つた。苦笑しながら縄目を調べていた彼は、はっとした。唯、廻してかけただけと思つていた頸繩は、頸部を一巻して背に走つていたのである。絞首！彼は心臓の凍る思いがした。むき出しになつた乳房の辺りに掌を当てて、彼は激しく「妻」を揺り動かし「万里子！万里子！」と呼んだ。それに応えて「なあに？」というように「妻」がうつすり力弱く目を開いたとき、彼はもっと慌てて、いきなり乱暴に「妻」を俯伏せにするや、指先の痛くなる程の力をこめて、夢中になつて縛しめを解いた。

万里子は泣いていた。敏彦の詰問に、淋しさを紛らす方法はこの途以外にないと応えた。矢庭に、敏彦は万里子の頬に平手打を加えた。襟を握つて引寄せ、連続の打撃にかつとした熱さを掌に感じながら、万里子っ！お前は、何んて云う事をするんだ。馬鹿つと喘ぎ喘ぎ云つた。一瞬、表情を硬ばらせた万里子の両眼からどつと涙が湧き出し、きらきら光つて流れ落ちた。しゃくり上げながら、夫の腕に捉えられたまま、万里子は抗議した。

「ひどいわ、酷いわ、みんな貴方のせいよ、貴方が、何にも、何にも知らなかつた私を、こんなにしたんじやありませんか。それ、それなのに、今になつて……」

急所を突かれた敏彦は、しかし興奮していた。

「何？お前、俺を非難するのか、俺を。」

「いいえ、非難だなんて、そうじやないの。ただ、私を愛して頂きたいのよウ！」

「生意気云うな、今の愛情じや不足だつて云うのか。」

「そうじやないわ。でも、私にだつて、もう少ししたいようにさせて頂きたいわ。」

「俺はするなどは云わないぞ。したいだけのことは、したらいじやないか。」



「私一人でやれって、おっしやるの?」

「何?」

「貴方に、そんな冷いことがおっしやれるの。私を、こんなにしておきなから……」

万里子は必死だった。涙は流れるままに任せ、しやくり上げるのはやめていた。二人共次第に言葉が荒くなった。万里子の言分には確かに理があったし、理窟は筋が通り、希望は妥当だった。しかしそれだけに、敏彦はいきり立った。

「お前は俺の愛情に指図しようというのか。そんなことは俺が決めることだ。何をされても、お前は、只、有難く受けていればいい女なんだ。」

「違います。私は貴方の妻です。決して、貴方の奴隷や罪人じゃありません。私たちだってそれだけの権利がある筈です。」

「何が権利だ! お前なんか俺の奴隷だ。罪人だ。俺の愛情にケチをつけた罪人なんだ! そんな奴は死刑だ、ぶち殺してやるんだ!」

疲れた傷心の「妻」と、いきり立った「夫」との力の差は歴然としていた。細引はぎりぎりとして万里子の肌を噛んだ。押入の中の細引も全部持出された。四肢も五体も、女の肉の柔らかさを見せ、到る処にくびれと隆起を拵え赤紫や蒼白の変色を作った。そんな「妻」は、「夫」を、じっと見上げていた。敏彦には、涙を溜めた万里子の凝視が恐ろしかった。彼は、いきなり汚れて脂臭いソックスを丸めると万里子の口に押し込めようとした。万里子は、捻じ込まれるソックスの下で「あうう、うううわ」と、喉をひきつらせたが、それでも、自分の歯が夫の指を傷つけないようにという心遣いを忘れてはいなかった。

敏彦の前に引据えられている万里子は、悲惨な限りの姿態を示していた。女体と云うよりは、血の噴き出しそうな女の肉塊であり、

目を覆うばかりの痛々しさであった。その姿を見下しているうちに敏彦の興奮も凍結した。彼は自らの性の恐ろしさよりも、犠牲に選ばれた女体の哀れさが、ひしひしと迫って来るのを感じた。

縛しめを解き、幾度か心で反覆した慰めの言葉を口にする前に、万里子は、かすれた声で「あなた、済みませんでした。私が悪うございました。」と手について眼の縁を抑えた。

そんな事があってから、敏彦は、万里子が独りで娛しみを創造することを認めるようになった。決して危険な方法を取らないこと、日を決め、かつ最大限の時間を決めて実行することが厳格な要件にされた。

その日になると、敏彦は新しい楽しみを感じた。自分達の家の中では、自分の出勤の間、留守を預る「妻」が、身体の自由を奪われている。それは敏彦に取って、家が無人であるより遙かに大きい危険な状態であった。敏彦が「妻」の身の上に思いをかけるのは、所謂愛妻家のそれと比べると、もっとと激しい異質のものだった。

結婚後三度目の暮が迫った。ボーナスが入ったら、二人はためらわずにフラッシュユガンを購入しようといふ過していた。

待望の品を二人はお互いのクリスマスプレゼントにした。

六帖の炬燵に差向いになって、敏彦は、包を開く万里子の細い指の動きを微笑をたたえ優しく見守っていた。

最初の記念すべきポーズは、海老縛りに決めた。装いはナイロンのブラジエアと黒のズロースだけの裸身にした。用具は荒縄と細引を選んだ。これらは、すべて夫唱婦随の一致した意志であった。

万里子はアイシヤドウをつけたいと云った。敏彦は、しかし、黒や青を好まなかったもので、濃く塗ったルーシユを無理に命じて眼の縁にも走らせた。

荒縄でまず胸の隆起の上下を二巻づつ、二の腕を締めつけ、腋で捻って高手小手にした。次には細引で、荒縄の上をなぞるように巻き、それから手首を思いきり吊り上げ、万里子が、痛っ！ いいっ！ と声を立てるのを容赦せず、ぐっと力を籠めて頸にかけた。万里子の面上には、早くも苦渋の色が満ち、呼吸は縄目の下のすべての隆起で苦しげに喘いでいた。それでも、できるだけ視線を下に向けようとするのは、やはり女の悲しさであろうか。

次には脚を組ませた。右足首を左の膝の外側に当て、左の足首は右膝の内側に当てた。まるで荷造りのように、敏彦は万里子の両脚を嚴重に括り合わせた。細引の締めつけている四つの溝は、ふくら脛は勿論、向う脛にまで深く掘られ、その辺りを白っぽく見せていた。

「痛いかな？」敏彦が判りきっていることを殊更に口にして顔を覗き込む。「妻」は、いかにも堪えきれぬように幽かに肯いた。そして「脚が痺れて来たわ。」と云った。

「我慢するんだ。本当に苦しいのはこれからなんだから……」

敏彦は、愈々脚と頸とを結び付けにかかった。うっ、うっ、うっ、うっ、うっ！ 頭脳では理解していても、万里子の肉体は、烈しい苦痛に強く抵抗した。膝頭に力を籠めて、敏彦は万里子の背中の中のし

かかった。十七貫余りの体重をかけた男の力は、女の体を殆ど前屈させることに成功した。ただでさえ喰い入っていた首縄は、びいんと張りつめて、殆ど固定されたように吊られた両手首を死にもぐりいで上げてみたところで、喉にかくれて頸われなかった。顔は真赤に充血していた。頸縄に曳かれた顔を脚すれすれにまで括りつけられては、万里子の体はまるで押潰されたように、腰から二つ折になつて、扁平に悶えていた。

「く、くう、くっ、くうーっ」

苦しい！ とでも云うのか、しかし言葉になる程の力は苛責に圧倒されて残っていない。

「くう、くっ、うう、うっ、うふ、うふっ、うふう、ふっ、ふう、ふう」

言葉を発する意志が脳裏から追払われたのであろう。次第に、荒い呼吸を短く吐き出すばかりになつて行く。そして、それはやがて噛みしめた歯の間から漏れる音が混つて、ふいーっ！ となつたりひいーっ！ となつたりした。

敏彦は、カメラを据えてファインダーを覗いた。苦悶する「妻」を一枚、そして自分が責手になつて一枚撮った。それから彼は猿轡用の布を取り出して、「妻」に云った。

(次号完結)

(雑誌通信)

西 龍 治

花 実

(3)「中央公論」(三月号)

舟橋聖一

年来、何らかの意味で貴社の御役に立ち が、はらずも、今回迄、何一つ手つたう事がないと思ひ、色々構想をねつておりました 出来ず、我ながら恥いつている次第であります

す。とにかく何かと思つていました矢先、「中央公論」二、三月号に少々面白い記事を発見致し、御参考にもなればと御送りする次第であります。「中央公論」三月号、花実(3)舟橋聖一(とにかく、重要な所を先ず書き抜いてから、私としての解説、説明をつけ加えたいと存じます)



「ねえママ、ママもお呑みよ」

「あたしは沢山」

「ママは知ってらしやるの、サディズムって……」

「サディズムって……つまり、男が女をいじめる事でしょう。その反対に、女にいじめられるのがマゾヒズムでしょう」

「その位のこととは知ってるの。概念はね。だから、もっとくわしくよ。どういうことをするんでしょう」

「知らない——」

脇子は面くらった。然し、そう云われると、錦田には多少その気があると思った。

が、まさかそれを、染子がほのめかしているわけもなからう。恐らく今の質問は、染子が彼女の相手の誰かにそれを感じ、サディズムの何んたるかを脇子にたしかめてみたかったのではないか。

「染ちゃん、なぜ、そんなことが訊きたいの」

「別に……たださ、さっきの防空壕へ入って、竹の床儿に腰かけていたら、サディズムって言葉が何ンとなく浮かんできたの。ああいう穴倉で、男にひどい目にあわされたら、どんなかしら……あなたは、そういうことは全然覚えがない」

「ありませんとも」

「健全なものね。私はまた、女にはみんなそういう覚えがあるのかと思ってたわ、まだ子供でしょ、私って……」

「子供——恐るべきが上につくわよ」

「ハハハハ。とにかく、あの防空壕は問題ね。魚島先生がどういう風に設計図の中へあの密室を吸収されるか、絶対に見ものだわ」

というとき、錦田が帰ってきたらしく車のクラクションが鳴った。染子は、のみさしのグラスを呷ると、ホワイ・ホースの瓶を棚へ戻すのが一緒に

「すっかり、酔っぱらったわ。ごめんなさい。」

「パパですよ」

「会いたくないわ。おやすみ」と云ったが、又戻ってきて

「パパはそもそも、サの字なんじやないのそうでしょう」

——ポンと脇子の肩を叩いて錦田が上つてこない間を狙い、シヤロンのスカートをふくりましたまま、妖しげな白猫のように足音も立てずに階段を駆け下りていった。

大体以上の様ですが、二月号に染子が、跣足で足をどろんこにして花に水をやっている場面で「熱心ね」という脇子に「自虐よ」とつぶやく所が書いてありますが、そんな伏線

のなるストーリー構成の中で準マゾヒスト染子の発する「ああいう穴倉で男にひどい目にあわされたら、どんなかしら……」という言葉が重要な色合を呈するのではないでしようか。

好色物を書かせたら天下一の舟橋聖一氏が、こういう風の小説を書き始めたのは、新しい変化といって良いでしょう。中学時代の「嫌な奴」という印象が、まだ残っているせいか、彼の作品を余り熱心に読んだ事はありませんが、大作「夏子」の中にもこういった世界は描かれてなかった様に思います。もし仮に聖一氏の心の中に、こういった世界に対する興味が動いたら、絶好の相手である夏子に要求せぬはずはないと思いますし、又夏子がいう「男のオモチャじやあない」に実にぴったりするのですが書いてない所を見ると、氏の心を動かしたじめたのはまだ最近、すくなくとも作品化しようと思う迄になったのは最近の事ではないかと思えます。それに、この書きぶりをみると、何故か、この世界は氏の巧妙な筆により大いに発展する様に見受けられますが、これは私だけが感ずる独断でしようか。

〔西龍治〕

## 私の女装遍歴

矢 島 浩 二

私は南九州に育った一男一女の父で商業を営んでいる者ですが、十四才頃より女の肌につける腰巻、肌襦袢に心をひかれ現在も女装に無上の喜びを持っている者です。

人知れず自分の此の気持を打明ける人としてなく又、時たま打明けても本当に自分のイメージを生かした理解を持っている人に逢う事が出来ずに過ぎて来ましたが、昭和二十九年頃商用で出張先の博多で「奇ク」を知るに及び同好の方の非常に多く又、勇敢に体験等を発表されて居られるのを見て本当に嬉しくなりました。

私の辿った腰巻、肌襦袢、女装の遍歴をのべてみましょう。幼少の頃よく可愛がってくれた祖父に連れられて旅廻りの歌舞伎芝居を見て男が女装する事を始めて知り、休憩時間に髪を外した化粧した儘の顔で赤い腰巻に襦袢をつけた女形を幕の間からのぞき見してなんだか妙な気持で非常に興奮したのが女装に興味を持った最初だと思います。

それから家人の隙をみては簞司の中にあつた母の嫁入りの時の縮緬の赤い腰巻を素肌につけてそのなんとも云えない肌ざわりを楽しんだものでした。その頃、隣家の風呂を貰いに行くとき、その家の娘さんの赤モスリンの腰巻の洗濯前のが湯殿の衣類箱の処によく置いてあるのを知り何時も口実を云っては遅い時間に風呂に行き裸体になつては腰にまいてみました。

風の吹く日に和服の女の人が裾がまぐれると赤い腰巻がちらちらするのを見るのが楽しみで、どんな奇麗な着物を着ている美人でも腰に巻いて踵よりずっと上に裾が短い黒ぼい色の腰巻だと魅力どころでなく幻滅を感じ、着物の下にズボンをはいている女の人を見るに至ってはいやらしささえ感じます。

盆踊り、祭の仮装行列、芝居等で女装の男が出れば出来得る丈見に行き平気で人前に出ているのを羨しく思いつながら化粧、身のこなし、着付等をよく観察して参考にするのが楽し

しみな事は現在も同じです。

現今の着物の着方（特に洋服地の和服等）の流行では衿をひきつめて裾を短かくして足首がよけいに見える方法ですが、之は私は好ましくなく、どちらかと云うと衿をぬいた粋な着こなしが好きです。

昭和十四年応召して中支に渡り姑娘の紺一色の中国服か、慰安所の女と云つても殆ど洋装が多くて楽しみもなく、これも戦争故とあきらめていましたが、只一度丈部隊司令部で演芸会があり司令部の衛生一等兵（劇団の女形出身）が丸髷の髪、黒い着物で裾をからげて赤い腰巻を長襦袢の裾からちらちら見せた芸者姿で唐人お吉の「柳の雨」のレコードに合わせて踊った時は、ふるいつきたいような興奮にかられ、その一等兵を抱きしめたいような気持で一杯でした。

内地ではいざ知らず殺風景な戦場でこんな気持を味わせて貰えるとは全く意外で、その時の興奮は今でもまざまざと浮んできます。後で聞いた処によると部隊長の命令で内地からわざわざ衣裳、髪一式を取り寄せて、将校の宴会には女装でお酌させるのだとか、真偽の程はわかりませんが、内地の気分に飢えきっている戦地の生活ですから或る程度そんな事があつたかも知れません。

其の後負傷はしましたが無事帰還する事が出来、激しい戦争中の生活、終戦時の不安、



食生活の窮乏等に一時は私の欲望も遠のいていましたが、だんだん諸般の事情が落着くにつれて女装欲がはげしくなってくるのをおさえる事が出来ませんでした。

女装の第一回目は昭和二十九年頃上京した時劇団出身の男娼Kさんの家でやりました。入浴して髭を丁寧な剃り赤い絹の腰巻を肌に着き化粧して肌襦袢、長襦袢、着物、帯と身につけ最後に丸髷をかぶり鏡の前に立って自分の女装を眺めた気持は同好の方が感ぜられたのと同様で何となく嬉しく心がうきうきとするばかりでした。雪日和で外出が出来なかったのはかえすがえすも残念でした。

第二回目は昭和三十年一月大阪のやはり男娼Sさんの家でやりました。今度は少し濃化粧して洋髪の髪でハンドバックを持ち夜の新世界附近を散歩して食堂で食事をしたり、男娼の集って居る処へ行ってあいさつをしたりして写真をとりました。

男娼には一種の仁義のようなものがあって、あいさつなしに勝手に商売すると男娼仲間からひどい目にリンチを受けるのだと云う事を始めて知りました。私の場合ついて居たSさんが直に仲間に「男娼でなく單なる女装マニアだ」と説明してくれましたので何ともありませんでした。何しろ始めて女装しての外出でしたので始終人から見られているようで恥しくて顔もあげずに歩きましたが、暫く

すると慣れました。行きずりのあんちゃん風の男に女と間違えられてひやかされた時の気分は恥しいような、ぞくぞくするような変な気持でした。

第三回目は私の区の懇意な女の人に事情を話して美粧院で花嫁用の日本髪の髪を洋風にセットして貰い衣裳をつけて写真部で写真を取り映画を見物に行きました。切符を買う時、後方にいた女の人が「あの人の髪は髪みたいね」と話しているのを聞いてドキリとしましたが男とは気がつかぬようでした。

その後、現在迄に三回程女装しましたが、未だ東京の森本信一様のように白昼女装して外出する自信がなくて残念に思っています。私は五尺八分、体重十四貫位で顔には少々髭があります、身体は毛が殆どなく乳の処も少しはふくらんで、腰も身体に比較して標準よりやや大きく餅肌のような性質で化粧もわりとのびます。腰巻も桃色より赤色、布地もネルよりモスリン、縮緬がよく、足にまつわりつく感触がたまりません。

私の経験では女装するのには夏より冬の方が気楽なようです。私が身体の線をかくすのに和服がよいと思う事と、洋装が嫌いだからで夏は女の人も洋装が多い為よく目立つし尚、冬だとシヨールで顔の大部分がカムライシュ出来て安心感(男と見破られない)があります。私は大部分のマニアの方が、そうで

あるように、男娼的な気分はなく、單なる女装崇拜で男娼に対しては女装で暮していると云う事以外全然興味がありません。女装研究のつもりで、女形や男娼と逢って話をしたり、遊んだりしましたが同性愛のウールニングと思われて困った事が二、三度ありました。

私の少し変っている事は和服のみで洋服には興味が薄く、シユミーズ、ブラジャー、ズロース等を見てもあまり魅力がなく、黒色のズロースなどは却ってけがらわしくなりまふ。私も今迄の女装では化粧もして貰い着付も手伝って貰っていますので今度は化粧、着付も稽古して自分独りで出来るようにしたいと思ひ又、日本舞踊を習って身のこなしにも慣れたいと思っています。

女装の度毎に髪を借りるのも大変なので最近、カモシ屋で巾四寸位のカモシを買い別にカモシのミノ(長さ五寸位)をカモシの後につけて美粧院で現代風の洋髪にセットして貰ったもの使っています。髪より安価であまり目立たないようです。私の今の希望は、殆ど全身を白く化粧して顔は濃化粧で芝居の舞台にたち、若娘役で悪人に責められ着物だけは帯もとけ、赤い腰巻が白い足にまつわりながら舞台に転がされると云うような劇を演じて見たいと思つて居ります。

## 「女 体 風 俗」

— 妖 艶 ・ 花 の 巻 —

牧

高 志

文 ・ 画

「——処でさ、兎も角、赤かピンクのお腰をして肌襦袢を着たと——その次は黙っていても友禪か縮緬の長襦袢となろうじやないか。女体風俗はいよいよこれから佳境となる、右を向いても左を向いても花が咲いたようだ。しかもその花は活きているんだ、おいッと云えばハイと答え、両の手はと云えば領ずいて静かに後に廻わす妙齡の女性ばかり——これが和装天国と云うものだ。この天国で羽衣を……」

「何を独り言ってるの、天国だナンてよろめくのはまだ早いわよ」

「よろめきやしないよ、開店したばかりじやないか、お照さんと、こうやって逢うのも何

かの腐れ縁、縄が取り持つ縁かいなって、知ってるか？」

「知らないわ、そんなもの……それよか、あたしポウツと赤くなったでしよ、介抱して下さる？ だったらもう一寸飲んでもいい」

「危い天国だね、ほどほどにし給え。でーないと後が困る……」

「あとって、いつかの夕涼みのラジオ体操をまたおさせになるんでしょ」

「ありや座興さ、芸者の体操って見たことないからなあ、夏であるだけに、君は活潑だった、用意！ ハイッ、てんでお座敷着の股を広げたりしちやってさ……」

「馬鹿ねえ、そんなとこ、ばかり御覧になっ

て……」

「つまり独り言で開眼した、したと云ったって後に尾を曳くだろう、そのしっぽを御披露しないと首になるんだ。いいのかい？ 可愛いマーさんが首になっちやっても……」

「かまわないわ、あたしが朝晩、口移しに御飯を入れたげるわ、何よ、男一匹、それこそ手鍋下げても、あなたの一人位……」

「馬鹿に張切っちゃったね、御親切有難うと云って置こう、処で——今、どんな長襦袢着てる？」

「長襦袢？、裕よ、寒いから——。これよ薄桃色って云うのかしら、これに鹿の子が入ってる友禪、裏は紅絹なんでしょう、こんな



なのは……。それに伊達巻一本よ、忘れちゃった、それに腰紐一つしてゐるわ、それでお終い」

『いやに紋切り型だね、以上報告終り！ナンであつさりしちゃったら、商売にならんじやないか。シスターボーイだって科を作る世の中なんだよ、まして本職がパアッパアッパと澄まし込んだり色気も糞も無くなっちゃう、そんな時は……』

『恥ずかしいわ、どうしてお聴きになるの？ っていう向くのが正解なんでしょう』

『正にその通り、流石はお照姐さんだ』

『いかれてゐるわ、今時。だってお嫁入り前の娘さんでもないわ、粹で暮らして粹で死ぬ、こう見えても、あたしは……』

『判った、判った。こう見えても、あなたに愛され、苛められ拳句の果が縄がつき、縛る阿呆かこの責苦、よござんす、女の意気と帯を解き両手を廻わすしおらしさ。』

柱にしようか、それともこの儘で、どうとも御随意に立て膝を、崩す可憐な花牡丹！ そこで——』

『お好きねえ、三味線にも乗らない口上を仰言つて……。今日はどうなさるおつもり？ まあ、一杯やりましょうよ。落ちついて』

『審査が済むと落ちついてもおられよ。どうだい一度むいてへ若し、こちの人って……ならんかい？、それから酒だ、いいぞ、江戸前

のシヤリツとした処を見せて、どんとぶつかつて来い、たかが女一匹、何んのこれしきへっちやらテンで……』

『まあ凄いい啖呵だ事、じや脱いであげる、脱げばよろしいでしょ、ストリップじやないんだかな音楽はつかないわよ。特等席でゆっくり御覧遊ばせ！ 音なしの構えで——帯から先ず……』

『今日は君の献上の帯を賞めようてんではないんだ。寒からず暑からずの粋な長襦袢がさ、如何に女体にからみつくかを研究するために斯くは相成つた次第で御座る。じやに依つて吠えたまでさ、犬なら知恵ある雄犬さ。お判りになりました？』

『どうも有難う存じますわよ、暑からず寒からず御親切な……。さあ、どうぞ——お好きな様に、お焼気になるなら白く膨れてあげますわよ。羽二重餅は地前なんですものねえ、フフフ……』

——とまあ斯う云う次第でお照君の長襦袢なるものをつぶさに拝見したんだが、第一、このでっかいお尻の線は湯文字では出っこなし、着物では帯が邪魔をする。してみると女の線は長襦袢に在つて長襦袢に如くものはなし。まして衣裳を売る粹筋とあれば伊達巻はコルセットを代用してきゆうツと胴おもてを絞つての黄金分割、これがまた堪



らない魅力を放っている。その上洋品売場に売つてゐるアチラさん臭い物は一品すら着けない処にどうして惚れて惚れ死にするポイントがありますぞえ。『で——君は綿や晒布なんぞ、巻いてないの

かい？よく着こなしが出来るねえ、それで……」

『何云ってるの、一遍着たら二度と触れないお嬢さんと違いますわよ、御存知のくせに、……』

『成る程、恐れ入りました。じゃ、早いところその手を借して呉れ、久し振りだきゆうツと一締め後手に縛らして貰らうか、それからあとは相談だ。急いだ、急いだ……』

『まあ特急ねえ——』が変轍のないい図となって現われたと思召し給え。

——処が同じ長襦袢でも下町を離れてさるお屋敷の深窓の中へカメラアイを持ち込むとぐつと違ってくる。

つまり粋が泥の中に沈んで代って純白をあざむく白蓮の花が咲くように、だから同じ広袴式に半袴をつけた長襦袢でもまた風情溢れるものを持っている。では只今から女性みどりさんを介して泥棒侵入盗難の巻を演んじて見よう。前以て断って置くが、みどり嬢氏はさる演劇グループの一人として演技の点は一通りマスターされていらっしやるから木に竹を接ぐようなへまはなさらぬ筈。



ろ図

最初は『ヤイツ、静かにしろ！』てな具合にお泥さんの僕が入った。型のように探す真似をしてみどり嬢の枕元を蹴る、アツと驚いて起き上ろうとする処を押えて

『おっと待ちねえ、ただじや起させねえんだぞ、両手を後に廻わせろ、この柔けえ手首に喰い込ます細引の締め加減に』

『御遠慮なさらず、きつくお縛りになってもかまいませんことよ——』

『今、縛ってる処です。痛いですか？』

『お泥さんはもっと凄味を効かして万事深刻になさいませ』

『有難き幸せ。では細引を前に廻わしますよ。お乳の処を二巻、ぎゅうつと締めますよ』

『いちいち、よ、だナンて仰言らずに、どうでい、女！ちったあ身にこたえたかなどと放言なさいませ、その方が実感があって縛られるあたしの方もゾクゾク致しますとも……フフフ、もっときつく——それ位に』

『今日は縛る縛らぬと云う段取りよりは実は、あなたの長襦袢姿を拝見したかったんですよ。変な横槍を入れますが、この腰骨の細紐はどう云うためです？』

『変なお泥棒さんね、女を縛る途中に気が抜けることを仰言って……、普段は洋装でしょ、ですから、たまにお着物を着るとどうしても着崩れしちゃうんですの、それに長襦袢だと腰がぶかぶかすると裾前からずったりしてつい見えたりしますもんですから、腰紐で伊達巻の下を今一遍締めておきますの』

『——すると序でにもう一遍妙なことを伺いますが……あの——この長襦袢の下は、すぐお腰を締めていらっしやる？それとも——』  
『ホホホ……、お寝巻代用にキヤミソールやペティコートは要らないでしょ、ハイヒール』



ルはお寝床には履きません。ですからお腰と云うことになります。お腰はスカート式は外出用はいいんですけど、家の中では昔風の前合せにしています。お腰の下は？……ホホホ、どのようにでもお考え遊ばせ。長襦袢の後背の紐ですか？、花嫁さんだと要るんじゃない？、ありませんか。『ようし』ってこの儘立つんですか？、立ってどうなさいますの？、アラ……それピンクの帯揚げですわ、それで……まあ猿轡ですの？ハイ、どうぞたっぷりお嵌め下さいまし……』

『あらまし、講釈は聴いた、金目の物は無えと仰言るんだね、じゃ、お嬢さん、少しは家の中を歩いて貰おうかい。邪怪に後縄をこう曳くぜ、そのプクプクとした身体を包んだ長襦袢姿ってものは、いつ見ても堪らねえ、白地に朱の梅花を散らした縮緬物、観念したその眼元がまたいい。序でにその脚立の上へ片足を挙げて見る！成程——紅の蹴出しとは驚き申した』

御協力を感謝します、お疲れさまでした。猿轡を脱ずさせ



て頂きます、後手はまあ一寸の間、そのまま堪能させて下さい。以上がる図なんだがそれから先きは諸兄の御賢察を乞う次第。

——さてお立合い！ラストは世界広しと雖も花嫁衣裳コンクールにおいて第一位を占めるわがニッポン花嫁の金欄綴子をそれに増して引立てる——安くては友禅縮緬、少々値が張って紅紋縮緬振袖の長襦袢、紅色紋倫子総しぼりと来れば豪華なもの。

『どうも御世話さまです、この娘の知合い者ですが、その——何んです、花嫁衣裳の医学上の見地から直接身体に及ぼす影響と申す論文起草のため、ちよいと身柄を拝借したいんですが……式は二時から？それじゃまだ一時間たっぷりありますね、脈搏も調べて見たい

## は 図

んです、呼吸も……』

『それは御随意でしようが、折角衿を抜いて結びあげた処なんですけど——』

『これで……その下拵らえが全部終ったと云う処ですね、着付けられる人よりも着付けをされるあなたがたの方も大変ですなあ。一体全体こんなにガンジガラメに縛っていいんですか？、最初はどの紐で、お乳の上から腰紐を……成程、巻いてあります、その二本の腰紐をしめた中間のたるみを平にして伊達巻を巻けはんを巻くように巻きつける。次に長襦袢の背につけた背紐を一つたんに廻わして、その先を後で中央に結び合せ、左右の紐を上から引張るように結ぶ。こりや大変ですな、でないと此処がずると衿がプカプカして着崩れる』

『ですから、衣紋は、この背紐の始末で安定する訳で、抜き加減は花嫁さんのお首の太さ長さで形付けることに成ります。このかたはこれでおよろしいんですけど、胴の細いお嫁さんですと、この上ウエストの部分にタオルを二枚位巻くことがあります。大変で御座いますよう……』

『これじゃ、花嫁修行も並大抵ではないですな、披露席の

〔雑誌通信〕

東 西 南 北 生

## 匪賊の惨虐な私刑

〔雑誌「日の出」昭和八年五月号附録〕

昭和八年発行の『日の出』という題の雑誌の五月号の附録で「東洋の火薬庫、支那を裸にする」という特集に次のような興味ある記事がありました。見出しは、匪賊の惨虐な私刑」と題し、当時の支那に於ける匪賊の惨虐行為を多少誇張的な筆で書いています。私の興味を持った部分だけ書き抜いてみましょう。

### 匪賊の惨虐な私刑

官憲の睨みが利かない支那では、政府の刑罰よりも私刑が勝手に行われる。これがまた素晴しく惨虐だ。

その最も甚だしいのは惨虐性を商売にしている馬賊の土匪の群れで、金持ちの家へ押しかけ「金を出せ！」とやる。直ぐ金を出せばよし、出さなければ容赦なく人質を取って引き揚げる。

さて、彼らの定めた期日までに金を持って来ないと、直ぐ様むごたらしい私刑をやられる。その私刑ぶりを紹介すると、ま

ず、載眼鏡（さいがんきよう）といって人質の両眼に膏藥を貼るのだ。これは彼らの行動と巢窟を知らせないためばかりでなく、その不自由を見て笑おうというのだ。

坐糞害（ざふんこう）の刑というのは、裸体で糞壺の中へ坐らせるもの。灌辣酸水（かんらつさんすい）というのは、辛い水か石油を、鼻の穴に注ぎこむ方法。夾太陽（きようたいよう）というのは、二本の箸を瞳孔へさし込む。

しかし、こんな瀕死の苦痛を与えても身代金の入る当てがあれば、決して殺すようなことはしない。

人質が命令に逆ったり、逃げだしたりして捕まると上大架（じようだい）という刑を行うが、これは両方の拇指を麻縄で固く結びつけ、それに棒を通して全身を宙にぶらさげてぶらぶらと振るのだ。

売豆腐（ばいとうふ）といっても、豆腐を売るわけではない。これも私刑の一種で鞭で背中が腫れ上るまで叩き、腫れたところ

で花嫁君が乾杯はさて置いて料理が食べられない原因が判りましたよ。第一胸を圧迫している。乳房の上は安外痛くないと仰言るがそうでもなさそう。一寸両手を後に廻わして御覧！

『まあー花嫁さんを、どうなさいますの？』

『いや、研究のため、ちよいと、一寸の御辛抱です。御覧なさい、後手に手首を縛っただけで、ほんのりと桜色になるではありませんか。この血の循環のバランスを保つためには、更に胸に一縄が必要となりますね。これは可なりきつく縛って丁度いい位です。更に呼吸を圧迫するには猿轡があるんですが、これは止めときましょう。』

如何です？、花嫁医学は、このように六ヶ敷しいんですよ。ですから僕なんぞ新郎になる相手の男性がこの上乱暴狼藉をしでかすと腹が立って腹が立って仕方がないんです。いつかも、さる新婚旅行の宿先きで花嫁を後手に縛ったと云う話を聴きましたがね、それはそれなりに二人の中に訳はあったでしょう、泣き出したかも知れません。しかしどんな理由があるにせよ、初夜の晩に後手は可哀いそうですよ。脈搏処あらゆる機能が止つて了う位は判って貰いたいですね——』

『その脈搏の方は、もうお済みになりました？』

『いや、もういいんです。顔の色、肌の色で』



るを刀で割く、丁度豆腐のかたまりになつたようなところを焼くのだ。

女の人質が頭目などの意に従わない時は着物をすっかり脱がせ一糸纏わぬ真裸にして仰向けに大地に寝かせ、配下の匪賊たちがとり巻いて腹の上で骸子(さい)を転がして賭博をはじめ。もし女が少しでも動いて骸子が地上に落ちようものなら激しく答で打たれる。

一通りの刺戟では満足しない支那人のこゝとだから、惨殺した死体にも、なお刑罰を与えようとする。坐火車(ざかしや)といつて線路に死体を転して汽車に轢かせてしまふなんぞは惨虐どころの話ではない。

### 細君を質に入れる

「女房を質におく」というが、支那では、本当に質に置くからたまらない。何か金の入用なことが起る。さしあたり算段がつかなくなると、金持のところへ、自分の細君をつれていつて質に入れる。そして証文には「抵当の妻は貴下の養用にまかせ異議申すまじく候、後日の為一札如斯御座候」と判を捺す。約束の期日が来ても借金の返せない時には、質流れで先方にやってしまふか利息を入れて証文を書きかえるかするのだから奇抜である。

もともと支那では、細君は高い結納金を出して手に入れたものだから買ったものと同じだ。買ったものなら質に入れても差支えないじゃないかという論法だから恐れ入る。

### 残忍極まる私刑

たけり狂う赤鬼の一群！彼等は遂に土匪の慣用手段まで用いる。殺人、放火、凌辱はなまやさしい部類で、後には酸鼻きわまる酷刑を行った。鉄製寝台の下に炭火を置き、寝台の鉄鋼を赤く焼いておいて、死刑囚を載せて焼き殺す。

これを快活床(かいほおちこわん)——気持のよい寝台という意味——という。鉄線でつくった腰掛けに裸体で腰かけさせ鉄線でしばり火であぶつて殺す。これを快活榻(かいほおたあ)——気持のよい腰掛けという意味——という。美人は〇〇し、醜婦は皮を剥ぎ筋を抜いて殺す。車裂きの刑を行ったこともある。

以上は勿論昭和八年発行の雑誌に掲載されていたものだから、現在のことではないが、その惨虐さと奇抜さに、私の興味をひいた記事であった。

× × ×

ちやんと判つてますから……じや、元気で嫁つてらっしゃい！、いい奥さんになるんですよ。美味しい料理は、一皿余まさず箸をつくらんですよ。戦いは先ずお腹からと云いますからね、では続けて下さい、すっかりお邪魔して本当に申訳ありませんでした。長襦袢も基本型が終ると、いよいよ待望の着物と云うことになりますね。これがまた、うるさいのなんのって、どうしてこんな面倒なのかと——」

「あら——それでも御座いませんのよ。それには、着付けの要所要所にコツと云うものがありました……」

「そりや、あんた方には、何んでもなくとも事情と好みとお縄がからみつくんで——いやコチラの話です、全くの話が——今日はいい大安の日ですな、じや御免なすつて……」  
「叔父さんったら、顔を赫めてお逃げになりましたわ、ホネホ……」

——と云う次第では図をお届け致します。

長襦袢に恨みは段々あれど今回は一先ずこれにて、佳報は寝て着物黄金篇をお待ちあれと云爾——。

(本項終り)



山里にも遅い春が来て、向うの山やこちらの谷に山桜が咲いて、また散っていった。  
おたねは彦造の心が自分から離れて、若い京子に移って行きはしないかという心配が、いつも心の隅から消えなかった。京子の滑らかな白い肌、おたねに責め苛まれる時に見せる堪えがたい苦悶の姿態は、同性のおたねでさえ惚れ惚れする程美しかった。  
おたねは京子を責める事によって、そして

彼女を完全な自分の奴隷にすることによって心の悩みを和らげようとした。  
彦造は四日目か五日目には上の山へ開墾に行った。彦造が開墾に行く時は弁当掛けで出掛けるので、いつも帰りは夕暮れであった。  
京子は、彦造が明日は開墾だと聞くと、その日は、おたねに責められる事を覚悟しなければならなかった。おたねは彦造の留守の日は、きまった様に朝の内、京子を責めた。特

の後に廻って京子の胸へ手を廻し、左右の乳房の中心へその紐の結び目をぴたりと当てた。それから両方の乳房の上と下とに一本ずつ廻して、乳房の外側で、上下の紐を結び合せ、そのまま腕の下を通して背中グイッと締めて本結びに結び留めた。よく発達した京子の乳房が上下の麻紐でくびれて、つきたての餅をふくらませたような恰好になった。  
「どう？ 胸にしまりが出来て、仕事をする

に京子に対する衣紋竹責めが気に入って、毎度その責めを用いた。  
或る日、いつもの様に彦造が開墾に出て行ったあと、おたねは京子を居間に呼び入れると、  
「京さん、お前さんのオッパイは、大きくて立派だけれど、それじゃ働き難いだろうから、あたしが良い乳バンドを作ってあげるよ」といって一本の細い麻紐を取り出した。そして、鉄で真中を切って二本にし、その二本の紐の中央を結んで十文字にした。

京子は何をされるのかと、不安な気持ちでおどおどしているのを「何をぼんやりしてるのよ、早く着物を脱いでここへお坐り」とせき立てた。そして京子が着物の袖をたらし肌脱ぎになると、そ



にも楽だろう。おやおや、こんなに張り切ってるよ」

と、京子の乳首を指先でつまんでひねり廻した。

「ああ、義姉さん、やめて……」

と京子が思わず、おたねのその腕に手を掛けると

「じっとしているんだ、いいかい、わたしやお前さんの命の恩人だよ。男に死なれて、借金をこしらえて、生きて行く事さえ覚束ない者を、こうして飢えと寒さの心配のない生活させているんだ。だから、わたしの言う事や、する事には絶対に従わなきゃいけないんだよ。わかったかい、京さん」

京子が黙ったまま、かすかにうなずいた。

「おや京さん、お前さん不服かえ？」

おたねの眼が急に峻しくなつて、京子の乳首をつまんでいる指に力が入った。

「あッ、いいえ、義姉さん、そんな……」

京子は慌てておたねの腕から手を離して、哀願するようにおたねの顔を見上げた。

「どう、云う事をきくのかい？」

「……はい……」

「どんな事でも」

「……はい……」

「いいね……。云つておくが、この乳バンドは、お前さんが勝手に外してはいけないよ。お風呂へ入る時も、寝る時もだよ。外してい

い時には、わたしが外すからね」

「はい」

「じゃア、いつもの様に両手を伸ばして、そこへ横におなり」

京子が観念の眼を閉じて仰向けに寝ると、おたねは部屋の隅から衣紋竹を持って来て、京子の両腕を真一文字に縛りつけた。この衣紋竹はおたねの考察で、その両端の処に錐で穴を開け、紐を通してあつて、京子の背頸を通して両腕に添わせて、ちよつと結べば簡単に一文字縛りができるようになっていた。

両腕を真横に伸して縛られると、胸が張つて、乳房を締めつけている麻紐が一層肌に喰い込んだ。

「さア、両脚を踏ん張つてお尻を持ち上げるんだよ——もっと高く、そらそら、又尻が落ちた」

京子には、それは苦しいというより、むしろ耐えていることの出来ない責めであつた。赤い腰巻の裾が乱れて、両の白い脛が露わになつた。上体を反らして後頭部と足の踵だけで全身の体重を支えているということは、そのまま姿勢で一分も続けておられなかつた。おたねは京子の懸命にお尻を持ち上げ、背中を床から離そうと努力するのを快よげに眺めやりながら

「もっと、もっと」

と物指で京子の尻や背を叩いた。

ややあつて、おたねはついと立って襖の外へ出て行つたが、やがて戻つて来て京子の腹の上に置いた物を見て、京子は思わず

「あッ」

と叫んだ。

それは京子の良人信一郎の白木の位牌であつたからだ。

「さア、お前さんの大事な信さんを、お腹の上から落さないように、氣をつけて支えてい

るんだよ」  
という、おたねは妖しい情炎に眼を輝やかせながら、右手に持った物指しをしっかりと握り直した。

なだらかな丘のような曲線を描いている京子の腹の上の位牌は、彼女がそういう無理な姿勢に耐えきれなくなつて腰を落すたびにグラグラと揺れた。

パチッ、と乳房を物指で叩いた衝撃で、思わずビクッと身をすくめた途端に、位牌はころりと後ろへ倒れて、京子の腰巻の横へ転がり落ちた。

「京さん、信さんがお前さんの床儿から落ちたよ。——もっと、しっかりお守りをしなさい駄目じゃないか」

とおたねは嬉しそうに笑い声をあげたが

「さア、もう一度やり直したよ」  
と言って、自分で掴み上げて再び京子の腹の上に立てた。

しかし安定の悪い位牌は、京子が少しでも身体を動かすと、すぐ引くり返ってしまう。おたねは

「仕様がないねえー」

と呟やいたが、

「そうだ、それなら、こうして……」

と云って立ち上ったおたねを京子は恐怖の眼で見ると、おたねは簡箭の抽出しから、筆の軸ほどの太さの麻紐を取り出して丁の字に結び、結び目を京子の尻の下に敷いて両端を腰から腹へ廻し、一本は腰巻の紐に通して、その三本で信一郎の位牌を京子のお臍の位置へ結び据えた。

「さア、もうこれで落ちないやね、元氣を出して、それお尻を上げるのだよ」

「あゝ、ゆるして……」

京子が身をよじらせて必死に尻を持ち上げると、腰巻の紐がずり上って位牌はふらりと胸の方へ傾いた。おたねが物指を垂直に持って、上から京子の脇腹をグイッと押すと、京子は「あアッ」

と呻いてどすんと尻を落す。すると位牌は又ふらりと動いて元へもどる。

「何だねえ、早や尻を降して、もっと足を踏ん張って長く続けないかね」

そう言っておたねは物指を逆手に持つと、上下の紐で締められて、きんきんと張り切っている京子の乳房をグイグイと突きまくつ

た。

「あッ、義姉さんッ……ゆ、ゆるして……」

……あーッ」

もう京子には何を考える心の余裕がなかった。物差の先端で滅多突きにされる乳房を少しでも護ろうと、自由な両脚をばたつかせ、身を左右に撚じて物差をさけた、彼女の腹の上に結び付けられた信一郎の位牌が、魚信を知らせる浮子のように、京子の足搔きに連れてふらふらと前後に揺れた。

その夜、京子は独り寝の床の中で、信一郎のことを夢に見て、ふと眼を覚した。もう十二時を過ぎた頃と思われたが、彼女は彦造とおたねの部屋の物音が気にかかった。おたねの異様な呻き声が断続して聞えて来る。いつもは蒲団を頭から冠って、頭の中で数を読みながら、悩ましい妄想から逃れる彼女であったが、今夜は何故か寝付かれない。京子は寝間着の上に軽く着物を羽織ると、足音を忍ばせて土間を渡り、台所へ這い上った。襖の合せ目から微かなランプの光が洩れるのを頼りに、暗い中を手さぐりでそろそろ進んだ。その間にも、おたねの

「あッ、うーん」

と言う、息を詰めた呻きが聞え、もぞもぞと物の動く気配が感ぜられた。

もうすぐ襖際、という傍まで寄り膝で寄った時、京子のさぐるような右手が、固い冷た

い物に触れたと思う間もなく、カラコロン、と音を立てて倒れてしまった。

「あッ」と京子が思わず口の中で叫ぶと殆んど同時に、襖の向うでも

「おッ」という彦造の驚いた声がした。

京子が咄嗟の失敗で、どうしようかと戸惑っている中に、バタバタと二三蒲団を大きく動かす音に続いて境の襖がサッと開いて寝間着姿の彦造が出て来た。

「ふん、やっぱりお京だったな。」

と云いながら間の悪さに身体を小さくしている京子の腕を取ると、そのまま部屋の中へ引入れた。

部屋は四隅に台付の置ランプを立て、天井から二個の吊ランプを灯して、電灯の光よりも明るかった。

おたねの姿は見えなかったが、彦造の坐った横に丸くふくれ上った蒲団が、もそり動いたので、その中にいる事はすぐ分った。

「お京、お前も淋しいだろうが、人の寝間をこっそり覗くのは良くないな」

「すみません」

「こんな山の中で、毎日変化のない暮しをしていれば、夫婦の仲でも普通のこっちゃア倦きが来る。お前は変に思うかも知れんが、俺等も出来るだけ生活に変化をつけて乏しい生活から希望を見付けようとしているのよ——ほーら、おたねは此処にいるぜ」



彦造が無造作に傍の蒲団を捲り取ると、おたねが右手首と右足首、左手首と左足首という様に両膝を折り曲げて仰向けに縛られていた。そしてはだけた寝巻の間から張り切った胸元のなだらかなカーブがランプの光に照らされて艶々と小麦色に輝いた。

そうした姿を見た瞬間、京子は慌てておたねの肢体から眼をそらした。すぐ、おたねのきんきんとした声が響いてきた。

「京さんは、私のこんな縛られている姿を見て嬉しいかい？」

「義姉さん、そんな……」

「いいよ、いいよ。いくらでも、見るがいいよ。そして、お前さんも、この人に私のように縛って貰うといいのサ」

おたねは京子より優位にあった自分が、今反対の立場に置かれている憤懣と、彦造と二人だけの時には、そうまで感じなかった、他人が見ている、と言う心理的な作用で起って来る恥かしさと、容貌からいっても年令の点でも、男の心を惹き付け易い京子の出現で、ともすれば彦造の関心が自分より京子の方へ移って行きはすまいかという危惧の三つの気持が錯綜しておたねの気持を混乱させた。

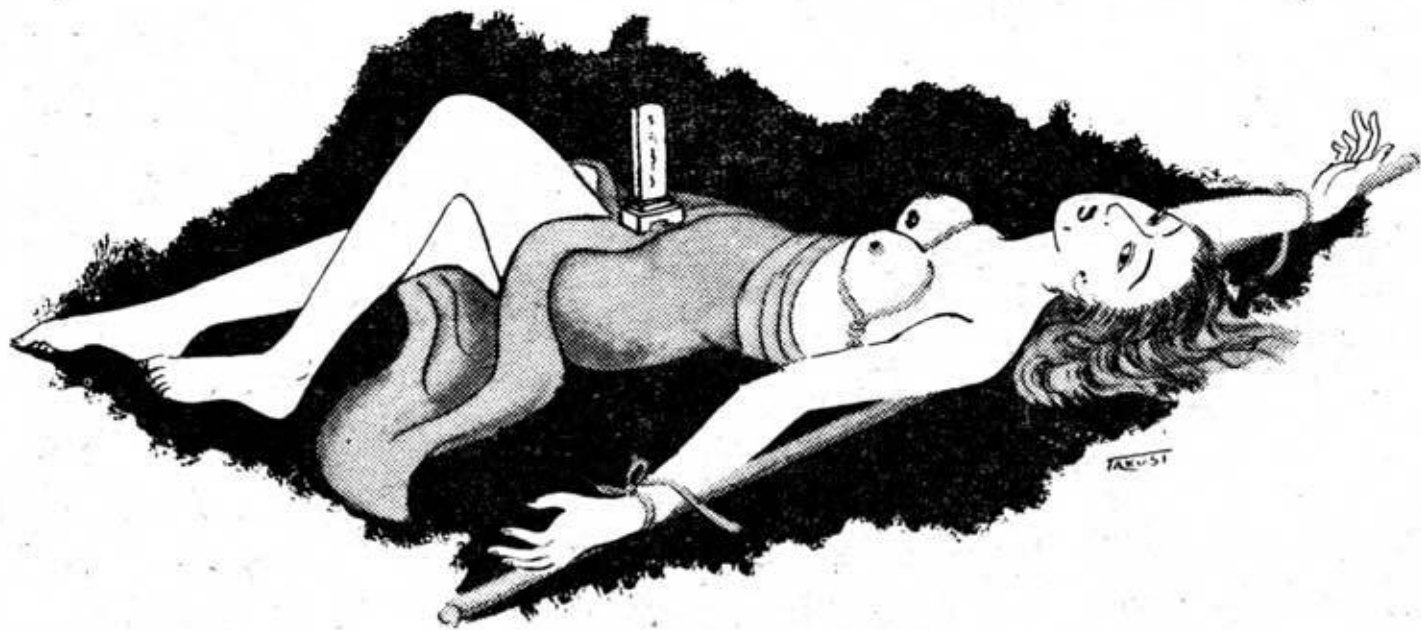
彦造に見れば、最初、信一郎の葬らに行った時から、既に京子へ対して新らしい興味を持っていた。その時、京子の姿態がもつと醜いか、それとも気性が勝気で、彦造の

手に負えない様なら、

「お前さんは、適当な人を探して再婚した方がよいぜ」

と言って、さつさと独りで山に帰っていた筈である。畑仕事もろくに出来ない、どちらかといえど食い潰しの厄介物をわざわざ背負い込んで来たのは、おたねを仕込んだとは違った方法で、もう一度初心な女を、自分の思いの儘に馴らして見たい下心があったからだ。

ただ彦造に見れば、京子に対して自分が行動を起す時期



を考えていた。先は兎も角として、夫に死別した妻の、亡夫を一途に憶うて嘆く期間と、その寂寥な心を感じ取り、過去を諦めて、未来への光明を望み、新しい刺戟を求めて来る迄の期間を読み込んで、今日まで素知らぬ振りをしていたのである。つい先頃、茶碗を割った事で、おたねがきびしく京子を責めた時は、未だ時期が早くそれに、あの時の針責めは初心な京子に対しては矢張り度を越えたものであったので、却って彦造がおたねを押える結果になったのであった。

彦造は何気ない風を装いながら、その後もおたねと京子の気持や様子をじっと観察していた。あの晩の針責めにも耐えて、逃げ出そ

うともしない京子の弱々しい態度は、彦造の  
 気持にぴたりであった。

京子に較べれば大分気性が強く、身体も色  
 こそ山家育ちで白い方ではないが体格も京子  
 より一廻り大きく、野良仕事で鍛えた固張り  
 のおたねが、京子と暮すようになってからは  
 女の競争心というか、男を奪られまいとする  
 嫉妬心か、その身じまいや態度に微妙な変化  
 を起して彦造を意外に思わせた。それは、お  
 たねがいつも彦造に責められるだけの立場か  
 ら、同性ではあるが、京子を責める事に興味  
 を持ち始めたことである。

——そろそろこころで手を添えねば、これ  
 は妙な事になるぞ——

そう思っていた矢先き、今夜不意に京子が  
 彦造の晩酌の後の膳に手を掛けて覗きの失敗  
 を演じ、おたねを責めている部屋に連れ込ん  
 だ事は、彦造にとっては此の上もないよいき  
 っかけであった。

「お前さん、私の手足を解いておくれ、私が  
 お京に覗き見のお礼をしてやるから」

「おたね、そう怒るな、良い加減には俺がや  
 る」

「えッ、お前さんが、お京を折檻する気か  
 い？そして私がここで、こんな恰好で、じつ  
 とそれを見ていなければならぬのかい。い  
 やだ、いやだ。さあッ、この紐を解いて」  
 おたねは、激しい嫉妬に身を揉んだが、手

足を縛られていて  
 は身動きも出来な  
 かった。ただ頸を  
 ぐつとこちらに捻  
 じ曲げて、彦造の  
 行動を、焼きつく  
 様な眼で見凝めて  
 いた。

彦造はおたねの  
 そうした気持を一  
 層そるるように、  
 わざとおたねに見  
 える位置で京子の  
 肩をしっかりと抱  
 いた。

京子は彦造の遅  
 しい腕で彼の膝へ  
 引き寄せられる  
 と、も早や抵抗す  
 る力を失っていた。

「おやッ、これはどうしたんだ」

京子を膝に抱えて、グツと彼女の衿をはだ  
 けた彦造は、京子の胸にがっちり喰入って  
 いる麻紐を見て驚きの声をあげたが、すぐそ  
 れと気がついた。そしておたねの顔を見て  
 「こんな責めは長く続けるもんじやアない。  
 大事な身体を壊すからな」

といいながら、それでも、その麻紐を直ぐ

## 女体緊縛フオート

G組 大中判印紙画焼付

各組1枚	
一枚	一三〇円
五枚	六〇〇円
十枚	一〇〇〇円
(送共)	

G1	鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)	ES2	三枚一組 二〇〇円
G2	股間縛正面 (高瀬 忍)	ES3	全裸悦唐集 (須川)
G3	海老晒し (萩千恵子)	ES4	四枚一組 二五〇円
G4	羞紅の椅子 (菅登紀子)	ES5	三枚一組 二〇〇円
G5	量感の帯 (伊吹真佐子)	ES6	酒宴の弄者 (佐賀)
G6	アイデア (萩千恵子)	ES7	二枚一組 一五〇円
G7	叫喚の森 (伊吹真佐子)	ES8	脱がされる娘 (須川)
G8	全裸目隠し (村田那美子)	ES9	五枚一組 三〇〇円
G9	優すがた (花坂道子)	ES10	二枚一組 一五〇円
G10	開股一番 (萩千恵子)		緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)
E組	(9×13cm印画紙焼付)		六枚一組 三五〇円
ES1	ヌード緊縛集 (佐賀)		

に解こうとはしないで、おたねと較べると、  
 ずっと肌目の細かい、若々しく張り切った京  
 子の肌を、まるで宝物でも眺めるように見つ  
 めた。

「そうさ、私よりお京の身体が大事なんだろ  
 うヨ。うんと可愛がつてやるがいいサ」  
 おたねは、地団駄ふんでそんな悪態口をつ  
 いた。

「馬鹿、お前はだまっていればいいんだ」



と、彦造は少しむツとした様にいったが、「お京、おたねに、お前が今朝どんな恰好で責められたか、もう一度、俺の前で繰り返えてやって見な」

と、彦造は少しむツとした様にいったが、

お京は羞恥で真赤になりながら、衣紋竹と信一郎の位牌を持って来て、逆エビの責めを再現しなければならなかった。

「はほう、こりやア思い付きだな。これじやアお京もちよつと参るわい」

彦造は、位牌を腹の上に載せて、足の踵と後頭部で全身を支えている京子の姿を見てこう眩やいたが、

「もうよい。さア今度は立ってみな」

と言いつつながら、衣紋竹に縛られて、両手を左右に伸ばしたままの京子を抱き起すと、縛られているおたねの頭の上へ蒲団をかぶせ、その上へ京子の身体を俯伏せに押し倒した。

「ああッ」

と、おたねと京子が蒲団の上と下とで同時に叫び声を上げたが、彦造はそんな事には頓着なく、六糎程の幅の、長い平紐を持って来て、京子の奴隷のように左右に伸ばした衣紋竹の両端に結びつけると蒲団の中で縛られているおたねの右足右手、左足左手と左右に分けて括りつけた。京子は口と鼻を蒲団に押さえつけられて呼吸も十分に出来ない苦しさに、「あッ、うーん」と身をよじらせて悶えた。

大の人間が自分の上に乗っている重圧に、おたねは蒲団の中で蛙を潰したようになっていた。それに彦造の操る平紐の手綱の引締めで、左右の手足がはちきれそうになって「いい」と歯を喰いしばって喘いだ。

しかし、この蒲団責めの折檻は、これで終ったのではなかった。今度は彦造は百姓仕事で鍛えた大きな尻を、どっかりと京子の背中へのせたのだ。

乳房は麻紐で締められ、両腕は衣紋竹で左右に伸ばされたまま、おたねを包んだ蒲団の上へ乗せられ、その上を彦造の尻に押しつけられて、十分苦しいのに、更にその上、平紐で頸を引き上げられて、京子は思わず「ヒーッ」

と悲鳴を上げた。痛いというよりも苦しいのである。息のつまるような切なさで全身を走った。

彦造は京子の閉じた眼尻から、うっすらと流れる涙の筋を見た。そうした恰好で思い切り顔を上へ反らせ、息苦しさに唇を開けて喘いでいる京子のそれと比較して、人間二人の下敷になつて蒲団蒸しになっているおたねの苦痛も相当なものであった。

蒲団の上から加えられる重圧もさることながら、なんとしても、この魚をひらいたような縛られ方は、この際苦痛を倍加した。今迄おたねが彦造から加えられた折檻の中で一番

持続的な苦痛を与えられたものだった。

あれだけ嫉妬の炎を燃やしながら、蒲団責にされた自分の蒲団の上で、京子が彦造からどんな責を加えられているか、おたねは知ることが出来なかったのである。(続く)

### 〔代理部だより〕

○代理部分譲品総目録はお申込を頂いた方々には大変申し訳ないのですが、いろいろの事情により作成が遅れております。然し出来次第いつでも発送できる手配だけはしてあります。故何卒御諒承のほどお願いいたします。

○臨時増刊号『サディズム特集号』の発行につき着手と準備や資料の蒐集に努めておりますので只今のところ、大分目鼻がついてきました。いずれ細部につき決定次第、誌上を以てお知らせいたしたく思っております。

○現在分譲広告中の「女体切腹構成案図譜」「女体自虐悦虐図」「風流女体アラベスク」「美しき女体家畜飼育室」等は近々分譲打ち切りの予定ですので、御希望の方は至急お申込下さるようお願いいたします。

○写真特写の引受は写真部の仕事で忙しくなりましたので当分の間中止いたします。再開の時期については未定ですが、御希望の方には御照会次第御返事いたします。

## 十三人目の奴隸

(四)

夢 原 狂 介

「よし、負けた横着な馬は、騎手が鞭の制裁を加えるのだ」

結果は、二着以下の騎手となった五人が、馬になった五人の人を、鞭で打たなければならなくなりました。私も、お嬢さんを打たなければなりません。男達は、馬になった女達を、機械体操のような棒に吊上げて縛りつけました。そして私達五人の騎手になった女に鞭が渡されました。私は、この鞭でお嬢さんを打たなければなりません。しかし、どうしてそんな理不尽なことが出来ましょう。私は力なく鞭を握ったまま困惑していると、突然

「あんた、打てないの」

背後に声がしました。ハッと振り向くと一番になった騎手です。

「あたしが一等になったから、みんなを打つ権利があるのよ。早く、その馬を打たないといけないじゃないの」

と促すように冷たくいうのです。でも、それは無理です。この優しいお背に、どうして鞭がと、ためらっていると、『パチッ』と音

がした一瞬、背中に熱い感じがしました。

「どう、こたえた？こたえたら、その馬を早く打つのよ」

その女が叫びました。しかし私は、鞭を握ったままです。

「あんた、まだこたえないのね。だから、その馬を打たないのね」というなり今度は前より一層激しく打たれました。私は、焼けるような痛さに其の場に崩れました。すると女は、

「じゃ、あたしが代りに打ってあげよう」

といいながら、お嬢さんをピシッと打ちました。

「ヒイッ——」

と悲鳴をあげられた其の声を聞いて、私は思わず、がばっと起き上り鞭を握りしめるや、その女の背後に迫りました。そして正に、振り下そうとした時でした。一人の男が息を切らして駆け来てました。

「旦那！大変です。見たこともねえボートが、屋敷の周りをうろつ



「います」

主人の男は、ちよつと緊張した様子で椅子から立ち上りました。

「よく確めたか。ともかく手前達、手配をしろ。俺も直ぐ行くから」

何事が起つたようです。主人の男の様子から推察すると、ひよつとすると警察の手でも回つたのかも知れません。私は思わず「嬉しい」と小さな声で叫んで、胸を躍らせました。男達は、私達を残して慌てて出ていきましたが、その後は別段変つた出来事も見られません。でも、このどさくさの御蔭で、この日の酷い運動会も、そのままになつてしまいました。

私は赤黒く、みみず腫れに腫れ上つたお嬢さんの痛ましい鞭痕を、半泣きになつて手当しましたが、

「ねえや、痛かっただろう。あたしをかばつてくれたばかりに、ねえやまで打たれてしまつて、勘忍して、あたしの軀はどうせ目茶目茶にいられて、終いには海へでも投げ込まれるんだわ。あたし、もう覚悟は出来る。みんなの動物にされて死なねばならん運命なの。あたしには、もうお母さんもお家もない」さすがに、お嬢さんは思い詰められたのか「わっ」と泣き伏せられました。何んという悲しい御決心をなさつたのかと、私は涙が先に立って声も出ません。でも私まで、お嬢さんのような気持でいては、誰がお嬢さんの力になるのかと思うと、自然と緊張してくる自分の気持がハッキリとしてくるのです。

「お嬢さん、しっかりして下さい。命さえあれば、何んとかなるんですもの。私が、もう駄目というまで、お嬢さんも気丈夫に思つて頑張して下さい」

「ねえや、あたし、あんたの力で生きてるようなものですわ。弱いね」

私は胸が塞つて思わず、お嬢さんを抱き寄せんばかりにしながら

「まあ、私羞しい。勿体ないですわ。そんなこと、もうおつしやらないで。それより元氣を出して、私達の目的を少しも早く実現することに努力しましょう。ね……」

といいました。本当に不運な主従の二人でした。

こんな事があつて一週間ばかり経つたうすら寒い、そして珍しく雪がちらつく鉛色の空をした日でした。飽くことを知らぬ淫獣共が又、なにを思いついたのか、例の通り奴隷達を集めて

「寒い日は血液の循環を活撥にすることが肝心だから、今からマラソン競走をして体を温める。この競走に一等をとった者には、賞として一週間、二等は六日、三等は五日、四等は四日、五等は三日、六等は二日、七等是一日、八等は十時間、九等は五時間、十等は三時間、十一等は一時間の自由を与えてやる。それもとれないものは当然、罰を受ける」

と云渡して、全員に又、裸になることを命じました。戦車競走の日と違って、今日は全く寒い冬空です。厚着をしても火が欲しい時候に、何んという残酷な命令をする獣でしょう。自分達は、皮のジャンパーやセーターに温く温くと身を包みながら、私達にこのような苛酷な命令を下すのです。全く私達は、この男達の玩具と化してしまいました。今更ながら、女に生れた自分が情けなくなりしました。

「呪われたる女性よ。お前は男達の前に、その妖しくも輝く肌を曝さなければならぬ。それが女と生れた人間が背負わねばならない不滅の哲理であり、生涯の十字架である。さあ、早く肌を曝すのだ！」

と、悪魔が罵り促すようです。全く哀れな私達です。どうして私達は、この世に生れて来たのかしらと、悲しくて仕方がありません。寒さに震え乍ら背を丸くしてしやがんでいる。その肩に雪が無情にも降りかかります。

「向うを向いて一列横隊に並べ」

私達を並べさせると、一人の男が籠を提げて後へ回りました。そして私達の背中に筆太に番号を書入れました。それが済むと、今度は前へ回って胸へ書き込んで行きました。そのうちに一人の女に、番号を書き間違えたようです。すると、その男は舌打ちをして、

「手前が動きやがるから、間違えたじやねえか」

というなり、その女の胸へパツと唾を吐きかけて、自分の履いているゴム底の靴でゴシゴシと消すのです。その人は、顔を真赤にして目を閉じて俯向いていました。全く、私達を完全に奴隷視して唯、動く肉塊としか認めておりません。さて、そんなことをしても消せる筈がありません。かえって、その人の胸の墨が拡がって黒く汚れるばかりです。

「仕方がねえ」

男は呟き乍ら乳の下から腹の辺りへかけて書き込みました。そのために、その人の上半身は、何んとも云えない奇妙な姿となりました。やがて全部の書き込みが終って、合図と共に走り出しました。奴隷にされた私達にとって自由は最高の榮譽です。我こそ一週間の自由をと死物狂いで走ります。私は、お嬢さんが気にかかって眺めると、さすがに女学校時代に鍛えてあるだけに、素晴らしいものです。思えば、変な処で昔の技能が役立ったわけです。誰もお嬢さんを抜く者はありません。私は安心しました。もう大丈夫、久振りで一週間も楽になれる。今から他の人がどんなにスピードを出しても、とても抜ける気遣いがないのだ。今度こそ女王様だ。やれ助かったと、自分が勝ったみたいな気持で、胸が晴々するのです。私も、お嬢さんの後になろうと思って頑張るのですが、氣ばかり焦っているように足が動いてくれません。私は諦めました。お嬢さんさえ一等なら自分は少し位、遅れてもいいと思いました。

遂に勝負が決りました。予想通り、お嬢さんが一等です。私は飛

責められる男性、虐められる男性十態

滝れい子画「マゾヒズム画廊」

（分譲）

大中判印画紙焼付 十枚一組 千二百円 略号（ろう）

一、屋根裏の妖女 二、黒帯と雪の足 三、御寮さんと丁稚  
四、女学生と中学教師 五、禪かつぎの受難 六、二号さんと重役 七、従姉と中学生 八、愉しい苦行 九、衣桁の陰に舞う鞭 十、土牢の女王とスパイ

んでいって、無意識にお嬢さんに抱きつきました。まるで親が子に對するような動作で抱合したのは生れて始めてです。でもその時は私もお嬢さんも夢中でした。と、お嬢さんが突然、

「ねえや！痛い！」

とおっしゃったので、ハツと気がついたのですが、何んと私が嬉しい余り、お嬢さんのお乳をしっかりと掴んでいたのです。私はビクビクして離しました。さて、二等はあの給仕の人です。三等は知らない人で、幸い私は四等になりました。それにしても、一番しんがりは一体、誰だろうと思って見ますと、それはこの間、私を二度も打ったあの憎い女ではありませんか。その女が、今は後手に縛られて私達の方へ、こずかれ乍らよると歩いて来るのです。そして私の顔を見た一瞬、その女は目を閉じて、いいようなない羞恥に身をくねらすのでした。

やがてその女は、噴水塔の下に私達の方を向いて立たされ、縄は一旦解かれましたが、すぐに今度は両腕をピンと斜めに拡がされ、手首を噴水塔の人形の足に結いつけられました。噴水塔は止められていましたが、塔の廻りには青く汚れて藻の浮いた水が、一杯に充



たされていました。肌を刺すようなこの寒中に女は膝まで水浸じです。私は、もっと酷い目に遭えば面白いのにと——思う程、その女を憎みました。女は冷たいのと恥しいので、齒を喰いしばっているのですが、襲ってくる寒さにか、折々ピリピリっと全身を震わしていました。やがて男は、皆に向って、

「お前達はその女に泉水の水をぶっかけるのだ。一等の者は、この籠に十一杯、二等は十杯と、後はその割合で、お前達の望む処へかけるのだ」

と、空籠を一人の女に渡しました。その女は、まるで成田のお不動様にでもお参りしたように、汲んではかけ汲んではかけしました。噴水塔に縛られた女は水をかけられるたびに「ヒーツ」と悲鳴をあげて全身を激しく動かしします。その次の女は、狙いを定めるように顔から胸、腹と八杯程、水を浴びせました。胸に書き込まれてあった番号も、いつの間にかすっかり流し落されて、二つの乳房が震えていました。暮れかかる冬の空気を突破するように、女の悲鳴が響きます。程なく空籠が私に廻って来ました。私は、この時を胸をわくわくさせて待っていたのです。本当に憎い女め、お嬢さんと私を酷い目に遭した恨みを晴すのは、今を外せば何時来るか判らない。こう思った私は、空籠を奪うよう受け取って、水を充分汲み込んで浴せようとした時、その手を後から止められました。ハッと思つて振り返ると、これは又、何んとお嬢さんが両手で、私の腕にぶら下らんばかりに、しっかりと掴まっておられるではありませんか。

「あつ、お嬢さん。何んですの？」

といい終らぬうちに

「お願い！勘忍してあげて。ねえ、いいでしょう。お願いだから……」

「でも、お嬢さん。直接に関係のないお嬢さんを打ったりなんかし

て、本当に憎い。私だって二度も打たれましたわ。こんな時こそ……」

と私は、いきり立ちました。

「ねえや、そりやあたしもよく判ってるの。でもね、ねえやが打たれたのは、あの時のルールだったんだし、あたしを打ったのは、この人の行き過ぎという事も知っている。けれど、あの人はあんなに苦しんでいるんだもの。これからまだ、他の人にもかけられんだと思うと可哀想よ。せめて私達の分でも、少なくしてあげたらと思つて止めたの。あたしが打たれたのは、あたしが許してあげるからね。ねえや、あなたもこの人を許してあげて、お願いするわ。ねえ、お願い！」

と、お嬢さんは眼に涙さえ浮かべて、おっしゃるのです。聞いているうちに、私も涙がこぼれました。本当にお嬢さんという方は、何んと清らかな神様のような優しいお方だろう。それに比べると自分は、お嬢さんの奴隷として使われても、まだ勿体ない位、値打のない人間だと思えるのでした。お嬢さんのお蔭で、その女は二十杯余りの洗礼？を助かりました。又、他の人もお嬢さんの美しい心に感じたのか、申訳けにかけれる位で、中には全然かけない人もありました。

こうして私達は、お嬢さんは一週間、私は四等で四日間の自由を許されました。といつても、それは両手の鎖を外して貰つて邸の近くを散歩したり、自分の部屋で好きなことが出来るというだけのことです。それでも今の自分達の環境としては、差し当り、これ以上の事は望めそうにありません。それにしても、邸外を散歩させたりしては逃げ出す人もあるだろうと、余計な事を考えたりしたのです。が、どうせ厳重な柵があるとか、若しかしたら島かも知れないと思ひました。とにかく、お嬢さんと二人で外に出ることにしました。夜中に降ったのか雪が少し積っていましたが、そんな事は平気で

す。二人は脚に委かせて回りました。この時ばかりは、お嬢さんも嬉しそうでした。私も、お嬢さんの嬉しそうな顔を見ると、つい楽しくなりました。

やがて私達は、小高い丘に登りました。下の方を見下すと、邸が立派なホテルのように見えます。それが樹木の間からチラチラと見える風景は、まるで油絵の風景を見ているようです。しかし、その美しい立派な邸には、世にも恐ろしい地獄の鬼のような男が住んでいるのだと思うと、戻りたくない気持ちがします。でも、所詮は囚われの身です。どうせ戻らずにはいられない自分達だと考えると、途端に気分が暗くなるのです。それとも、このまま逃げ出そうかと、お嬢さんと相談したものの、其の方法がありません。どうやら、ここは島のです。勿論、小舟すらある筈もなく、其の上、邸の裏は海岸といっても岩が多くて、足がかりもありません。それを思うと、私達を手放して散歩させる理由が判りました。実際、何かの援助がない限り、絶対この島を逃げ出すことが出来ないようになっていくのです。

自由期間が切れると又、あの呪わしい奴隷服を着せられて、両手を鎖でつながれました。この邸では罪と罰が必ず併行していかないのが不安でした。罪がなくても罰だけが行われるのです。ですから、罪を犯さないからといって安心してはいるわけにはゆきません。とも角、私達奴隷のすべては、必要に応じて主人の男の意のままにならねばならない運命を背負わされているのです。そして、その意（苦痛又は辱しめ）に従わないと、罰だといって又、苦しめられるので、所詮この女達はどっちに廻っても、いじめられるために生きている奴隷でしかありません。

そうした或日の事です。来客がありましたので、私は命じられたまま、その客へお茶運びました。そして、その部屋に這入った途端に、ハッとなりました。

お客は婦人ですが、素晴らしいミンクのオーバーの上から銀狐の襟巻を豪勢につけて、指には何か知りませんがキラキラとよく光る宝石の指輪、どう見ても富豪の令夫人といった服装です。処が、その人の顔を見て、ちよっとビックリしました。仮装舞踏会などで見るマスク（鼻にあたる処を半円形に切抜いた）をつけているのです。私は「ハテ、物好きな茶目っ気のあるお客さんだなあ」と思いながら、お茶を差出しますと、その人は一口飲んで

「住み心持はどう？」

と、いきなり尋ねるのです。私は、この人が自分に何かのつながりがあるのではないだろうかと思ったので、

「別に、どうっていうことは御座いませんけど、失礼ですが、あなたさまはどなたさまでしようか」

といいますと、その人は

「あたしはね、この主人と知合いなの。あんた達は、この主人をどう思う？」

と聞きました。私は、服装は物凄く立派だが、話題が初会にしては安っぽく感じましたので、ちよっと詰らなく思いました。それに、その人が主人の知り合いとすれば、うかつに返事が出来ないという警戒心が起って、

「私、別に考えて見たことも御座いませんけれど……」

「そう」

と、何か物足りない表情でした。そして

「あなたの、お友達は何？」

というので、私は自分の友達というのは、この仲間の女達のことだと思って、

「ええ、皆いますわ」

「皆？そうじゃないのよ。ほら、あの美しい、あんたにとって何よりも大切な人さ」



私は、お嬢さんの事だと気がついて

「ああ、お嬢さんのことですか。いらっしやいます」

「そう、じゃあ済まないが、ちよっとここへ呼んで来て頂戴」

私が、お嬢さんをお連れして来ますと、その人は、お嬢さんの顔を見るなり、

「まあ！滝沢さん、お久しぶり。おたっしやで、なによりだわ」

と、誰だか判らないのでボンやりしていらっしやるお嬢さんを、頭の上から足の先までじろじろ眺め乍ら、

「あんたが着ているそのドレスは、素晴らしいデザインね。背中をいつでも打って貰えるように、ホックを外せば直ぐ肌が飛び出すあたり、全く素晴らしいわ。それに両手のアクセサリー、少し重いけど丈夫でいいわ」

と、その人は恥しがらるお嬢さんを、面白そうに見詰めているのです。お嬢さんは堪りかねて、

「あなたは誰方ですか」

と、ちよっと気色ばんで、おっしやると、

「まだ判らないのね。あたしはこのマダムで、こういうものさ」

というなり、マスクをパツと外しました。同時に、私とお嬢さんは「あっ！」と驚きました。その人は、ドレス・メーカーのフアツ

シヨン・モデル仲間で一番年配であった。藤野というモデル女です。あの女が、この主人の女であるとは、夢にも知らなかったのです。これで私達をこんな処へ誘拐した手段の大体が判りました。さすがに、お嬢さんも御立腹の様子です。

「まあ、藤野さんでしたの、お蔭でいい景色が毎日見られて喜んでいますの」

と皮肉をおっしやると、その女は気に障ったのか、

「お黙り！奴隷のくせに、私の名を呼ぶなんて、主人に対して失礼よ。奴隷なら奴隷らしくするものよ。第一、お前達は生意気よ。少

し美しいことを鼻にかけて……それを陳の馬鹿社長が後生大事にするものだから、お前はいい気になって。よくも、わたしを馬鹿にしていたね」

というのです。すると、お嬢さんは

「まあ、あなたは何んてひどいことをおっしやるのね。あたしは新米だし、あの仕事は始めてだから、皆様に教えて頂く気持こそあれ馬鹿にした覚えなんか少しもありませんわ。それに、あたしを励まして下さった社長さんまで引合いに出したりなんかして。あなたこそ、あたしを馬鹿になさってるわ」

全く、お嬢さんのおっしやる通りです。けれども、その女はそれ位の事で引込みません。それどころか、増々威丈高になって、

「お黙り、奴隷女！お前がそんな了見でいるから、そんな姿にされたのがわからないのか。お馬鹿さん！」

私も堪えかねて、

「でも、お嬢さんは決してそんな方じゃないのです」

「お前も同じ料簡だね。いいよ、何も聞く必要がないから。しかしお前達は、まだ奴隷の作法をしてないじゃないの」

私達は口惜しいが、仕方なくその女の足に接吻しました。

それから中一日をおいた翌日でした。今日は、久々に来られた奥さま（藤野のこと）をお慰めするためにと、私達一同は珍妙な服を着せられました。生地はセルのような毛織物で赤、青、黄と色々な色で染めてあります。襟も腕も脚も皆、はしだけはキッチリ締めるのですが、それ以外の処はダブダブです。これだけなら別段珍しくないのですが、この服の胸、それもお乳に当る箇所だけが窓のように抜きとってあるのです。そしてそこを蓋するように、別の生地で胸の上部から下っているのです。この下った生地の下端の両角にゴム紐がついていて、これが腰を締めているバンドの両脇に結びついているのです。そして別の長い二本の紐が、両隅についているゴム紐

と同じ処につき、それが肩にある輪の金具を通して、それぞれ四十センチばかり、だらりと下っているのです。さて、この変てこな服を素肌へ着せられた私達一同は、広間へ連れ出されました。

床にはカーペットが一面に敷きつめられ、五米おき位に太い大理石の柱が並んでいます。両側の窓はカーテンを絞ってありますので、外は寒そうでもガラス越しに差込む陽光で割合に温く、それに白い天井に反射するためとても室内は明るいのです。男達は私達を一行に並べさせると、

「今日は奥さまに、お前達の踊を見て頂くんだから、一生懸命にやるんだぞ。怠け者はこれだ！」

と鞭で床を叩いて見せました。

「あたし、踊りなんか知らないわ」  
「そう、あたしはダンスなら知っているわ」

「あたしは、何んにも知らないわ」  
「なあに、なんでもいいのよ。目茶苦茶に跳ね廻ってりや、それでいいんだわ。ホホ……」

私達の間で、ひそひそと話声がします。やがて、あの憎い藤野が出て来ました。そして正面の椅子に腰を下しました。奴隷女一同は



頭を下げます。すると藤野は、さながら女王様のように背いているのです。その時、男は手を高く上げました。それを合図に私達は一



齊に跳廻りました。広間ではありますが、若い女ばかりが物凄いテンポで暴れ狂っているわけですから、室内が暑い位です。私の肌もじっとりと、汗ばんで来ます。それに着ている服が毛織の生地なので、シクシク刺されるようにムズ痒く感じ、堪らないからといって、ちよつとでも動きを止めると、すぐに背中へ鞭が下されるので、仕方なしに踊り狂っていました。かなり長い時間が終った頃、男が「止めっ！」と号令しました。ほっとしていますと、三人の男が一人一人の前に立って、垂れ下っている二本の紐を手首に結びつけました。私は何んの気なく両手を下に降した時「ハッ」としました。乳房を隠すように垂れ下っていた蓋のような生地が、お芝居の幕のように、あつという間もなく上部にキリキリとたくし上るので、そのために私のお乳は両方共、丸出しになってしまいました。何んという恥しい服でしょう。他の処は、暑くて困る程キツチリしているくせに、ここだけが素肌になるので余計に羞しいのです。よく判りませんが、他の人も同じなんです。どぎつい原色で染め上げた服の一箇所から、どの人も皆、張切った乳房が飛出ているさまは、乳房と思えず何か造り物をくっつけているように見えます。初めのうちは手を挙げていた人達も、手がだるくなって下すと、胸の窓の戸がポツカリと開いて、その中からお乳がピヨッコリと顔を出すのです。それが大勢ですから、あつちでもピヨッコリ、こつちでもピヨッコリと、まるで白い風船玉でも飛廻っているような光景です。やがて男は

「お前達は右から順に一人宛、奥さまの前に行って、踊りを見て頂いたお礼を申上げるのだ」

といいました。やがて一人の女が藤野の前に進み出ましたが、藤野に、

「両手をあげて主人の前に立ちはだかっている無作法が、どこの世にある」

といわれ、手を下げた途端、当然の結果として美事なお乳がブルンと揺れて露わになりました。すると藤野は、その女に近寄って、

「まあ、失礼じゃないの。汗臭い体をして来るなんて」

と、傍に置いてあつた履き古した草履で、ゴシゴシと美しい乳房をこすりました。その人は苦しそうに、頭を烈しく動かしていました。滑らかな乳房を藁で擦られるのですから痛い筈です。そのうちに私の番になりました。どう考えても恥しいので、やはり手を挙げたままで藤野の前に立ちましたが、結局手を下げねばなりません。すると藤野は、

「お前も汗だらけだね。それに変な匂いがするね」

と殊更、大きな声でいったものですから、他の女達がくすくすと笑ったようです。それから例の草履で乳房をいやという程、拭かれて、赤インキで「丑」という字を十センチ位の大きさに書込まれました。次の人は「寅」その次の人は「卯」といったように、私達は丁度、十二人ですので、十二支にもじったわけです。そして、いよいよお嬢さんの番になりました。お嬢さんは諦めていらっしやるのか、両手を下におろして進まれました。

「お前は、わたしに抗弁したことを詫びているんだね。悪いと気がつけばそれでいい。旦那様に仕えると同じように、わたしにも奴隷の身分を忘れずに命懸けで仕えるのだよ。わたしは、お前の殊勝な心掛けに特別の御褒美をあげるから」

と、白い滑らかな両乳房の間へ「未」と書入れ、更に乳首にも筆が下されようとした一瞬でした。突然、お嬢さんの手が上ったのです。恐らく、それを拒むためであつたでしょう。そのために、胸の上部にたくし上げられていた生地が、サツと下りるはずみに筆が女の指からピーンと離れて宙返りをしました。そして赤インキを含んだ筆が、藤野の腕にピシヤッと当りました。藤野は「あっ」と叫んで、お嬢さんを睨みつけ、

「まあ！お前は何んとした奴隷だ。わたしの贈物を拒んだ上に、わたしに、よくもこんな事をしたね！」

というなり、傍らの男に

「この奴隷を二番倉へぶち込んでおしまい！」

と命令しました。可哀そうにお嬢さんは、二人の男に両腕をとられて広間を連れ出されました。さあ、心配で堪りません。そんな事位を、さも大事件のように怒るのは、過ちそのものよりも、お嬢さんを虐める口実になっている位のは、私にもよく判っているのです。それだけに、お嬢さんをどんなひどい目にあわすか知れないと思うと、立つてもいても居られない焦りを覚えるのです。部屋に戻ったものの、私の頭はその事で一杯です。それから一時間位、経った頃です。男が来て、

「おい、俺と一緒に来い」

といわれて、薄暗い廊下を通り抜け地階に下りました。五、六歩

ゆくと、檜の頑丈な扉がありました。男は、その扉を重そうに開けました。ゴロゴロと地に響くその戸の音が、地の底に引込まれるような暗い感じを与えます。中は真暗で、様子がちっとも判りませ



ん。その時、私は気がつきませんでした。二番倉とは、ここだろう。すると、お嬢さんをここへ押し込めてあるんだ。そして私も一緒に閉じ込めるつもりかも知れない。万一、そんなときは、一人の男位なら



死物狂いで抵抗したら、相手もひるむだろう。その際にお嬢さんを救い出して、とりあえず裏山へ一時身を隠して……等と考えても見たのですが、いやいや、そんなことをしても、この邸には小牛位のセバートが二匹もいる。あれに嗅ぎ出されて捕えられた挙句、最悪の場合は殺しになるような事になったら、自分はよいとしても国元にいる両親や弟、妹等がどんなに悲しむかも知れない。それに、行方不明になった、たつ一人のお嬢さんの事を心配していらっしやる奥様の気持をお察しすると、うかつなことは出来ない。もうちょっと時期を待とうと、逸る気持を押えていました。

「おい、何をボンヤリしているんだ。早く中へ這入るんだよ」

と男に背を突かれて、二、三步ヨロヨロとよろけて中へ這入りました。男は懐中電灯を照し乍ら、箱や荒縄の散乱している間を通って、奥の方へ私を連れて行くのです。やがて男が灯したアセチレン灯の青い光で、かび臭い内部の様子がくっきりと浮び上がりました。大きな木箱や筵、それに板切れ等が乱雑に片隅に積み重ねてあります。一見して倉庫であることが判ります。それにしても、お嬢さんの姿が見えないのです。私は予想が外れて、ちよつと安心すると同時に、新しい不安が生まれました。何か身に迫まるものを感じて、足も地につかない気持です。

「どんな御用ですの？」

と私は、こわごわ尋ねますと、

「まあ、ゆっくりしな。急ぐことはねえや。そのうちに、お前が飽きるほど用事が出来るんだ」

男は、こういいましたが、私は、この邸なら碌な用事でないと思つたので黙っていました。しばらくすると入口の方に人の気配がするので、何気なく振り向いて見ると、猿ぐつわを嵌められたお嬢さんが後手に縛られて、例の女に鞭で追われ乍らよると這入ってくるのです。私は、我を忘れてお嬢さんにすがりつきました。する

と男が近寄って、邪慳に私達を引離しました。そして私は、傍の柱に縛りつけられて猿ぐつわを噛まされてしまいました。

「わたしは、お前に恨みがある訳ではないが、お前がわたしの恨んでいる女を庇うのなら、お前も同じように地獄の責苦を舐めねばならないんだよ。それが承知なら、この女を、たんまり庇っておやりよ。ホホ、ホホ、ホ」

こういったのは、私の頬を指先でつ突きました。何んと残酷な女でしょう。しかし、お嬢さんがこのような女に恨まれたのも、もとはといえば、お嬢さんが余りにも身心共に美し過ぎたからなのです。世の中は皮肉なものです。美しい人は幸福であるのが当然の理くつなんですけれど、実際は反対の場合が多いのです。女は一般に嫉妬深いのですが、藤野のような嫉妬心が亢進してくると一種の精神病患者なのです。この気狂いのような女のために、清純なお嬢さんが、どのようなひどい目にあわれるかと思うと、心配で、心配でたまりませんでした。

(未完)

### ◆読者座談会開催について◆

長らく読者座談会を開催いたしませんでしたが雑誌の発行も一応軌道に乗って安定して参りましたので、近々有志の方々を募り読者座談会を開催したいと思ひます。それで気軽な気持で集って下さる方は、略歴を添布してお申込み願ひます。話題は今のところ未定ですが、出席される方の顔ぶれにより適当に決めたいと思ひます。座談会記録を誌上に掲載するかどうか未定ですが、今後、出来れば定期的に開催できるような運びに持ってゆきたいものです。出席希望者に対しては、日時その他詳細は、改めて封書にて御連絡いたします。

△読者座談会係▽

## ダイアナ夫人

## 障 碍 へ の 道

乗 杉 貴 代 子

割合熱心な読者であり、執筆者の麻生保さんから強いお願いがありましたのでまた筆を取る気になりました。すでに旧号などで誌しましたものと重複するところがあるかも知れませんが、その点は悪しからず。

乗 杉 貴 代 子

## (心がまえ)

乗馬というものは特殊なスポーツです。誰にでもできるというものではありません。若干のヒマと金と大らかな家庭の環境がなければ続けられないことでしょう。特に女性の場

合は金と環境が隘路になることと思います。ですから、この条件が満たされない人はあきらめた方がよいと思います。せいぜい空想だけにとどめておいた方が身辺に風波を起さずにすみます。

さて乗馬の第一は精神状態を完全な「ノーブル」な型に置くことです。自らの才能を信じ、同性はもとより、異性も見下げる気概がなければなりません。ですから自意識過剰気味な方がむしろよいわけです。人間ですから少々の劣等感はあるでしょうが、そんなものはあっさりとなげに上げ、男性などというものは、ある程度「か弱きもの」と思っているければなりません。ある程度というのは馬でも人間以上の馬があるように、男でも、まん

ざら捨てたものでもないのが往々あるからです。そこで自らを高貴な心理状態に置くためには、やはり上流階級の慣習、エチケット、教養といったものを一通りは理解していないと高貴になれといってもなれません。その方法は適宜考えて頂くことにして、ここでは女流乗馬者のあり方についてだけ述べることと致しましょう。

## (服 装)

美人などというものは化粧である程度何とかなるように、やはり先ず服装です。乗馬をするからには、みすばらしいのは一番禁物です。一見して上衣は優雅を必要とします。二代ならスポーティなものもよいでしょうが、二



十台以上はセキシイでクラシックなものがよいようです。色は黒とかレンガ色とかが、時に緑もよいでしょう。

乗馬ズボンは純白とかグレイの、よくからだに合ったギヤバやクレパネットのものが好ましいです。だぶだぶしたものは乗馬中の下部の躍動する筋肉の動きが第三者には分りませんから。

あいだに着るものになるべく軟く厚手で、しかも、からだにピッタリしたものを選ぶべきです。むじゅんする

ようですが、からだの線がよく出て、しかもクッションの効いた例えばトリコットパイル地のようなものが乗馬中の感興を増してくれます。特にコルセットやガードルは必需品で、男性でもオートバイ乗りが胴締めを使うように、女性でも快適なコルセットを使うことにより、胃腸の保護と快感増進の両方の意味を持っています。下部部の運動が自由で、しかも太ももがよく締ることが乗馬中の気分



を安定してくれます。

肌着類は清潔であると同時に余りデコレーションのつかないものが快適です。寝室用のかざりの多いものは、かえって鞍傷などを起し易いからです。またピッタリしていることが大切で微妙な触感を味うスポーツだけに特に肌ざわりの良いものを選ばなければなりません。特に汚れ易い部分などは吸湿性の良い綿ガーゼ類を補足できるように仕立てのもの

が快適です。

次は馬装ですが、馬にも良い装具をすべきです。心理的に生理的に大きな楽しみの道具となるのですから跨った時に最大限の効果を發揮できるようにすることが肝心です。欧米諸国の鞍作り職人は、注文服と同様に跨った気分、つまり鞍味のテスト場を設け、巾とか、くぼみの度合とか、軟かさについて注文者の気のすむように作ってくれます。わが国では鞍は得てして既製品のためテストの機会がありませんが、これも馬に乗って遊んでいられる階層が少ないためともいえそうです。いままでは鞍の下に敷くものは毛布、せいぜいよいもので羊の毛皮でした

が、最近ではぼつぼつフォーム・ラバーを使つたものも出てきました。これは当りが軟かく、馬場馬術などに使うと刺戟が適当で多感な方にはかえって毒かも知れません。

鞭はいろいろありますが、競馬の騎手が使うような短かくて硬いのはつや消しでしょう。白魚のような手に握られる鞭は細く、長く、軟かく、みるからに痛そうなのが乗り手の馬にも、見物する男性の為にもよいでしょう。



う。調教上は硬目のものがよいのですが、鞭打つ楽しみを満足させるためには、長く軟かいものがよいようです。よく手入れの行き届いた光沢ある馬の尻に「ピシッ」と打つ手応えは何んともいえない感じなのですから……。そして鞭は竹製より皮製、しかも中程まで硬く、それから先がヒリヒリするような感触を持つものが楽しみを増してくれます。

拍車にもいろいろありますが、わが国では種類が限られているようです。スペインとか米国西部には女性用にも大型の鋭利なものもあります。日本人はどういうものか余り利きの強いものは使いません。せいぜい突起部が長くて三センチ、歯車の直径は二センチどまりでしょう。それでも、この程度のものを馬腹に蹴り込む触感はおツなものです。というのは蹴り込む時はどうしても臀部を鞍から浮かし、太ももで馬背をはさみ込みながら蹴るので気合の高揚中に適当な間が入るからです。しかも蹴込めば大抵の馬は少々はねるか、運動を大きくするので乗馬の快適さを味う上には是非とも必要なのです。拍車は速度を加える時だけでなく、ある種の注意を馬に促す意味が大きいといえましょう。軟い馬腹に蹴込んだ時の心地よさは表現に苦しみです。「障碍への道」といいながら、前がきが長くなりました。しかし障碍飛越ということは、ほんの一瞬のことです。その一瞬のために馬

に乗る女性は、どんなことをするか、あるいは、しなければならぬかということを述べたためにも前に誌したことは予備知識として理解して頂きたかったのです。

### (運動) 始まり

まずはじめはあし並みを整えることです。乗り手と馬の調子が合うまで、あるいは早く、あるいは遅く、自由な気持でグイグイ歩かせることです。この間に乗り手は馬の程度が、馬には乗り手の程度が相互に理解されます。こうやって歩かしているうちに、適当な震動と摩擦のため乗り手はしだいに征服感がかき立てられてくるわけです。

「今日はなんとしても、この生物を意のままに御してみよう……」

といった。男性も同様かも知れませんが女性の場合は生理の教科書にもある通り構造が違うのですから、この気分は特に強いように思われます。ですから、いつだったか「私はサドルの誘惑に負けた」とかいう題でサイクリングで早くも陥落してしまふバカな女性も出てくることになるのでしょう。自転車鞍と乗馬鞍では同じ鞍でも、干魚と生魚の違いです。

さてそうしながらも、少しずつ速度を早めてゆきます。それは人によって違うでしょうが、大体気分の高揚、心臓の脈搏と同じカーブで上げてゆけばよいでしょう。乗り手は五

の速度の要求しているのに馬が三しか出さなければ、早速美しいふくらはぎを軽くけいれん(そうすると拍車が強く入ります)をやればよいわけです。このような運動を続けながら、できれば馬の口に泡を噛ませるか、心持汗ばむくらいまで乗り慣らします。泡を噛ますと汗ばませるのは簡単で(といっても多少技術を要しますが)運動のエネルギー発散量は少ないが疲れる要求をすることです。馬体を収縮させたり(前編参照)駆足でも緩く大中とか斜めに駆けさせたりします。この際少しでも乗り手の意に従わなかったり、不十分であつたしたら、それこそ鞭の味、拍車の味を気がすむまで味あわせてやるのです。つまり本格的障碍飛越段階になって乗り手の威力を知らせようとしても遅過ぎますから比較的开始のうちに乗り手の凄さを教えておくわけです。馬は乗り手の男女の識別はできませんから跨がり具合、鞭の味、拍車の味を頼りに行動するわけです。(世の中にはそんな男性も多いようです)

ついでですが若い女性の方で試験前とか結婚前とかは以上の段階で我慢し、いったん中休みした方がよいでしょう。これ以上、中頃、終りの追い込みまで一気にやると気が散って試験とか結婚どころではなくなるので、目前の大仕事ですんでから再び技術の向上をはか



つた方が長続きもするし、楽しみも大きいようですから。

### (運動) 中ごろ

さて中ごろになると人、馬ともに血の流れは早目になり、ひとによっては顔が真赤に火照ってきます。ちよつといっぱい飲んでポーツと赤くなった感じです。色白の美しい人ならピンク色になり、興奮状態が全身にみなぎってくるのが分ります。御承知のようにひとたび動き出すとあの感情はある程度満たされない限り止むことがありませんから、この頃から終りにかけては乗り方はだんだん容しやしない態度をとってきます。腰のヒネリで理解されなければ、即刻鞭が飛ぶなり、拍車が蹴込まれるわけです。恐れおののき、あるいは抵抗する巨大な肉塊を股下にはさみながら手綱を引きしぼったり、打ったり蹴ったりして快楽追求の手段に使うわけですが、これが「調教」というもので、人生の目的を快楽追求とする女性にはまたとない楽しみなところですよ。大てい女性が乗馬していれば気の抜けたような顔をして幾人かの男性がみているものです。これらの連中のためにも時々次のような視覚上のサービスを与えてやるのもよいでしょう。

①薄手の品のよい乗馬ズボンの下に穿くジョーツは裾の山の高いものを使うこと。こう

すると大腿部やヒップの筋肉の動きが見物人によく分ります。②見物人の前に来たらしきさら困難な運動をさせて打ったり、蹴ったりする機会を作ること。これは乗り手にも見物人にも適当な嗜虐的感興を与えます。③しかし美人(精神的にも)のカモフラージュのためにも、ある程度要求を満たしたらニンジンなど与えることが動物愛護精神の発露のようできれいです。④乗馬にはある種のシヨウ的要素が強いことを忘れないこと。特に下腹部は時おり、それこそ、あられもない?動きをしますから必要に応じ長目の上衣か、乗馬コートを用い、間接的にイットを発散させるようにします。(あの美しい衣類の下ではどんな心理的暴風雨が、あるいはどんな肉体的変化が起こりつつあるか?と男性に思わせることが大切です)

### (障碍飛越)

嫌がる馬を脅迫的条件のもとで障碍に向わせる気持はなんともいえません。それだけに

徹底的に精神状態を征服的にします。すでに始めから中頃にかけて手心は加えてあるとはいえ、相当歩かせ、走らせ、疲らせていきます。それに追打ちを、かけるように打ちまく、蹴りとばしながら、その上にも快感を追求しようとする乗り手の意思に完全服従させるわけです。もうこの頃になるとただ征服感のみ、完全服従を要求するのみの心理状態になっていきますから動作も手荒くなってきました。先ず腹帯を締めなおして五、六十センチから始めた横木は二、三回ずつ飛ばしながら次第に七十、八十、九十とあげてゆきます。六、七十センチまでは軽々跳んだ馬も次第に疲れて、呼吸は乱れ、鼻の穴を大きくして息づかいが荒くなってきました。この頃になると馬が大きく吸い込んだ息で跨がった太ももが心持ち開かれそうになるのを逆にギョツと締めながら馬に気合いを入れます。一メートル以上となれば当然馬は飛ぶのを拒否したり、不満足な飛び方などして消極的な抵抗をはじめますから、そうなれば主人である女性は当然懲戒用具をひんぴんと働かせます。瞬時のスキも与えぬように拍車は馬腹を突き当てたままにして走らせます。

跨っている私は心地よい震動を全身で味わいながら、馬にはあらん限りの力をふりしほえることを要求するわけです。ここまでくればそれこそ奴隷以上のものですし、全くのワン



サイドプレイです。そして障碍の数歩手前に来たら手綱を心持ち引締めて、あと一息の努力を要求し、それを補う意味で右手のムチを力の限り素早く打ちおろします。最高度に緊張した馬の尻から火の出るように発するムチ音を耳底にとどめて横木を飛び越させます。

飛越える時、馬は首を伸ばしますから、その時は心持ち手綱をひるめ、馬の前脚が地に着くと同時に再び、緊張をゆるめるな！、と叱る意味をも含め、手綱を引締めます。馬体に跨ったまま空中に飛び上るスリルと快感はこの瞬間に十分味わえるわけです。その際、ムチを握る右手以外の身体各部はできるだけ動揺させぬことです。落馬しそうな態勢では馬の方が気を利かして飛びませんから……。しかし万全の注意を払っても飛ばずに横道にそれたりしたら、それこそ手綱を引しぼって駆けにくくさせておき、ピシッ、ピシッ、ピシッと連続的に打ちこらすわけです。そのチャンスが大切に横道にそれた瞬間にやるほど効果的です。「主人の意に従わぬとひどい目に会おう」ということを常日頃教え込むのが乗馬者の権利であり義務ですから。

そしてムチと拍車の味を十分味わせたらまた横木を飛ばせます。こうやってだんだん高くしてゆくと遂に人馬ともに限界に来てしまいます。いくら打っても蹴り飛ばしても、手綱を引絞って痛い目に合わせても能力的に飛

べなくなります。そうなたらやむを得ません。横木を少々下げても、とに角飛ばせることです。最後はとに角飛ばせて、うまく飛んだら首や肩をたたいて労をねぎらい、呼吸のおさまる頃を見計ってニンジンをやります。麻生保さん、これでムチと拍車とニンジンの効用がお分りになったでしょうか。文章が下手なので御満足頂けないかも知れませんが……。また他の読者の方はどんな感じでしょうか。私の感じでは目的と手段が多少違いますが、上役と下僚、主人と奴婢、支配者と被支配者の関係は、こんな感じのところが多い気がします。

ところで話の続きですがニンジン（僅かなボーナス）で労をねぎらった後は馬場を何周かゆっくり歩かせます。絞るだけ絞り、責めるだけ責め、そのあと残りの楽しみはアブミから足をはずし、手綱をゆるめ馬の自由歩行にまかせるのです。馬は疲かれていますから、少々の刺激では跳んだりはねたりしません。乗り手も下肢部には得もいわれぬ痛みと疲れを感じている際ですから、できるだけ十分マッサージさせるつもりで鞍上に跨っていればよいわけです。人馬ともからだの力を抜いて……。

### （どうでもよいこと）

◇ある遠乗り会の時でした。時は青葉、草原

に出れば草いきれを感じる時でした。S嬢は四時間連続の乗馬のため疲れたのか馬上で、うつらうつらしているうちに危く落馬するところでした。多感な女性の長時間乗馬は体力的にも限度があるかも知れません。

◇裸馬の味は格別です。背骨の凹突、傾斜の度合もよいですが、霜柱の立つ朝など跨がりますとホカホカと暖かく、二、三十分の腰ならしには願ったり叶ったりです。騎座を丈夫にしたいといって申込み乗馬クラブでも裸馬を貸してくれるかも知れません。ただアブミがないので乗り手の疲労度は鞍馬の数倍です。

◇馬上体操というのがあります。からだを柔軟しておかないと（どんなスポーツでもそうですが）事故の発生率が高いのでやる運動ですが、女性はこういうものか余りやることを好みません。しかし、上手になろうと思ったら十分やることです。とくに鞍上でヒザを上げたり、伸ばしたりする運動は腰の動きをやわらかくしますから。

◇蓼科高原あたりの貸馬屋は女性には小さな座ぶとんやフオームラバーのクッションを貸してくれます。慣れてくると、こんなものは邪魔ですが、初心の女性には中々味なもののようにです。一時間ほどゆっくりもまれるだけで乗馬が病みつきとなる人もあるときいています。

（終）





## 読 者 通 信

○ 四月号の口絵、何て素敵なんでしょう。北沢典子さんの、腰元姿で吊られたたかれる二葉は素晴らしく、奇巧の腰元折檻シリーズ(?)も最高潮に達したと云えましようそれに続いて四馬先生の「屋根裏の秘密室」の素敵なこと、ギユウギユウと革の責め衣のきしむ音が聞えるようです。久方振り登場の花坂道子さんは和装縛り、でも、このポーズで豪華なお振袖にうんと巾の広い帯を締め乳から上だけほだけいていたらどんなに嬉しいでしょう。編集長様、十二月読者通信にあった花坂嬢振袖姿の縛り写真のプランはどうなったのですか? とっても期待しているのに毎号がっかりさせられます。でも

女優さんや腰元折檻などで和装縛りを見せて頂けるのはキモノファンに有難いことです。五月号の出る頃は結婚シーズンですから、花坂さんか田中芳代さんをモデルに「花嫁さんの縛られるまで」とでも題して、絢爛たる振袖姿の花嫁が色々に縛られる光景を何枚か載せて頂けないでしょうか? 洋装や半裸娘の縛り写真は沢山あります、和装花嫁の縛りや責めの写真は見かけませんので是非お願いしたいと思います。何年か前に風俗草紙という本で、お姫様姿のモデルの縛り写真を見ましたが、ドテラの様に厚ぼったい衣裳や見るだけでも息が詰まりそうな巾広帯を締めた姿が魅力的な筈なのに、振袖はグジャグジャに着くずれ帯はシワが寄って巾も狭くなっている興味半減でした。若い娘がもっともあこがれる花嫁姿、そこには着飾った優越感、伊達巻や大きな帯で息苦しく締めつけられた緊縛感何枚も厚く重ねて着た振袖のため身動きも自由にならず、ヨチヨチ歩きしか出来ない劣等感、そして更には男性に征服されねばならない屈辱と歓喜と羞恥の入り混った複雑な感情が秘められているのです。重いカツラに身を責める衣

装、名優歌右衛門さんさえもが「娘役は大きな帯を締めるのでこたえる」という女形が、若い娘ではつとまらないのはもつともですが、その女形の舞台姿にも匹敵する重い衣裳を着た花嫁が、あられもない形に縛られ、吊られ、責められる姿は美の極みと云えないでしょうか。編集長様、五月号に間に合わなければ六月号でも七月号でも結構ですから、右のアイデアによる特写口絵を載せて下さることをお約束下さいませ。このプランに賛同の振袖ファン、女帯ファンの方御支援下さいませね。  
(東京、OBI)

○ 二月号の映画スチールに、早速「肉体の悪夢」をのせて下さって感謝します。優美なシユミーズ姿の荒縄の緊縛は、素晴らしい迫力があります。肝心の映画の方は、まるで出鱈目でしたが、ニューガールの緊縛も中々によいですね。まだ少女らしいあどけなさの残る乳房を締め上げる縄目は、逸品です。「嵐の中の花」は、素晴らしいの一語につきまます。可憐な美女、美少女への残酷極まりない拷問の刻明な描写に息づまる程です。是非、続けてほしいものです。絵がもつと

叮嚀だといひのですが、少々粗雑で残念、殊に美少女晴美の逆吊りの絵のなひのが残念。三月号のニユীগールの緊縛(その三)も柔肌に容赦なく食い入る太縄の緊縛感はいいのですが、モデルの表情が割に呑気なのは遺憾。時には本当の荒縄で縛ってほしいと思います。「強盗事件に関する新聞記事についての一考察」は実に楽しい読物(研究と云うべきでしょう)で、色々の女の縛られ姿を想像させて飽きません。四月号の映画場面中、力斗空手打ち(第三部)の悪漢に捕えられ、ワンピース姿をきりきりと後手に縛られ猿ぐつわを噛まされ、みもだえる美少女の姿は素晴らしいですね。早春賦のセーラー縛りは、少女らしい可憐さがなく頂けません。立って縛りつけられてゐるのが、どうやら女学生らしい感じがする程度です。捕われの令嬢達は、中々よろしく嵐の中の花とよく似ていてよいのですが、どうも挿画が物足りません。挿画が近來、同一の人ばかりと云うのも、変化がなくて飽きてくる惧れなきにしもあらずです。映画場面には是非「鬼面龍騎隊」後篇の円山葉子の縛られ姿をのせて下さい。美しい少女が、太縄でぐ



るぐる巻きに縛られ、弓の折れを背へさし込まれこじ上げられて苦悶する様、火あぶりにもだえる姿など、実に素晴らしい場面でした。

一宮の真砂美弓子様、名古屋T・Y様、名古屋附近の在住の方々に一度お会いしたいものです。私の連絡先は二月号に名古屋M・M生として発表してあります。東京の桂様も御連絡下さいませんか。(名古屋、M・M生)

○ 京都の浣腸ファン生へ、私も浣腸マニヤの一人です。最近、読者通信欄に、浣腸に関しての投書が少いと思います。私は自分一人で時々プレイを行います。仲々同好の方々と文通又は連絡出来ないのが残念です。若し文通出来まし

たら、色々研究していただきますので、意見を交換したいと思っています。(埼玉 一マニヤ)

○ 四月号掲載の三隅千恵子さんの文章には、全く感服の外ありません。少しの無駄もなく、初めから終りまで息をつかせぬ充実に酔いしれて仕舞いました。たいがい作品には、退屈する部分があるものですが、三隅さんの文章にはそれがありません。純粋な文章的価値から云っても立派な作品だと思います。内容的には、読む人によつて素晴らしくもあり、又それ程でもない場合もあります。しかし私自身、残念乍ら心魂を奪われて仕舞いました。私は、簡単な一言ですが、心服の讃辞を申し上げます。

### 新作切腹写真『女体自決悦虐図』(略号(えつ))

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真△

大中判印画紙(タテ十八糎ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千円

### 女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案 北原純子女史画  
キヤビネ版印画紙密着焼付 八枚一組 千円(送共)

### 花坂道子嬢 優美姿態緊縛選

純黒調大中判印画紙焼付(タテ十八糎ヨコ十三糎)

花坂道子嬢全裸緊縛集(はな1) 花坂道子嬢股間縛り集(はな2)の大好評により更に素晴らしい作品の発表を強く要望されていきましたので、ここに前二作とは変った新しい観

点から狙いをつけた作品を提供いたします。

★ヌード縛り(略号3) 二枚一組 三百円  
★股間縛り(略号4) 二枚一組 三百円

る次第です。今後の御幸運を切にお祈り致します。(貴山茂)

○ 飯塚勝男(兵庫)

私は、地方都市に住んでいる一愛読者です。皆様方の御活躍をいつも羨しく思っています。ブラジャー、パンティ、シユミーズ姿の縛り、磔、責めマニヤです。私もそれをつけ猿ぐつわ目隠しされて心ゆくまでプレイをしたいと思っています。神戸にも多数のマニアの方達がいらつしやるようですが指導して頂けないでしょうか。毎月一、二回は神戸三宮まで出かけていきます。外国の責写真を見ますと色々な道具を使ったプレイがあり、こんなプレイをしてみたいと思います。神戸の八潮三枝子様水野高広様、T・I様、お呼びか

○ 沼正三さん。四月号の「ある夢想家の手帖」読みました。私の文或は皆川と云う女を、かくも関心を持って見て下さる方が居られた事を大変嬉しく思います。全く貴方の御想像通り私は女性です。(百万べん書いて見ても、要は読む人の感じとり方によりますが)私の事を男だと言っている一部の人がある事は、私も耳にして居りますが……今後、色々な意味でよろしく。原忠正さん、御無沙汰致しました。色々な都合で貴方の名刺を失くしましたが又、お逢いしてお話したい事がありますので、御都合のよろしい近いうちに例の



喫茶店まで御連絡下さいませんか  
(お電話で) (皆川のぶ子)

いつも素晴らしい緊縛フォトを沢山お送り頂いて有難うございます。楽しみに飽かず拝見しております。つきましてはマニアとしての私の希望を述べますれば、一度江戸時代の刑罰図的なものを女性ヌードを使って是非作って頂きたいと思っています。別紙に大体の構図を入れておきましたから何卒八枚位の組写真（大判）で至急実現して頂けませんでしょうか。今迄私の求めた写真では前向のみが殊に多かったようですが今後は後向き又は斜め後向き等を三枚に一枚位は必ず入れるように御願います。序に昔の色々な代表的な本縄の掛け方の順序を女性ヌードを使った組写真で（前後共五六枚宛）これも是非早く実現して下さい。尚、分譲品目録へ各写真の姿態及び縄の掛け方を縮小略図でも発表して頂け

ると注文の際選ぶのに大変好都合です。それから今迄の写真は殆ど縛った直後の写真のみでしたから今度は縛ってから一時間後、二時間後等ゆるくなったら縛り直して撮れば非常に真実感(苦痛疲労等)の出たものが出来ると思います。尙、緊縛の色々のデーターを作つて発表して頂ければ幸甚だと思ひます。たとえば吊し責め、又はエビ責で五分後、十分後、三十分後一時間後、等。後手緊縛で一時間後、二時間後、三時間後、五時間後、十時間後、等、男女共数十人の統計をとつて発表されれば非常に意義のある資料が得られると思ひます。誌友からも実験希望者を募れば多数応募者があると思ひます。(静岡 斎藤生)

早春の候、編集の方々並に読者の皆さま御機嫌如何ですか。朝の中、武蔵野の樹立の中を歩けば、さくさくと霜柱がくずれる音が靴

## 「潰滅の前夜」のアイデアに依る責画

四馬孝画『美しき女体家畜飼育室』(略号 しま)

大判印画紙  
（タテ十八糎ヨコ十三糎）  
焼付 八枚一組 八百円

## 女体禪美の緊縛

(9×13センチ) 印画紙焼付

五枚一組 四百円

略号(こん1)

女体の禪美フォト

(9×13センチ) 印画紙焼付

二枚一組 二百円

略号(こん2)

の下でして、氣持のよい空氣が頬に  
触れます。しかし、もう日中は降  
りそぐ、陽の光で肌も汗ばむくら  
いです。春に先がけて貴誌4月号  
有難く拝受いたしました。滝れい  
子氏の巻頭口絵は、雑木林の中で縛  
られた美少女の哀憐の表情がこよ  
なくよく出ています。惜しむらく  
は胸にまわった縄が一筋だという  
ことです。この際、猿ぐつわがな

い方が美観の上からもうなづけま  
すが、せめて縄を胸に二巻きはし  
てほしかったと思います。長纏袴  
様の着物や腰巻の乱れ具合も見事  
に描かれています。写真では和装  
縛りの花坂道子さんの姿態がよか  
ったと思います。しかし、このポ  
ーズで右足をもう少しなんとかや  
り場所を考えられたら美貌優雅の  
モデル嬢のことですが尙一層素晴  
しくなっただろうと惜しくてなり  
ません。今後更に変わった同嬢の姿  
態をお見せ下さるよう御願いま  
す。本文では十三人目の奴隷、美

容病院、魔教圈の○○等の連載小説が相変らず光彩を放っております。こういった連載の大作と肩を並べてコント式の紹介記事、随筆といった雑文を盛沢山を挿入して下さると尙楽しい雑誌になるだろうと思われます。それにしても種々雑多な数多い希望をよく取り入れて編集して下さる担当の方々の御苦勞には感謝いたします。

(東京 道場修一)

ニタ度東京の「Y・A」氏に此の文を呈します。貴君に女性と同等席する様な感じを与えたのであれば私のうかつさを御ゆるし下さい、飽くまでも男だけの世界に生き度いのはソドミヤである私も同じ事です。扱て愛禪者にも種々好みがあるとおっしゃっておられますが勿論越中禪が好きな人、六尺禪が好きな人、白の好きな人、赤禪の好きな人、Mの人、Sの人、どちらでもない人、それ等を色々組合



せると幾通りにもなるでしょう。  
只一揮亭の内田氏がいみじくも喝破せられた様に六尺揮愛好者は総てソドミアだと云う事は本当だと思ひます。私はMでもSでもありませんが今から考えて若し私にそう云う傾向があつたら魂が天空に遊んだであらう様な場合を海軍で幾度か経験しました。けれども、それは私一人でなく海軍へ行つた者(尤も佐世保関係は柄が悪くて特にそんな経験が多かつただろう

責められる女、責められる場面八態

北原純子画『風流女体アラベスク』(略号)

大中判印画紙(タテ十八糎ヨコ十三糎)焼付 八枚一組 八百円

が)は皆です。MやSの諸君が今やつて居られる事は如何に巧みに演出せられても、それは所詮芝居です。軍隊の中で行われたあのムチと凌辱はホンモノでした。先々月号の事をもう一度繰返します。貴君の云われる様に揮の愛好者の会が出来て、交流でも出来る様だとなんかに楽しい事でしょう。ところで揮にMO号と云う番号をつけてと云うMOとは何を意味するのでしょうか。NOIの間違いではありませんか?(香川章二)

美容病院

益々筆が冴えて、久方振りに読み応えのあるものになって来ましたのは、誠に嬉しく思ひます。近頃は、さっぱりコルセットに関するものがなくて、失望して居りましたが、美容病院では、これが実に上手に取り入れられてあるので、何度も何度も読み返して居ります。二月号投書で東京の阿部氏は、愛子を責める手が尽きて持て余しているのが感ぜ

られると云われるが、小生はそうは思ひません。きつと素晴らしいアクロバット応用の美容体操が出現すると思ひ、今から楽しみにして居ります。しかし一言、云いたいと思ひますのが挿画の事です。もつと文章に合った衣裳の着用を望みます。例えば一月号で、白のオイルインワンのコルセットを着し股間にベルトが嵌められてある筈なのに、挿画では黒のバレータイツの様なものになって居ります。又、二月号では、グラマー女優、

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』(略号)

四馬孝画 胃の洗滌 ヒマシ油責

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

小桜美智子はブラジャー一枚、シヨーツ一枚の筈ですが、挿画では上下続きのベルト付水着と云うのは、折角の文章をマイナスにしています。なるべく文章に一致したものにしたいと思ひます。大変失礼なことを書きましたが、お許し下さい。

(K・H生)

安田由美子様。貴女の二月号のお便りを読み、呼びかけてくれた乗杉さんを羨ましく思つて居ります。私は軽いサジストです。乗杉さんから貴女への返事を読み、貴女に深く同情する者です。貴女はオドオドとへりくだつて頼んだのにも拘らず、乗杉さんからあのよ

か。小生は二年前、某大学の研究室にいました国文学専攻の一学生で、貴女とはお話も合うと思ひます。貴女は決して「性格改造」や「洗脳」なんかをして、Sに変わる必要はありません。マゾで充分、それこそ女らしい女です。小生はSですから、貴女を縛り、くつわを嵌め馬にして乗り廻りたいと思ひます。貴女は、そういうことには興味をお持ちではありませんか。ただ乗馬プレイだけではいけません。乗馬と同様の理解と興味がありましたら、お便り下さいませんか。どうか失望なさらずに御勉強なさるよう御祈り致します。

(東京 駒込生)

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』(略号)

四馬孝画 伸し責 苦悶のコルセット 浣腸責

大中判印画紙焼付 三枚一組 四百円

自分の文が活字になることは、とっても嬉しいものです。私のように復刊以前の読者でありなが



ら投稿する勇気のなかった者には喜びも大きいようです。文字を綴ることは、それほど苦痛でありませんので、今後も続けたいと思います。ところで私は、自分自身は

論文めいた硬いものしか書けないくせに、柔い読物的な作品が好きです。例えば三月号では「大阪屋花鳥」「美容学校」「十三人目の奴隷」「マヤの黄昏」「魔教圏

## ◎新人モデル嬢新作緊縛姿態集

光沢純黒調印画紙(9センチ×13センチ)焼付

新人モデル嬢の中、三人の得意のポーズを選んでここに提供いたします。

### 愛川悦子嬢の巻

#### ★ベッド変型縛り(略号しん1)

四枚一組 三〇〇円

ベッド上に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバチックな全裸のポーズは輝くライトに映えて豊かなアクシオンをふりまいてゆく。

#### ★全裸強烈縛り(略号しん2)

四枚一組 三〇〇円

山里離れた温泉宿の一室、硝子窓から洩れる夕陽に照らし出されて縛られた裸身は妖しくゆらめく。

### 大塚啓子嬢の巻

#### ★股間縛り(略号しん3)

六枚一組 四〇〇円

その美を誇る啓子嬢の肌にひしひしと喰い込む縄目、緊縛マニアの方々に捧げる垂涎万丈の作品。

#### ★全裸縛り(略号しん4)

五枚一組 三五〇円

豊満な柔肌の全身に喰い入る麻縄の醸し出す妖しい美しさ

### 田中芳代嬢の巻

#### ★セーラー服縛り(略号しん5)

五枚一組 三五〇円

可憐な表情、巧みなポーズ、セーラー服をまとう縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまざなし

#### ★股間しばり(略号しん6)

四枚一組 三〇〇円

ここに又、新しいモデル嬢の股間しばりをアルバムにお加え下さい。

NO8」など——そして必ず文章に目を通す前に、パラパラと挿画だけを先に一覽する癖があります

(この癖は私独りとは限らないと思います)そして挿画次第で内容にとりついて行きます。ここで苦言なのですが、三月号の挿画で気に入らなかつた点を二カ所。P90

「美容学校」の愛子は、腰に廻した後手を何故縛ってないのですか? 内容には、ちゃんと両手は邪魔にならないよう背中にくくられ

……となつています。作者の意志をそこなわれないよう慎重にして下さい。それからP133「マヤの黄昏」のエリカの襟ですが、内容では大の字縛りの筈です。表情もよく描かれ非常に美しい画ですが、

内容通り大の字に襟にした方が一層悲惨だし、私個人の意見ではその方が美しくも感じるので。話が変わりますけど、佐川増夫氏の「L.T.商会」三月号の読者通信で

知って残念でたまいません。書く者の身として他人の援助を受けることは不服なものです。それは一つ、数多くの愛読者が待つてい

ると佐川氏に奮起を願つて、みんなアイディアなどを提供してでも続けていただけないものかと考え

ますが。最後に東一郎氏に、私の拙劣な文章を読んで頂きましたことを感謝しております。

(奈加田須磨尾)

昨年、貴誌を初めて拝見以来、毎月号の特異な読物にひかれ、今では小生にとって、なくてはならぬ存在です。特に一輝亭雑記及青葉氏の小説が好きです。六尺禪と

縄に興味を持って居りますが、今後もこの線にそつて編集して頂きたいと存じます。貴誌から右のものを除けば他誌と何も変わりなく、特異性がなくなりません。尚、口絵にも是非、男性緊縛フォトを載せて下さい。又、同好の人が多く

とを心強く思いましたが、出来れば誰か心から話合える友達が欲しいと思います。同性に縛られたり使役されたい人があれば御連絡下さい。充分話し合った上で、種々のプレイをして見たいと思います

女性には全然関心なく、若い男性にのみ心をひかれます。(東京都深川局区内富岡局止 渡辺)

○ 禪愛好者が多くなつたのは非常にたのしく嬉しく思います。静岡の北沢氏が云われるように、六尺禪一本の筋骨たくましい男性が一堂に集り、一緒に過せたらどん



なに愉快でしょう。私は銭湯で六尺禪を締め、鏡に裸形を写したりして時間をとっています。なかなか同好者は見当りません。何とか同好者の集る機会を持ちたいものです。角田新一氏をヘコとして色々責めてみたいと思うのですが、そのうち機会があると思います。しかし私も一方かなりマゾ的なところがあり、責められたいと云う希望があります。一禪亭雑記は、私の希望的な幻想でもあるわけですが、大阪の中井氏や静岡の北沢氏にも、ぜひお会いしたいと思えます。中井氏の九十九里浜の禪風景に関する記事がありました。九十九里浜の漁夫を特徴づけるものが、彼等が冬でも全裸で働くという事です。彼等の全裸像の作業風景は、岩波の写真文庫にも日本風物誌の南関東篇のグラビヤにも載っています。私自身この地で暮したことがあります。(下関 内田武男)

三、四月号での色んな方の呼びかけ、嬉しいやら恥しいやら、厚くお礼申し上げます。文面では皆様紳士的な方ばかりで結構なのですが、誰方に御連絡して良いのやら途方に暮れて居ります。涙と鼻汁

で無茶苦茶に私の鼻孔を責めたいと云われる方以外、誰方も私を理解して頂ける様拝察致します。私が本名、住所等、本当のことを書けばよいのですが、女の弱い悲しさ、悪用されたり、自分の意志以外の酷い責苦を受ける結果になつてはと思ひどうしても申し上げられない事、どうぞ御推察の上、お許し下さいませ。ですから、はつきり住所氏名を書いて下さる方に、私の方から御連絡するより仕方がありません。それから申し上げて置きますが、二月号での私の文が不味いため、誤解された方もあると思います。私が、私は何も鼻孔そのものを痛い目に逢わされて嬉しいのではありません。只、私はマゾで女なのです。女性にとつて顔は一番大切なものです。美しいと意識し自覚している場所を弄ばれるのが、私のマゾの本能を刺激し快感を憶えるのです。鼻孔を責められたいのではなく、愛玩して欲しいのです。お判りでしょうか。キリキリ縛り上げられて、いきなり鼻輪をされたのではたまりません。形式ではなく心理的な悦びを私は求めているのです。私のこんな感情を御理解下さって、上手にリドして下さいたら、雰囲気次第で

少々の事なら御希望通りにされてもよいと覚悟して居ります。

(神戸 八潮三枝子)

都内在住の皆様と、千葉、神奈川、埼玉、近県に在住の皆様、御元氣ですか。最近号を見てもわかりますように、近頃は関西勢の方が通信欄で大変活潑になっていますが、一つ我々の方でも、大いに通信を出しあいませんか。この通信を見て直ぐ何か一つでも書かれて出している如何ですか。それが次の号の皆様への呼びかけとなり、大きくこだまされる事でしょう。編

## 最新作

### 女体緊縛写真

#### 花坂道子嬢全裸緊縛集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えまして、今まで一度も衣服を脱いだことの無い花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。(略号はな1)

## ◎花坂道子嬢

### 股間縛り集

大中判印画紙焼付

十枚一組 八百円

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。(略号はな2)

◎以上二集二十枚にて 千五百円

集部へ、昨年十月号の絵物語は好評のようでしたし、これからもどしどし載せて下さい。それから伊吹さんと大塚さんを使つて鎖と、かざによる責フォートを載せて下さい(手錠式によるカギの使い方では自由を奪う事は出来ないわけです)。このように、縛り、責具、プレー等に興味を持っていただける方は、大勢いるのではないでしょう。女王様、奴隸、主人、下男色々構成を考えると、色々な責めも浮んで来ます。九月号、横浜H・T生様、小坂多美枝様、十一



月号、東京菅良太様、新年号の女装マニヤ様、お便りお待ち致して居ります。(東京 土屋)

○ 三月号の静岡市の北沢孝司様、並びに四月号の東京のY・A生様

僕も貴兄と同じ気持を抱いている男です。貴兄の文章を拝見し、本当に嬉しく思っております。一昨年、六尺禪愛用生の名で投書し、その時に禪会なるものを提案したこともあり、又その外、色々と皆様からお便りを戴いたこともあり、不幸にして前回は賛成者？が少なかつたので、そのままとなりましたが、貴兄と協力してもう一度作ってみたいと考えて居ります。よろしかったら御協力下さい

## ◎浣腸連続フォト◎

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

長らく浣腸フォトの作成を中止しておりましたが、同好者有志の御希望により、ここに久方ぶりに十二枚連続フォトを完成分譲することになりました。マニヤ垂涎の硝子製浣腸器、エネ

何しろ現在の青年の中には同好の志がなかなか見当らず、貴兄のような方とお話し出来たら、どんなに幸福でしようか。是非お便り下さい。(埼玉県大宮市土手町二ノ一九岩淵方 横倉)

○ 以前から心に描き続けて来た私のイメージの一端が、二月号の貴重な誌面を頂いて、活字となつて多くの読者の目にふれたことは、筆の稚拙、我乍ら汗顔の至りとはいえ、とにかく悪い気持ではありません。私は、「美少年の秘密」以来、山口氏の美しい作風に傾倒していますので、あの「少年禪美……構想」も出来るだけ山口氏の作品のスタイルに習おうと努力致

## ◆新版マゾフォト分譲◆

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフォト。

第一組 凌辱篇 (略号 ま1) 七百円

大中判印画紙焼付、五枚一組 (略号 ま2) 七百円

第二組 屈伏篇 (略号 ま2) 七百円

大中判印画紙焼付 五枚一組 七百円

しましたが、如何せん、横板に給の如き駄作と成り果てました。

「思想貧困」にして尽し得なかつた点は、何卒皆様の旺盛なるイマジネーションに依つて、おぎなつて頂きとう存じます。次に異常なる反響を呼んだ傑作「一禪亭」に付いては、私も一度本欄で言及致しましたが、読みかえす程、内田氏のすばらしい独創力に敬服の念を深めるばかりです。そして、私なりの脱線イメージも果てしなく展開して行くのです。——特に、純真な少年へコに加えられる肉付け室での容赦ない全裸調教。羞恥や苦痛を無視して強制される特殊な強化訓練。競技出場前の峻烈な全身精密点検。極寒の日をえらん

で、丸裸で行うへコ直しの種々の肉体評価。或いは又、禪美、ヌードは勿論、客の命令に依る特異なポーズや行為などをほしひままに

フィルムに収められる等々の情景

が、我が空想のワイドスクリーン

に、次々と手に取る如く鮮明に映

し出されて行くのです。否、すで

に一禪亭では、休憩時間のアトラ

クシヨソとして、「へコの誕生」

笹吉の入亭式」、「ヤタ(弥太吉)

の初見世競馬」、更には又、すっ

裸にされた雪太郎が、冷たいタイ

ルの上に、うつぶせに、あるいは仰

向けに四肢をおさえ付けられ、針

と朱墨の耐えがたい痛さに悲鳴を

あげ乍ら、全身刺青を施される

「朱牡丹開花! 雪太郎、墨入れ」

などの天然色記録映画も上映され

ているかも知れません。内田氏の

「回想」に依れば、雪太郎は、わ

ずか一週間で「全身刺青」を施さ

れたとのことですが、普通ならば

大の男でさえ、部屋中はいずりま

わる程の痛さなので一日に少しし

か彫れず、如何に頑張っても、月



# ◎次号の本誌は四月下旬発売です

余の日は費さねばならないという話です。「雪太郎墨入れ」のリアルな描写に思わず読み入る反面その言語に絶した苦痛を思いやつて、なんとも云えぬ気持ちになつてしまいました。(余談ですが、数年前の夏、東京二子玉川岸の河川工事場に、左の二の腕に刺青』といつても如何にも素人くさい花模様ですが』をしてゐる土工の少年がいました。男の子、といった方が似合らしい可愛らしい感じの少年でしたが、私が大真面目で刺青の害を話すといちいちうなずいて聞いていたことを思い出します。Tという此の少年は、自分では十五才だと云つていましたが、成長した彼と再会したいものだ、と夏が来る度、思い出します。(最後に次の二人の方へお願い。五十六年十二月号本欄での「小樽、三田岩隆」様、貴方が憲兵隊へ行つてごらんになった様な情景を始め、種々の御面想に依る口絵シリーズを是非発表して頂きたく存じます。又、同号の「谷津」様、貴兄(私の方が一寸上らしいが)の経験談又は創作が発表されることを切望

しています。私の如き弱心臓ですら、あつかましく投稿したのですから、貴兄もふるつてどうぞ本欄でもお便り頂ければ望外の喜びです。(東京 S・K生)

○

私は二十五才、商業をいとなむ者です。K・Kは私のよき友としてずっと愛読させていただいて居ります。特に旅先でのなぐさめには、なくてはならないものになりました。私はマゾです。幼い頃、親類へあずけられました。そこにはいた年上のいとこにいろいと責められたのをよく覚えています。彼女は、今は空襲のぎせいとなつてこの世に居りませんが、私には未だになつかしい人です。その彼女が、よく私を、はなれの一間につれていつて責めました。子供の私を組みふせて馬乗りになつたりふとももでしめつけたりしました。そして、そんな時は必ず私は後手にくくられて、両足もしばられていました。手足をぐるぐるまきにされた私は彼女のまたの間に、はさみ込まれすっぽりとスカートでおおわれてしまい「かんにんし

て」と叫んだことが何度もありました。彼女は今にして思えばサドの女で、又いろいろの責めをしました。そのはなれに連れ込まれると私は完全に彼女のとりこになつていました。彼女は力もつよかつた様にキオクします。それ以来私はマゾとして生きてきたようです。サドの女性の方、居られましたらお仕えします。私はいつも、この小さい頃の思い出をたのしんで居ります。少々の責めには耐えます。こんな私を貴女の体と縄でぎゅうぎゅうのめにあわして下さい。大阪近郊のサド女性の皆様、私にお

○

青葉慎一氏、内田武男氏、山口幸一氏、杉俊夫氏、又読者欄の原

便り下さい。宛先は(大阪市東住吉区西今川町三丁目五六 瑞穂荘内)です。あくまでも紳士的なおつき合いをしたいと思ひます。又男性を責めるいろいろの方法ありましたらお便り下さい。私も、この幼い頃の私の経験を書いてみたくも思つて居ります。(その節は編集部の方々よろしくお願いいたします)サドの女性の方からのお便りおまちしております。

(大阪市 西川政一)

## 【新版】女体緊縛フォト ◎分譲◎

R組 六十組 (印画紙の大きさ 9×13cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円

R1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R3	床間の飾り (佐賀美智子)
R4	高手小手 (花坂道子)
R5	海老縛り (萩千恵子)
R6	後手猿轡 (須川令子)
R7	後手足縛り (村田那美子)
R8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R9	股間しばり (須川令子)
R10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R11	股間縛正面 (伊吹真佐子)



俊行氏菅良太氏中井光夫氏北沢孝司氏兵庫凡生、東京Y生等数える  
と男性マゾ、愛禪家、ソドミア派  
が多いのに驚きました。僕は自分  
だけの悲しい性癖だと思つていた  
ら世の中に同好の志の多いので氣  
を強くしました。僕は二十五才の  
独身の青年ですが、少年の頃から  
一人の男が多勢の男達に残酷な目  
にあうのを見ると不思議な興奮を  
感じました。そして自分も一度で  
もそんな目に合つて見たいと思つ  
ています。それで一人でそのような  
な想像をして楽しんでます。貴  
誌を知つてそのような小説がない  
かと毎号見ていますが、女の残酷  
は書いてあつても、男のものがほ  
とんどないのを残念に思つていま  
す。又僕は禪の愛好者で二十才頃  
から水泳で使つてから氣持がよ  
いので引つづき用いています。緊  
めた時男らしい血が流れてくるよ  
うな感じがしました。恋愛はした  
事がなく、いつも年上の青年で男  
性的な性格の者を好きになつたり  
しました。プラトニックなもので  
なく肉体的な愛情もともなうので  
いつも一人苦しんでいました。一  
種の神への冒瀆だとも思つていま  
したが、貴誌を見て同好の志が多  
いのを知り安心したり心が何か明

るくなつたような氣がしています  
ただ僕にとつて貴誌におびたし  
くのつていて女性の責小説や写真  
にはまるで興味がありません。僕  
は男に関する記事を切取ると他は  
すぐ焼き捨ててしまひます。集め  
て見て驚いたことは十冊ちかい本  
も切取ると僅か一冊にも充たない  
薄いものになつてしまふので、い  
かに男性の記事が少いことが分り  
ます。編集部の方に是非お願い致  
します。どうか僕たちのためにも  
男性の緊縛の絵や写真、又は小説  
を上記のベテランの作家に書いて  
もらつて毎月のせたらどんなに満  
足に思ふか分りません。僕は房州  
海岸の生れですが房州地方では今  
でも漁夫は荒縄の禪を締めて漁に  
出ることがあります。これは何か  
神の信仰から来るものらしいので  
すが荒縄といつても二重の縄が股  
に通すだけですから全裸とあまり  
変わりません。いや全裸になつたよ  
り猶魅力があるかも知れません。  
夏など全裸で漁をするものが非常  
に多いことで中には葉だけくつ  
ている男もあり風俗研究家には面  
白いので紹介します。僕の今抱い  
ている一つの理想は東京在住又近  
県の男性派のファンが数人集つて  
近くの温泉に一泊旅行をし、お互

いに奇抜な話題を交換し合い、一  
風呂浴びた後、六尺禪一つの姿で  
お互いに撮影をし合つたりしたら  
どんなに楽しいかと思ひます。ど

R 36	R 35	R 34	R 33	R 32	R 31	R 30	R 29	R 28	R 27	R 26	R 25	R 24	R 23	R 22	R 21	R 20	R 19	R 18	R 17	R 16	R 15	R 14	R 13	R 12
和装責め (藤田節子)	手足逆吊り(伊吹真佐子)	首縄股間縛(坂口利子)	股間縦縛り(中富綾子)	薄羅の緊縛(加賀利江子)	くさり責め(伊吹真佐子)	松樹後手縛(村田那美子)	変型しぼり(萩千恵子)	高手小手(加賀利江子)	逆海老責め(伊吹真佐子)	股間縛後手(中塚文子)	後手吊責め(伊吹真佐子)	逆さ吊り(伊吹真佐子)	椅子責め(佐賀美智子)	強烈梯子責(伊吹真佐子)	帆立縛 (萩千恵子)	いたぶり(春日、伊吹)	足揚梯子責(伊吹真佐子)	緊縛横臥 (厚狭春江)	立木しぼり(村田那美子)	トイレ縛り(須川令子)	猿轡の魅力(伊吹真砂子)	開股しぼり(川辺砂登子)	尻立縛り (萩千恵子)	女学生縛り(須川令子)
R 60	R 59	R 58	R 57	R 56	R 55	R 54	R 53	R 52	R 51	R 50	R 49	R 48	R 47	R 46	R 45	R 44	R 43	R 42	R 41	R 40	R 39	R 38	R 37	
トップモード (〃)	強烈しぼり (〃)	あきらめ (〃)	苦悶の表情 (〃)	猿ぐつわ (〃)	後手しぼり (〃)	引き裂き (〃)	のぞき見 (〃)	股間緊縛 (〃)	雁字搦目 (津森静子)	折檻の魅力(須川令子)	くさり責(川端多奈子)	御開帳 (萩千恵子)	後手しぼり(加賀利江子)	手足緊縛 (萩千恵子)	股間しぼり (〃)	コルセット(中塚文子)	松樹しぼり(村田那美子)	後手猿轡 (萩千恵子)	お灸責め(春日、伊吹)	肉体美誇示(伊吹真佐子)	乳房下緊縛(村田那美子)	後手首縄締(加賀利江子)	仰向悦虐責(川端多奈子)	

「少年禪美構想」に対して懇切な  
りませんか。(千葉 室壮介)



# ◎女体切腹フォト◎

(略号こし)

## 「腰元自刃」

村井知可子嬢

大判判印画紙焼付  
六枚一組 八百円

お家の重宝を紛失した美貌の腰元が激しい責折檻の末、遂に敵方から忍び込んだ間諜であることを白状する。そして今は、せめて武士の娘らしく深く切腹して果てることを願う。彼女に秘かな好意を寄せていた御側の若侍は彼女の介錯を願って出て許される。今迄の折檻の場は忽ち凄惨な

美女切腹の場と変る。という構想のもとに六枚連続の切腹フォト(全場面切腹)六枚の中、二枚は若侍介錯の場面。女体切腹マニアの方は是非一度ごらん下さい。日本髪をふり乱して苦悶するさまは、必ずや皆様を魅了せずにはおかないでしょう。(女性モデルの外、美男男性モデル登場)

る御批評を頂き感謝にたえません内田様、北沢様、ソドミア生様、RS生様等、多くの方が、少年の禪美よりも、青年の禪美を求めておられる様ですが、人は好きずき……ということ、私の我儘は大目に見て頂き、皆様の心のステージには逞しい青年を主役として登場させて存分に活躍させて下さい。一禪亭！ 最近号で、之程心をひかれた作品は少いでしよう。若し仮りに「会員」になれるとしたら、勿論、弥太吉、雪太郎、笹吉の様な少年へを相手にえらびたいものです。然し答で追いまわす様な競技は、とても出来ません二人になったら私の「部屋」にい

る時だけでも、のんびりと休ませてやろう……又、私の求めに応じて之等の少年たちは、その全身及び部分を完全に撮された、自分達の禪美又は全裸写真を貼布し、又詳細なる全身計測値や競技成績表などを書き込んである「ヘコ帳」をめぐって見せ乍ら、彼等の入亭式の模様、肉付室での訓練や検査の状況を、頬を染め乍ら語って呉れるだろう……などと、一禪亭にとつては、甚だ営業妨害的な空想にふけたりしています。野原美喜夫様は、たしか京都方面の方。私の趣味と似た処があるので、前にも何回か通信を寄せておられることをよく覚えています。ところ

でお詫びしなければ？ なりません……例の矯正バンドなるものは単なる私の「イメージ」で、して見たことも勿論ありません(云わぬが花?) だが、こういうものは当然あっても良さそうだと思います。それよりも、想像力を駆使して、いろいろな種類の矯正バンドを考案したり、脱衣して、そのバンドだけを締めさせられた少年が大勢の人の前で、検査を受けたり写真をとられたり……と云った場面を思いうかべるのも、第一かねをかけずに楽しめるではありませんか? 貴方のイメージも是非、誌上で拝見致したいものです。東京都内のN区の某中学校では、角力部の生徒が放課後、校庭の端にある土俵で、禪一本だけの姿で訓練を受けています。運動場は、垣根らしいものもないので、校外からその模様は手にとる様に見えます。私が通りかかった時すぐ目の前で、一二年生と思われる、運動部員などには不似合なおとなしそうな少年が、上級生に重そうなズツクのまわしを締めなおして貰っていました。最初から締めなおす為、すっかり解かれた後向きのその少年は黒、サポータもつけておらず完全な裸でした

再び股に喰いこむ様に固く結び終ると直ちに土俵に引きあげられ、何度も投げ倒されて、色白の背中や尻が忽ち土でよどれてしまいました。だが、それでも、フラフラになり乍らくりかえし突っかかって行き烈しい訓練が続けられていました。思わず、頑張れ! と声をかけたくなり、又なんとなく此の少年の仕合わせを祈らずにはいられない気持ちになっていました。大分、春田様へ。碩学W・シュテーケル博士の一著「Fetischismus」にはdie Orthopädische fetischismus

(矯正具偏好?) の章に、余り旨くはないが非常に興味をそそる数葉の絵入りの実例があり、又、比

### 北原純子責画傑作選

〔女学生の羞恥責め〕

(略号女学生)

大判判印画紙焼付

四枚一組 五百円

〔ハートの的女体洗滌室〕

(略号はあと)

大判判印画紙焼付

二枚一組 三百円

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕

(略号ぬうと)

大判判印画紙焼付

二枚一組 三百円



較的入手容易と思われるものに、英文「orthopaedic apparatus」(整形外科用矯正器具——写真図録多数)があります。御存知とは思いますが、御参考迄に……。但し、原書のこと故、値段は、というところになると、一寸……?と云った処です。内田武男様へ、御厚意は誠にありがたく存じますが、いろいろと制約がありますので、今の処、どなたとも文通せず読書オン

リイで我慢しております。何卒悪しからず御諒承下さい、しかし「一禪亭」が、今の奇クでは一番のたのしみです。ますます御健筆をふるわれん事を祈ります。

(杉俊夫)

女性の責に関する映画の紹介を毎号拝見しますが。男性のそれが全く見られないのを残念に思っています。男性マード及び責めに興

味をお持ちの方に仏伊合作映画「フアビオラ」の必見をおすすめします。これは数年前封切られたもので、ローマ時代の異教徒迫害を主題にした映画で、既にごらんになった方も沢山あることと思いますが、昨年末新版が再上映されていることと映画館で上映されてもあきることなく、今に再び当地へ還ってくることを期待してお

### 奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに二十六号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

### ★復刊号の分

復刊第1号 (30年10月号) △売切▽  
復刊第2号 (30年11月号) △売切▽

復刊第3号 (31年4月号) 二百円  
復刊第4号 (31年5月号) 二百円  
復刊第5号 (31年6月号) 二百円  
復刊第6号 (31年7月号) △売切▽  
復刊第7号 (31年8月号) △売切▽  
復刊第8号 (31年9月号) 二百円  
復刊第9号 (31年10月号) 二百円  
復刊第10号 (31年12月号) 二百円  
復刊第11号 (32年1月号) 二百円  
復刊第12号 (32年2月号) 二百円  
復刊第13号 (32年3月号) 二百円  
復刊第14号 (32年4月号) 二百円  
復刊第15号 (32年6月号) 二百円  
復刊第16号 (32年7月号) 二百円  
復刊第17号 (32年8月号) 二百円  
復刊第18号 (32年9月号) 二百円

復刊第19号 (32年10月号) 二百円  
復刊第20号 (32年11月号) 二百円  
復刊第21号 (32年12月号) 二百円  
復刊第22号 (33年1月号) 二百円  
復刊第23号 (臨時増刊号) 二百円  
復刊第24号 (33年2月号) 二百円  
復刊第25号 (33年3月号) 二百円  
復刊第26号 (33年4月号) 二百円

### 〔代理部だより〕

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします。誌代のみお送り下さい。六冊以上一緒に求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

○休刊前の本誌は全部売切れてしまいました。今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。



ので思いきってペンをとりました  
(I・T生)

○ 御社の御繁栄を心からお祈りいたします。小生貴誌を創刊号より拝見致しておりましたところ途中で休刊になり本当に残念に思っております。その後、小生の不注意のため、復刊されたことを長らく知らずにおりましたが、最近になって、初めて復刊されてから、既に二十何冊か発行されていることを知りました。然し、既刊の中でも、すでに売切れになっているものも四、五冊あるようで誠に残念です。以前の雑誌は創刊号以来ずっと一冊残らず揃えてありますので尙、欠けている分が心残りです。とにかく現在在庫しているバックナンバーは全部お送り願いたいと思います。同封しました金額で余分になった分は御誌に寄贈いたします。適当に御使用下さい。以前は種々と写真などもお送り頂きましたが、それはそれとして良きものですが、舞台等であっていいアクロバットの写真がほしいものと思っております。若し御誌にて斡旋頂けるものなら何枚でもほしいと思います。その他、アクロバットに関する参考資料、並に外

国文献書籍写真等、女体に関するサジスチックなもの等の入手方法がございましたら御教示頂きたいと存じます。(埼玉、F・O生)

○ KKの女性読者の方に御願ひ致します。小生、目下倒錯心理の研究をしている医者ですがMSどちらの傾向の方でも結構です。誌上では通交際を希望致します。誌上では明らかにされぬいろいろの事柄について話しあいたいと思います。直接御面会出来れば幸いです。貴女の意志を尊重し秘密は絶対にお護り致しますから御安心下さい。よき研究資料を提供して下さい。よろしく御願ひ致します。特にインテリの方は歓迎致します。連絡は本誌の係の方気付に御願ひします。

(東京 林克己)

○ 小生は年来の女性切腹愛好者です。中康弘通氏の切腹研究がK誌の誌上を飾るようになってから、ずっと愛読しております。毎月一篇か二篇ぐらいですが、毎月かさず切腹記事を書いて下さっているのが嬉しく思います。中には自分の趣向のもので一冊全部を埋めてほしいといった無茶な自分勝手なことを希望する方もありますが

小生はそんな非常識な要求は致しません。せめて毎月号に小説一篇告白一篇ぐらい載せて下さればどんなに我々マニアは楽しめるかれません。小生は書店の店頭で見た単行本雑誌は、たとえ一枚の絵、一行の文でも自分の好みに合ったものがあれば、それを買うことにしています。その点からいってK誌一冊は小生にとって千金にも替え難い存在です。どうして他の趣味の方の記事を押しつけて、自分の好みだけを盛沢山にしてくれなどと要求できるのでしょうか。今回御送り下さいました「腰元自刃」は従来の分譲写真の中で(小生は全部見ているというわけではありませんが七分通りは求めている

る筈です)最も雰囲気が出てくる一つだと思えました。扮装、表情環境、腹の切り方等全く我々のイメージにぴったりしていました。今後もうこういったよいモデルを用いて時には傑作を発表して下さい。この連続フォトの中で、モデル嬢の豊満にふくれ上った乳房から腹部にかけての素晴らしい線がより一層、この写真を立派なものにしています。それにしても中康弘通氏は如何しておられるのでしょうか。御病気のことでした。一刻も早く御快癒されて、その御研究を発表して頂きたいものと願うものです。

(三重 森生)

# 編集後記

○次号六月号の主な掲載予定作品を挙げておきます。前号から引続いて連載されるものに、創作紅山彦(三条卓史)が短い文章ながら人里離れた山里に展開する妖しい責めの雰囲気を描き出し、魔教団NO8(土路草一)は愈々話の筋がクライマックスに入ろうとしています。今後誌上が楽しみ。赤いペチコート(鴉嘔吐夫)は主人公の身上の変化が今までの

違つた激しい刺激が誌面に充満します。本号で惜しくも間に合わなかつた美容病院(久留木栄)も又華麗な悦虚模様をくりひろげることでしよう。結婚の条件(近藤一)は今月号を読まれた方は必ずあとを讀みたくなるでしょう。近來の力作といつて然るべき作品。他に事実小説、貸し男(植村奏)春浅き日に八文江の切腹V(佐藤すみ事)等々数多くの作品を準備しておりますから、どうか御期待下さい。

(三三、三、二〇)